

クモ類

① 名古屋市におけるクモ類の概況

現在まで名古屋市で記録されたクモ類は、今回の調査の分を含めると、41 科 334 種になる。日本産のクモ類は、およそ 1,500 種（小野，2009）、愛知県産は現在 48 科 564 種（緒方，2013）なので、日本産の約 22.3%、愛知県産の約 59.2%にあたるクモ類が名古屋市に生息していることになる。

以下に、市内の地域ごとに、それぞれの状況を記述する。

東部地域（東部丘陵地）のクモ

名古屋市内はほとんどの地域が都市化され、クモの住む環境は狭められてしまった。その中であって、この東部地域は北には、東谷山を中心とした守山区志段味地区や小幡緑地、南には緑区の大高緑地など、丘陵地やそれに付随する湿地・ため池が残されていて、二次林から成る樹木も多い。そのため、生息するクモの種も比較的豊かであり、クリチャササグモなど市内では貴重なクモも見られる。なお、1977 年には、珍種ムロズミソレグモが天白区で記録されている。

その一部を例示すると、カネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ナルトミダニグモ、オオセンショウグモ、キヨヒメグモ、コンピラヒメグモ、ツノナガイソウロウグモ、ハラナガヒシガタヒメグモ、アシヨレグモ、ツメケシグモ、ジョロウグモ、マメズメオニグモ、シロオビトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、スズミグモ、アオオニグモ、コガネグモ、ムツトゲイセキグモ、ゲホウグモ、ヤマシロオニグモ、サツマノミダマシ、クリチャササグモ、ウスイロヤチグモ、ヒゲナガツヤグモ、ヤドカリグモ、コハナグモ、ネオンハエトリ、ムツバハエトリ、マツモトハエトリなどである。

この地域は、現在まで確認されていないキジロオヒキグモなどの稀種が発見される可能性を残す地区である。

中央部地域（中央台地）のクモ

この地域のほとんどは市街化されている。そのため生息するクモ類の数も種数も年々少なくなっている。僅かに、市街化の波を逃れて残された名古屋城*、高蔵神社、熱田神宮の林*などは熱田台地の面影を残しており、都市部でのクモの安息場所となっている。*【例1：名古屋城内に住むクモ：20 科 55 種（緒方・須賀，1998～1999 調査）、例2：熱田神宮域内に住むクモ：30 科 109 種（緒方・須賀・柴田，2011～2013 調査）】これらの林には、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、カネコトタテグモ、ワスレナグモ、ヤギヌマフクログモ、チビクロドヨウグモ、ナシジカレハグモなど希少種や分布の限られた種などが多く生息しているが、いずれも個体数は少ないか、一部は減少の一途をたどっている。

更に、昭和区にある興正寺の社寺林もクモ類の生息にとって重要な樹林であり、キシノウエトタテグモの住居は、ここを中心として昭和区・瑞穂区の一部に多く見られる。また、今回の

調査で、市内ではたいへん珍しいトゲグモが発見された。ただ、これらの地区も年々環境破壊が進み、クモ類の個体数は減少の一途をたどっている。

この地域で記録されたクモの一部を例示すると、ジグモ、ワスレナグモ、ダニグモ、サトヒメグモ、ゴマダラヒメグモ、ナナメケシグモ、ヨツボシサラグモ、ビジョオニグモ、ムツボシオニグモ、コガネグモ、スズミグモ、サガオニグモ、ナガズキンコモリグモ、カチドキナミハグモ、ヤマヤチグモ、ムナアカフクログモ、ヤギヌマフクログモ、ホンジロトンビグモ、ニッポンオチバカニグモ、オビボソカニグモ、コガタネオンハエトリ、タイリクアリグモなどである。

西部地域（沖積地）のクモ

この地域では、枇杷島緑地などの庄内川の河川敷に、草地なども残されていて、重要なクモの生息地となっている。そのほか、河口付近の少ない葦原は廃棄物や流木が散乱しているが、その中にカコウコモリグモが見られる。市内で唯一の産地であり、貴重である。また、名古屋港に近い公園の溝の中などには、移入種のマダラヒメグモやオダカユウレイグモなどが多く生息している。

なお、1995 年大阪府高石市や三重県四日市市で発見され、話題になったセアカゴケグモは 2010 年には名古屋市市内では確認されていなかったが、2014 年現在では港区・中川区を中心にごく普通に見られるようになった。過去に一頭だけ採集されたことがあるハイイロゴケグモは、その後、見つかっていない。

この地域に生息するクモの一部を列記すると、ジグモ、ワスレナグモ、オダカユウレイグモ、ヒラタグモ、コガネヒメグモ、マダラヒメグモ、クロケシグモ、ノコギリヒザグモ、ヨツコブヒメグモ、マルムネヒザグモ、セスジアカムネグモ、コガネグモ、ナガコガネグモ、イエオニグモ、カコウコモリグモ、フジイコモリグモ、ネコハグモ、ヤマトガケジグモ、ウラシマグモ、ムナアカフクログモ、ヤドカリグモ、ヨコフカニグモ、ネコハエトリ、シラヒゲハエトリなどである。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回、名古屋市として、絶滅危惧種のリストに挙げたクモ類は、絶滅危惧ⅠA類（CR）6種、絶滅危惧ⅠB類（EN）3種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）8種、準絶滅危惧（NT）8種、それに情報不足（DD）4種である。名古屋市産のクモ類は、現在分っているものだけで303種（2014年現在）であるから、CR・EN・VU・NT・DDの合計29種は全体の約9.6%にあたる。

環境庁の「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）」（平成26年）によると、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）1種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）6種、準絶滅危惧類（NT）5種、情報不足（DD）5種、合わせて17種が掲載されている（NTには名古屋市のリスト中のカネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモが含まれている）。以上、環境省の「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）」（平成26年）に挙げられたクモは日本産クモ類（約1,500種）の約1.13%にあたる。この数値は今回取り上げた名古屋市の数値に比べると極端に少ない。現実には、全国的に見て危機に瀕しているクモ類は、この17種以外にまだまだ数多くあり、また、自然破壊の著しい大都市としての環境を考慮

に入れば、名古屋市の9.3%は妥当な数値だと考える。

名古屋市の絶滅危惧種のリストに取り上げた種の主な選定理由は次の三つに大別することができる。

その一つは、工事・開発・除草剤・農薬・殺虫剤などの影響により減少した（または減少しつつある）と思われるもので、次の種が該当する。

ワスレナグモ、カネコトタテグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、コガネグモ、トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、カコウコモリグモ、テジロハリゲコモリグモ、ミナミコモリグモ、ヒゲナガツヤグモ、オビボソカニグモなど。

次に、全国的に、あるいは県内・市内において、広い範囲に分布する割には生息する個体数が少ないと考えられる種である。これらの種は、微妙な環境の変化で生息できなくなってしまうようである。言い換えれば、似たような環境でも微妙な違いで、生息可、不可が決定すると考えられる次のような種である。

アカイトトリノフンダマシ、シロオビトリノフンダマシ、ゲホウグモ、ヤギヌマフクログモ、ムツトゲイセキグモ、エビチャコモリグモ、ハヤテグモ、ハマキフクログモ、ギボシヒメグモ、ビジョオニグモ、トゲグモ、チビクロドヨウグモ、ナシジカレハグモなど。

さらに、限定された特殊な環境にしか生息できず、その環境が悪化したため減少した（またはその恐れがある）と考えられる種である。たとえば、湿地・ため池や河川河口部の葦原などは限定された環境であり、そこには生息域の限られたテジロハリゲコモリグモ（湿地）、ミナミコモリグモ（湿地）、カコウコモリグモ（河口部の葦原）など生活している。市内に点在する湿地・ため池・河口部の環境は、年々悪化しているし、湿地・ため池においては埋め立てによりなくなってしまった場所も多く、前記のクモの生息場所は狭められている。

なお、クリチャササグモは、もともと山地性のクモであり、高度1000m前後の場所では、近縁のササグモよりも多くなるといわれる（新海・高野，1987）。高地では普通であるが、低地の名古屋市内では、個体数も生息地も極めて少ないため取り上げた。

また、ムロズミソレグモ（スオウグモ科）は、現在まで山口県・京都府・兵庫県・島根県（隠岐島）で、それぞれ僅か1頭ずつ採集されただけの珍種であり、名古屋市では1977年に採集されている。近年（2010年）、奈良県で雌雄3頭が採集されたが、家屋内に住む以外、生態的に不明の点が多いので情報不足に掲載した。

（執筆者 須賀瑛文）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各クモ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（クモ類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産クモ類目録 Ver.2014R1」（谷川明男，2014：インターネット上にて公表）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産クモ類目録 Ver.2014R1」（谷川明男，2014：インターネット上にて公表）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物（クモ形類、甲殻類等）」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、生態写真または標本写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

クモ類 <クモ目 ジグモ科>

ワスレナグモ *Calommata signata* Karsch**【選定理由】**

地中に縦穴の管状住居で生活するクモ。20 数年前までは、市内の神社仏閣、公園、古い民家などに、ごく普通に見られた種であったが、生息環境の悪化により急速に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長雌 13～18mm、雄 5～8mm。雌の背甲にある中窩は点状で深く黄褐色～淡褐色、第1脚は2～3脚に比べ極細。雄の体色は褐色～黒褐色ですべての脚が細く著しく小さい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

以前には緑区、中区（名城公園）、西区（庄内緑地）、熱田区、中村区（中村公園）に生息していたが現在では庄内緑地と名城公園のみとなった。

【県内の分布】

愛知県内でも減少傾向にあり、採集例も少なくなった。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国、中国。



ワスレナグモ（雌）

安城市、2011年11月26日、中根 翼 撮影

巣穴：西区庄内緑地、2014年8月30日、柴田良成 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

日光の当る比較的明るい草むら、芝生などに地中に縦穴を掘り、内部を糸で綴った管状の住居を造る。出入口は露出するか糸で閉じる。住居の内側は極めて細くて丈夫な糸で裏打ちされ、穴を中心として放射状に受信糸（触糸）を出すこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は、地中に縦穴を掘り生活するため、地表面の掘削やコンクリート化により生息場所の消失が大きな減少の原因であると考えられる。加えて、トタテグモ類同様、除草剤や農薬の影響も考えられる。最近、公園や神社などでジグモの生息数が減少傾向にある現象も同じ原因ではないかと考えられる。

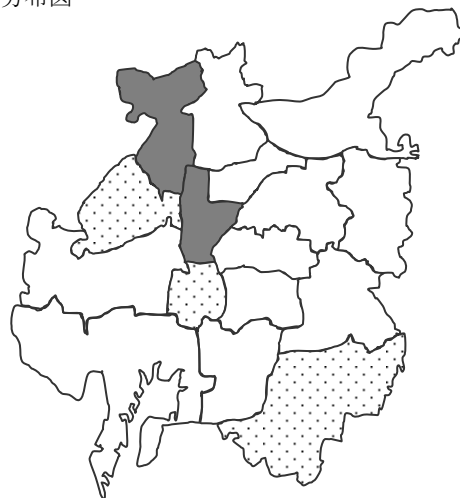
【保全上の留意点】

公園整備による樹木、芝生等には配慮し、少なくとも除草剤などの散布には注意する必要がある。

【関連文献】

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.86. 東海大学出版会，秦野。
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.20,p.164. 偕成社，東京。
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.6. 保育社，大阪。

市内分布図



(執筆者 柴田良成)

クモ類 <クモ目 カネコタテグモ科>

カネコタテグモ *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch)

カテゴリー

【選定理由】

崖地に多い地中性のクモである。崖地（法面）の改修によるコンクリート化や人為的な土地の攪乱、崩壊によって生息場所を失うことが多く、市内では激減している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長雌 12～18mm、雄 9～13mm。背甲の中窩は縦向き。上顎の牙は上下に可動。胸板は長さとは幅がほぼ同じ、有毛だが前方に無毛の部分がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

以前は守山区、千種区、昭和区、中区、緑区に生息していたが現在では名古屋城敷地内だけになった。

【県内の分布】

海辺近く（海拔 1m）から高所（茶臼山：海拔 1200m）まで広範囲に分布するが、個体数は減少している。

【国内の分布】

本州の岩手県から岡山県まで局地的に分布する。関東地方、中部地方に多い。

【世界の分布】

北米。

【生息地の環境／生態的特性】

林床、草むら、崖地、人家や社寺の庭などの地中に管状住居を造り入り口には両開きの扉を付け、その中で生活する。扉の周辺にはコケや土を付けてカムフラージュしている。

【現在の生息状況／減少の要因】

公園整備、住宅建設、道路工事等に伴う崖地の人為的な改変ならびに石垣、コンクリート化により生息場所の消失が大きな要因である。また、除草剤、農薬散布の影響も考えられ市内では激減している。

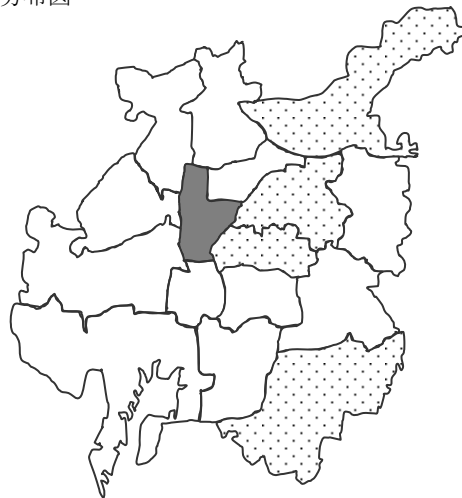
【保全上の留意点】

崖地を工事する際の注意が肝要であり生息地での除草剤、農薬等の散布には特に注意する必要がある。



カネコタテグモ（雌）、及び 住居
住居：日進市、2010年12月2日、緒方清人 撮影

市内分布図



【関連文献】

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.87. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.18,p.162. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.2. 保育社，大阪.

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 トタテグモ科>

キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (Kishida)

カテゴリー

【選定理由】

片扉を付けた地中性のクモ。市内では、ほとんどが崖地に棲むため、崖地の破壊、コンクリートなどによる補強などの影響を受けて激減、絶滅の恐れが大である。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長雌 12～20mm、雄 10～15mm。背甲の中窩は横向き。頭胸部には疎らな毛がある。胸板にくぼみがある。

【分布の概要】

【市内の分布】

以前には名古屋市昭和区（八事興正寺境内、鶴舞公園）、千種区（覚王山）、瑞穂区（民家など）、天白区、中区（名古屋城敷地内）、熱田区（寺院など）、守山区に生息していたが現在ではいずれの生息地においても個体数が少なくなった。

【県内の分布】

岡崎市、犬山市、瀬戸市、豊田市等に分布する。

【国内の分布】

本州（山形県以南）、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

神社、仏閣、城、古い屋敷の敷地内によく生息している。崖地に横穴の管状住居を造り入口に片開きの扉を付ける。縦穴も作るが、市内ではほとんどが横穴に棲む。都市またはその周辺部に棲み、人里離れた山中に生息しない。扉に周辺のコケや土を運んで付着する。

【現在の生息状況／減少の要因】

造成整備工事や道路の改修等による崖地での掘削工事やコンクリート化が激しく、急速に生息場所が狭められ、激減している。特に、八事興正寺境内の減少は驚くばかりである。

また、除草剤や農薬散布等が影響を及ぼし減少に拍車をかけていると思われる。クモタケの寄生による被害も多少は考えられる。

【保全上の留意点】

崖地改修の際、工事の方法に注意すること。生息区域での農薬、除草剤等の散布に注意する必要がある。

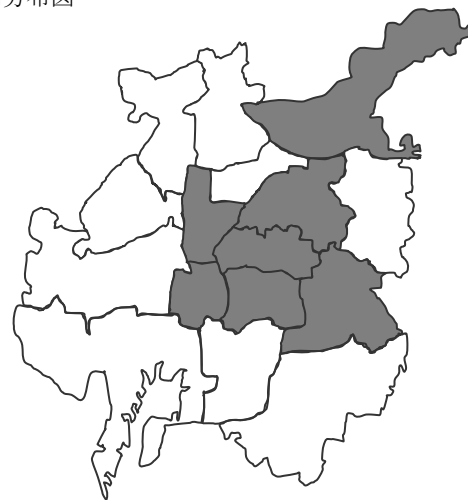
【関連文献】

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.91．東海大学出版会，秦野。
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.19,p.163．偕成社，東京。
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.3．保育社，大阪。



キシノウエトタテグモ（雌）、及び 住居扉
昭和区鶴舞公園、2015年1月26日、柴田良成 撮影
住居扉：同上、2014年11月11日、柴田良成 撮影

市内分布図



(執筆者 柴田良成)

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

ムツトゲイセキグモ *Ordgarius sexspinosus* (Thorell)**【選定理由】**

市内の確認できた生息地は1ヶ所で、個体数は少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 8～10mm。頭部背甲は濃褐色で2本の尖った突起が縦に並び、後方にも4突起が横に並ぶ。腹部背面は黒褐色で白い網目模様がある。その両肩は隆起、その上に小突起がいくつか見られる。後端にも4個の突起がある。雄は小さくて2mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

県内でも確認された分布地は僅かである。個体数は少ないためか、見つけにくい、まだ発見される可能性はある。

【国内の分布】

本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

ビルマ、インドネシア、インド、韓国、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

昼は広葉樹の葉の裏に潜んでいる。夜、枝や葉に簡単な糸を引き張り、そこから第2脚の先端に粘球を糸で釣り下げ、それを投げ縄のように回転させ、蛾の仲間を捕らえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと個体数の少ない希産種であるが、生息適地の開発による減少も考えられる。

【保全上の留意点】

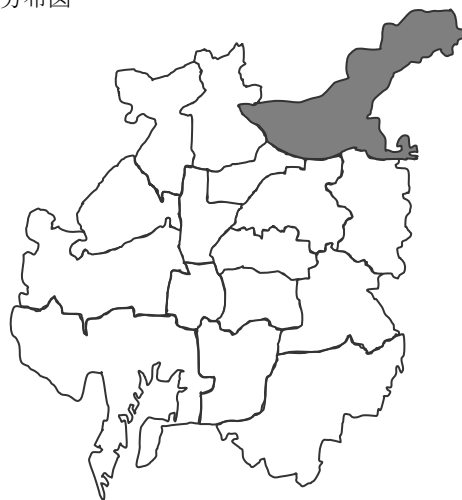
生息環境（二次林）の確保。特に市内分布確認地の環境を変えないような努力が必要である。



ムツトゲイセキグモ（雌）

守山区大森、1998年9月26日、緒方清人撮影（小笠原幸恵採集）

市内分布図

**【関連文献】**

- 千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.83, p.217. 偕成社, 東京.
 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.112. 保育社, 大阪.
 小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 コモリグモ科>

カコウコモリグモ *Pardosa nojimai* Tanaka**【選定理由】**

河口付近の内海に面した塩性葦原に生息するため、護岸工事や環境の悪化によって激減、絶滅の恐れが大である。市内での生息地は少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌雄 5～7mm。雄の頭胸部は黒褐色。腹部背面は茶褐色で、褐色の心臓斑が顕著である。雌は背甲、腹部とも茶褐色。雌雄とも歩脚は褐色で各節に長い刺を要する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区で記録された。

【県内の分布】

田原市汐川河口、豊橋市紙田川河口で記録されている。刈谷市境川河口にも生息していたが、ここでは近年確認されていない。

【国内の分布】

岡山県岡山市の標本を模式とし新種記載された(田中, 1998)。現在は静岡県、三重県、大阪府、島根県、熊本県で記録されている(新海ほか, 2012)。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口付近の塩性葦原に限って棲む。同じ葦原でも海岸以外には生息していない。成体は5～8月にかけて見られ、葦原内を素早く動き回る。雌は卵のうを糸器に着けて徘徊する。同じ環境にはクロベンケイガニなどカニ類も多数生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、港区稲永の庄内川左岸の河口部の塩性葦原に棲むが、生息地域は狭く限られている。同じ環境でも河口の上流部には生息していない。近年、護岸補強工事の影響で葦原が減少した。また、発泡スチロール、ビニール、プラスチックなど多量のゴミが蓄積し、環境悪化が著しい。その影響で個体数は激減している。

【保全上の留意点】

護岸補強工事の際には、十分な配慮が必要である。塩性葦原を保全すると同時に、環境美化に努める必要がある。

【引用文献】

Tanaka, H., 1998. A New Species of the Genus *Pardosa* (Araneae: Lycosidae) from Japan. *Acta Arachnologica*, 47(2): 101-103.

新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生, 2012. CD 日本のクモ. 自刊.

【関連文献】

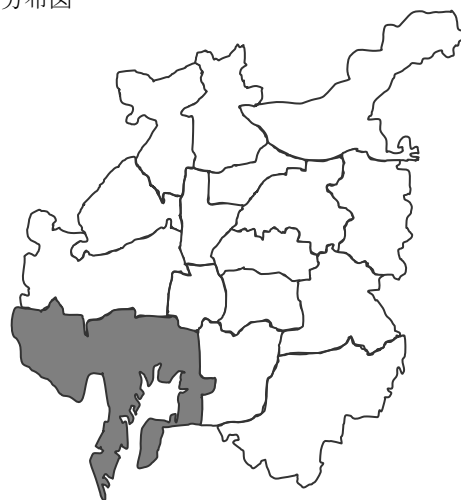
小野展嗣(編), 2009. 日本産クモ類, p.245. 東海大学出版会, 秦野.



カコウコモリグモ (雌)

港区野跡、2013年6月10日、緒方清人 撮影

市内分布図



(執筆者 緒方清人)

クモ類 <クモ目 コモリグモ科>

デジロハリゲコモリグモ *Pardosa yamanoi* Tanaka et Suwa

カテゴリー

【選定理由】

徘徊性のクモで、開発にともなう湿原の減少や環境悪化で、近年激減した。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌雄とも 5～7mm。雄の頭胸部は濃茶褐色で中央と縁は白い毛で覆われる。腹部背面は濃茶褐色で中央に白色の縦斑があり、第1脚の脛節に多数の白毛を生じる。雌は背甲・腹部とも茶褐色で、腹部に多数の白斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区上志段味と天白区島田の極限られた湿地に生息する。天白区八事天白峡湿地では、1978年5月3日に永井均氏により雌雄各1頭が採集された。この記録が県内初記録である(田中, 1986)。その後、1990年代までは生息していたが、湿地の環境悪化とともに個体数は減少し、現在は生息していない。

【県内の分布】

日進市、岡崎市、新城市に分布する。豊川市では土地開発により湿地が消滅し、絶滅したと思われる。

【国内の分布】

岡山県鹿久居島の標本を模式とし新種記載された(Tanaka, 1986)。現在は秋田県、東京都、神奈川県、長野県、岐阜県、三重県、大阪府、岡山県、徳島県、長崎県で記録されている(新海ほか, 2012)。

【国内の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

湿原に生息する。5～7月にかけて成体になり、雌は7～8月にかけて卵のうを糸器につけて徘徊する。幼体で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、守山区上志段味(東谷湿地)と天白区島田(島田湿地)に生息する。天白区八事天白溪湿地は、湿地周辺の樹木や草本が繁茂し、環境が著しく悪化したことにより湿地は消滅した。2008年6月15日と2014年7月22日の調査でも発見できず、絶滅したと思われる。

【保全上の留意点】

周辺部の環境保全と管理が望まれる。また、日当たりの良い湿地を好む傾向が強いので、周辺からの木本類や草本類を速やかに取り除く等多方面の対策が急務である。

【引用文献】

Tanaka, H., 1986. Descriptions of Three New Spiders of the *Pardosa laura* Complex (Araneae: Lycosidae) based on their Morphology and Ecology. *Acta Arachnologica*, 34(2):49-60.

新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生, 2012. CD 日本のクモ. 自刊.

【関連文献】

小野展嗣(編), 2009. 日本産クモ類, p.241, pl.610. 東海大学出版会, 秦野.

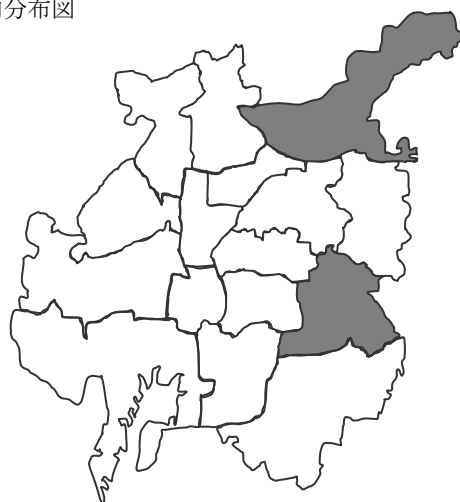
新海栄一, 2010. 日本のクモ, p.67, 文一総合出版, 東京.



デジロハリゲコモリグモ (雄)

守山区上志段味, 2009年4月16日, 緒方清人 撮影

市内分布図



(執筆者 緒方清人)

クモ類 <クモ目 トタテグモ科>

キノボリトタテグモ *Conothele fragaria* (Dönitz)

カテゴリー

【選定理由】

特に神社仏閣などの大木の樹皮などに生息。どこでも個体数が少なく減少しつつある。特に地表に近いところに住居を造った個体は除草剤の被害に遭うことも多い。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長雌 10～12mm、雄 8～10mm。背面の中窩は大型で、体も太く頑丈である。

同属他種との区別はやや困難。体長 40mm 内外。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、中区、昭和区（八事興正寺）、熱田区（熱田神宮）、千種区（東山公園）。

【県内の分布】

低地から海拔 600m の山地まで広く分布しているが、各生息地とも個体数は少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、伊豆諸島、小笠原父島。

【世界の分布】

日本固有種。



キノボリトタテグモ（雌）、住居扉

千種区東山公園、2015年1月25日、柴田良成 撮影

住居扉：熱田区熱田神宮、2012年1月23日、柴田良成撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に大木の樹皮上、岩上、塀、石灯籠や記念碑などの表面に長さ 2～3cm の袋状の住居を造り、下を向いた出入口に片開きの扉を付ける。扉の上を通る獲物を住居内に引きずり込む。扉や袋には付近のコケ、樹皮、土などを運んできて付けている。

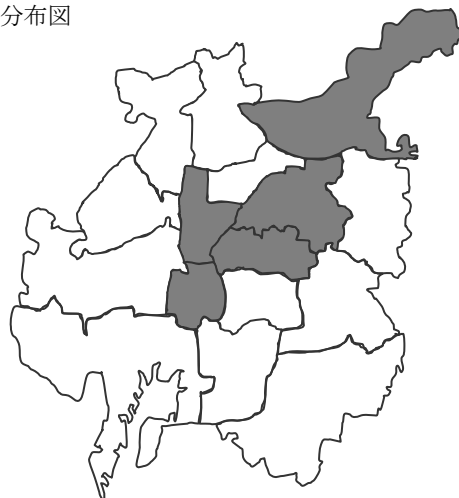
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では、本種の住みかである神社仏閣で、古木、古い墓石、灯籠などが少なくなった。ほかに、照度、通風、湿度なども微妙に影響するようである。

【保全上の留意点】

社寺林等の保全が必要である。また、生息地では、農薬、除草剤の散布には要注意。

市内分布図



【関連文献】

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.91. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.19,p.163. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.4. 保育社，大阪.

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コモリグモ科>

ミナミコモリグモ *Piratula meridionalis* (Tanaka)**【選定理由】**

徘徊性のクモで、湿原や池沼など湿潤地に生息する。開発にともなう生息地の減少や環境悪化で近年激減した。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌雄とも 4～6mm、頭胸部は茶褐色で中央に本属特有の Y 字型の斑がある。腹部背面は濃茶褐色で 3～4 対の白斑がある。4 脚の各節に濃茶褐色の環がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区上志段味、天白区島田、緑区大高の極限られた湿地や湿潤地に生息する。

【県内の分布】

弥富市、東海市、日進市、長久手市、豊明市、知立市、豊田市、岡崎市、豊橋市、新城市、北設楽郡設楽町等に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州 (Tanaka, 1988)。

【世界の分布】

韓国、中国。



ミナミコモリグモ (雌)

天白区島田湿地 2014 年 6 月 17 日 緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湿原や湿潤地を徘徊している。5～7 月ごろに成体になる。雌は 8～10 月ごろに白色の卵のうを糸器につけて徘徊する。ふ化した子グモは 1 週間ほど親の背中にしがみつき、その後、分散し独り立ちし、幼体で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区上志段味の湿地は、周辺から植物が侵入し、年々環境が悪化している。天白区島田湿地は保全区域に指定されているので、個体数は維持されると思われる。緑区大高緑地は湿潤地である。しかし、どの生息地においても個体数は極めて少ない。天白区八事天白溪湿地にも生息していたが周辺の樹木類や草本類が繁茂し、湿地は消滅した。2008 年 6 月 15 日と 2014 年 7 月 22 日に調査したが、発見できずテジロハリゲコモリグモと同じく絶滅したと思われる。

【保全上の留意点】

湿地と後背地の環境を保全し、乾燥化に名ならないように水資源を確保する。同時にゴミ対策や湿地性以外の植物の侵入を防ぐなど、多方面の対策が必要である。

【引用文献】

Tanaka, H., 1988. Lycosid Spiders of Japan I. The Genus *Pirata* Sundevall. *Acta arachnologica*, 36(1):33-77.

【関連文献】

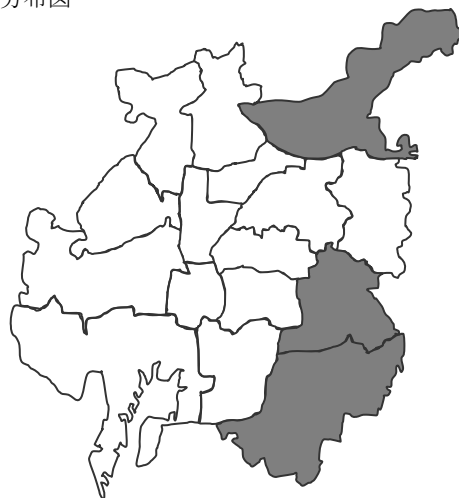
小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類, p.225, p.608. 東海大学出版会, 秦野.

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.19, p.163. 偕成社, 東京.

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.3. 保育社, 大阪.

新海栄一, 2010. 日本のクモ, p.67. 文一総合出版, 東京.

市内分布図



(執筆者 緒方清人)

クモ類 <クモ目 キシダグモ科>

ハヤテグモ *Perenethis fascigera* (Bösenberg et Strand)**【選定理由】**

徘徊性のクモで、河川敷や草原などに生息し、まれに公園や人家の庭などからも発見される。近年、生息域の環境悪化により激減した。2000年の記録が最後である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 10～12mm、雄 9～11mm。頭胸部は淡褐色で中央部は濃茶褐色で両縁は白色。腹部背面は淡褐色で中央部は赤褐色もしくは黄褐色で両縁は白色。中央から後方にかけて波形模様となる。胸板は黄褐色で両側は淡黒色。歩脚は各節黄褐色だが跗節や附節は濃い黄褐色となる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

緑区で確認されたが、その後は確認されていない。

【県内の分布】

常滑市、日進市、豊橋市で記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州（新海ほか、2012）。

【世界の分布】

中国、韓国。



ハヤテグモ（雄）

緑区鳴海町、2000年7月3日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

市街地の林縁部や草地に生息する。6～8月にかけて成体になる。雄は捕獲した獲物を雌にプレゼントする（板倉，1999）。雌は7～8月ごろに産卵し、卵のうを口器にくわえて保護する。幼体で越冬する。

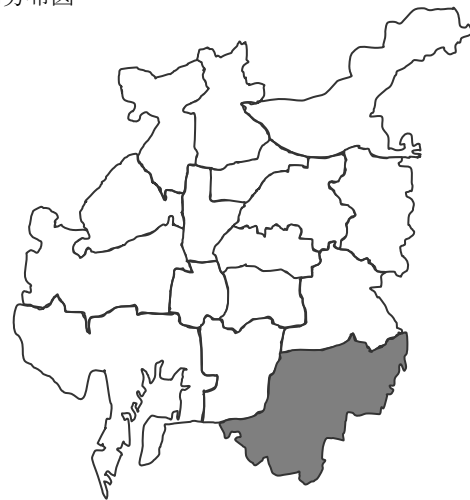
【現在の生息状況／減少の要因】

唯一、緑区の生息地は住宅地になり消滅した。その後、本市からは記録されていない。徘徊性で見付けにくい在今后、河川敷や草地など本種に適した環境が残されていたら、発見される可能性はある。

【保全上の留意点】

宅地や工場などの土地開発の際、生息域の環境保全が必要である。

市内分布図

**【引用文献】**

板倉泰弘，1999. 苦節9年，ハヤテグモの生息環境と婚姻給餌発見まで. *Kishidaia*, 76:30-33.
新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生，2012. CD 日本のクモ. 自刊.

【関連文献】

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.220,pl.606. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.106,p.273. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.175. 保育社，大阪.
新海栄一，2010. 日本のクモ，p.81，文一総合出版，東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

シロオビトリノフンダマシ *Cyrtarachne nagasakiensis* Strand

【選定理由】

もともと個体数の少ない種である。さらに、近年、開発等により生息適地が狭められ急激に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

雌、体長 5～8mm、雄、1～2mm。頭胸部は赤褐色、腹部背面の地色は黒褐色～茶褐色、その最広部付近を横に黄白色～白色の帯があり、最後部は淡黄色となる。また、頭胸部は赤褐色であるが、腹部は灰褐色の個体（*nigra* type）もあり、色彩にはいくつかの色彩変異がありシロオビ型、クロ型などがある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、千種区、緑区で記録がある。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市等の記録が多い。

【国内の分布】

本州、四国、九州、伊豆諸島、薩南諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、八重山諸島。

【世界の分布】

韓国、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

昼は、ススキや広葉樹の葉の裏に脚を縮めて止まっている。夜間、草間や樹間に同心円状の水平円網を張り活動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと個体数の少ない種である上、市内では、草原等生息適地の減少が拍車を掛けている。また、管理地等での農薬等の散布の影響も大きい。

【保全上の留意点】

開発時、ススキ草地や疎林を残すなどの配慮が必要である。また、農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

【特記事項】

従来、クロトリノフンダマシ（*C. nigra* Yaginuma）と呼ばれていたものは本種の色彩変異（*nigra* type）で syn. とされた（Tanikawa, 2001）。

【引用文献】

Tanikawa, A., 2001. Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnologica*, 50(1):87-89.

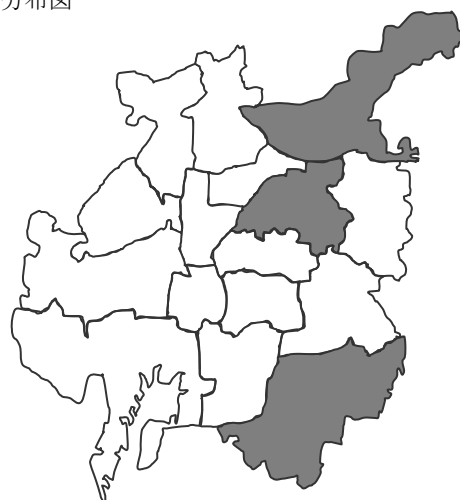
【関連文献】

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.428．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82,p.216．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.110．保育社，大阪．



シロオビトリノフンダマシ（雌）
千種区平和公園、2014年7月29日、柴田良成 撮影

市内分布図



（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

アカイロトリノフンダマシ *Cyrtarachne yunoharuensis* Strand**【選定理由】**

もともと個体数が少ない種である。その上、市内では開発等に伴い生息適地が減少、個体数もますます減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 4.5～7.0mm、雄 1.5～2.0mm。頭胸部背甲は黄褐色。腹部背面は赤褐色に白斑、その最広部の左右に1対の黒点がある。また、腹部背面が黒色の個体（アカイロ型）、黒色で後方部が暗赤色の個体（ソメワケ型）なども見られる。いずれにしても腹部の色彩には変異が多い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区、千種区に生息する。個体数が少ないため観察、採集記録は数例である。

【県内の分布】

犬山市、瀬戸市、豊田市（旧稲武町）等県北部での記録が多い。県南部の記録は少ないが、渥美町、田原市等で記録はある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、薩南諸島。

【世界の分布】

中国。

【生息地の環境／生態的特性】

ススキ草原、広葉樹林に棲み、昼はそれらの葉裏に静止している。夕方から活動を始め、同心円状の水平円網を張り、主として蛾の仲間を捕らえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと個体数の少ない種であるが、開発による生息適地の減少や農薬等の使用が減少に拍車を掛けている。

【保全上の留意点】

開発に際しては、ススキ草原（周辺部の環境も含め広く）など生息場所を残すこと。また、管理地などでの除草剤や農薬などの散布に注意する必要がある。

【特記事項】

従来ソメワケトリノフンダマシ（*C. induta* Yaginuma）と呼ばれていたものは、本種の色彩変異の一つである（Tanikawa, 2001）。

【引用文献】

Tanikawa, A., 2001. Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnologica*, 50(1):87-89.

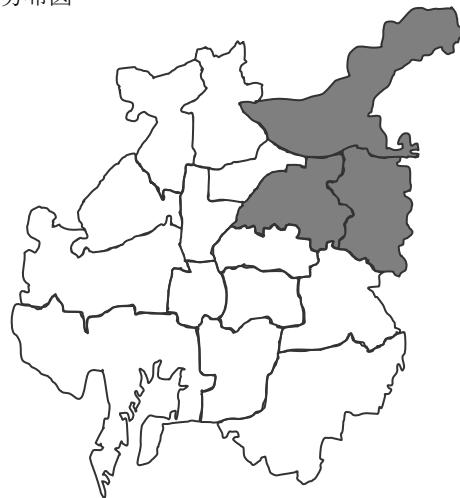
【関連文献】

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.428．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82,p.216．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.110．保育社，大阪．



アカイロトリノフンダマシ（雌）
千種区平和公園、2014年7月29日、柴田良成 撮影

市内分布図



（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

トゲグモ *Gasteracantha kuhli* C. L. Koch**【選定理由】**

市内では初に観察された大変珍しいクモ。分布は限られている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 6.0～8.0mm、雄 3.0～4.0mm。雌の腹部はキチン化していて硬く、3 対の黒色の刺がある。腹部背面は白色で黒い斑紋がある。腹部には 3 対の刺はなく、1 対の突起があり頭部と胸部の幅はほぼ等しい。腹部背面の体色や模様は雄に類似。垂直円網を張り周囲の糸には小さな糸の塊が点々と付けられることが多い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

昭和区八事山散策路で観察、採集（2014 年 7 月 22 日）。市内初記録。

【県内の分布】

三河部の山地、豊田市（旧足助町、旧稲武町）、北設楽郡設楽町、新城市（旧新城市）、豊橋市などに僅かな記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、伊豆諸島、奄美諸島。

【世界の分布】

インド、フィリピン、台湾、韓国、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

もともと山地の樹間に垂直円網を張るクモ。市街地の社寺林では珍しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内における観察例・採取例なく、今回初。個体数も多くない。

【保全上の留意点】

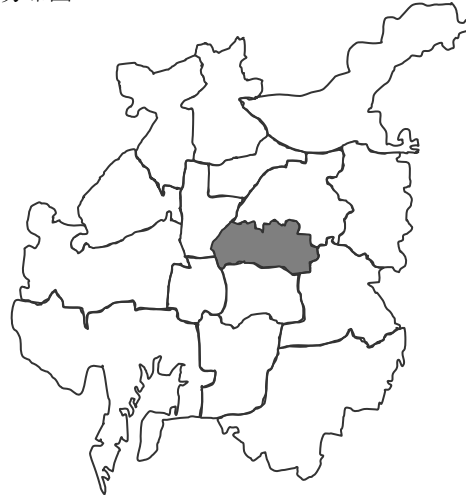
緑地公園内の樹林帯、主に落葉広葉樹林の保全、保護に努める必要がある。



トゲグモ（雌）

昭和区八事、2014 年 7 月 22 日、筒井朋子 撮影

市内分布図

**【関連文献】**

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.429. 東海大学出版会，秦野.
 千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.83,p.217. 偕成社，東京.
 八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.111. 保育社，大阪.
 新海栄一，2006. 日本のクモ，p.228. 文一総合出版，東京.

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

ゲホウグモ *Poltys illepidus* C. L. Koch**【選定理由】**

市内での分布は局地的で、個体数も少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

雌体長 12～18mm。背甲は赤褐色、腹部背面は黒色で両肩に1個ずつの大きな隆起があり、ほかに多くの小突起がある。腹部の形態は個体によって変異が大きい。雄は、4～6mm。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部地区の千種区、名東区、守山区に生息している。都市公園やその付近の住宅の庭などに多く、分布的にみて不明の点が多い。

【県内の分布】

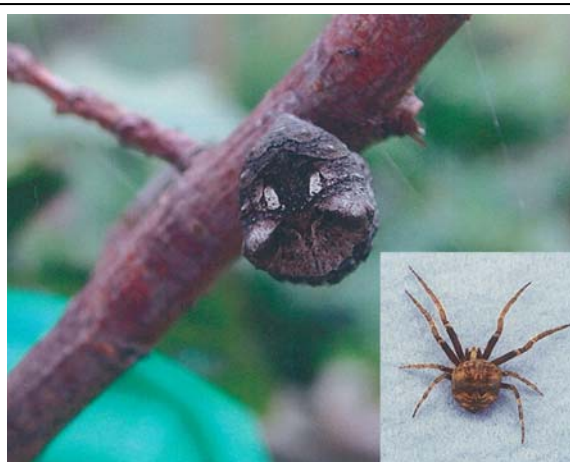
豊田市、豊川市（旧市域、旧音羽町）等に分布する。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

インド、フィリピン、中国、オーストラリア。



ゲホウグモ（雌）

左：名東区猪高町、2003年8月31日、家股幸子 撮影

右下：知多郡武豊町老町田湿地、1999年8月8日、原穰 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

昼は脚を縮めて枯れ枝などの先端に止まっていることが多い。この場合、枯れた木の芽に似ていて見つけにくい。夜は樹間などに円網を張り活動する。

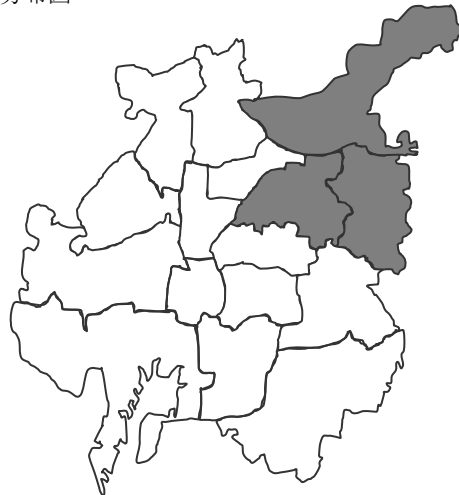
【現在の生息状況／減少の要因】

採集例は少ない。近年、名東区の都市公園を中心とした生息地が確認されている。しかし、生息地は局地的で、生態的にも不明の点が多い。

【保全上の留意点】

都市公園等における殺虫剤、除草剤の散布に注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

- 千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.81, p.215. 偕成社, 東京.
 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.117. 保育社, 大阪.
 小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 コモリグモ科>

エビチャコモリグモ *Arctosa ebicha* Yaginuma**【選定理由】**

徘徊性のクモで、大型のコモリグモである。河川敷、湿原、草原などに生息するが個体数は少ない。市内での記録は2ヶ所である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 11～13mm、雄 9～12mm。頭胸部と歩脚は濃茶褐色。腹部背面は茶褐色で心斑は褐色。全身に黒毛を生じる。第1跗節には長毛が2本あり、脛節下面には短い刺が3対ある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区八事天白溪湿地に生息していたが、環境悪化で湿地が消滅し絶滅した。現在は西区庄内川河川敷が唯一の生息地である。

【県内の分布】

豊田市、刈谷市、知立市、岡崎市、安城市等から記録されているが、土地開発で絶滅した地域が多い。また、生息地においても個体数は非常に少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

韓国、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

主に草原を徘徊しているが、石の下や土の窪みなどに潜んでいることもある。9～11月にかけて成体になる。多くのコモリグモの雌は、卵のうを糸器につけて徘徊するが、本種は卵のうを糸器につけてはいるが、地中に穴を掘って潜む。

【現在の生息状況／減少の要因】

西区庄内緑地が唯一の生息地である。1990年ごろまでは、天白区八事天白峡湿地に生息していたが、周辺の本木類や草本類が茂り、湿地は消滅した。2008年と2014年の調査でも発見されず、絶滅したと思われる。今後、生息地に適した環境が残されていたら、発見される可能性はある。

【保全上の留意点】

河川工事や土地開等による生息域での環境悪化や、農薬、除草剤等の散布にも注意する必要がある。

【関連文献】

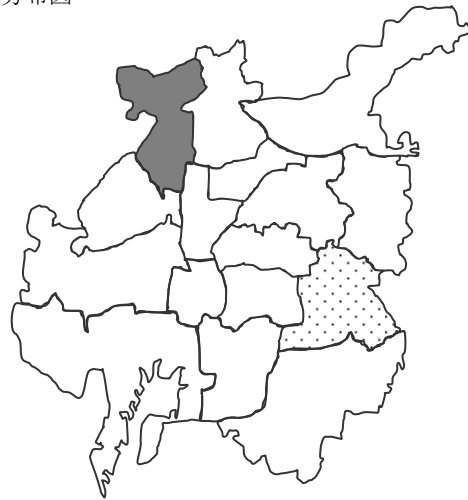
小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.234,pl.609．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.111,p.240．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.158．保育社，大阪．
新海栄一，2010．日本のクモ，p.61．文一総合出版，東京．



エビチャコモリグモ（雌）

天白区八事天白溪、1986年6月28日、緒方清人 撮影

市内分布図



（執筆者 緒方清人）

クモ類 <クモ目 ササグモ科>

クリチャササグモ *Oxyopes licenti* Schenkel**【選定理由】**

山地に多いクモ。県内には広く分布するが、市内では生息適地が少なく注目に値する。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

ササグモに似ているが、それよりも小型で全体が黒っぽく、外雌器は明らかに違う。雌の体長7～9mm、雄は6～8mm。背甲は黒褐色で中央に正中条斑がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区、天白区、名東区、守山区。

【県内の分布】

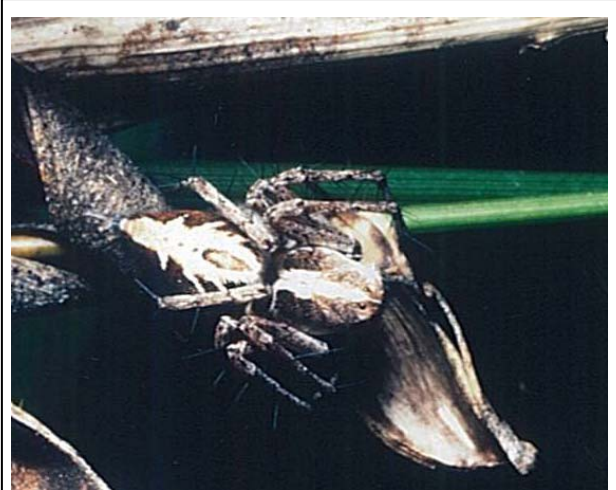
豊明市、豊田市（旧豊田市、旧下山村）、岡崎市、豊川市（旧音羽町）等に分布する。

【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

韓国、中国、ロシア。



クリチャササグモ（雌）

名東区猪高町、1988年5月18日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

二次林やスギの植林地の中や周辺に棲み、ピョンピョンと飛び跳ねる。

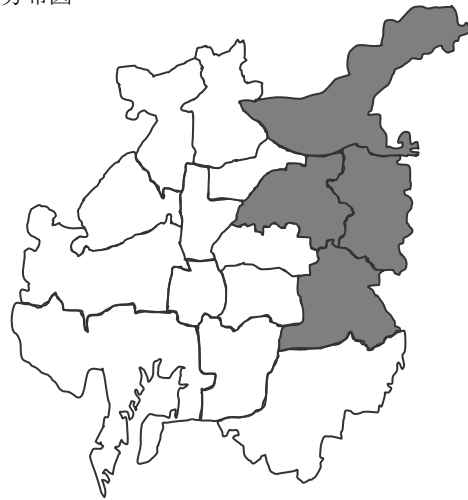
【現在の生息状況／減少の要因】

市内東部地域の一部に僅かに分布する。もともと、都市部には生息適地は少ない。

【保全上の留意点】

生息地付近の環境を保全する。また、殺虫剤や除草剤の散布に注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.117,p.247．偕成社，東京．

八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.157．保育社，大阪．

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類．東海大学出版会，秦野．

（執筆者 須賀瑛文）

クモ類 <クモ目 フクログモ科>

ヤギヌマフクログモ *Clubiona yaginumai* Hayashi**【選定理由】**

愛知県内では豊田市などで記録はあるが、いずれも雄であり、名古屋市内での雌の記録は注目に値する。特に、市内での生息適地は少ないので貴重である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

雌の体長は5mm、雄は4.5mmある。雌、雄ともに淡黄色で斑紋もなく特徴のないフクログモである。雌の外雌器周辺の模様（写真左下）と雄の触肢の大きな生殖球が特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区の熱田神宮で雌が確認された。

【県内の分布】

豊田市（旧市域、旧足助町）、新城市（旧鳳町）に記録（いずれも雄）がある。

【国内の分布】

全国的に見ても少ないクモである。

【世界の分布】

台湾。



ヤギヌマフクログモ（雌） 左下：外雌器と周辺の模様
熱田区熱田神宮、2001年8月5日、須賀瑛文 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

平地の草間に生息するといわれている。市内での生息場所は二次林内の下草付近である。

【現在の生息状況／減少の要因】

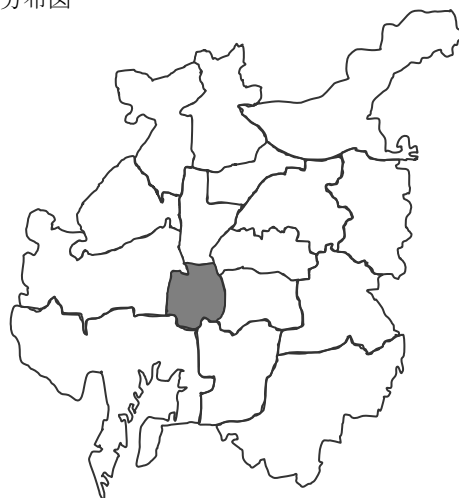
熱田神宮の立ち入り禁止区域に生息しているため、将来にわたって生息できる可能性が残されている。

元来個体数の少ない種ではないかと考えられるが、開発による生息適地の減少も理由の一つであろう。

【保全上の留意点】

二次林やその下草の保護、ならびに生息場所付近での除草剤や殺虫剤の使用に注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.126, p.257. 偕成社, 東京.
小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 ネコグモ科>

オビジガバチグモ *Castianeira shaxianensis* Gong**【選定理由】**

徘徊性のクモで、河川敷や草地などに生息する。本市では緑区で記録された。その後は記録されていないが、市内の河川には生息地が残されている可能性が高いので、確認に努めたい

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 7～8.7 mm、雄 6.5～7mm。頭胸部は灰黒色。腹部背面は灰色地に黒色の太い条がある。上顎の前牙堤に 3 歯、後牙堤に 2 歯がある。4 脚の各節は淡褐色で腿節に黒色の縦条がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

緑区鳴海町の記録が唯一のもので、1999 年 5 月 25 日の記録である。その後、記録されていない。

【県内の分布】

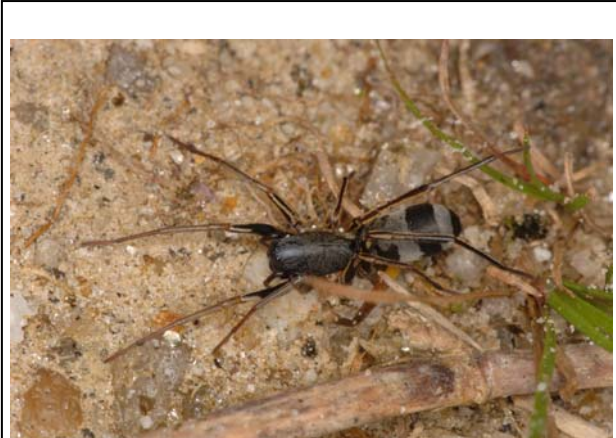
常滑市、半田市、豊明市、知立市、豊田市、岡崎市、豊川市、豊橋市。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国・韓国。



オビジガバチグモ（雌）

常滑市常滑 2011 年 6 月 15 日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

草地の地上を徘徊し、一見するとアリに見間違う。6～8 月にかけて成体になる。和名の由来は昆虫のジガバチに似ているので付いた。

【現在の生息状況／減少の要因】

緑区鳴海町の唯一の生息地は住宅地になり、絶滅した。本種に適した生息環境が確認されれば発見される可能性が高い。例えば天白川や日光川などの河川敷は適した環境といえる。

【保全上の留意点】

生息環境を保全し、農薬や除草剤等の散布には注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.234,pl.609. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.111,p.240. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.158. 保育社，大阪.
新海栄一，2010. 日本のクモ，p.61，文一総合出版，東京.

（執筆者 緒方清人）

クモ類 <クモ目 カニグモ科>

オビボソカニグモ *Xysticus trizonatus* Ono

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

徘徊性のクモで、主に山林から都市周辺の神社、仏閣、城などの樹幹に棲む。普段は樹皮のすき間に潜んでいるので発見されにくく、採集、観察例の少ない種である。

【形態】

体長雌 7～8mm、雄 5～6mm。頭胸部の中窩は淡褐色、両縁は茶褐色。後方に1対の頃色斑がある。腹部背面は赤褐色で中央に数対の淡褐色の斑があり、中央から末端にかけて3～4本の黒筋がある。第1・2脚の脛節と蹠節に太い刺を生じる。胸板にくぼみがある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

中区に生息している。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市、安城市、豊橋市、豊根村等に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。青森県陸奥市の標本を模式とし、1988年に新種記載された(小野, 1988)。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に松を好み、樹幹の窪みや樹皮下に潜んでいるので見つけにくく、観察記録は非常に少ない。松のコモ巻きはマツカレハの幼虫を駆除する目的で、立冬のころに樹幹に巻かれ、翌春に取り外す。取り外す際に、越冬個体がしばしば発見される。落葉層からも、幼体が時々発見される。

【現在の生息状況／減少の要因】

中区名古屋城内の松で発見されたのが、唯一の記録である。もともと個体数の少ない種と思われる。松の葉を害するマツカレハの駆除を目的とするコモ巻きは、取り外した後に焼却される。その際に、越冬個体が被害を受けている可能性が考えられる。

【保全上の留意点】

農薬散布は極力避けるべきである。また、松のコモ巻き内からも越冬個体が発見されるので、取り外しの際は害虫と益虫を区別することが望ましい。

【引用文献】

Ono, H., 1988. A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan. *National Science Museum monographs*, 5:1-252.

【関連文献】

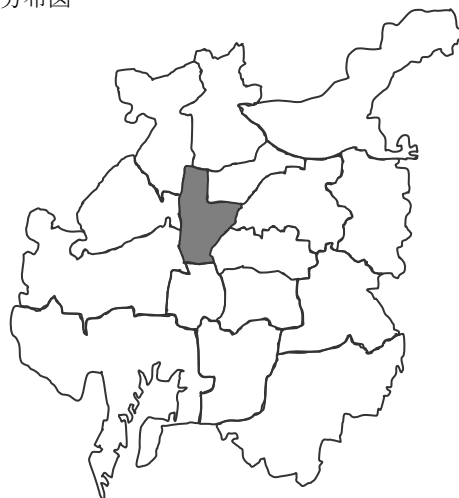
小野展嗣(編), 2009. 日本産クモ類, p.515, pl.635. 東海大学出版会, 秦野.
千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.145, p.273. 偕成社, 東京.
新海栄一, 2010. 日本のクモ, p.258, 文一総合出版, 東京.



オビボソカニグモ (雌)

中区名古屋城、1998年9月23日、緒方清人 撮影

市内分布図



(執筆者 緒方清人)

クモ類 <クモ目 ヒメグモ科>

ギボシヒメグモ *Chikunia albipes* (S. Saito)**【選定理由】**

造網性のクモで山林に棲む。県内での分布は主に三河地方なので、名古屋市での生息は注目に値する。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 2.5～3.5mm、雄 1.5～2.0mm。頭胸部は橙で眼域は黒褐色。腹部は角のとれた三角形をし、橙で両肩と末端が黒い。色彩変異があり、全身が黒色の個体もある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区に生息している。

【県内の分布】

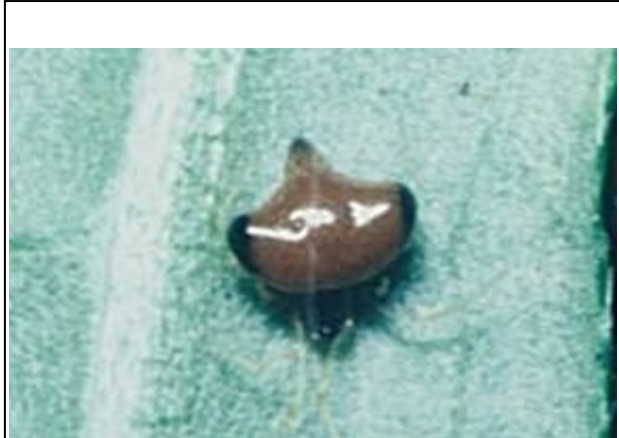
設楽町、豊田市（旧稲武町、旧下山村）等に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

ロシア、中国。



ギボシヒメグモ（雌）

北設楽郡設楽町、1988年8月10日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹の葉裏に不規則網をはる。夜行性で網は早朝とりこわし、昼間は葉裏に潜んでいる。卵のうは白色球形で雌が保護する習性がある。

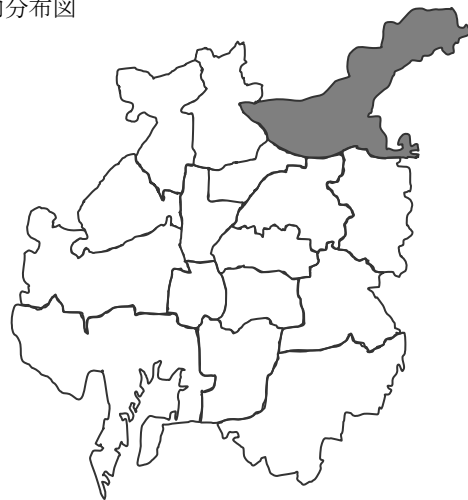
【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵地の開発による林の伐採等で減少している。個体数の少ない種と思われるが、東部地域の自然度の高い環境においては、今後、発見される可能性がある。

【保全上の留意点】

山林などの生息環境を保全する。

市内分布図

**【関連文献】**

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.42, p.185. 偕成社, 東京.
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.35. 保育社, 大阪.
小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 神奈川.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

ビジョオニグモ *Araneus mitificus* (Simon)

カテゴリー

【選定理由】

造網性のクモで、山林や林に棲む。もともと愛知県では個体数が少なく、特に市内では採集、観察例の少ない種であり注目に値する。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 8.0～10.0mm、雄 5.0～6.0mm。背甲は明褐色、腹部上部は緑白色で前縁は黒色、前方には横向きの暗色の斑紋があり、中央付近には1対の黒点、後端には横一列に4黒点が並ぶ。歩脚は橙色で各節の末端に黒色環斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区、守山区、昭和区、熱田区、西区に生息している。

【県内の分布】

豊明市、豊田市（旧足助町）、知立市等で記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

インド、マレーシア、フィリピン、台湾、韓国、中国、ニューギニア。

【生息地の環境／生態的特性】

多くは広葉樹の枝葉間に黄色の垂直円網のキレ網を張り、網の中央から呼び糸を引き先にある葉を丸めた住居に潜む。餌の昆虫などが網にかかると、呼び糸を伝わって捕獲する。捕らえた獲物は住居内で食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に公園や林に生息するが、個体数は少ない。もともと採集や観察例が少なく、一度確認された生息地においても毎年見られるわけではない。流動的な分布を示すようである。

【保全上の留意点】

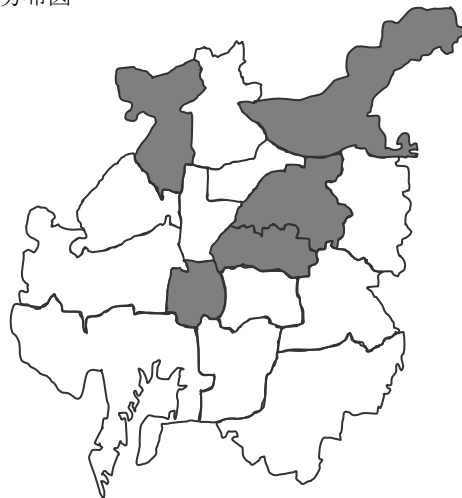
公園整備作業には樹木管理に配慮し農薬、除草剤等の散布には特に要注意。



ビジョオニグモ（雌）

千種区平和公園、2014年8月17日、柴田良成 撮影

市内分布図



【関連文献】

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.457. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.66,p.205. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.100. 保育社，大阪.

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

コガネグモ *Argiope amoena* L. Koch**【選定理由】**

草や木の間に円網を張り生息する全国的にもっとも普通なクモであったが、市内では特に減少傾向にある。生息適地である草地環境の減少が主な要因であろう。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 20.0～30.0mm、雄 5.0～7.0mm。
背甲は暗褐色で銀色の毛が多数生えている。
腹部上面には黄色と褐色の幅の広い横縞模様が美しい。鹿児島県加治木町のクモ合戦で有名。

【分布の概要】**【市内の分布】**

近年急速に減少しているが、守山区、中村区、港区、西区、中川区に見られる。

【県内の分布】

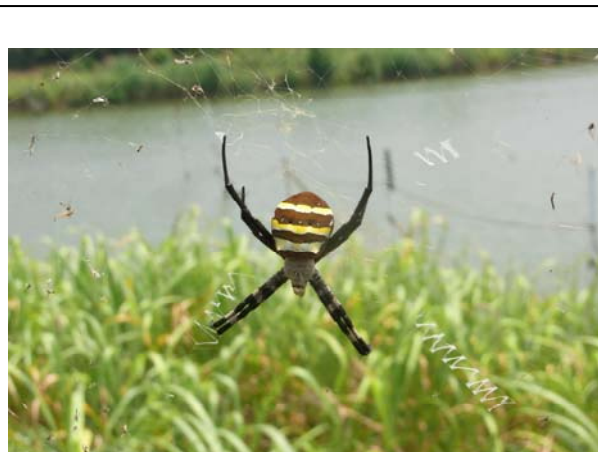
広く分布し、良好な環境があれば多産することがあるが、一般に減少傾向にある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、薩南諸島、伊豆諸島。

【世界の分布】

台湾、韓国、中国。



コガネグモ（雌）

中川区戸田川、2014年7月2日、柴田良成 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に河原や草木の枝の間や軒下などに垂直円網を張り、X字状のかくれ帯（一部省略されることもある）を付け、その中央に止まる。一般に、日当たりのよいところに多い。網の近くに不規則に糸を引き、淡緑色の卵のうを吊す。

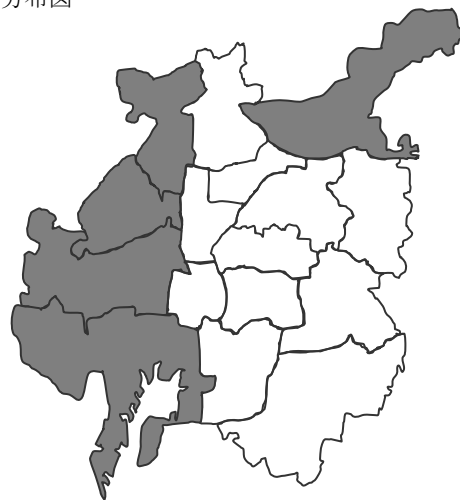
【現在の生息状況／減少の要因】

主に公園や林に生息するが、個体数は少ない種で、もともと採集や観察例が少なく、一度確認された生息地においても毎年見られるわけではない。流動的な分布を示すようである。

【保全上の留意点】

河川改修の整備工事などにより生息できる草地環境の減少が主な要因であろうが、他にも原因があるように思われる。

市内分布図

**【関連文献】**

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.425．東海大学出版会，秦野．
千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.79,p.213．偕成社，東京．
八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.113．保育社，大阪．

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

オオトリノフンダマシ *Cyrtarachne akirai* Tanikawa**【選定理由】**

市内における生育適地の減少に伴い、分布地、個体数ともに急激に減少傾向にある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

雌は体長10～13mm、雄2～2.5mm。背甲は褐色、腹部上部は黄色で前方両側には褐色の丸い斑紋が1対あり長さと同幅がほぼ同長。雄は極めて小さい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、千種区に僅かに生息している。

【県内の分布】

豊田市（旧豊田市、旧稲武町、旧下山村）、東浦町等に広く分布するが減少傾向にある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、薩南諸島、沖縄諸島、奄美諸島/。

【世界の分布】

インド、台湾、韓国、中国/。



オオトリノフンダマシ（雌）

千種区東山、2011年9月23日、柴田良成 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に山間部、丘陵地の道沿い、ススキや広葉樹の葉裏に脚を縮めて止まっている。夜になると、大型の荒い同心円状の水平円網を垂れて張り、餌としては主に蛾の仲間を捕らえる。

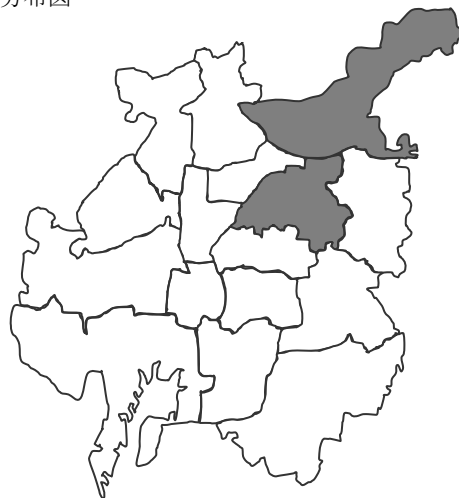
【現在の生息状況／減少の要因】

主に公園整備等により樹木の生息場所が失われることが大きな要因である。他に農薬の影響も考えられる。

【保全上の留意点】

整備工事や山林開発の際、ススキの原や疎林を残し生息環境の確保に配慮。千種区の平和公園に生息しているのは、僅かな疎林が残されているからである。ほかに農薬等の散布に注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

小野展嗣（編），2009. 日本産クモ類，p.427. 東海大学出版会，秦野.
千国安之輔，1989. 写真日本クモ類大図鑑，p.82,p.216. 偕成社，東京.
八木沼健夫，1986. 原色日本クモ類図鑑，p.109. 保育社，大阪.

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

トリノフンダマシ *Cyrtarachne bufo* (Bösenberg et Strand)**【選定理由】**

市内における生息適地の減少に伴って、個体数も減少傾向にある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 8.0～10.0mm、雄 1.0～2.5mm。腹部は前方は灰褐色、後方は黄白色。前方両肩は灰褐色で隆起、その周辺は白い線で囲まれる。雄の腹部は扁平で黄褐色、褐色の斑紋がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部に残された二次林を中心に生息している。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市等に広く分布するが、個体数は少ない。

【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

台湾、韓国、中国。



トリノフンダマシ（雌）

千種区平和公園、2014年8月15日、柴田良成 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

昼間はススキや広葉樹の葉の裏に静止、夜間に荒い同心円状の垂れた水平円網を張り、餌としては主に蛾の仲間を捕らえる。

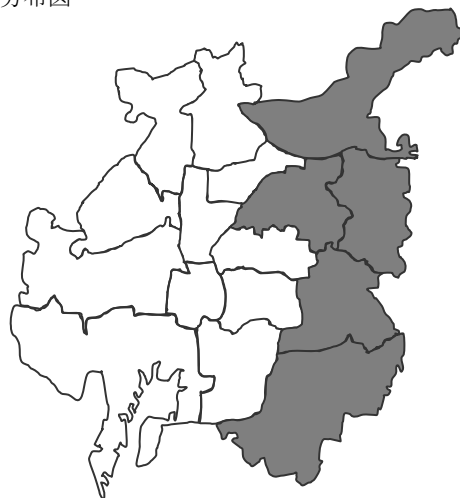
【現在の生息状況／減少の要因】

公園整備や開発に伴い生息適地の減少、ならびに農薬散布の影響などが主な要因と思われる。

【保全上の留意点】

主に公園整備工事などの際、生息に適した林地、草原を残す必要がある。農薬散布にも注意が必要である。

市内分布図

**【関連文献】**

小野展嗣（編），2009．日本産クモ類，p.427．東海大学出版会，秦野．
 千国安之輔，1989．写真日本クモ類大図鑑，p.82,p.215．偕成社，東京．
 八木沼健夫，1986．原色日本クモ類図鑑，p.109．保育社，大阪．

（執筆者 柴田良成）

クモ類 <クモ目 コガネグモ科>

スズミグモ *Cyrtophora ikomosanensis* (Bösenberg et Strand)**【選定理由】**

二次林などの樹木の枝や葉の間にドーム形の網を張る種である。市内では、このような生息環境が少なくなり、減少傾向にある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

雌の体長は18～23mm、雄は小さく3～5mmある。腹部の前方（両肩）に円錐状の突起があり、その前方は白い。後方はイナズマ状の美しい斑紋がある。斑紋の色は個体によって違い、褐色、緑色、黒色、赤色などまちまちである。また、斑紋の形も少しずつ違っている。第4脚の腿節が赤い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

東部の守山区、千種区、昭和区、緑区の森林が多く残っている地域や熱田区の熱田神宮林内に生息している。

【県内の分布】

刈谷市、豊明市、豊橋市、東浦町等県南部に広く分布するが、局地的な傾向がある。

【国内の分布】

本州（埼玉県・千葉県以南）、四国、九州、南西諸島/。

【世界の分布】

インド、台湾、オーストラリア、中国

【生息地の環境／生態的特性】

樹間に、直径30～80cmほどの特徴のあるドーム状絹網を張り、上下に不規則な糸を引く。雄の網もドーム状であるが小さく5cmほど、雌の網の中や葉の裏などに張る。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内に点在した二次林などが開発によって減少し、生息に適した場が失われたことが減少の主原因と考えられる。

【保全上の留意点】

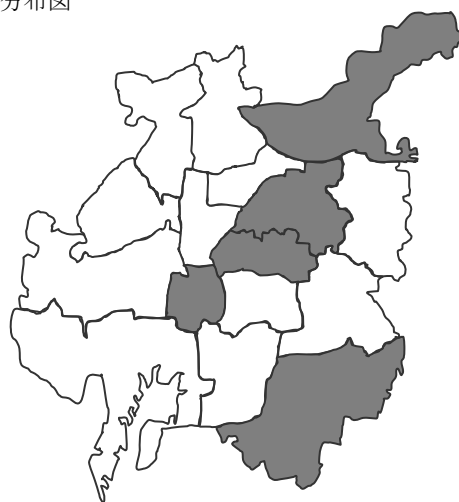
開発に際して、二次林を残す工夫が必要である。また、公園などでは、殺虫剤の散布に注意する必要がある。



スズミグモ（雌）

緑区大高緑地、2000年7月30日、緒方清人 撮影

市内分布図

**【関連文献】**

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.81, p.214. 偕成社, 東京.
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.117. 保育社, 大阪.
小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 フクログモ科>

ハマキフクログモ *Clubiona japonicola* Bösenberg et Strand**【選定理由】**

徘徊性のクモで、主に、池沼やその周辺の草原に棲む。そのため、開発の影響を受けやすく、生息環境の悪化により激減した。フクログモ属で水辺に依存する種は少なく、本種は注目に値する。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 8～9mm、雄 5～6mm。背甲は黄褐色で頭部前方にいくにしたがい黒褐色となる。腹部は黄褐色で白色の短毛におおわれる。歩脚は黄褐色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

西区、天白区、昭和区、北区。

【県内の分布】

旧豊田市、岡崎市、豊明市等に分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

東アジア一帯。



ハマキフクログモ（雌）

豊明市沓掛町、2002年5月5日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に池沼、湿地帯、河川などの水辺に生息する。雌は大型草本類のマコモ、ガマなどの葉先を三つ折りに曲げて産室をつくり、その中で産卵し卵のうを保護する。

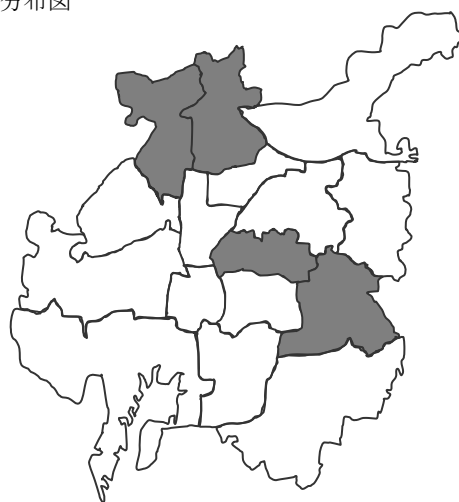
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では局地的に分布しているにすぎない。開発等により池、湿地などが減少し生息場所が失われたことが大きな要因である。

【保全上の留意点】

水辺の環境を保全し、生息区域での農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

市内分布図

**【関連文献】**

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, p.123, p.257. 偕成社, 東京.
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.179. 保育社, 大阪.
小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 ワシグモ科>

ヒゲナガツヤグモ *Micaria dives* (Lucas)**【選定理由】**

徘徊性のクモで、河川敷や草地などに棲む。市内では観察、採集例も少なく、もともと個体数の少ない種と思われる。近年、開発等の影響で生息地が狭められている。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 2.5～4mm、雄 2～3.5mm。背甲は濃紫色で頭部前方にいくにしたがい紫色や藍色に輝く。腹部上面は艶のある濃紫色で、光線の角度によっては、一部が黄金色、藍色、紫色、赤色等に輝く。

【分布の概要】**【市内の分布】**

緑区に生息している。

【県内の分布】

豊田市（旧豊田市）、知立市、安城市、日進市、豊橋市等に分布する。

【国内の分布】

本州に分布するが、個体数は少ない。

【世界の分布】

旧北亜区。



ヒゲナガツヤグモ（雌）

緑区鳴海町、2000年7月3日、緒方清人 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

主に、草地の地上を徘徊する。動きが俊敏で、一見するとアリに見間違ふ。5～8月にかけて成体になり、雌は石や土のすき間などに、直径3mmほどの卵のうを数個産みつける。

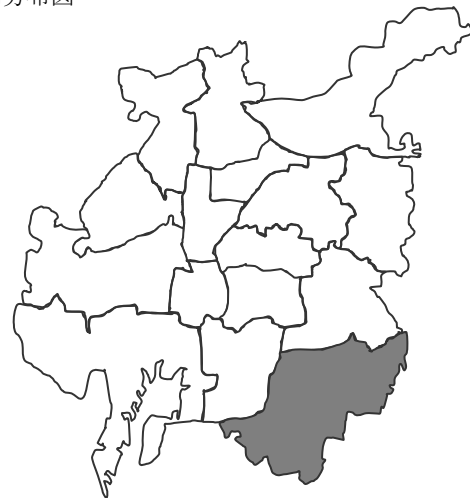
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では緑区で確認されただけである。現在、発見された生息地は住宅地になり、その後の生息は不明である。微小で動きが速いため観察、確認されにくい、他の場所で発見される可能性はある。

【保全上の留意点】

河川敷、草原などの生息環境の保全をする。生息区域での農薬、除草剤等の散布には注意する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

加村隆英, 2002. ワシグモ科 Gnaphosidae (その5). くものいと, 32:23-25.

【関連文献】

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.17. 保育社, 大阪.

小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 アシナガモ科>

チビクロドヨウグモ *Meta nigridorsalis* Tanikawa**【選定理由】**

全国的に見ても確認された県は少ないが、本市では分布域や生態など不明な点が多く情報不足と判断した。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌約 5.5 mm、雄約 4.5mm。全体に艶があり、頭胸部は黒褐色で頭部は黒色。腹部背面は黒褐色で縁に 3~4 対の瘤がり、波打っているように見える。4 脚とも黒褐色で腿節に茶褐色の環がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区で 2012 年 7 月 23 日に雌雄が採集された。その後も、同地で 2014 年 5 月までに延べ 3 回確認された。

【県内の分布】

上記の熱田区熱田神宮の記録が唯一である

【国内の分布】

三重県熊野市の標本を模式とし、1994 年に新種記載された (Tanikawa, 1994)。現在は和歌山県、岡山県、広島県、島根県、島根県、香川県、徳島県、佐賀県、熊本県、鹿児島県で記録されている (新海ほか, 2012)。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

筆者の観察では暗部を好み、三重県では石垣や崖地の窪み、和歌山県では朽ち木の空洞部に生息していた。水平円網の直径は 9~13cm で本属では小型である。

【現在の生息状況／減少の要因】

極めて狭い範囲に 10 頭前後が生息していると思われる。

【保全上の留意点】

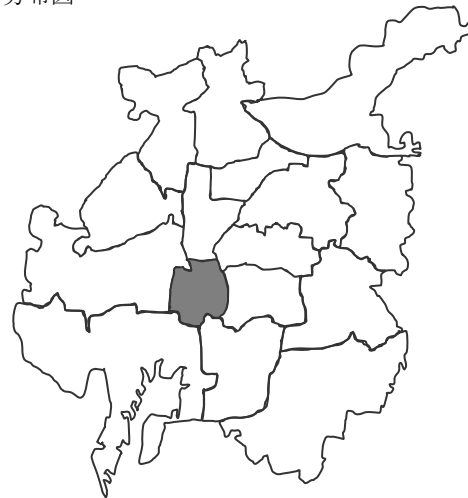
伐採木が山積みされたすき間に棲んでいるので、今後もその環境が保全されることが望まれる。



チビクロドヨウグモ (雌)

熱田区熱田神宮、2012 年 7 月 23 日、緒方清人 撮影

市内分布図

**【引用文献】**

Tanikawa, A., 1994. A New Species of Spider Genus *Meta* C. L. Koch, 1836 (Araneae: Tetragnathidae) from Japan. *Acta Arachnologica*, 43(1):65-69.

新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生, 2012. CD 日本のクモ. 自刊.

緒方清人, 2012. 愛知県のクモ目録追加種 (IV). 蜘蛛, 45:14-16. 中部蜘蛛懇談会.

【関連文献】

小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類, p.407. 東海大学出版会, 秦野.

新海栄一, 2010. 日本のクモ, p.173, 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)

クモ類 <クモ目 スオウグモ科>

ムロズミソレグモ *Takeoa nishimurai* (Yaginuma)

カテゴリー

【選定理由】

全国的に見てもたいへん珍しいクモであるが、不明な点が多いので情報不足と判断した。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌雄ともに 11mm。腹部は長く一見コモリグモのようである。体全体、やや赤味を帯びた黄褐色である。頭胸部は中央と側縁の間に黒色の不規則な 2 縦条がある。胸板は周縁が赤褐色で中央部が淡色になり黒や白い毛が混生している。腹部背面は黒や褐色や白い毛が混生し、中央に淡色の不明瞭な矢筈斑がある。第 4 脚蹠節の上方□位のところに、群集した毛櫛(群)があるのが特徴である。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区で採集(1977 年 5 月 1 日)された。

【県内の分布】

上記の名古屋市天白区の記録が唯一である。

【国内の分布】

1962 年山口県光市室積町で雌が、同年京都市伏見区で雄がそれぞれ 1 頭ずつ記録された。さらに、兵庫県、島根県隠岐島、大阪府で各 1 頭ずつ採集されただけ、名古屋市のものは、国内 6 頭目にあたる。近年(2010)、奈良県で雄雌合わせて 3 頭が見つかった。

【世界の分布】

今のところ日本固有種であるが不明な点が多い。

【生息地の環境／生態的特性】

山口県の雌は放置されたレインシューズ上に産み付けられた孵化した子グモ近くで、京都市の雄は座敷上、名古屋市の雌はアパートの便所で採集されている。生態は不明。屋内での発見が多いが体型からみて野外の地上徘徊性ないし狩猟性と想像される(小野, 2009)。

【現在の生息状況／減少の要因】

まったく不明である。

【保全上の留意点】

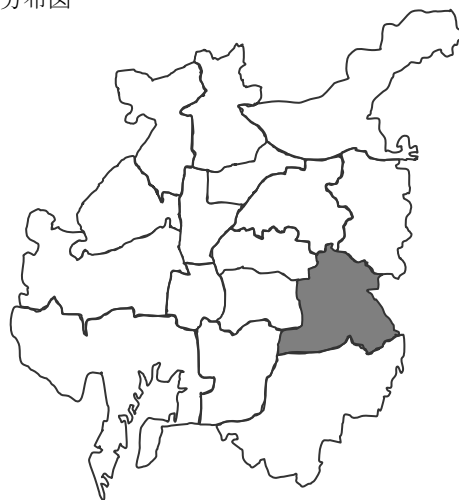
情報が十分でないので、今後とも注意して情報収集に努める必要がある。



ムロズミソレグモ

(「愛知の動物」(1984, 愛知県郷土資料刊行会)より転載)
天白区八事山田、1977 年 5 月、八木沼健夫 撮影

市内分布図



【引用文献】

- 八木沼健夫, 1963. Zoropsidae のクモ日本の Fauna に入る. *Acta Arachnologica*, 18(1):1-6.
八木沼健夫, 1977. 分布資料. *Atypus*, 69:39.
須賀瑛文, 1984. 真正蜘蛛類 愛知の動物, pp.41-62. (株)愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
荒川真, 2011. 奈良県産のムロズミソレグモとマダラヒメグモ. くものいと, 45:14-17.
小野展嗣(編), 2009. 日本産クモ類, p.141. 東海大学出版会, 秦野.

【関連文献】

- 八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.17. 保育社, 大阪.

(執筆者 須賀瑛文)

クモ類 <クモ目 カニグモ科>

シロスジグモ *Runcinia affinis* Simon**【選定理由】**

本市では千種区と西区で確認されているが、分布域や生態など不明な点が多く情報不足と判断した。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長雌 4.5～6mm、雄約 2.9～3.5mm。頭胸部は淡黄褐色で両側に1対の濃褐色の縦条がある。また、背甲中央に淡色の縦条がある。腹部背面は黄褐色で側縁は濃褐色で4～5対の細い縦筋がある。雄もほとんど雌と同様だが、眼域に白色の横条がある。また、第1・2脚が体長の約2.5倍と非常に長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区と西区で採集（2012年7月23日）された。

【県内の分布】

沿岸部から平野部に分布する。常滑市、日進市、知立市、豊橋市で記録されている。県内では、近年採集記録が増えている。

【国内の分布】

本州（千葉県以南）、四国、九州、南西諸島。

【世界の分布】

アフリカからアジアにかけて広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

筆者の観察では暗部を好み、三重県では石垣や崖地の窪み、和歌山県では朽ち木の空洞部に生息していた。水平円網の直径は9～13cmで本属では小型である。

【現在の生息状況／減少の要因】

千種区平和公園と西区庄内緑地で確認されているが、個体数は少ない。

【保全上の留意点】

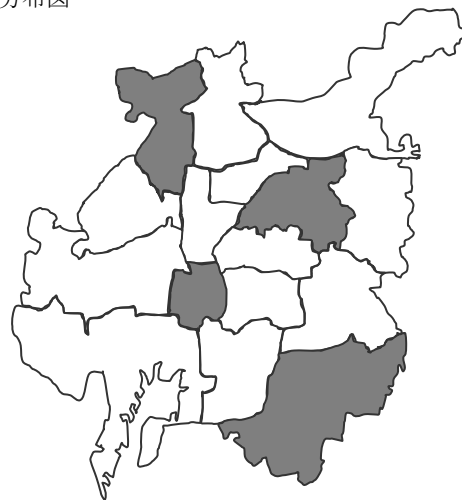
河川敷や草地に生息する。本市では適当な草地が土地開発によって減少傾向にある。今後、注意深い調査と、環境保全が望まれる。



シロスジグモ（雄）

千種区平和公園、2008年7月12日、緒方清人 撮影

市内分布図

**【引用文献】**

Ono, H., 1988. A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnida, Araneae) of Japan. *National Science Museum monographs*, 5:1-252.

新海 明・安藤昭久・谷川明男・池田博明・桑田隆生, 2012. CD 日本のクモ. 自刊.

緒方清人, 2012. 愛知県のクモ目録追加種 (IV). 蜘蛛, 45:14-16. 中部蜘蛛懇談会.

【関連文献】

小野展嗣 (編), 2009. 日本産クモ類, p.407. 東海大学出版会, 秦野.

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, p.158. 保育社, 大阪.

新海栄一, 2010. 日本のクモ, p.173. 文一総合出版, 東京.

(執筆者 緒方清人)

カニ類

① 名古屋市におけるカニ類の概況

名古屋市で今まで観察されたカニは、12 科 43 種である。淡水産サワガニ以外は、潮の干満の影響を受ける名古屋港南部のふ頭海岸（潮見・稲永・汐止・空見・金城）や市内を流れる河川の河口・河口干潟・ヨシ原に生息していた。

ふ頭海岸に生息するカニ

ふ頭岸壁下の岩・石の間に多く生息するイソガニ 1 種と、海底に生息しているカニは次の 17 種である。サメハダヘイケガニ、アミメキンセンガニ、ナナトゲコブシ、イッカククモガニ、イボイチョウガニ、ガザミ、シマアシイシガニ、ヒメガザミ、イシガニ、フタホシイシガニ、チチュウカイミドリガニ、ケブカエンコウガニ、マルバガニ、シワオウギガニ、シワオウギダマシ、トリウミアカイソモドキ、オオヨコナガピンノ。

海底に生息するカニは抱卵盛期に入ると、浅瀬に移動する。ふ頭に近づくものもあり観察が容易になる。

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニ

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニは次の 24 種である。

河口にはマメコブシガニ、オウギガニ、モクズガニ、オオシロピンノ。

河口干潟にはハクセンシオマネキ、コメツキガニ、チゴガニ、オサガニ、ヤマトオサガニ、アリアケモドキ。

カキ礁や転石の下にはケフサイソガニ、ヒメケフサイソガニ、ヒライソガニ、タカノケフサイソガニ。

ヨシ原にはアカテガニ、カクベンケイガニ、ユビアカベンケイガニ、クロベンケイガニ、フタバカクガニ、クシテガニ、ベンケイガニ、ハマガニ、アシハラガニ、ウモレベンケイガニ。

市内を流れる 7 つの河川の河口堤防は、コンクリートの垂直岸壁となっている。河口に干潟・ヨシ原が発達していない川が多い。河口、河口干潟、ヨシ原はカニの産卵や稚ガニの生育場所と親ガニの生息場所として重要な役割をしている。

庄内川は規模の大きい川で河口・下流に干潟・ヨシ原が発達している。河口干潟は藤前干潟へと広がっている。干潟周辺にカキ礁や転石がある。

次に規模の大きい天白川は上・中流域の水源となる丘陵や池が住宅団地となった。河口は、潮見ふ頭により、河口の自然環境が変化し、河口干潟・ヨシ原の減少で、カニの種類・個体数が減少した。

なお、ケフサイソガニは、形態的に区別し得る 2 型が存在することがわかり、ケフサイソガニとタカノケフサイソガニに分けられることになった（高野，2005）。2005 年以前の標本は、区別しない。

このほか、ミナトオウギガニ（外来種）が中川運河で採集されている（木村妙ほか，2007）。

守山区東谷山のカニ

サワガニが生息していた。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回の調査の結果、絶滅危惧ⅠＢ類（EN）２種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）４種、準絶滅危惧（NT）４種、計１０種がリストに掲載された。

サメハダヘイケガニは潮見ふ頭南海岸、金城ふ頭南海岸の海底に分布しており、長期にわたり継続観察をすることができた。結果、減少傾向にあることがわかった。このカニは海底の汚れの影響を受け易い砂泥底に生息している。大型船舶の出入りが多く、汚れを受け易い場所である。生息場所の関係から、環境が更に悪化すれば消滅の危険性がある。清掃活動によりゴミ・油を回収し、海水の水質を浄化回復させることが必要である。

河口干潟に生息しているカニはスナガニ科のカニが多い。かつて庄内川・天白川の河口干潟にハクセンシオマネキ・コメツキガニ・チゴガニの大きい集団を観察することができた。両河川の河口にふ頭ができ、河口護岸工事が行われて干潟・ヨシ原が減少し、カニの個体数が激減した。庄内川の現状の自然環境の維持・管理が必要である。藤前干潟については、残された貴重な自然の保全が図られている（ラムサール条約登録）。河口は、モクズガニの産卵場所となっているが、稲永ふ頭・汐止ふ頭・空見ふ頭によって河口面積狭く、海水の汚れの影響が考えられる。

ヨシ原に生息しているカニはアカテガニ・クシテガニ・ユビアカベンケイガニ・ウモレベンケイガニなど、ベンケイガニ亜科のカニが多く、希少カニが含まれている。

市街化により、各河川の堤防・河口をコンクリートの垂直岸壁とするための大規模工事が行われた。干潟・ヨシ原は減少し、カニの種類・個体数が減少した。開発を免がれた背割堤干潟・ヨシ原に希少なカニが生息している。

サワガニは守山区東谷山に生息しているが、市街化により丘陵地開発が進み、生息環境が変化し、個体数が減少した。生息地は限られており分散能力が低いので消滅の危険性大である。近年、生息を確認していないが、生息しているという報告はある。東谷山の溪流の自然植生と水理の保全などが必要である。

（執筆者 天野 勲）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各カニ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、この記載については、平成26年10月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（カニ類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産かに類の分類目録」（三宅，1998）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産かに類の分類目録」（三宅，1998）に準拠した。その後、新しい取扱いがある場合は、それに従った。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物（クモ形類・甲殻類等）」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種が名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定された理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、生態写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査によって確認された地域について、各区（地先を含む）ごとに着色して市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

カニ類 <十脚目 スナガニ科>

ハクセンシオマネキ *Uca (Celuca) lactea lactea* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では、庄内川河口干潟・背割堤干潟や天白川河口干潟に生息していた。庄内川の河口には、稲永ふ頭・汐止ふ頭が出来て干潟の面積が狭くなり、個体数が減少した。さらに砂底・砂泥底干潟の減少で現在はハクセンシオマネキの生息を確認できない。天白川の河口干潟は、潮見ふ頭が出来、干潟・ヨシ原が減少した。上・中流域の水源となっていた丘陵地・池の多くが住宅団地となり、水質の汚濁などによりハクセンシオマネキの姿は見られなくなった。

【形態】

雄・雌ともに甲長 12mm 位、甲幅 18mm 位。鋏脚は、雄は左右著しい相違。大鋏の掌部はやや扁平し、表面白色（白扇）。雌は左右とも小型で相称である。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口・背割堤の干潟では 2002 年と 2008 年～2012 年まで、生息を確認した。天白川河口は 2000 年に生息を確認している。現在は消滅したものと思われる。

【県内の分布】

知多半島伊勢湾側にある南知多町内海、知多市日長の干潟に生息していた。

【国内の分布】

伊勢湾が北限とされているが、下田市の大賀茂川河口、三浦半島にも生息している。南は九州まで分布。日本列島での分布範囲は狭い。

【世界の分布】

韓国、台湾、ホンコンまで分布。

【生息地の環境／生態的特性】

砂泥底のやや硬い干潟を好み、深さ 5～20cm 巣穴を掘って生活している。干潮時巣穴からでて集団で活動するウェイビング行動は 6 月中旬から 8 月下旬の繁殖期に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口・背割堤の砂底・砂泥底干潟に生息していたが、干潟面積が狭くなり、個体数が減少。2013 年以後、生息を確認していない。河川により運ばれる砂土量が減少し、生息場所が消失。天白川河口は 2001 年以後、生息を確認していない。

【保全上の留意点】

河川の上流に横断構造物を建設すると、川水によって運ばれる土砂量が減少し、ハクセンシオマネキの生息場所が減少する。河口干潟・ヨシ原は稚ガニの生育場所となっている。庄内川の現状の自然環境が維持管理されることが必要。

【特記事項】

藤前干潟は大都市に残された貴重な自然としてラムサール条約に登録され、保全が図られている。

【関連文献】

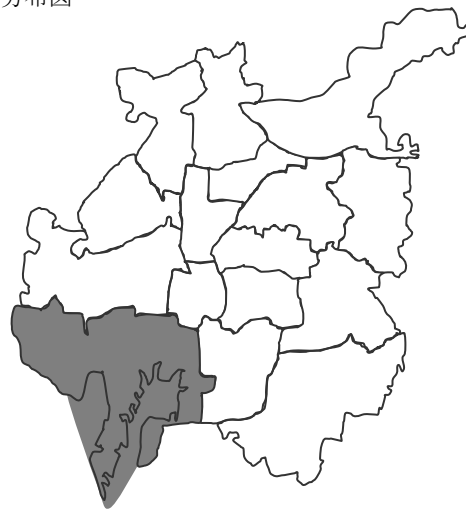
- 天野 勲, 2010. 生物から見た名古屋の自然, p.98. 名古屋市.
 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.175. 名古屋市.
 伊東 円, 2004. 静岡県下田市大賀茂川に生息するシオマネキ類について. 日本甲殻学会第 42 回全国大会報, p.36.
 伊東 円, 2011. 静岡県内でのシオマネキ類の生息状況. 日本甲殻学会第 49 回大会報, p.44.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター (編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, p.91. 東海大学出版会, 秦野.
 水産庁 (編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp.3-23. (社)日本水産資源保護協会, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp.18-19, 21, 59, 64, 66, 96, 102-103. 京都大学学術出版会, 京都.
 (執筆者 天野 勲)



ハクセンシオマネキ

港区庄内川河口背割堤干潟、2009 年 9 月 6 日、天野勲 撮影

市内分布図



カニ類 <十脚目 サワガニ科>

サワガニ *Geothelphusa dehaani* (White)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

山間の溪流や平地の清流に生息し、池や沼には生息しない。産卵で海に降りることもない。本種の生息地は限られており分散能力が低いので地域的に消滅を起こしやすい。市内では守山区東谷山で生息が確認されているが、東谷山周辺の丘陵地の開発、登山道工事などにより、溪流・清流が土砂で埋まったり、川水の汚濁によりサワガニは減少した。個体数が少ないので発見がむずかしい。

【形態】

雄は甲長 20mm 位、甲幅 25mm 位、甲の色彩に異変あり。東北地方は青色が多く、東海・三重は暗褐色である。二次性徴は、雄の鋏脚は、左右一方が大きくなる。第二腹肢が伸び、剛毛は長く密である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山で 1984 年に初めて生息を確認した。

【県内の分布】

県内の山間の渓谷や平地の清流に広く分布している。

【国内の分布】

青森下北半島（北限）から本州、四国、九州、屋久島（南限）まで分布している。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

溪流・清流に生息し、池沼に生息しない。繁殖期 6 月～10 月。雌は腹部に卵を抱いて、15～20 日間孵化するまで保護する。3 年から 4 年生きる。食性は、藻類、ミミズ、ヨコエビ類、陸貝類（カワニナ）、水性昆虫、死んだセミなど。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地造成・道路工事などにより溪流・渓谷が土砂で埋まるなど、サワガニの生息環境が荒廃したと考えられる。天敵はイノシシ、アカショウビン、ヤマショウビン、ヤマメ、ドンコ。

【保全上の留意点】

山間の溪流の自然植生・水理の保全。平地の清流の河岸や川底をコンクリートにしないで土のままにしておく、川の上流から農薬、化学物質、有機物の流入をしないようにするなどの留意が必要である。

【特記事項】

サワガニは渓谷毎に遺伝的分化があるといわれている。肺吸虫の中間宿主として知られている。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.176. 名古屋市.

天野 勲, 2008. 代表的な自然と生物 4 東谷山 カニ. 新修名古屋市史資料編 自然, p.507. 名古屋市.

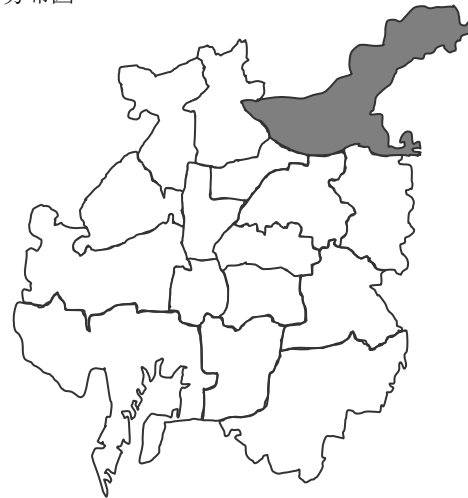
嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.260-261. 朝日新聞社, 東京.



サワガニ

守山区東谷山、1984 年 10 月 21 日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

アカテガニ *Chiromantes haematocheir* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市では、庄内川河口から、最も陸深く、堤防の土手など高い所に生息するカニ。市内の河川堤防は、コンクリートの垂直壁で、這い上がることが難しいため、個体数が減少した。河口付近の干潟やヨシ原に生息するものもある。しかし、個体密度の低い種類であり、河口域・下流域の生活環境が悪化すれば消滅するものと思われる。

【形態】

雄の甲長 35mm 位、甲幅 40mm 位で、甲は四角形。雄の鋏脚は強大で鮮紅色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川の河口から河川沿いに 5km～6km 位上流まで分布していた。個体数は多くない。

【県内の分布】

伊勢湾の木曽三川や三河湾の矢作川・豊川など大きい河川の河口部・下流域に分布。

【国内の分布】

岩手県以南（太平洋側）と秋田県以南（日本海側）に分布。

【世界の分布】

韓国、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

堤防の土手斜面や陸上の自然林に巣穴をつくり生息する。抱卵盛期 7 月～8 月。産卵は河口です。幼ガニまではヨシ原の中で生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市化が進み、堤防がコンクリート化した。陸上の自然林もなくなったため、堤防内のヨシ原の周辺を生息場所としている。

【保全上の留意点】

河川改修の際、土の岸とその付近の植生を残すこと、河口のヨシ原を消失しないよう見守っていく。コンクリートの垂直堤防はカニが陸上への昇降ができない。堤防の傾斜を考えるべきである。

【特記事項】

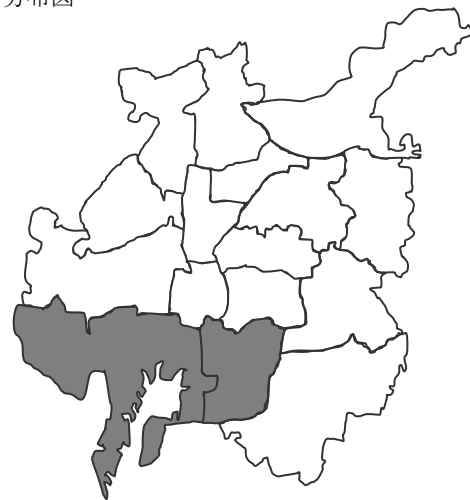
赤いカニとして目立つので捕獲され易い。



アカテガニ

港区庄内川下流、2005 年 8 月 20 日、天野 勲 撮影

市内分布図

**【関連文献】**

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.177. 名古屋市.
 馬場敬次, 1976. アニマ特集 カニの世界・海に育つ河口のカニ, pp.16-19. 平凡社, 東京.
 小島太一, 2008. アカテガニの産卵における 3 年サイクル. 日本甲殻学会第 46 回大会報, p.78.

(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

クシテガニ *Parasesarma plicatum* (Latreille)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつて、名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原と天白川の右岸のヨシ原である。その後、庄内川左岸は大規模護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少した。河口に残されたヨシ原の中で生息を確認している。右岸の背割堤は立ち入り禁止となり、干潟・ヨシ原の自然は守られた。2009年6月に立ち入りが許可され、クシテガニの生息を確認した。個体数が減少していた。天白川は上・中流域の丘陵が住宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口近くにふ頭ができ干潟・ヨシ原が激減した。クシテガニの生息は確認できなくなった。

【形態】

雄の甲長 21mm 位、甲幅 30mm 位で四角形のカニ。鋏脚の可動指の上縁に米粒のような顆粒 6～8 個並びクシのように見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口左岸に残された干潟・ヨシ原と右岸の背割堤に生息している。

【県内の分布】

伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口の干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原氏汐川河口干潟・ヨシ原などにも生息していた。

【国内の分布】

東京湾、相模湾、岡山、熊本、長崎方面に生息している。

【世界の分布】

韓国、中国、マレー半島、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

【現在の生息状況／減少の要因】

護岸工事など開発が進み干潟・ヨシ原が減少したため、個体数が減少した。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生活場所を保護する必要もある。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.178. 名古屋市.
中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録, p.32.
大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター(編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, pp.33,45,105. 東海大学出版会, 秦野.
三宅貞祥, 1998. 日本産かに類の分類目録. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ, p.181. 保育社, 大阪.

(執筆者 天野 勲)

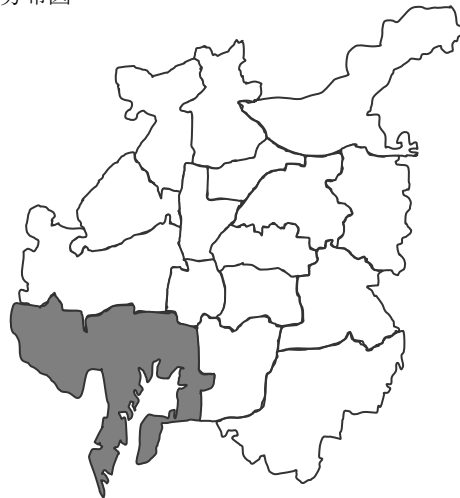


クシテガニ

港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日

天野 勲 撮影

市内分布図



カニ類 <十脚目 イワガニ科>

ユビアカベンケイガニ *Parasesarma acis* Davie

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原である。その後、庄内川左岸は護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少した。右岸の背割堤は立ち入り禁止となり、干潟・ヨシ原の自然は守られた。2009年6月に立ち入りが許可され、ユビアカベンケイガニの生息を確認した。個体数が減少していた。

天白川は、上・中流域の丘陵が住宅団地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口にふ頭ができ、右岸の干潟・ヨシ原は激減した。ユビアカベンケイガニは生息できなくなった。

【形態】

雄の甲長 12.4mm、甲幅 15.2mm。クシテガニに似ている。小形種。鋏脚の可動指の上縁に 24～26 個の顆粒が密に列生している。鋏脚の先が赤い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川右岸の背割堤に生息している。

【県内の分布】

三河湾の田原市汐川河口干潟、ヨシなどにも生息していた。

【国内の分布】

相模湾、三浦半島、土佐湾、福岡市多々良川水系と論島。

【世界の分布】

台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の北部や東部の丘陵地にある湿地やため池は、都市化の波に洗われ、土地改良や埋め立てが進行し、生育環境が減少しているのが大きな要因になっている。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生活場所を保護する必要もある。



ユビアカベンケイガニ

港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日

天野 勲 撮影

市内分布図

**【関連文献】**

中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録. 40pp.

大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター (編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, pp.33,46. 東海大学出版会, 秦野.

三宅貞祥, 1998. 日本産かに類の分類目録. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ, p.181. 保育社, 大阪.

(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

ウモレベンケイガニ *Clistocoeloma sinensis* Shen

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつて、名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口両岸・背割堤のヨシ原と天白川河口右岸のヨシ原の2ヶ所であった。その後、庄内川左岸の堤防工事やふ頭埋め立て工事により、河口の干潟やヨシ原が減少した。背割堤の立ち入りが禁止となり、再調査ができなかった。2009年6月に立ち入りが許可されウモレベンケイガニの生息が確認された。天白川は上・中流域の丘陵が住宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口にふ頭ができ、右岸の干潟・ヨシ原は激減した。ウモレベンケイガニは生息できなくなった。

【形態】

雄の甲長 12mm 位、甲幅 20mm 位で長方形のカニ。全身黒色で、短毛で覆われている。完全な保護色である。鋏脚の先が赤い。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口右岸の背割堤ヨシ原に生息している。

【県内の分布】

伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原市汐川の河口干潟・ヨシ原にも生息していた。

【国内の分布】

東京湾以南に分布。紀伊半島、四国(土佐清水)、山口湾周辺の干潟。福岡、佐賀にも生息している。

【世界の分布】

台湾、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

河口・ヨシ原周辺の石・漂着物の下の湿り気のある場所に生息する。半分位土にうずもれているので発見しにくい。指で触っても動かない。小動物を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河口開発が進み、干潟・ヨシ原が減少したため生息場所が減少し、個体数の減少となった。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生活場所を保護する必要もある。

【関連文献】

- 天野 勲, 2010. 生物から見た名古屋の自然, p.98. 名古屋市.
 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.179. 名古屋市.
 市川市・東邦大(編), 2007. 干潟ウォッチングフィールドガイド, pp.37,136. 誠文堂新光社, 東京.
 中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録, p.32.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター(編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, p.91. 東海大学出版, 秦野.
 酒井 恒, 1976. 日本産蟹類, pp.419-420. 講談社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 158-162. 京都大学学術出版会, 京都.

(執筆者 天野 勲)

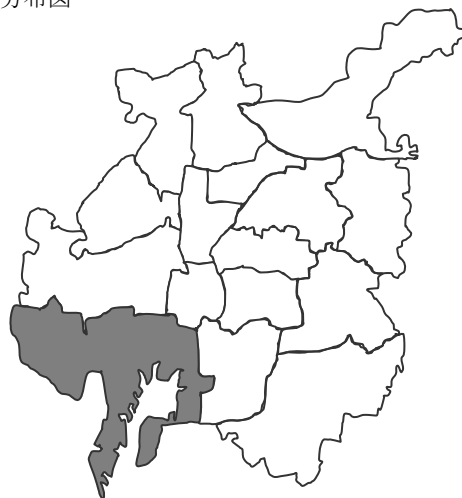


ウモレベンケイガニ

港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日

天野 勲 撮影

市内分布図



カニ類 <十脚目 ヘイケガニ科>

サメハダヘイケガニ *Paradorippe granulata* (De Haan)**【選定理由】**

伊勢湾の知多半島沿岸に多く生息しているカニで、近年、減少傾向にある。水質や海底の汚れの影響を受け易い沿岸の砂泥底に生息していることから、減少しているものと思われる。名古屋港南部の潮見ふ頭・金城ふ頭南海岸の海底に生息しているが、年々減少している。ふ頭海岸は、船舶の出入りが多いことから、海水・海底の汚れが減少の原因ではないかと思われる。

【形態】

雄の甲長 24mm 位、甲幅 25mm 位、人の顔に似た甲面は、小さな顆粒に覆われ、さめ肌になっている。四対の歩脚のうち、前方の2対は長く、歩いたり泳いだりするが、後方の2対は縮小して、その先端の爪で二枚貝の殻などを背中のにのせて歩く、変わった形態・習性をもつ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

伊勢湾北部エリア内の埋め立て地である名古屋港の潮見・金城ふ頭南海岸の海底に生息する。

【県内の分布】

伊勢湾の知多半島側に特に多く分布。三河湾・遠州灘にも分布している。減少傾向にある。

【国内の分布】

北海道南部から九州までの両沿岸に分布している。

【世界の分布】

韓国、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢湾には、古くから見られるカニ。水深 10～150m の砂泥底で貝殻の多い場所に生息する。抱卵盛期 7 月から 9 月で、繁殖時期になると砂底の場所を求めて、活発に移動する。冬になると深い場所に戻る。

【現在の生息状況／減少の要因】

水質や海底の汚れの影響を受けやすい沿岸の砂泥底に生息していることから、減少傾向にあると思われる。特に名古屋港ふ頭付近の海底は、大型船舶の出入りが多く、水質や海底の環境悪化が進んでいると考えられる。

【保全上の留意点】

清掃活動などにより、ゴミ、油の回収をし、海・港の水質浄化回復をしていくことが必要である。

【特記事項】

相模湾では、サメハダヘイケガニが激減している（池田ほか、2006）。

名古屋港一帯の埋立地（ふ頭）でサメハダヘイケガニの化石が採集された。

【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.180. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 甲殻類. 新修名古屋史資料編 自然, pp.337-342. 名古屋市.
 池田 等ほか, 2006. 相模湾葉山沖の短尾類相. 国立科学博物館専報, (41):173-182.
 三輪龍之, 1977. 郷土の化石と貝 -名古屋港及びその周辺を中心として-, pp.24-25.
 中島徳男, 1992. 愛知県三谷港に水揚げされたカニ類の目録とその分布, pp.35-45. 三河生物同好会.
 水産庁 (編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, (社)日本水産資源保護協会, 東京.
 富山 実, 1993. 小型底びき網漁から見た伊勢湾内底生生物相. 愛知水試研報, (1):41-47.

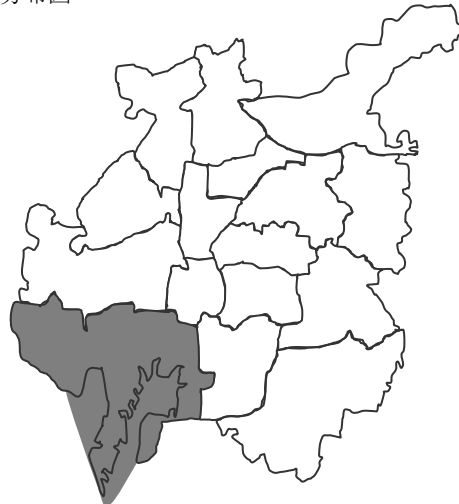
カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外



サメハダヘイケガニ
港区潮見ふ頭南海岸、2001年9月5日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

モクズガニ *Eriocheir japonicus* (De Haan)**【選定理由】**

生活史の大部分を淡水域で生息するが産卵のため海（河口）に降る。幼生期は河口で生育し、稚ガニから、親ガニになると川を遡上する回遊性のカニである。庄内川では、上流・支流に広く生息している。

天白川では、河口の自然環境が悪化し生息が困難となっており、個体数が減少している。河口の干潟・ヨシ原の減少・水質の変化が原因と考えられる。市街を流れる堀川・山崎川の上流域にモクズガニの生息が確認されている。両川の水質が、ある程度改善されたことによるものと考えられる。全国的に食用に供されるカニであり、近年、生息環境悪化などにより、減少が指摘されている。

【形態】

雄の甲長 50mm 位、甲幅 80mm 位に達する淡水最大のカニ。鋏脚掌部の外面は軟毛でおおわれ、雄は雌より著しい。甲の側縁に 3 歯がある。チュウゴクモクズガニは日本のモクズガニに比べ、甲がやや凸凹で脚が細長い。脚の爪は細く尖っている。甲の側縁に 4 歯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川のかかなり上流と矢田川など支流に多く分布している。天白川では減少傾向にある。

【県内の分布】

伊勢湾東側にある知多半島の各河川や三河湾に流れ込む矢作川・豊川などの上流にまで分布している。

【国内の分布】

北海道以南、本州、四国、九州、沖縄まで分布。小笠原のモクズガニは別種。

【世界の分布】

サハリン、韓国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

成体は各地の河川に生息する。年間通し放卵するが、抱卵盛期は 9 月から翌年 6 月、特に 9 月から 10 月は、海（河口）に降り放卵する数が多い。（12 月放卵するカニは 5 月上旬に川を上がる。冬、淡水で越冬するカニは、5 月上旬川を降る。）

【現在の生息状況／減少の要因】

水質汚濁に強いが、水質の富栄養化が進むと生息困難となる。河口の干潟・ヨシ原の環境が悪化すると個体数が減少する。

【保全上の留意点】

庄内川の途中に堰や横断構造物を建設しない。また、河川全域と河口の自然環境を維持・管理していくことが必要である。

【特記事項】

9 月に海に降る親ガニをトラップを仕掛けて捕獲し食用にしている。肺吸虫の中間宿主として有名。2014 年 4 月に庄内川の最も下流にある堰堤に階段状の魚道ができた。モクズガニの通過が容易になった。

【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.181. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 甲殻類 (カニ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.340-341. 名古屋市.
 岡本一利, 2004. モクズガニの種苗生産の現状. 日本甲殻類学会第 42 回大会報, p.14.
 小林 哲, 2014. モクズガニの形態の変異と奇形. *CANCER*, (23):36.
 水産庁 (編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. (社)日本水産資源保護協会.
 渡辺精一ほか, 2006. モクズガニの種内分化. *CANCER*, (15):9-12.
 渡辺精一ほか, 2007. モクズガニ異所的集団の遺伝的分化. 日本甲殻類学会第 42 回大会報, p.13.
 山崎いづみほか, 2006. モクズガニ属カニ類の遺伝的類縁関係. 日本甲殻類学会第 42 回大会報, p.59.

カテゴリー

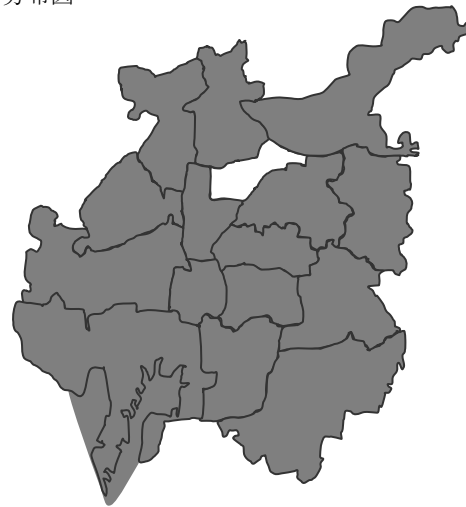
名古屋市 2015	準絶滅危惧
愛知県 2015	調査対象外
環境省 2014	リスト外



モクズガニ

中川区新川下流、1999 年 5 月 16 日、天野 勲 撮影

市内分布図



カニ類 <十脚目 スナガニ科>

コメツキガニ *Scopimera globosa* De Haan**【選定理由】**

干潟では普通種であるが、個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川の河口には広い干潟があり、砂底干潟にはコメツキガニの大きい集団が見られた。河口ふ頭ができ、干潟の面積が狭くなり、個体数が減少した。庄内川河口に稲永ふ頭（空見ふ頭）がつくられ、干潟が狭くなった。残された砂底干潟でコメツキガニの集団が観察できる。しかし川により運ばれる土砂量が減少したり、水質が変化すると更に減少が懸念される。天白川河口には、潮見ふ頭がつくられ、河口干潟は狭くなった。上・中流の丘陵地の森林がなくなり、池が埋まり、住宅団地となった。河口に運ばれる土砂量が減少し、水質も汚濁し、個体数が激減した。

【形態】

雄は甲長7mm位、甲幅9mm位の小型のカニ。鋏脚は左右同じ大きさ。指部は内側に曲がりスプーン状である。鋏脚・歩脚の長節に鼓膜がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口砂底干潟に多く分布している。天白川の河口干潟は、河口の自然環境が悪くカニの個体数が減少している。

【県内の分布】

知多半島伊勢湾側内海の干潟に分布している。三河湾に流れこむ河川、矢作川、豊川、汐川などの河口干潟、一色海岸の干潟にも分布している。

【国内の分布】

北海道から九州、沖縄、八重山まで分布。

【世界の分布】

台湾、韓国の沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾や河口の砂底干潟に群生する。干潮時に摂食活動が見られる。干潟の表面に繁殖するケイ藻類を砂土とともに鋏脚ですくって口に入れ、砂土を団子にして外に捨てる。抱卵盛期は6月から7月。

【現在の生息状況／減少の要因】

天白川河口干潟は砂底干潟やヨシ原が減少し、コメツキガニは激減した。

【保全上の留意点】

庄内川河口の砂底干潟が現状のままに存続するためには、河口に運ばれる土砂が減少しないことである。そのためには、河川の途中に横断構造物を建設しないことが必要となる。

【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.182. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 代表的な自然環境と生物・庄内川河口. 新修名古屋市史 資料編 自然, pp.496-497. 名古屋市.
 嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.270-271. 朝日新聞社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 21,23,58-59,98. 京都大学学術出版会, 京都.

カテゴリー

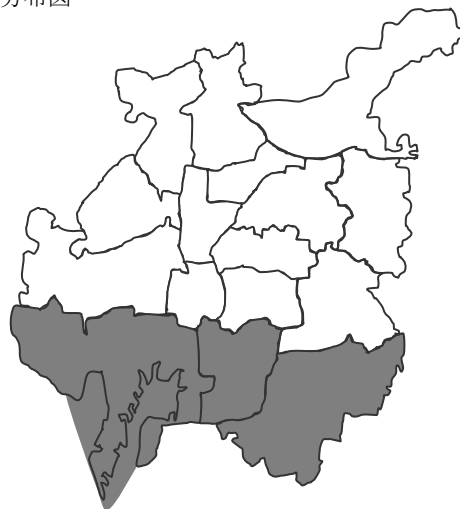
名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外



コメツキガニ

港区庄内川河口干潟、2005年7月22日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 スナガニ科>

チゴガニ *Ilyoplax pusilla* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

干潟では普通種であるが、個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川に広い河口干潟があり、砂泥底干潟には、チゴガニの大きい集団を見ることが出来た。両河川の河口にふ頭ができ、個体数が激減した。庄内川河口干潟には、幾つかの集団を観察することができる。天白川河口干潟に生息するチゴガニの個体数は少ない。河口の自然環境悪化が進めば、消滅すると思われる。

【形態】

雄の甲長6mm位、甲幅9mm位で、甲は横長で、六角形の小型のカニ。鋏脚は左右同大。鋏脚の長脚に鼓膜を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川と天白川の河口砂泥底干潟に分布している。

【県内の分布】

知多半島南知多町内海川の河口干潟に分布。三河湾に流入する矢作川、豊川、汐川の河口干潟と一色海岸の干潟にも分布している。

【国内の分布】

東京湾から九州沿岸まで分布。近年、宮城県まで分布していることが分かった（生息範囲は狭い）。

【世界の分布】

韓国の沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

河口の砂泥底干潟に生息する。干潮時には砂泥底上のケイ藻類を砂とともに摂取し、砂団子にして出す。抱卵盛期は6月から7月。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川環境が悪化し、河口の砂泥底干潟やヨシ原が減少するとチゴガニは産卵・稚ガニの生育ができなくなり、個体数が減少する。

【保全上の留意点】

河川の途中に横断構造物ができると、川水が運んでくる土砂量が少なくなり砂泥干潟やヨシ原が減少する。庄内川河口の環境保全が必要である。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.183. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 代表的な自然環境と生物2・庄内川河口. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.496-497. 名古屋市.
 嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.270-271. 朝日新聞社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 21,22,58-59,93-95. 京都大学学術出版会, 京都.

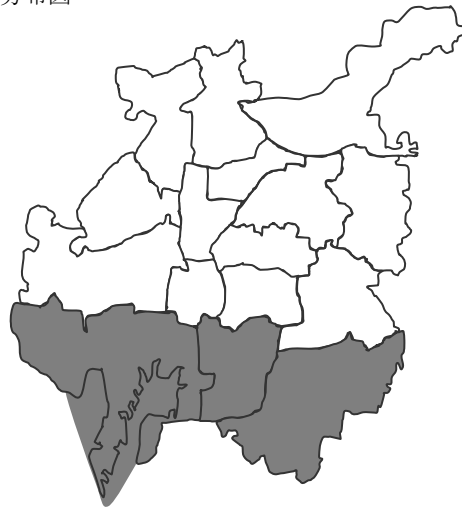
(執筆者 天野 勲)



チゴガニ

港区庄内川河口干潟、2005年7月22日、天野 勲 撮影

市内分布図



貝類

① 名古屋市における貝類の概況

名古屋市に生息している（していた）貝類は、レッドデータブックなごや 2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）の名古屋市産貝類目録に 73 種が掲載されている。同様にレッドデータブックなごや 2010（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2010）の名古屋市産貝類目録には、外来種、国内移入種を含め 92 種が掲載されている。レッドリストに掲載されており目録に掲載されていない種が 18 種存在するため、これをあわせるとレッドデータブックなごや 2010 では 110 種が掲載されたことになる。今回の調査では、現地調査（文献調査を含む）により 40 種が目録に新たに追加された。ドブガイについてはヌマガイとタガイに分けた（計算上はヌマガイとタガイを追加しドブガイを削除した）。これにより名古屋市産貝類目録の更新されたリストは 149 種である。その内訳は、海産（汽水性種を含む）70 種、淡水産 24 種、陸産 55 種である。これらのうち、今回レッドリストに新たに追加されるのは、海産（汽水性種を含む）8 種、淡水産 9 種、陸産 23 種である。

海産（汽水性種を含む）種については、レッドデータブックなごや 2010 において、水深 20m までの潮下帯が調査され最新データが整っているため、今回は河口域から潮間帯を中心に現地調査をおこなった。潮下帯の種については文献などによる追加情報を加筆した。名古屋市で自然海岸が残されているのは、庄内川河口・新川河口から藤前干潟のみであり、潮下帯に生息する種を除けば海産種のほとんどはこれらの地域に生息している。特に庄内川河口域には大規模なヨシ原湿地（塩性湿地）が残っており、このような特異な環境にのみ生息する稀少種が多く見られる。今回の調査では、ヨシ原湿地の転石下からナラビオカミガイを名古屋市内から新たに発見した（早瀬ほか，2014）。ヨシ原湿地周辺には砂泥干潟が広範囲に露出し、砂泥底に生息する種をあわせれば、庄内川河口域の貝類相は比較的豊かである。一方、藤前干潟では庄内川や新川、日光川から流入する淡水の影響を強く受け、低い塩分濃度でも生息できる広塩性の種しか生息できないと考えられる。また、砂質部分は少なく強熱減量の値の高い泥質が優占することから（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難であり、貝類相を貧弱にしている。このような状況で、例えば藤前干潟のカキ礁（マガキ礁）を構成するウネナシトマヤガイは、確実に個体数が減少しており準絶滅危惧に追加した。オキシジミは年により個体数の消長が著しく変化し、激減することがあることから（川瀬ほか，2009）準絶滅危惧に追加された。

淡水産種については、これまでに水田・水路や溜池の調査が充分に行われていなかったため、名古屋市内のこのような環境を出来る限り幅広く調査した。特に水田ではいわゆる微小種を捕獲するためにメッシュの細かい篩やフィッシュネットを使用することにより、ヒラマキミズマイマイ、ヒメヒラマキミズマイマイ、ヒラマキガイモドキやウエジマメシジミを新たに確認することができた。特に中川区の水田・水路において、市内から絶滅した可能性の高かったマルタニシの生貝を 10 年あるいは 20 年ぶりに再発見できたことは特筆すべき事項である（川瀬・石黒，2015）。しかしながら、市内の大部分の水田・水路では汚濁耐性種や汚濁指標種である

ヒメタニシ、スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）、サカマキガイが多産することが多い。また、2009～2012年には名古屋市内15ヶ所の溜池において、淡水生物調査や外来魚駆除などが行われ一部の溜池については池干し調査も行われた。その結果、これまで確認されていなかった溜池からもヌマガイやオオタニシの記録が増えた（川瀬・野呂，2013）。一方、イシガイは再発見されず、明らかな外来種であるシジミ類（川瀬・市原，2013）やハブタエモノアラガイが新たに発見された。

陸産種（陸産貝類）については、守山区など調査が充分に行われていない地域での重点的な調査が実施されたことや（川瀬，2012a,2013c；川瀬ほか，2014a,b；川瀬・村瀬，2014）、市民参加型（参加者456名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全16区33地点）が開催されたことにより（川瀬，2012b,2013a,b；川瀬ほか，2013）、今回新たに23種を目録に追加することとなった。市内に広く分布し比較的個体数の多い陸産貝類は、ナミコギセル、トクサオカチョウジガイ、ホソオカチョウジガイ、オカチョウジガイ、ウスイロシトラ、ウラジロベッコウ、ヒメコハク、コハクガイやイセノナミマイマイである。市内に残された自然度の高い雑木林は少なく、相生山緑地、名古屋城外堀、熱田神宮、庄内川河畔林など神社や公園を含む特定の地域のみで生き残っている陸産貝類が存在する。特に守山区からは、ビロウドマイマイ属の一種（川瀬ほか，2014b）、ニッポンマイマイ、コベソマイマイ、ヤマタニシなどが新たに発見された。いずれも名古屋市内では生息域が限られており、各地の生息個体数も少なく稀少種である。新たに熱田神宮から発見されたシリオレギセル（川瀬，2012a）は明らかな国内移入種である。他には国内移入種としてウスイロオカチグサやコハクオナジマイマイが、外来種としてノハラナメクジやチャコウラナメクジが記録されている。

最後に、レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）において、移入種である可能性が高いとされたヒクギセルのDNA分析を行ったところ、名古屋市に生息するヒクギセルは絶滅のおそれのある地域個体群（LP: Threatened Local Population）であることが判明した（川瀬・森山，未発表）。ヒクギセルは静岡県以東、関東地方、伊豆諸島に分布するが、飛び地分布として名古屋市熱田区にも生息している。特に熱田神宮公園の断夫山古墳では大きな個体群が残されており、生物地理学的に重要である。今回は関東地方のサンプルを十分に集められなかったため、各種の解説への掲載を控えたが、関東地方各地のデータを追加分析し別途報告する予定である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

本誌掲載のレッドリスト掲載種は、絶滅4種、絶滅危惧ⅠA類27種、絶滅危惧ⅠB類8種、絶滅危惧Ⅱ類9種、準絶滅危惧32種、情報不足3種の全83種である。海産（汽水性種を含む）種では、絶滅3種、絶滅危惧ⅠA類22種、絶滅危惧ⅠB類2種、絶滅危惧Ⅱ類6種、準絶滅危惧20種、情報不足1種、淡水産種では、絶滅1種、絶滅危惧ⅠA類5種、絶滅危惧ⅠB類3種、絶滅危惧Ⅱ類1種、準絶滅危惧2種、陸産種（陸産貝類）では、絶滅危惧ⅠB類3種、絶滅危惧Ⅱ類2種、準絶滅危惧10種、情報不足2種である。

今回新たに追加されたのは、絶滅危惧ⅠA類が2種である。このうちタガイは従来のドブガイから分かれた種である。本誌では従来ドブガイとして扱われてきた種を、ヌマガイとタガイに独立させた。DNA分析によっても2種に分かれることを確認した。今回の調査ではタガイの生息を確認することが出来なかったが、愛知県教育センター（1967）では市内にタガイの記録

が複数あることから今回の掲載に至った。ナラビオカミミガイは庄内川河口のヨシ原湿地の転石下からオカミミガイとともに発見された。マシジミは絶滅危惧Ⅱ類からランクアップされた。

絶滅危惧ⅠB類は2種であり、ヌマガイは従来のドブガイから分かれた種である。レッドデータブックなごや2004（名古屋市動植物実態調査検討会監修，2004）に掲載されているドブガイはヌマガイである可能性が高く、現在市内で生貝を確認できるイシガイ科二枚貝はヌマガイだけである。ウエジマメシジミは南区や天白区の水田から発見されたが市内の生息地は限られており個体数も少ない。

絶滅危惧Ⅱ類にはヒゼンキビとビロウドマイマイ属の一種の合計2種が加わったほかオオタニシが準絶滅危惧からランクアップされた。

準絶滅危惧は最も追加種が多く、海産（汽水性種を含む）5種、淡水産2種、陸産10種の合計17種である。従来ムシヤドリカワザンショウとされていた種は、太平洋側には分布せず誤同定であることが明らかになりヒナタムシヤドリカワザンショウに改められた。海産種ではカキウラクチキレモドキが庄内川河口域のカキ礁から発見されたが個体数は極めて少ない。また、イソシジミ、マテガイ、ウネナシトマヤガイ、オキシジミは以前から生息が確認されていたが、個体数が確実に減少しているなどの理由から準絶滅危惧に追加された。淡水産種では市内全域の水田や水路で微小種が詳細に調査されたことにより、ヒラマキミズマイマイとヒラマキガイモドキが発見されたが分布には偏りがあり個体数も多くはない。一方でヒメヒラマキミズマイマイは市内各地の水田に見られ個体数も比較的多いため、レッドリスト種の対象とならなかった。陸産種では市内全16区の詳細な調査が行われたことにより、既に知られていたミジンヤマタニシ、ヒダリマキゴマガイ、ヒメカサキビやウメムラシタラガイの微小種の生息地や個体数が少ないことが分かり準絶滅危惧に追加された。守山区などから最近新たに発見されたヤマタニシ、コベソマイマイ、ニッポンマイマイなどの大型種も生息地や個体数が非常に少なく同様に準絶滅危惧に選定した。以前より生息が知られている大型種のオオケマイマイは、名古屋城外堀を除き他地域では個体数が極めて少なく、分布も限局的であることから準絶滅危惧に追加された。

情報不足には分類学的研究の遅れているオオウエキビを新たに追加した。

（執筆者 川瀬基弘）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各貝類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（貝類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁編，1998）に準拠した。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右の上枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 6 貝類」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

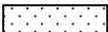
【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごと、一部は沿岸部に着色して市内分布図として掲載した。ただし、絶滅と判断された区域は  で示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

カワネジガイ *Camptoceras hirasei* Walker, 1919

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

河川の下流域や平野部など低地の池沼や潟湖など止水環境の水面付近から水深1m程度まで生息し、沈水植物の茎や落葉などに付着する(紀平ほか, 2003; 増田・内山, 2004)。しかし、河川下流域の環境がよく保全されていた1960年代にすでに本種は、生息地が少なく珍しい種と認識されていた(愛知県科学教育センター, 1967)。1970年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが(中山, 1978; 木村, 1994)、再発見されていない。レッドデータブックなごや2004で絶滅と評価され、その後も発見されないことから絶滅と判断した。

【形態】

非常に特異的な形態で、殻は著しく細長く、左巻きで螺管ははずれて巻く。殻高10mm、殻径3mm程度。殻表は細かい成長脈を刻み、半透明な汚白色である。生時は付着物で薄く覆われている。

【分布の概要】

【市内の分布】

1929年に北区浄心(東海自然環境調査研究会, 1993)での生息記録がある。戦後すぐの西区での生息情報がある(原田一夫氏私信)。

【県内の分布】

木曽川水系五条川の須ヶ口付近(絶滅)。豊川水系豊橋市蒲池(絶滅)。

【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川の下流域や平野部など低地の池沼や潟湖など止水環境の水面から水深1m程度まで生息し、沈水植物の茎や落葉などに付着する(紀平ほか, 2003; 増田・内山, 2004)。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

現在市内の生息地はない。全国的な減少要因として、池沼や河川、用水路、湿地等の開発、水質汚濁、標本業者・収集家による乱獲等があげられる(阿部・福田, 2010)。

【保全上の留意点】

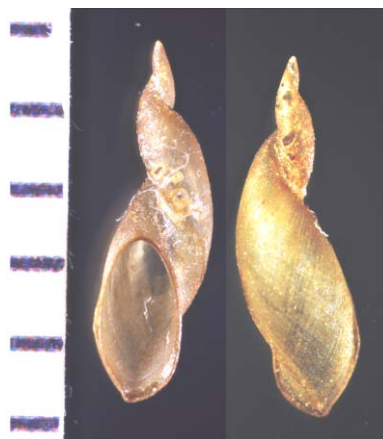
池沼や河川、湿地等の原形をとどめない改修や水の汚濁をなくし、県外の数少ない生息地においては、現状を維持することが望ましい。

【特記事項】

消長の著しい特性をもつ。インドには形態が著しく類似した *Camptoceras terebra* が分布する(増田, 2005)。

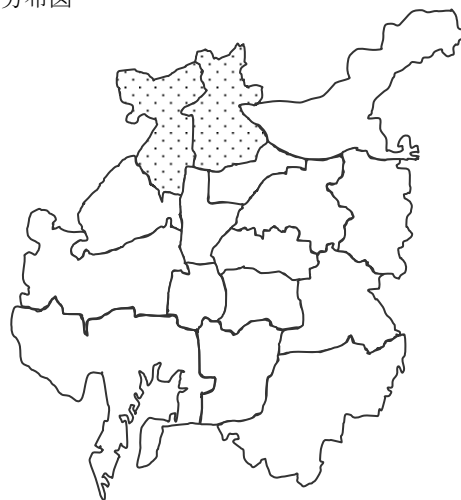
【引用文献】

- 阿部 司・福田 宏, 2010. 絶滅危惧種カワネジガイの岡山県における新産地. *Molluscan Diversity*, 2(2):37-41.
 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159pp. ピーシーズ, 東京.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 増田 修, 2005. カワネジガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—6 陸・淡水産貝類, p.79. 自然環境研究センター, 東京.
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
 中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第7回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, (4):4-5.



カワネジガイ
和歌山県岩出町、2002年9月16日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <フネガイ目 フネガイ科>

ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していたが、現在では淡路島と有明海・八代海北部・伊万里湾でのみ生息が確認されている（和田ほか，1996；山下，2012）。また、本種は1960年代には衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で比較的普通に生息していた（愛知県科学教育センター，1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長5～6cm、殻高4cm程度で殻は厚く、よく膨らむ。殻表にはまばらに強い結節を備えた強い肋が20本ほどある。肋間は肋より幅広い。殻は白色であるが生時には灰褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区藤前干潟や庄内川河口干潟で古い死殻がごく稀に確認される。

【県内の分布】

汐川干潟や名古屋市港区で古い死殻が確認されたのみであり、県内からは絶滅した。

【国内の分布】

国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島以南、インド洋、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部・河口域の干潟泥底に生息する。潮間帯から水深10mに浅く潜ってすむ。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

上述したような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅に至ったと考えられる。

【特記事項】

日本本土には、9500～7500年前の温暖期に分布を広げたが、関東以北では1000年前までに消滅した。伊勢湾・三河湾・高知県浦戸湾では1930～60年代に消滅した（山下，2012）。

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友，(45):20-25.
 河合秀高・千葉正己，1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石（1）二枚貝・角貝. 化石の友，(43):21-25.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。
 山下博由，2012. ハイガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.110. 東海大学出版会，秦野。

【関連文献】

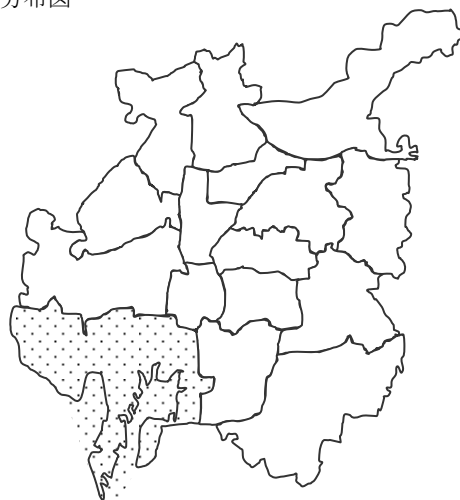
水産庁・水産資源保護協会，1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（I），123pp.



ハイガイ

愛知県三河一色、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

イチョウシラトリ *Tellina (Serratina) capsoides* Lamarck, 1818

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

日本では、北海道以南から記録があるが、過去 50 年ほどの確実な生息地の北限は相模湾である（山下・木村，2012）。相模湾では 1960～70 年代に消滅した（池田ほか，2001）。本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種である。近年の詳細な調査の結果、かつて日本の広い範囲に分布していたが、現在では三重県英虞湾、瀬戸内海、宮崎県、福岡県、熊本県などにある程度の個体群が生き残っている（山下・木村，2012；Yamashita et al., 1997）。本種は 1960 年代には衣浦湾や汐川干潟でも生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター，1967）、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長 4cm、殻は丸みを帯びた三角形で膨らみが弱い。殻はやや厚く白色、規則的な板状の成長脈で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

港区藤前干潟で古い死殻がごく稀に確認されたに過ぎない。

【県内の分布】

汐川干潟や名古屋市港区で確認されたのみである。愛知県内からは絶滅した。

【国内の分布】

国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸、東南アジア、北オーストラリア、メラネシア、インド洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

泥干潟の自然消滅や埋め立てにより上述のような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統からは本種の化石記録があり、クイチガイサルボウ、ハイガイ、イセシラガイ、ウラカガミ、イヨスダレ、カニモリ、ヘナタリ、ウミニナ、イボウミニナなどと共産している（蜂矢・田中，1998）。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里周辺の沖積層の化石. 化石の友，(45):20-25.
 池田 等・倉持卓司・渡辺政美，2001. 相模湾レッドデーター貝類一，104 pp. 葉山しおさい博物館，神奈川。
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。
 山下博由・木村昭一，2012. イチョウシラトリ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.129. 東海大学出版会，秦野。
 Yamasita, H., M. Okamoto, M. Harato and H. Fukuda, 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan -1. *The Yuriyagai*, 5(1/2):101-116.

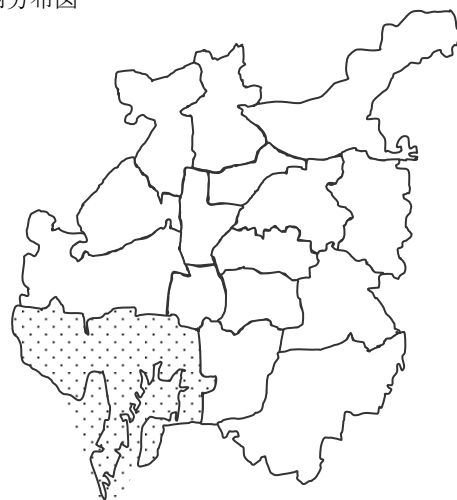
（執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



イチョウシラトリ

熊本県松島町，2002 年 3 月 30 日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 ナタメガイ科>

アゲマキ *Sinonovacula lamarcki* Huber, 2010

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、三河湾、瀬戸内海、有明海、八代海に分布していたが、三河湾、瀬戸内海では消滅し、有明海、八代海も危機的な状況である(山下, 2012; 和田ほか, 1996)。近年では汐川干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される程度で、愛知県下では絶滅した。和田ほか(1996)では危険にランクされている。

【形態】

殻長 10cm、殻は前後に長い長方形で、殻はやや薄い。殻の前後端は丸みがあり両殻の間は開口している。生時の殻表は殻頂部を除いて灰褐色の殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟で生息姿勢を維持したまま死滅した個体群が、靱帯や殻皮が保存されたまま半化石としてシルト層から大量に見つかる(早瀬ほか, 2014)。

【県内の分布】

汐川干潟と名古屋市港区藤前干潟で死殻のみが確認された。愛知県内からは絶滅した。

【国内の分布】

“【選定理由】” 参照。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸の内湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の河口域や干潟の泥底に棲息し、大型個体は 1m もの生息孔を掘る。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

1960年代には衣浦湾(知多湾奥)、汐川干潟などの内湾奥で生息が確認されていた(愛知県科学教育センター, 1967)が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、汐川干潟では三河大橋の建設と前後して絶滅した(原田一夫氏私信)。上述したような潮間帯の環境は失われているので、本種の生息場所、生息数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

本種に使われてきた *Sinonovacula constrictus* Lamarck, 1818 は、*Sinonovacula constrictus* Bruguière, 1792 の一次同名となるので、Huber (2010) によって新名が与えられた(山下, 2012)。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 Huber, M., 2010. Compendium of Bivalves, 901pp. Conch Books, Hackenheim.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 山下博由, 2012. アゲマキ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.172. 東海大学出版会, 秦野.

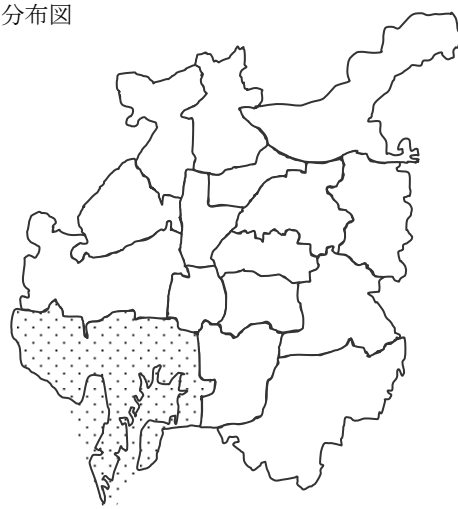
【関連文献】

- 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.



アゲマキ
 福岡県有明海、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <古腹足(オキナエビス)目 ニシキウズ科>

イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum* (Lamarck, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の砂泥干潟にかつてはごく普通に多産した種で、伊勢湾、三河湾でも1960年代には広い範囲で多産した(愛知県科学教育センター, 1967)。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。また汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも、生貝が見られなくなっている(藤岡・木村, 2000)。三浦半島では絶滅し、三河湾・伊勢湾でもほぼ絶滅状態である(木村・山下, 2012)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻径約1.5cmの低いそろばん玉型で、殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが殻が小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟や藤前干潟で古い死殻が稀に採集される。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾でも1960年代には広い範囲で多産したが、近年生貝を採集できない。

【国内の分布】

東北地方～九州。浜名湖や瀬戸内海には健全な個体群が残っている。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟では古い死殻が採集されたが、生きた個体はまったく採集されていない。名古屋市内では絶滅した可能性が高い。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県下では近年生貝を採集できない。死殻さえ多くないので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

上述したような干潟環境を破壊しないことはいまでもなく、周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

東京湾の盤州、富津干潟では健全な個体群が維持されているが、元々の個体群であるか否かは検討を要する(木村・山下, 2012)。

名古屋港浚渫地の半化石(河合・蜂矢, 1999)や愛知県田原市高松の更新統(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.

河合秀高・蜂矢喜一郎, 1999. 名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(2)巻貝(その1). 化石の友, (46):20-25.

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.

木村昭一・山下博由, 2012. イボキサゴ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.17. 東海大学出版会, 秦野.

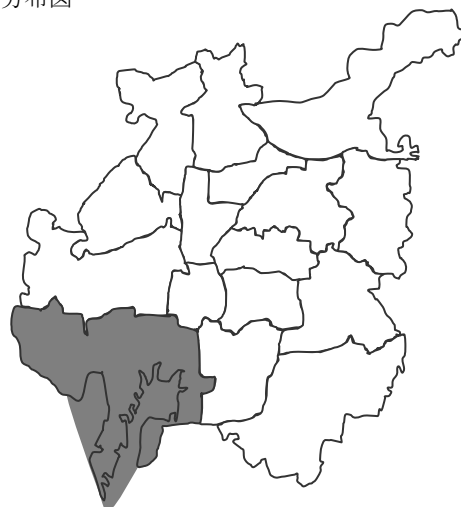
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



イボキサゴ
静岡県浜名湖、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 タニシ科>

マルタニシ *Cinpanopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は、海に近い平野部の水田や用水路などにかつては食用にするほど多産し、最も親しみのある淡水貝であった(紀平, 1990)。近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村(1994)では、5地点のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。名古屋市内では守山区志段味地区で1990年頃まで生息記録があるが(酒井, 2002)、その後は生貝を確認できず絶滅した可能性が高かった。しかし、2013年に中川区から再発見された(川瀬・石黒, 2015)。

【形態】

成貝では殻高6cmに達するが、通常3～4cm程度。各螺層は丸く膨れ、縫合は深くくびれる。殻は薄く壊れやすい。殻の表面に縫い跡のような微小なくぼみの列がある。蓋は革質で赤褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

期待された北区、守山区の水田(酒井, 2002)では確認できず、中川区の水田から発見された(川瀬・石黒, 2015)。

【県内の分布】

知多半島先端部の休耕田、新城市や豊田市の特定地域の水田や水路に生息している。

【国内の分布】

北海道南部～九州、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

かつての水田に多産したので、水質汚濁、農薬散布、用水路の改修、水田の乾田化などの影響の少ない水田を含めた低湿地には、現在も比較的多くの個体が生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地がほとんど残されていない。

【保全上の留意点】

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。水田などの低湿地の保全とその水質の保全が必要である。

【特記事項】

市内では10年或いは20年ぶりにマルタニシが再発見されたが(川瀬・石黒, 2015)、発見された中川区江松西町・富田町では個体数が極めて少なく、大量のヒメタニシと混生していた。

【引用文献】

- 川瀬基弘・石黒鎌三, 2015. 名古屋市内で再発見されたマルタニシ. なごやの生物多様性, 2:33-34.
 紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.

【関連文献】

- 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか編, 新城市の自然誌—虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 高柳茉友子, 2014. 矢作川上中流域に生息する淡水産貝類. 矢作川研究, (18):5-11.

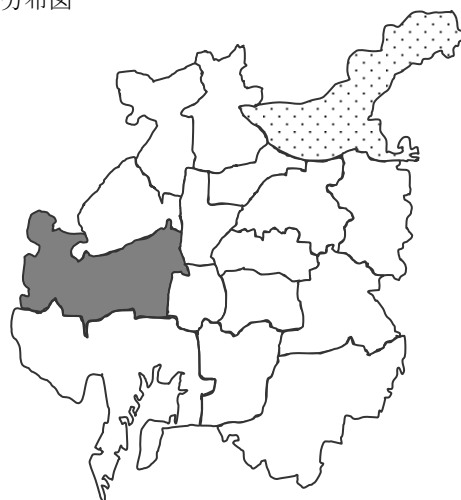
(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



マルタニシ

中川区江松西町、2014年5月10日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 エゾマメタニシ科>

マメタニシ *Parafossarulus mauchuricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布しているが、生息場所は狭く限定されている。小型種のためか生息情報は少ない。木村(1994)では、愛知県下の1地点のみで生息が確認されたにすぎないが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。市内では中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区松葉公園で多産したと報告されているが(愛知県科学教育センター, 1967)、現在これらの地点では生息を確認できず市内から絶滅した可能性も高い。

【形態】

成貝では殻高1cmに達する。殻は細長く、各螺層はやや膨れ、数条の強い螺肋がある。縫合は深くくびれる。殻質は薄く半透明。蓋は石灰質で表面は白色。

【分布の概要】

【市内の分布】

名城濠、鶴舞公園、松葉公園(愛知県科学教育センター, 1967)での記録があるが、現在これらの3地点では生息を確認できない。

【県内の分布】

豊橋牛川町の豊川水系用水路(木村, 1994)、須ヶ口、立田、弥富(田中, 1959)。

【国内の分布】

北関東以西の本州、四国、九州。日本固有亜種。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は平野部の水田や用水路、小河川などに広く分布するが、生息場所は狭く限定的である。水の流れのほとんどない水草のよく茂った場所に生息する場合が多い。近年の水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため、生息地、生息数とも著しく減少したと考えられるが、元々生息地が少なかった可能性も否定できない。

【現在の生息状況／減少の要因】

2012～14年の市内の水田や溜池調査では本種を確認できなかった。名古屋市内では既に絶滅している可能性が極めて高い。

【保全上の留意点】

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。

小河川、用水路そのものとその水質の保全が必要である。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
田中守彦, 1959. 愛知県産淡水貝目録, 14pp. (謄写).

【関連文献】

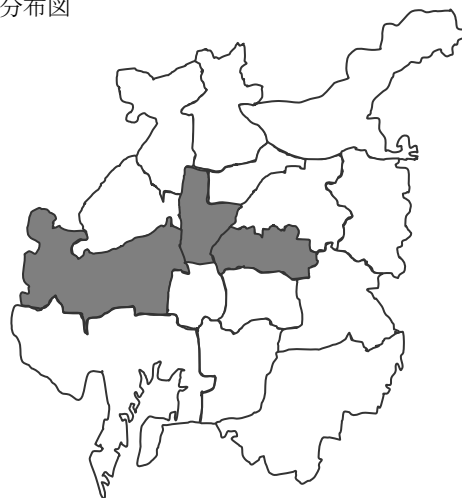
紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.
増田 修, 2005. マメタニシ. 環境省(編). 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 6 陸・淡水産貝類, p. 317. 自然環境研究センター, 東京.
増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.



マメタニシ

大津市堅田、1993年4月8日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 サザナミツボ科>

サザナミツボ *Elachisime ziczac* Fukuda et Ekawa, 1997**【選定理由】**

本種は最近記載された微小種で内湾奥に生息することが知られている(Fukuda and Ekawa, 1997)。軟体部の残った個体が海岸に打ち上げられて、三河湾、伊勢湾の4ヶ所から複数採集されていたが(田中・河合, 1998; 河合, 1998)、愛知県内で生きた個体が採集された記録はなかった。今回、名古屋市内の庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。泥質干潟上の転石の下面に生息していた。生息範囲も非常に狭く、護岸工事等の改変で容易に生息場所が消失してしまう可能性が高い。本種は微小種で最近記載されたことなどから、打ち上げられた死殻に関する情報も非常に少ない(田中・河合, 1998; 河合, 1998)。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。

【形態】

殻長約2mm 微小な卵型の貝。殻は光沢のあるガラス質。殻表にジグザグの螺溝を多数めぐらすことが特徴である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口域。

【県内の分布】

南知多町内海、美浜町布土。

【国内の分布】

宮城県亘理郡鳥の海(鈴木ほか, 2009)、浜名湖、三河湾、伊勢湾、的矢湾、瀬戸内海、玄界灘など、陸奥湾、男鹿半島～南西諸島(奄美大島、沖縄島)。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は河口域の特殊な生息環境に生息し、生息場所も限定的で狭い。生息場所自体も護岸工事や埋め立てなどで容易に改変もしくは消失する可能性の高い場所である。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、河口域の護岸工事では河口側の改変を伴わないように留意することが必要である。また内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや2010が本種の愛知県初の生きた個体の採集記録である。

【引用文献】

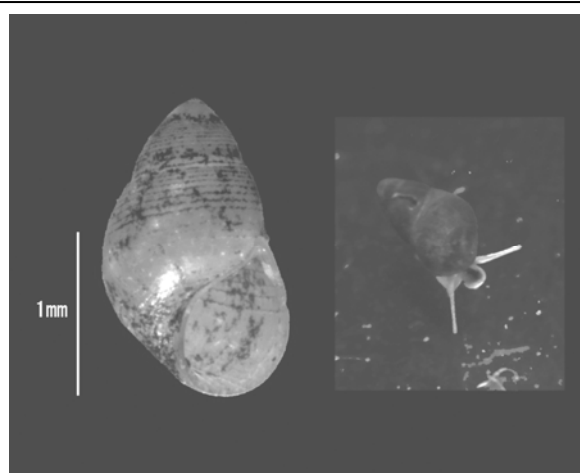
- Fukuda, H. and K. Ekawa, 1997. Description and anatomy of a new species of the Elachisinidae (Caenogastropoda: Risssoidea) from Japan. *The Yuriyagai*, 5(1/2):69-88.
 河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. かきつばた, (24):16-17.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.
 田中利雄・河合秀高, 1998. 愛知県渥美半島西ノ浜の打上げ貝. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8):33-36.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

福田 宏, 2012. サザナミツボ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.40. 東海大学出版会, 秦野.

カテゴリー

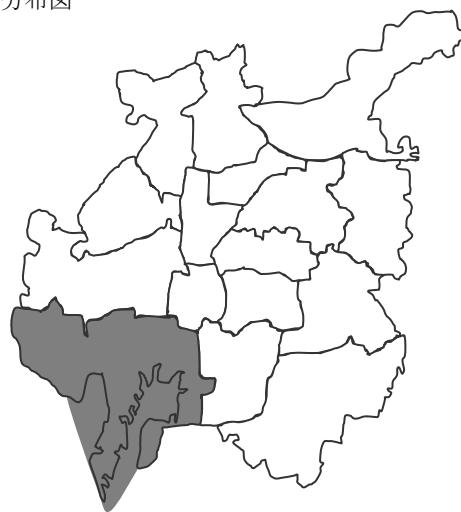
名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	準絶滅危惧



サザナミツボ

庄内川河口域、2008年7月13日、木村昭一 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ヨシダカワザンショウ *Angustassiminea yoshidayukioi* Kuroda, 1959

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地とそれより上部の陸上植生にかけて分布する。ヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。市内でも特にヨシ原湿地の陸上に近い部分は堤防工事などによる生息地の破壊が進行しており、庄内川河口域の非常に狭い範囲でわずかに本種の生息が確認されたにすぎない。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約 3mm の微小種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は貝殻の光沢が強いこと、肉眼ではわかりにくい、臍孔が狭いが明らかに開いている点で、市内に生息するカワザンショウガイ科他種と区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域のヨシ原湿地に分布する。

【県内の分布】

上述したように県内での生息場所は著しく減少したと考えられる。木村・木村(1999)では7ヶ所生息地があった。カワザンショウガイ科貝類は生息地には群生する 경우가多いが、本種の個体数はどの生息地でも少ない。

【国内の分布】

東京湾～九州にかけて分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

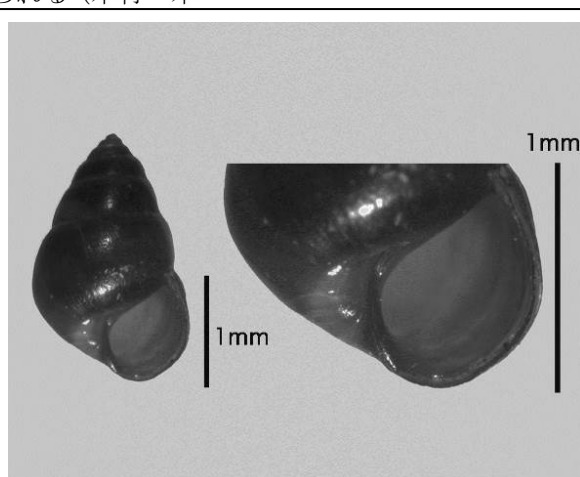
もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまう庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

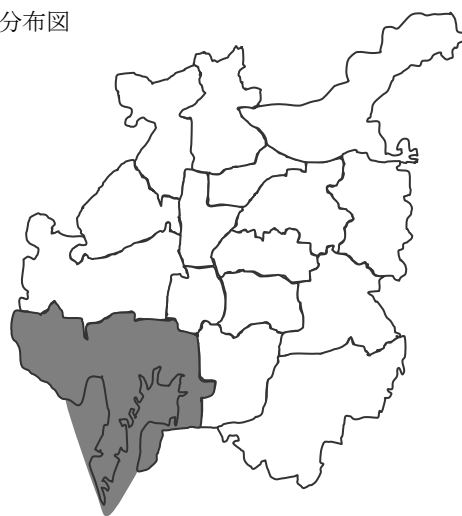
- 福田 宏, 2012. ヨシダカワザンショウ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.46. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp, 東海大学出版会, 秦野.



ヨシダカワザンショウ

庄内川河口域, 2009年9月18日, 木村昭一 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ウミナ科>

ウミナ *Batillaria multiformis* (Lischke, 1869)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種の属するウミナ科貝類は、愛知県にホソウミナ、ウミナ、イボウミナの3種があり、ともに内湾の泥干潟の表面に生息している。東京湾や三浦半島では、ホソウミナ以外の2種に著しい減少傾向が認められる(木村・福田, 2012; 黒住, 2000; 池田ほか, 2001)。愛知県でも干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。愛知県下では、まだ健全な個体群が残されている場所があるが、名古屋市内では藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高3cm 殻径1cm程度の塔型で殻は厚く、よく成長した個体の殻口は肥厚し、内唇の滑層は肥厚する。ホソウミナに似るが殻が太く、内唇の滑層が肥厚する点で区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

藤前干潟で死殻がわずかに採集されるに過ぎなく、近年生貝が全く採集されず、絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

汐川干潟、東幡豆、福江、吉良、矢作川河口など10ヶ所程度。

【国内の分布】

北海道南部～九州まで。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されなくても減少する例が確認されており(黒住, 2000; 池田ほか, 2001)注意を要する。

【保全上の留意点】

泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【引用文献】

- 池田等・倉持卓司・渡辺政美, 2001. 相模湾レッドデーター貝類一, 104pp. 葉山しおさい博物館, 神奈川.
 木村昭一・福田 宏, 2012. ウミナ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相, 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.
 黒住耐二, 2000. 貝類. 千葉県の上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—動物編, pp.359-399. 千葉県環境部自然保護課.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

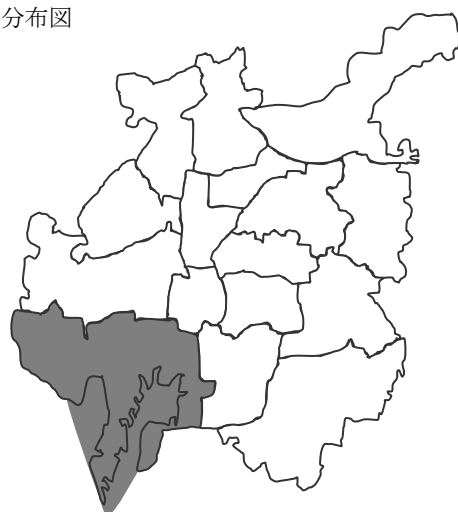
- 早瀬善正ほか, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, 32:11-33.



ウミナ

三重県尾鷲市、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 ウミニナ科>

イボウミニナ *Batillaria zonalis* (Bruguiere, 1792)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて日本各地の内湾域にごく普通に棲息していたが、浜名湖、伊勢湾では少数の死殻は見られるが現在生息が確認できず、三河湾でも汐川干潟の狭い範囲に生息が確認できるに過ぎない(木村・福田, 2012)。本種はウミニナと比べても著しく生息地が少なく、近年生息数が減少している。和田ほか(1996)では、絶滅寸前(日本本土)とランクされている。名古屋市では藤前干潟や庄内川河口で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高約4cm、殻径約1cmの高い塔型で殻は厚く、螺層にやや強い肋を持つ。殻口外唇が湾入する。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟で古い死殻が稀に採集されるに過ぎない。近年、市内では生貝が全く採集されず、絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

汐川干潟では、まだ健全な個体群が存在する。また、愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、死殻は多くの干潟で確認される。

【国内の分布】

北海道南部～琉球列島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように泥干潟の表面に生息するが、ウミニナ科3種(ウミニナ、イボウミニナ、ホソウミニナ)の中では最も干潟の先端部(沖合の部分)に分布し、ヨシ原湿地周辺の干潟の陸地に近い部分には生息しない(木村・木村, 1999)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。また、生息場所が直接改変されない場合でも、生貝が見られなくなってしまう場所も多い。

【保全上の留意点】

泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【引用文献】

- 木村昭一・福田 宏, 2012. イボウミニナ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

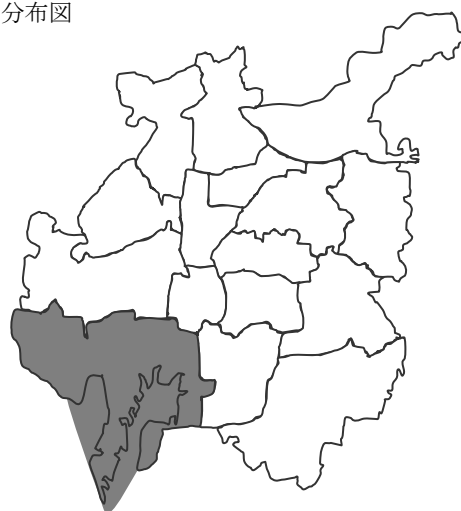
【関連文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.



イボウミニナ
三重県紀伊長島町、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

ヘナタリ *Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata* (Gmelin, 1791)**【選定理由】**

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市内では、藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。

【形態】

殻高約3cmの塔型で、体層は幅広く、強い縦張肋がある。よく成長した個体の殻口は肥厚し、外唇は下部が水管部へのびる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎない。生息が確認できなく、絶滅した可能性も高い。

【県内の分布】

汐川干潟では大きな個体群が残されている。県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在7ヶ所である。生息場所では群生し、個体数は多い。

【国内の分布】

房総半島北長門海岸～南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部の河口汽水域砂泥底の中・低潮帯表層を匍匐する(福田・木村, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地やそれより下部の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統(蜂矢・田中, 1998)、愛知県刈谷市港町と城町の完新統(矢野ほか, 2010)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ. 日本ベントス学会(編). 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.29, 東海大学出版会, 秦野.
蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
矢野一生・田中利雄・牧口貴久, 2010. 愛知県三河地方境川水系の護岸工事に伴って産出した完新世化石. 化石の友, (55):26-36.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.
島居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘, 2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49. 西三河野生生物研究会.

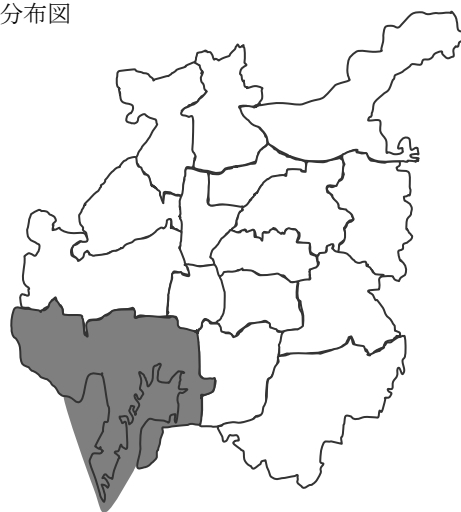
カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I A類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧



ヘナタリ
産地不詳、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

カワアイ *Cerithidea (Cerithideopsis) djadjariensis* (K. Martin, 1899)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

かつて各地の内湾域にごく普通に生息していたが、各地で激減し、三河湾では汐川干潟の狭い範囲で生息が確認できるに過ぎない(木村・福田, 2012)。愛知県下で最も干潟環境が保全さ

れている汐川干潟でも個体数の著しい減少がみられる(藤岡・木村, 2000)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市内では藤前干潟で古い死殻が稀に見つかる。

【形態】

殻高約3cmの塔型で、よく成長した個体の殻口は肥厚し、ヘナタリと近似しているが、外唇の下部は水管部へ延びることはない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟で打ち上げられた古い死殻が少数採集されるに過ぎず、生息が確認できない。絶滅した可能性が高い。

【県内の分布】

木村・木村(1999)では7ヶ所の生息地があったが、汐川干潟でも激減しており2001年8月の調査では3個体しか生息を確認できていない。県内でも絶滅寸前と考えられる。

【国内の分布】

東京湾(絶滅)以南～琉球列島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

県下では、ヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。ヘナタリと同所的に分布しているが、本種は著しく個体数が減少している。

【現在の生息状況／減少の要因】

ヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が、護岸工事などで失われ生息地が減少している。生息場所が新たに改変されていない場所でも個体数が著しく減少しているが、原因は不明である。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、ホソウミニナ、イボウミニナ、ヘナタリなどととも、本種の化石が発見されている(川瀬, 2013)。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)〜鶴飼修司コレクションの貝類化石〜. 瀬木学園紀要, (7):38-48.

木村昭一・福田 宏, 2012. カワアイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.30. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

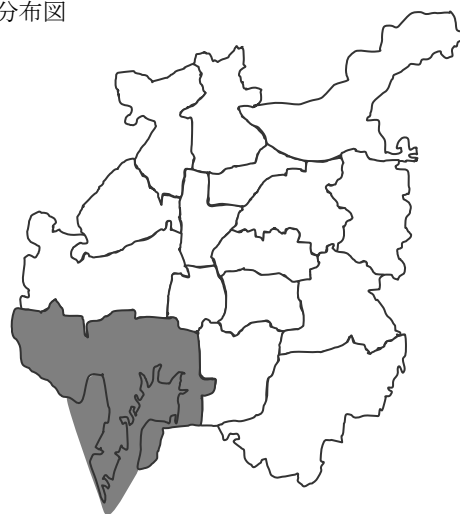
鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.



カワアイ

岡山県、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <異旋目 タクミナ科>

タクミナ *Eucharilda sinensis* (Fischer, 1867)**【選定理由】**

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。県内で本種は日間賀島南沖水深 2m から 10m の砂泥底より、死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていない（木村，1996）。2008、2009 年に行った調査で名古屋港沖合の泥底より新鮮な死殻が少数採集された。和田ほか（1996）では、現状不明（絶滅寸前）とランクされている。

【形態】

殻高約 1cm、淡褐色、細長い円錐型の貝。螺層の周辺には強く角張った螺肋が 4 本並ぶ。縫合部分は深くくびれる。肋間には規則的な縦肋が並ぶ。

【分布の概要】**【市内の分布】**

金城ふ頭造成時（1970 年代）にサンドポンプによって新鮮な死殻が採集され（河合，2009）、2008、2009 年のドレージおよび潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されておらず、死殻も稀産。

【世界及び国内の分布】

房総半島以南に分布する。

【世界及び国内の分布】

中国大陸沿岸、熱帯インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、近年生貝を採集できない。死殻でさえ稀であり、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋港浚渫地の半化石（河合，2000）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

- 河合秀高，2000. 名古屋港浚渫地（金城埠頭）産貝類化石（3）巻貝（その 2）. 化石の友，(47):46-49.
 河合秀高，2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた，(34):20.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレージによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.

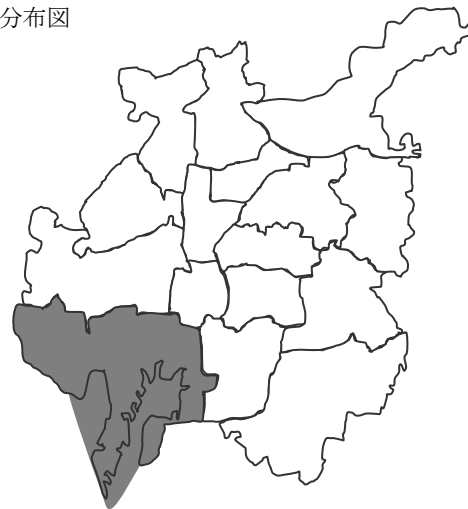
カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧 I A 類
愛知県2015	絶滅危惧 I A 類
環境省2014	リスト外



タクミナ
豊後水道、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <異旋目 イソチドリガイ科>

イソチドリ *Amathina tricarinata* (Linnaeus, 1767)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地に棲む二枚貝類（タイラギ、イタボガキ）に外部寄生する。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。県内では本種は、日間賀島南沖水深 2～10m の砂泥底より、死殻がわずかに採集されているが、生貝は採集されていない（木村，1996）。2008、2009 年に行った調査で名古屋港沖合の泥底より殻皮の残った新鮮な死殻が少数採集された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約 1.5cm。殻頂の巻いた笠型の貝。殻頂部から前縁部にかけて 3 本の強い明瞭な肋が走る。殻は白色であるが、黄褐色の厚い殻皮に覆われる。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009 年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が採集されていなく、殻皮の残った比較的新鮮な死殻が日間賀島南沖より数個体採集されたにすぎない。

【世界及び国内の分布】

房総半島以南。

【世界及び国内の分布】

インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、近年生貝を採集できない。宿主であるタイラギ、イタボガキも著しく減少しているため、危機的な生息状況といえる。近年採集されるタイラギの殻上には移入種のシマメノウフネガイの大型個体が多く付着しているため、種間競争の結果、同じ様な場所を生息場所とする、イソチドリが減少した可能性がある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

フィリピンなど南方に生息する個体と日本産個体では貝殻の形態に差異があり、同種か否か検討を要する。愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

- 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

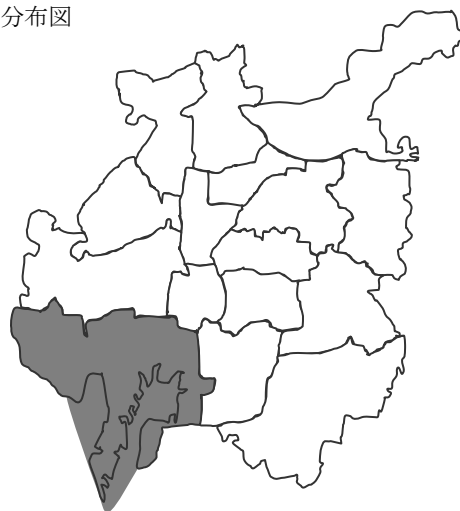
奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.



イソチドリ

中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

キヌカツギハマシイノミガイ *Melampus (Melampus) sincaporensis* Pfeiffer, 1855**【選定理由】**

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。愛知県ではヨシ原湿地が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。健全な個体群は汐川干潟と新堀川河口でのみ保存されている(木村・木村, 2002)。名古屋市内では庄内川河口域で早瀬(1998)によって生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約1cm。殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻には褐色から黒色の色帯があり、その幅や本数は個体によって異なる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口域で早瀬(1998)により2個体生息が確認されたが、それ以後生息が確認できない。この生息地での絶滅が危惧される。

【県内の分布】

三河湾の汐川干潟と新堀川河口の2ヶ所で確認された(木村・木村, 2002)。愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられるが、矢作川河口域から新たに記録されている(木村, 2012)。

【国内の分布】

三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、有明海、八代海(日本ベントス学会, 2012)。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、シンガポール。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥部の河口域に発達したヨシ原湿地内の高潮帯の泥上、朽ち木表面や落葉の下に生息する。健全な個体群の生息地はヨシ原から連続する陸上植物も残されている場合が多い(日本ベントス学会, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全する必要がある。

【特記事項】

三浦半島で絶滅したため、現在では三河湾が本種の分布域の東限である(日本ベントス学会, 2012)。

【引用文献】

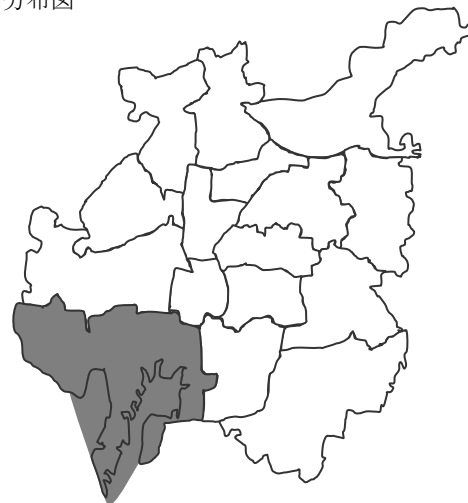
- 早瀬善正, 1998. キヌカツギハマシイノミガイ庄内川河口に生息。かきつばた, (24):12.
 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相。三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会。
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相。日本ベントス学会誌, 54:44-56。
 木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相。かきつばた, (28):13-14。
 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック, 284pp. 東海大学出版会, 秦野。
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状。WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



キヌカツギハマシイノミガイ [スケールバー: 1cm]
 田原市汐川干潟、2001年8月5日、木村昭一 採集・撮影

市内分布図

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

オカミミガイ *Ellobium chinense* (Pfeiffer, 1855)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。本県だけではなく全国的にヨシ原湿地が護岸工事や埋め立て等で著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。県内では健全な個体群は汐川干潟でのみ保存されている。市内では1932年に採集された熱田区産の標本が現存しているが、2009年の調査で再発見されるまで、長年にわたって生息が確認されていなかった。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。

【形態】

殻高約3.5cm、殻径約1.5cm。殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻口は白く肥厚し、耳状を呈する。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口域のヨシ原湿地。

【県内の分布】

木村・木村(1999)では3ヶ所で生息を確認し、その後新たに2ヶ所で生息を確認した(木村, 1999)。しかし、汐川干潟以外では絶滅が危惧される。2002年に渥美半島三河湾流入河川河口部で生息地を確認したが生息数は非常に少なかった(木村・木村, 2002)。

【国内の分布】

三河湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と連続する上部の陸上植生を破壊しない。

【特記事項】

東京湾から三浦半島の個体群は絶滅し、本県は現在の分布の東限である。

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ433-14、登録標本の採集地: 庄内川河口ヨシ原湿地。

【引用文献】

- 木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25):14-17.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相, かきつばた, (28):13-14.
 水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅳ), 126pp.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 木村昭一, 2012. オカミミガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.95. 東海大学出版会, 秦野.

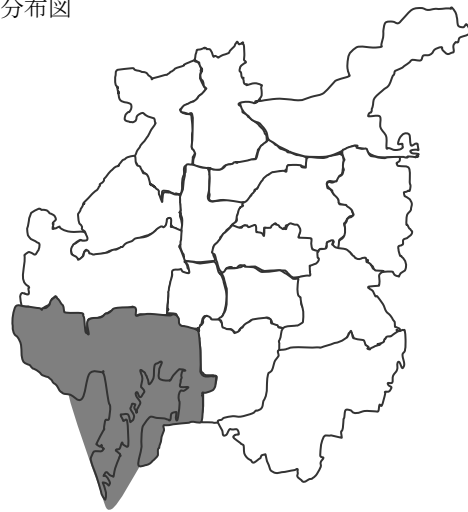
(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



オカミミガイ

港区庄内川河口、2013年4月27日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <基眼(モノアラガイ)目 オカミミガイ科>

ナラビオカミミガイ *Auriculastra duplicata* (Pfeiffer, 1854)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

2013年に名古屋市から初めて発見された種で(早瀬ほか, 2014)、名古屋市内でオカミミガイの生息地として唯一知られている狭い範囲のヨシ原湿地内で発見された。本種は三河湾を分布の東限域とし、三河湾、伊勢湾ではオカミミガイより生息地、個体数ともに著しく少ない。本調査の確認個体は主に幼若個体であったことから、当地の個体群は近年になって新規加入した個体のみで形成されている可能性もある。国内全域においても本種が定着できる環境は減少傾向にあり、都市化の進んだ名古屋市内に本種の定着可能な環境がcaろうじて残されている。

【形態】

殻長 9mm 前後。短い紡錘形、厚質、臍孔は閉じ、縫帯はない。螺層はドーム状。縫合は波打ったようになる。殻皮は光沢のある緑褐色で、平滑。外唇はほとんど肥厚しない。内唇に1歯、軸唇に強い2歯をもつ。オカミミガイの幼貝に似るが、本種の縫合下は成長線だけで平滑であるのに対して、オカミミガイの幼貝では小顆粒列がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口のヨシ原湿地の転石下。

【県内の分布】

矢作川河口域、汐川河口域。

【国内の分布】

三河湾～九州。

【世界の分布】

中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

庄内川河口部に見られるヨシ原湿地の埋もれ石下より確認された。埋没石の周囲に地下茎が伸び僅かな空間を形成するマイクロハビタットにおいて生息が確認された。

【現在の生息状況／減少の要因】

当地の個体群は近年になって新たに侵入した個体のみで形成されている可能性があるものの、市内のヨシ原湿地は堤防工事により減少しており、本種の生息地の破壊が原因。

【保全上の留意点】

名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらない(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.

【関連文献】

木村昭一, 2010. コラム: 庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全. 生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100 (改訂版), pp.102-103. 三菱 UFJ 環境財団, 東京.

木村昭一, 2012. ナラビオカミミガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.92. 東海大学出版会, 秦野.

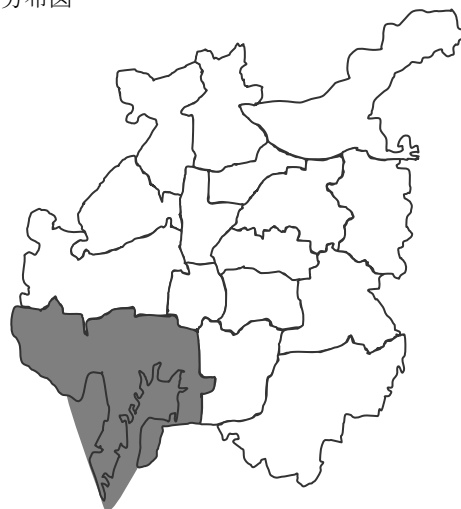
(執筆者 川瀬基弘)



ナラビオカミミガイ

港区庄内川河口、2013年4月27日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

タガイ *Anodonta japonica* Clessin, 1874**【選定理由】**

紀平ほか（2003）では、ドブガイ *Anodonta woodiana* にはドブガイ型、ヌマガイ型、タガイ型の3型があるとされており、レッドデータブックなごやではドブガイ *Anodonta woodiana* として扱われてきた（名古屋市動植物実態調査検討会，2004）。しかし最近の研究ではドブガイは、タガイ *Anodonta japonica* とヌマガイ *Anodonta lauta* の2種に分けられている（近藤，2008）。2009年より名古屋市内の主要な溜池を調査したところ、生息が確認された大型二枚貝は全てヌマガイであり、タガイは死殻すら確認できなかった（川瀬，2010；川瀬・野呂，2013など）。名古屋市内にはタガイとしての古い記録があるが（愛知県教育センター，1967）、現在では死殻すら見つからないので市内からは絶滅した可能性も否定できない。

【形態】

殻が長卵形で膨らみが弱く、中型で通常の殻長は10cmを超えない。殻表は黒褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白区野並橋、緑区鳴子池、千種区東山新池、千種区法生池、西区中小田井、中区名城濠、昭和区鶴舞公園、中川区富田町伏屋など（愛知県教育センター，1967）。

【県内の分布】

豊田市や新城市の溜池や水路（川瀬ほか，2011；川瀬，2014）。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布し、溜池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

溜池や用水路の砂泥～泥底に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”参照。

【保全上の留意点】

本種が生き残っている可能性のある溜池を保全することが不可欠。

【特記事項】

DNA分析の結果、タガイとヌマガイを別種として区別した（川瀬・森山，未発表）。

【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 川瀬基弘，2010. 3貝類. なごやため池生きもの生き生き事業報告書，pp.69-72. 名古屋ため池生物多様性保全協議会，名古屋。
 川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか（編），新城市の自然誌－昆虫・動物編一，pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館。
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水，48:9-16。
 川瀬基弘・野呂達哉，2013. 名古屋市内におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた，(38):56。
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう，2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類，159 pp. ピーシーズ，東京。
 近藤高貴，2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号，69 pp. 日本貝類学会，東京。
 名古屋市内動植物実態調査検討会監修，2004. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや2004－動物編一，368pp. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋。

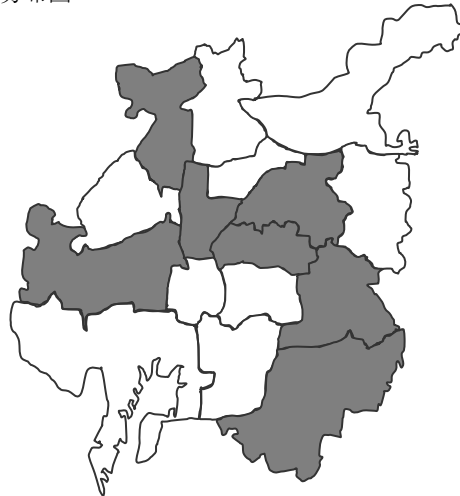
カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外



タガイ

豊田市古瀬間町、2010年11月25日、市原 俊 撮影

市内分布図

(執筆 川瀬基弘)

貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

イシガイ *Unio douglasiae nipponensis* (Martens, 1877)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。愛知県下ではこのような場所はほとんど失われてしまったため、1960年代には広い分布をもち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。

【形態】

中型で通常、殻長6cm程度であるが、湖沼産の個体は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく輪郭は細長い方形。殻長部分には弱いさざ波状の彫刻がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区、守山区に限られた場所に生息していたが(酒井, 2002)、本調査では溜池、河川、水路ともに発見出来ず絶滅寸前である。

【県内の分布】

1960年代中頃までは日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されている(愛知県科学教育センター, 1967)。木村(1994)や川瀬ほか(2011)には矢作川水系や豊田市内の溜池での確認記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥底で水質の良い環境を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は失われており絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質を保全し、護岸工事には注意が必要である。イシガイ科貝類は、グロキジウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できないため、他の淡水生物を含む生息環境全体の保全が必要である。

【特記事項】

市内での生息が期待された守山区、北区の溜池では発見できなかった。また、市内でヌマガイが生息する溜池(川瀬・野呂, 2013)においても本種を発見できなかった。

【引用文献】

- 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市内に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉, 2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた, (38):56.
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.

【関連文献】

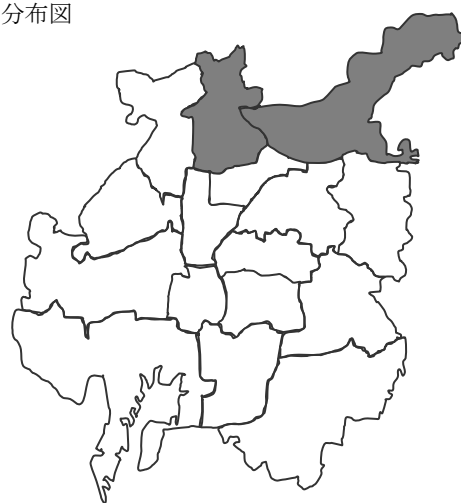
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.
 高柳茉友子, 2014. 矢作川上中流域に生息する淡水産貝類. 矢作川研究, (18):5-11.



イシガイ

豊田市平戸橋町、2012年8月21日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 カワホトトギスガイ科>

マゴコロガイ *Peregrinamor oshimai* Shoji, 1938

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は河口域の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ類の頭胸部腹面に足糸で付着する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。このような状況から本種も明らかに生息場所、生息数とも激減していると考えられる。本種はすでに三重県側の伊勢湾からは生息記録があるが（木村・山本, 1990）、愛知県ではレッドデータブックなごや2010が初記録である。和田ほか（1996）では、絶滅寸前とランクされている。

【形態】

貝殻は両殻を合わせて背面から見るとハート型で、和名はその外形および付着部位にちなむ（庄司, 1938）。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底に生息していたアナジャコ類の頭胸部腹面に付着した1個体のみが採集された。藤前干潟にもアナジャコ類は多産するが、今まで本種が採集された記録はない。

【県内の分布】

上述の名古屋市内の記録のみである。

【国内の分布】

模式産地は東京湾で（庄司, 1938）、伊勢湾、瀬戸内海、九州の内湾域に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

東京湾からは原記載（庄司, 1938）以来採集記録はなく、名古屋市が現在知られている分布の東限である。

【引用文献】

木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりばたん, 21(1/2):12-13.

庄司幸八, 1938. 珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝. *Venus*, 8(3/4):119-127.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

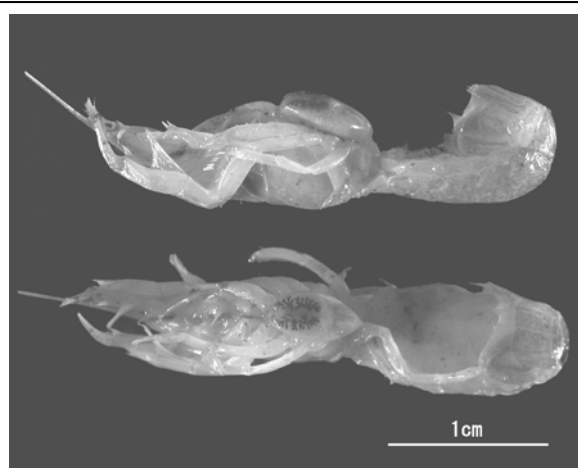
【関連文献】

木村昭一・山下博由, 2012. マゴコロガイ. 日本ベントス学会（編）. 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.162. 東海大学出版会, 秦野.

奥谷喬司（編）, 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.

佐藤正典（編）, 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.

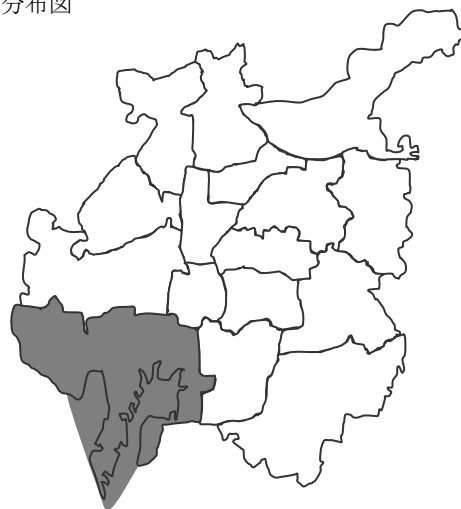
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版（南西諸島を除く）～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



マゴコロガイ

名古屋港沖水深6m、2008年10月9日、木村昭一 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ツキガイ科>

イセシラガイ *Anodonta bialata* (Pilsbry, 1895)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるものの、近年生貝の採集記録がなかったが(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)、2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝2個体が採集された。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長約5cmで球形に両殻共によく膨れる。殻は薄く脆い。殻は黄白色であるが、生きている時や新鮮な死殻には茶褐色の薄い殻皮がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底より幼貝ではあるが生きた個体が2個体採集された。

【県内の分布】

上述したように、名古屋港以外では現在生息が確認できない。

【国内の分布】

北海道南部～沖縄。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、アンダマン海、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統(蜂矢・田中, 1998)、愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群(川瀬, 2013)からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

- 蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

- 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 山下博由, 2012. イセシラガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.116. 東海大学出版会, 秦野.

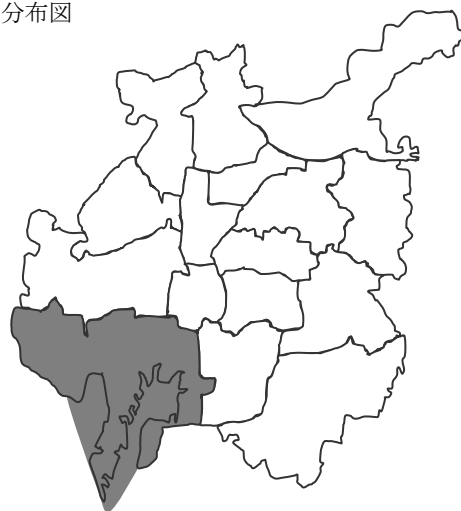
(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



イセシラガイ

熊本県天草市、2009年4月、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 バカガイ科>

ヤチヨノハナガイ *Raeta pellicula* (Deshayes, 1854)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で死殻が採集されたが、生貝は採集されない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。和田ほか(1996)では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長約4cmで殻は白色で薄くやや膨らみ、殻皮は光沢が強い。前縁は丸く、後縁は狭く裁断状。内湾の貧酸素層の発達する海底に多産するチヨノハナガイと近似するが、本種は殻が大型で、輪肋が多く密で、光沢が強いので、区別は明確である。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジと潜水調査で名古屋港沖合からも死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

2010年に南知多町千鳥ヶ浜で離弁状態の複数の死殻を確認している。

【国内の分布】

兵庫県～九州。

【世界の分布】

中国、フィリピン、東南アジア、紅海など。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。生貝が採集されないのが、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

前述のとおり、2010年前後に南知多町千鳥ヶ浜において離弁状態ではあるが比較的状态の良い死殻が複数打ち上がったことから、この周辺海域に少なからず本種が棲息している可能性がある。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, 研究集報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

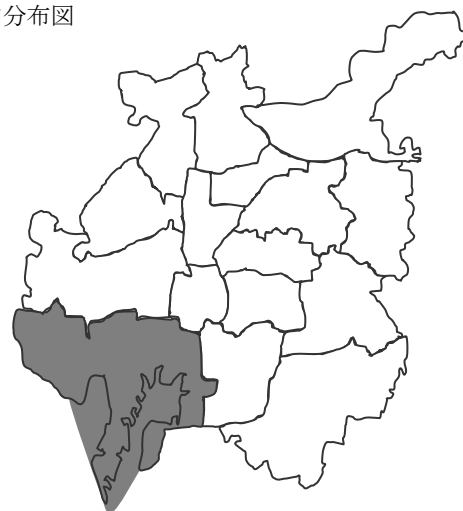
- 福田 宏, 2012. ヤチヨノハナガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.143. 東海大学出版会, 秦野.
奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ヤチヨノハナガイ
愛知県三河一色、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

アオサギガイ *Psammotreta (Pseudomitis) praeupta* (Salisbury, 1934)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、生息数とも激減している。本種は知多湾南部で底引き網によりわずかな死殻が採集されて以来（中山，1980）、採集記録がない。近年、三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、死殻も採集できなかった（木村，1996；木村，2000）。名古屋港沖から2008、2009年に殻皮の残った合弁の新鮮な死殻が少数ではあるが採集された。和田ら（1996）では危険とランクされている。

【形態】

殻長約4cm、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で殻頂部はわずかに青みを帯びる。後背縁は短く直線的。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から新鮮な死殻がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように、生息場所、生息数が減少し、近年では名古屋港沖以外では死殻すら採集されていない。

【世界及び国内の分布】

房総半島～九州。

【世界及び国内の分布】

東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。近年名古屋港沖以外では死殻さえ採集されず、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

- 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物，研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.
 中山 清，1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた，(6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

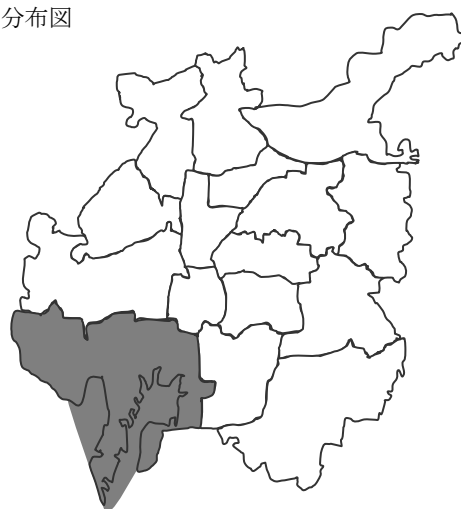
【関連文献】

- 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.
 佐藤正典（編），2000. 有明海の生きものたち，396pp. 海游舎，秦野.



アオサギガイ
産地不詳、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 ハナグモリ科>

ハナグモリ *Glaucanome chinensis* Gray, 1828

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、近年東京湾や瀬戸内海沿岸の都市近郊では激減している（和田ほか，1996）。本種は県内内湾域に広く分布していたと思われるが、地味で小型種のためか、生息状況に関する記録はない（愛知科学教育センター，1967）。伊勢湾奥の金城ふ頭（現在）が埋め立て地であった頃、殻皮の残った死殻が採集されたが（河合，2009）、現在県内では死殻が採集される場所も確認されていない。和田ほか（1996）では危険にランクされている。

【形態】

殻長 2cm、殻は前後に長い楕円形で、膨らみはやや強い。殻はやや薄く、黄褐色の厚い殻皮を被る。

【分布の概要】

【市内の分布】

金城ふ頭造成時（1970 年代）にサンドポンプによって新鮮な死殻が 1 個体のみ採集されたが（河合，2009）、その後死殻すら採集されていない。

【県内の分布】

上述したように、現在生息が確認できない。

【国内の分布】

房総半島～瀬戸内海～有明海、八代海、沖縄島、西表島に分布するが生貝が確認できない地域も多い。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、フィリピン。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在死殻さえ採集できないので、危機的生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

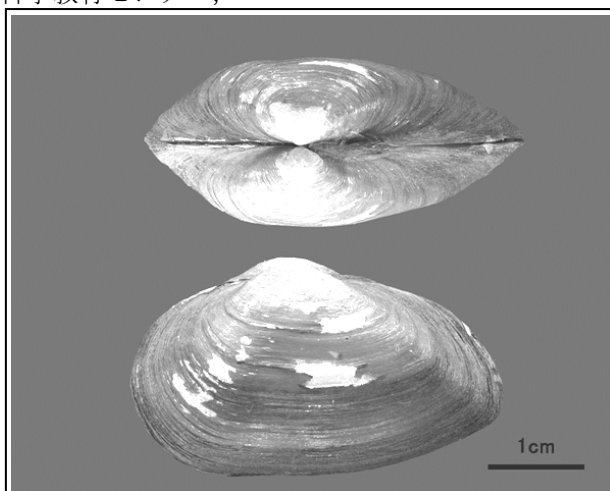
山下（2012）によれば、銚子、相模湾、三河湾、伊勢湾、浦戸湾では、消滅または現状不明となっている。東京湾には 2 ヶ所の生息地がある。瀬戸内海東部では現存生息地は少なく、西部の周防灘に生息地が多い。

【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
河合秀高，2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝。かきつばた，(34):20。
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状。WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。
山下博由，2012. ハナグモリ。日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.139. 東海大学出版会，秦野。

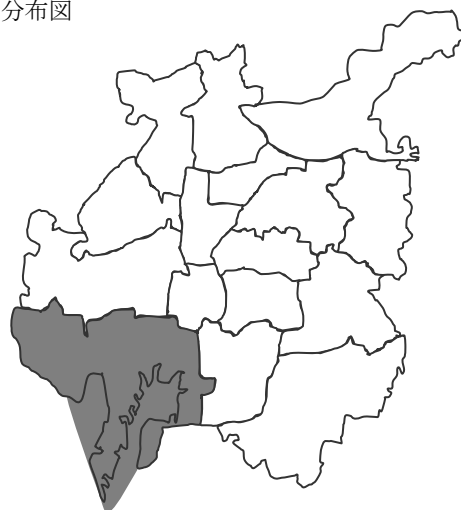
【関連文献】

奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，東京。



ハナグモリガイ
名古屋港金城ふ頭、1970 年代、木村昭一 撮影

市内分布図



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <マルスダレガイ目 シジミ科>

マシジミ *Corbicula leana* Prime, 1864

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

マシジミは愛知県の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた淡水二枚貝であった(愛知県科学教育センター, 1967; 木村, 1994)。しかし、1990年代にカネツケシジミ(タイワンシジミの黄色型)が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認された(原田, 2000; 木村, 2002)。名古屋市でも2008年にカネツケシジミの生息が確認された。1980年代ですでにマシジミの生息場所が少なかった名古屋市内では現在、主な河川からマシジミの生息が確認できない。

【形態】

殻長30mm程度の三角形に近い形をした二枚貝。殻表の成長脈はやや荒く、殻の色彩は黄褐色から黒色。カネツケシジミの典型的な個体は殻表の色彩が鮮やかな黄色で内面は白色になるので区別は明確であるが、マシジミかタイワンシジミ類か同定が困難な個体も多く出現する。

【分布の概要】

【市内の分布】

1980年代の守山区での記録(酒井, 2002)の他、2014年に中川区の水路で発見した。

【県内の分布】

かつて県内各地に普通に生息していたが近年は激減している。

【国内の分布】

東北～九州、四国、奄美大島(国内移入の可能性あり)(増田・内山, 2004)。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

タイワンシジミが移入した水域での対策はないが、移入していない生息地を早急に発見し、タイワンシジミが侵入しないように措置を講ずる必要がある。

【特記事項】

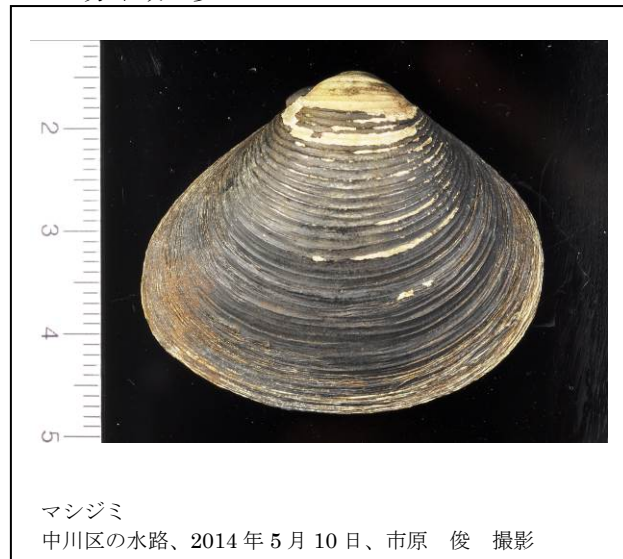
遺伝子分析の結果は、殻形態に基づく同定結果でマシジミ(またはタイワンシジミ)と同定できる個体には必ずしも対応しない。

マシジミとタイワンシジミを同種とする見解もある(山田ほか, 2010)。

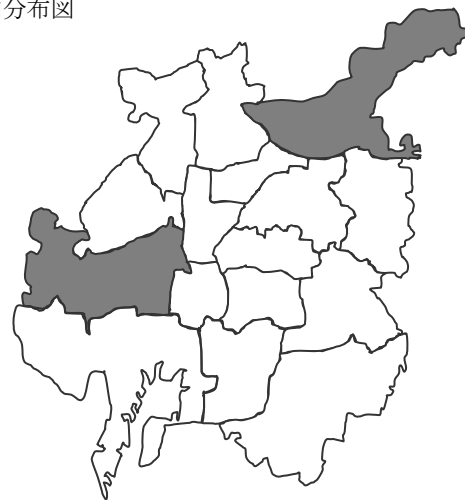
Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ432-14、採集地: 守山区竜巻池、DNA分析: 名古屋市立大学大学院。

【引用文献】

- 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋。
 原田一夫, 2000. タイワンシジミが愛知県に侵入。かきつばた, (26):10。
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相。研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会。
 木村昭一, 2002. 豊田市におけるカネツケシジミの繁殖例。かきつばた, (28):18-19。
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京。
 酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類。かきつばた, (28):15-17。
 山田充哉・石橋 亮・河村功一・古丸 明, 2010. ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ, タイワンシジミの類縁関係。日本水産学会誌, 76(5):926-932。



市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

ウラカガミ *Dosinorbis (Phacosoma) penicilata* (Reeve)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅰ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるが、近年生貝の採集記録がなかった（中山，1980；木村，1996；木村，2000）。その後、2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝2個体が採集された。和田ほか（1996）では絶滅寸前にランクされている。

【形態】

殻長6cm、殻はやや角張った円形で殻質は厚いが、膨らみは弱い。殻は白色から淡褐色で、殻表には、密な輪肋がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約6mの泥底より生貝(幼貝)2個体が採集された。2009年の潜水調査では新鮮な合弁の死殻が多数採集された（生貝の記録無し）。

【県内の分布】

上述のとおり名古屋港のみ。

【国内の分布】

陸奥湾以南～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。現在名古屋港以外では古い死殻が少数得られるのみで、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

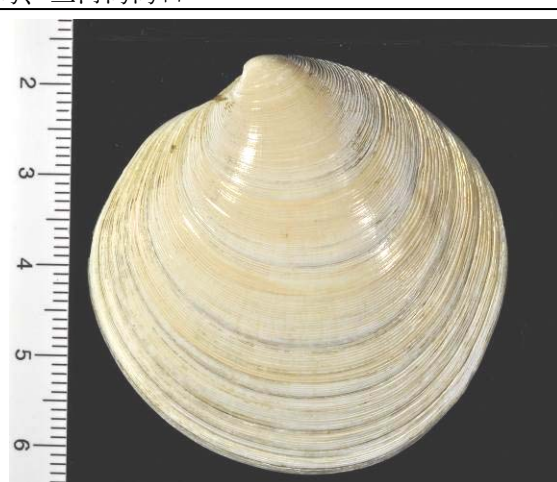
名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

- 蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石。化石の友，(45):20-25。
 河合秀高・千葉正己，1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石（1）二枚貝・角貝。化石の友，(43):21-25。
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～。瀬木学園紀要，(7):38-48。
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物。研究集報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会。
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）。かきつばた，(26):18-20。
 中山 清，1980. 知多湾南部海域の貝類相。かきつばた，(6):10-12。
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状。WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。

【関連文献】

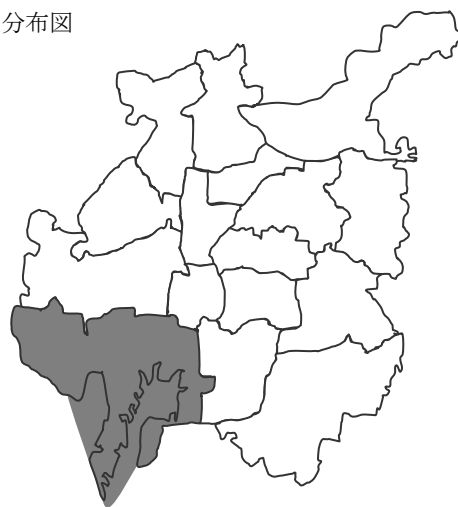
木村昭一，2012. ウラカガミ。日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.149. 東海大学出版会，秦野。



ウラカガミ

韓国順天市、2009年6月22日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Roding, 1798)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は分布域全域で著しい減少が報告されており、瀬戸内海、有明海の極一部や天草などに健全な生息場所が残されているが、その他では非常に稀な種となってしまった(和田ほか, 1996)。愛知県内でも本種は1960年代には三河湾奥部の前芝付近、福江湾で多産し、食用にされていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、近年では死殻すらほとんど採集できない。和田ほか(1996)では危険にランクされている。このように絶滅が危惧されたが最近では県内のいくつかの干潟で時々生貝が発見されるようになった。全国的にも回復しているようである。名古屋市内では、2013年に庄内川河口で生貝が確認されたが生息個体数は極めて少ないため絶滅危惧ⅠA類とした。

【形態】

殻長8cmに達するやや大型な種。殻は丸みを帯びた三角形で、殻はよく膨れるが薄い。殻の色彩は濃い褐色から灰褐色まで個体変異が多く、模様も変異する。シナハマグリ(中国・韓国からの輸入品)は殻全体に丸みが強く、殻の模様は褐色の稲妻模様のある個体が大部分で色彩の変異も少ない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2013年に庄内川河口で生貝が確認された。

【県内の分布】

2010年に矢作川河口や南知多町で複数の生貝を確認した。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内の干潟から潮下帯は環境が著しく悪化しているので、かつて多産し食用にされていた本種の生息場所は、現在ほとんど確認できない。大型種であるのに、死殻の確認できる場所すら非常に少ない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

藤前干潟で時々発見されるようになったが、継続調査が必要である。

【引用文献】

愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

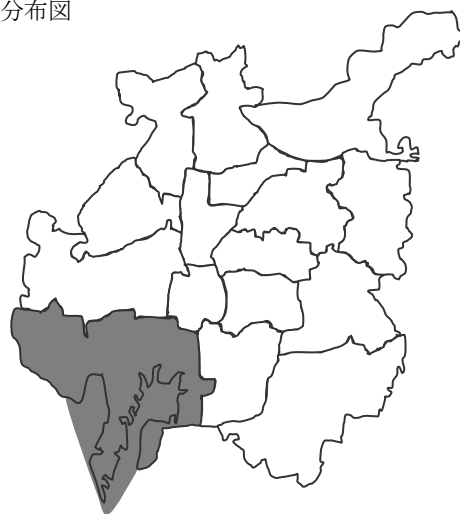
川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30):14-20.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31):29-31.



ハマグリ

庄内川河口、2008年12月11日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

ヒメマスオガイ *Cryptomya busoensis* Yokoyama, 1922

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖（木村，1996；木村，2000）、蒲郡市三谷地先人工干潟（木村，2004）で死殻が少数採集されたが、生貝は確認されていない。2008年に名古屋港沖で行ったドレッジ調査で生貝が少数採集された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約2cmで、殻は卵形で膨らみはやや強い。殻は白色で薄く脆い。殻の後端は裁断状で開く。殻頂下にさじ状の弾帯受けがある。外套線はほとんど湾入しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約2～6mの砂泥底より生きた個体が少数採集された。

【県内の分布】

上述したように、名古屋港沖合以外では近年全く生貝が採集されていない。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。名古屋港沖合以外では死殻も少ないので危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

- 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.
 木村昭一，2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた，(30):14-20.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

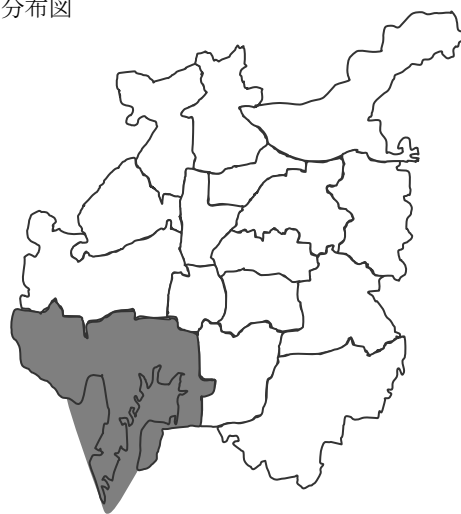
【関連文献】

- 木村昭一，2012. ヒメマスオガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.166. 東海大学出版会，秦野.
 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～，120pp. 日本国際湿地保全連合，東京.



ヒメマスオガイ
中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

クシケマスオガイ *Venatomya truncata* (Gould)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の砂泥干潟に生息する。愛知県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種はかつて伊勢湾周辺の海岸に死殻が多く打ち上げられ、生貝も普通に生息していたが、近年 20 年間でその生息場所、生息数とも激減した。本県側の伊勢湾や三河湾では生貝はおろか、死殻すら採集できる場所もほとんどない。2008年2月知多半島内海海岸で軟体部の入った本種が寒波で打ち上げられた。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では 2008 年に名古屋港沖で死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや 2010 の評価区分に従った。

【形態】

殻長約 2cm で、殻は卵形で膨らみは弱い。殻は白色で薄く、殻表には細い放射肋が密に走る。弾帯受は小さく、外套線湾入はない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 2～6m の砂泥底より殻皮の保存された合併の死殻が少数採集された。

【県内の分布】

上述したように、現在上述の内海海岸を除きほとんど生息が確認できない。

【国内の分布】

伊勢湾～九州、南西諸島。

【世界の分布】

インド、太平洋、紅海。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在ほとんど生息が確認されず、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182 pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京．

【関連文献】

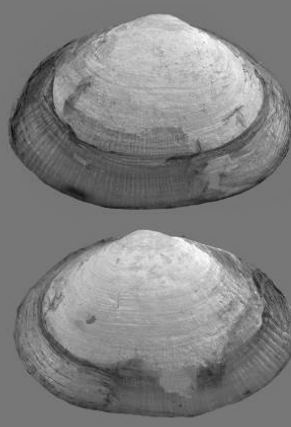
愛知県教育センター，1967．愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋．

木村昭一，2012．クシケマスオガイ．日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.166. 東海大学出版会，秦野．

名古屋市動植物実態調査検討会監修，2010．レッドデータブックなごや 2010 ―2004 年版補遺―，316pp, 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室，名古屋．

奥谷喬司（編），2000．日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野．

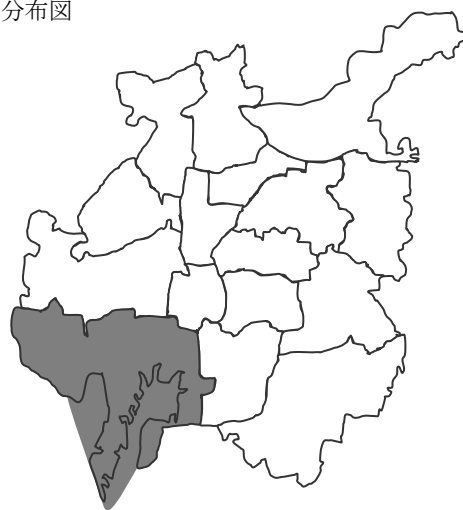
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009．干潟生物調査ガイドブック～東日本編～，120pp. 日本国際湿地保全連合，東京．



クシケマスオガイ

名古屋港水深 6m、2008 年 10 月 9 日、木村昭一 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 ニオガイ科>

ウミタケ *Barnea (Umitakea) japonica* (Yokoyama, 1920)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。かつては房総半島以南の内湾から記録されていたが、有明海以外での最近の記録はきわめて少ない(和田ほか, 1996)。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は伊勢湾では1997年3月に三重大学実習船勢水丸のベントス調査によって湾口部(水深12m)で死殻の破片が1個体採集されたにすぎない。三河湾では近年、生貝が2個体採集された(西, 2010)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で比較的新鮮な死殻片がわずかに採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長約8cm、殻は極めて薄く膨らみは強い。殻は白色で生きている時はやや厚い殻皮を被る。殻の前端は丸みを帯び、後端は斜めに裁断状で両端とも大きく開く。後域にはやや長く強い棘が並ぶ。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合から殻皮の残った比較的新鮮な死殻片がわずかに採集された。

【県内の分布】

上述したように、近年三河湾で2個体生貝が採集されたが、殻皮の残った死殻が採集される場所は名古屋港沖合だけである。

【国内の分布】

日本各地。

【世界の分布】

ロシア、朝鮮半島、中国大陆。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)〜鶴飼修司コレクションの貝類化石〜. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
西 浩孝, 2010. 三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認. 豊橋市自然史博物館研究報告, (20):15-17.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
山下博由・木村昭一, 2012. ウミタケ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.

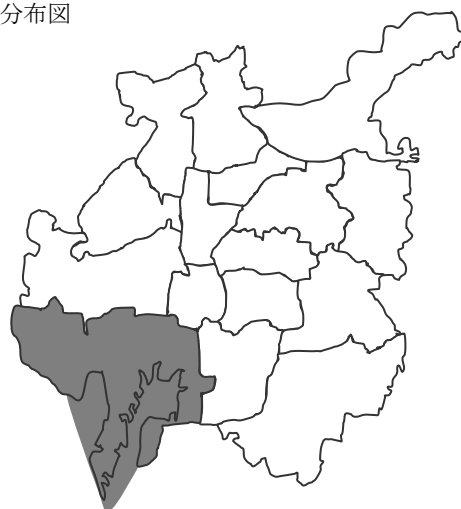
(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ウミタケ

中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <新腹足目 コロモガイ科>

オリイレボラ *Trigonostoma scalariformis* (Lamarck, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されていなかった(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。2006、2007年に知多半島先端部の数地点でドレッジ調査の結果、少数の生貝と比較的多くの新鮮な死殻が採集された。しかし、生息範囲は狭く、個体数は少ないので予断を許さない。和田ほか(1996)では、現状不明(絶滅寸前?)とランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数個体のみ採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻はこの属としては大型でやや細く、臍孔は狭く開くが、軸唇の滑層によって部分的にふさがれる。縦肋は強いが、肋間は平滑で螺旋肋は弱い糸状か不明瞭。蓋はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深 2~6m の砂泥底から生貝が少数個体ではあるが採集された。

【県内の分布】

上述したように県内の潮下帯では、近年生貝は少数しか採集されない。

【国内の分布】

房総半島~九州西岸。

【世界の分布】

黄海、インド、太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため、本種の生息場所、生息数ともに減少し、生貝が採集されることは稀である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

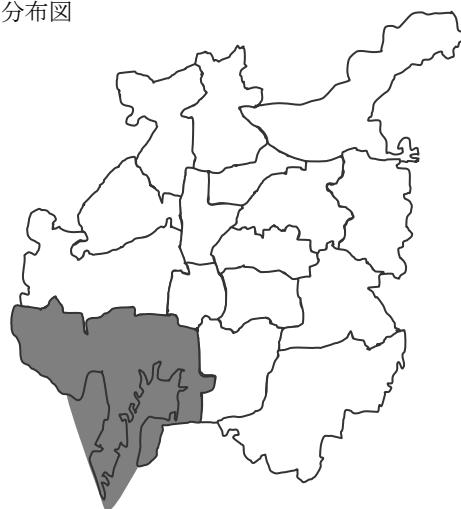
【関連文献】

- 木村昭一・福田宏, 2012. オリイレボラ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.74. 東海大学出版会, 秦野.
 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック~東日本編~, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



オリイレボラ
千葉県房総半島、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <基眼(モノアラガイ)目 モノアラガイ科>

モノアラガイ *Radix auricularia japonica* Jay, 1857

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧

【選定理由】

本種は平野部の池沼や水田、川の淀みなどの水草や礫に付着している(紀平, 1990)。近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修のため生息地、生息数とも著しく減少した。木村(1994)では、4ヶ所のみで生息が確認されたにすぎず、そのいずれでも生息数が少ない。今回の調査では名古屋市北区の水田で僅かな個体が見つかっただけである。

【形態】

殻高20mm程度で、殻口が著しく広がり殻口高は殻高の7~8割程度を占める。軸唇は多少ねじれる。殻表面には細かい成長脈がみられる。蓋はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

今回の調査では北区の水田で僅かな個体が見つかっただけである。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少し、生息数も少ない。名古屋市の調査期間中に新城市(川瀬, 2014)と豊田市から本種を発見した。

【国内の分布】

北海道~九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定の理由】”参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定の理由】”参照。

【保全上の留意点】

護岸工事、用水路の改修、農薬散布には注意が必要である。平野部の湖沼や河川下流域の水質の保全が必要である。

【特記事項】

今回得られた個体は、最近分布を広げている外来種の可能性もある。似て非なる個体の場合、殻形態だけの識別は困難である。増田(2005)は、近似した外来種との置換や交雑の危険性を指摘している。例えば大量に見つかる岐阜市では外来種の可能性がある(岐阜市役所自然共生部自然環境課, 2014)。また、豊田市では5年間の調査で生息していなかった水路において2013年に本種が突然発生しており、移入種の可能性が高い。

【引用文献】

- 岐阜市役所自然共生部自然環境課, 2014. 岐阜市の自然情報, 238pp. 岐阜市役所, 岐阜。
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌ー昆虫・動物編ー, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館。
 紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取。
 木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会。
 増田 修, 2005. モノアラガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー6 陸・淡水産貝類, p.320. 自然環境研究センター, 東京。

【関連文献】

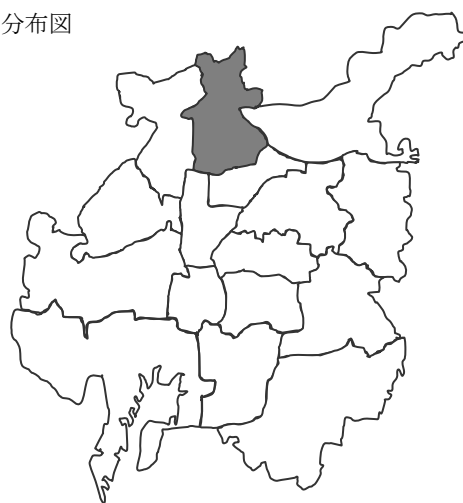
- 紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京。
 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京。

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



モノアラガイ
豊田市中金町、2012年6月1日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 キセルガイ科>

ナミギセル *Stereophaedusa japonica japonica* (Crosse, 1871)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は本州、四国、九州北部に広く分布するキセルガイで、各地に地域変異個体群があり、多くの亜種が記載されている。標準和名の通り普通種とされているが、愛知県内では分布は限定的で(野々部ほか, 1984)、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。特に名古屋市内では八事丘陵の南西部に位置する瑞穂区内のごく一部の自然林のみに生息が確認されていた(守谷, 2004)が、宅地開発等によりその生息が危ぶまれる。

【形態】

殻は中形で、殻高 26mm、殻径 7mm、12 層。やや棍棒型で淡黄～紫褐色。殻口は卵形で全縁、白色。外唇は厚くひろがり反転する。上板は斜位で内唇にいたる。下板は顕著に発達し、弓状に湾曲し、上板に近づいている。下軸板は弱く唇縁に現れる。主襞は長く、その下に上腔襞が少し斜めにあり、それより短い下腔襞がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

瑞穂区の 2 ヶ所でのみ生息が記録された(守谷, 2004)。東区木ヶ崎(矢田川左岸)で 2014 年 9 月 10 日に生貝が新たに発見された。

【県内の分布】

上述したように、東三河部を中心に生息地があるが、生息地点数は少なく、生息範囲も狭い。例えば近年全域的な調査が行われた豊田市や新城市では、本種の生息は極めて限られており滅多に見つからない。

【国内の分布】

本州、四国(北部)、北九州。多くの地方型や異名がある。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

古い自然林の保全が望まれる。

【特記事項】

2012 年に名古屋市内の陸産貝類の一斉調査が行われたが、ナミギセルはいずれの地点でも発見されなかった。

【引用文献】

守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸産貝類の現況, かきつばた, (29):25-31.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343 pp. 保育社, 大阪.

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市内に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.

川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編). 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

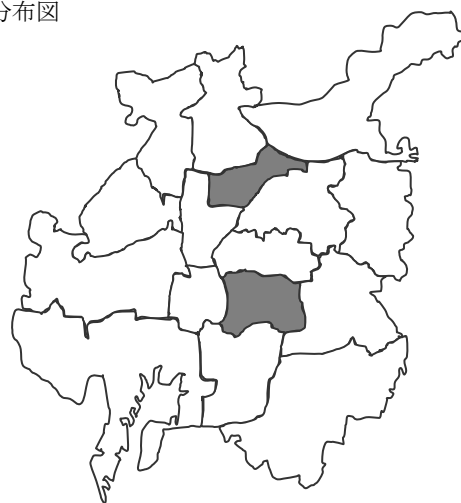
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市内に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



ナミギセル

岐阜市秋沢、2012 年 5 月 3 日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 オカモノアラガイ科>

ナガオカモノアラガイ *Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。近年、このような生息環境自体が激減しているため、本種の生息地、生息数は減少している。名古屋市では西区の小水路周辺の湿地で採集された標本が保存されている（豊橋市自然史博物館所蔵）が、近年、西区ではその生息が確認されていない。2013年に北区喜惣治新田で生貝が発見された。

【形態】

殻はとても薄く、やや光沢のある黄褐色の半透明。卵形～紡錘形で体層は長い。殻高10～13mm程度。殻口が著しく長く広がり殻口高は殻高の8割程度を占める。淡水産のモノアラガイなどに似ているが、眼が触角の先端についていることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

北区喜惣治新田の水田で発見された。

【県内の分布】

川瀬（2012）の報告後に豊田市各地から発見されているが個体数は少ない。新城市からも発見された（川瀬，2014）。

【国内の分布】

関東地方～九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の安定した水田、湿地周辺のマコモなどの挺水植物の茎や葉に付着している。陸産貝類であるが、水辺に最も近い位置に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

野々部ほか（1984）によれば、当時は名古屋市内の水田にも普通に見られた。しかし近年は、上述したような安定した環境自体が減少し、本種は激減している。

【保全上の留意点】

生息環境全体の保全が必要である。

【特記事項】

早瀬（2008）は、静岡市清水区において本種個体群の連続的な観察、計測を行い、本種の生活史には、春型と夏型があり、それぞれに寿命が異なることを解明し以下のように考察をしている。一見、無意味な発育状態の差が、湿地という不安定な環境において、突然の増水や渇水など環境の急激な変化に対して、卵や稚貝に対する被害を一部に食い止める生存戦略ではないかと考えられている。

【引用文献】

早瀬善正，2008. 静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史. 兵庫陸生生物，(60):151-157.
川瀬基弘，2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究，(3):57-80.
川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか（編），新城市の自然誌，pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫，1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚（編），愛知の動物，pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会，名古屋.

【関連文献】

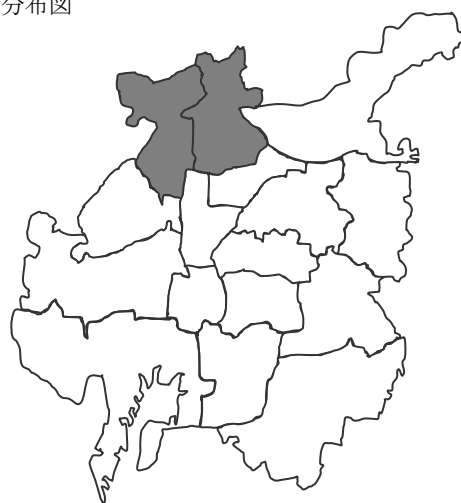
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報，(21):31-43.



ナガオカモノアラガイ

豊田市松平町、2013年5月13日、西尾和久 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 オナジマイマイ科>

ヒルゲンドルフマイマイ *Trishoplita hilgendorfi* (Kobelt, 1879)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

名古屋市の熱田神宮が古くから著名な産地である(愛知県科学教育センター, 1967)。その他、愛知県内では定光寺、石巻山、嵩山などに分布するが、石巻山、嵩山に分布する個体群はオオヒルゲンドルフマイマイとして区別されることがある。チャイロオトメマイマイなどとの区別も難しく、分類学的な問題のある種である。典型的な個体は、伊吹山系、鈴鹿山系の石灰岩地に生息しているが、名古屋市内では非石灰岩地に分布し、知多半島でも非石灰岩地で生息が確認され(早瀬, 2001)、分布上興味深い。著名な産地であった熱田神宮では採集困難となり、木村(2002)によって久々に生息が確認された。2013年の本調査でも神宮内から発見された。

【形態】

殻高約1cm、殻径約1.5cmの低円錐形で、体層は丸く膨らみ、周辺に弱い角がある。殻の色彩は淡黄色から黄褐色で、殻質は薄く、殻表に薄い殻皮を持つ。産地によって殻の色彩、周辺角の強さなど殻の形態は変異する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田神宮の他に、熱田神宮公園(熱田区)、木ヶ崎公園周辺(東区)、荒池(天白区)からも発見された(川瀬, 2012; 川瀬, 2013)。

【県内の分布】

定光寺、石巻山、嵩山などに分布する。近年、知多半島南部の非石灰岩地でも生息が確認された(早瀬, 2001)。

【国内の分布】

伊吹山系、鈴鹿山系の石灰岩地に分布する。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

よく茂った二次林内の低木の樹上(活動期)に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような安定した二次林の減少が原因と思われる。

【保全上の留意点】

分布域の二次林の保全に留意する。

【特記事項】

名古屋市一斉調査などにより、木ヶ崎公園周辺(東区)、荒池(天白区)ほか新たな生息地が確認されたが、いずれの地点においても生息個体数は少ない(川瀬, 2012; 川瀬, 2013)。

【引用文献】

- 愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
 早瀬善正, 2001. 知多半島に生息するヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (27):10-11.
 川瀬基弘, 2012. 名古屋市内で確認されたシリオレギセルとヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (37):52.
 川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 木村昭一, 2002. 熱田神宮の貝類相. かきつばた, (28):24-25.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2013. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

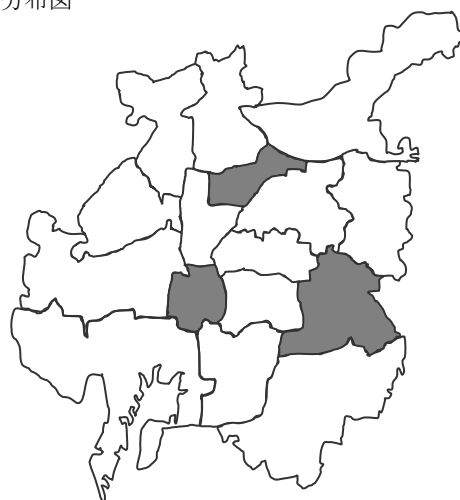
(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ヒルゲンドルフマイマイ

天白区荒池、2011年6月17日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



貝類 <イシガイ目 イシガイ科>

ヌマガイ *Anodonta lauta* Martens, 1877

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種を含むイシガイ科二枚貝は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで底質が砂泥底で、比較的水質の良い場所を生息場所としている。名古屋市内ではこのような環境の改修や汚染が進み、グロキジウムの寄主となるヨシノボリなどが外来魚に捕食されるなど、本種は激減した。

【形態】

殻は卵形で膨らみ、大型個体の殻長は20cmを超える。殻表は緑褐色で、殻頂付近には同心円状の皺がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜巻池／雨池／見返ヶ池、名東区明德池、天白区大根池、千種区猫ヶ洞池（川瀬・野呂，2013）と中川区の水路。ただし明德池は死殻のみの発見であった。

【県内の分布】

豊田市（川瀬ほか，2011）や新城市（川瀬，2014）などの溜池。ヌマガイとしての記録は県内に15ヶ所以上ある。

【国内の分布】

北海道～九州の河川下流域や湖沼。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域や平野部の用水路など、流れが緩やかな水質の良い砂泥底や平野部の溜池。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”と“【分布の概要】”参照。

【保全上の留意点】

外来魚の侵入防止、水質の保全、農薬使用の制限に加え、水路においては堆積した底質の確保と一年を通しての一定水位の確保が不可欠である。

【特記事項】

従来のドブガイ *A. woodiana* は、近藤（2008）によりヌマガイ *Anodonta lauta* Martens, 1877 とタガイ *Anodonta japonica* Clessin, 1874 の2種に分けられた。

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号：GBJ440-14（中川区の用水路）、GBJ421-14（天白区大根池）、GBJ430-14（守山区見返ヶ池）、DNA分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか（編），新城市の自然誌，pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館。
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水，(48):9-16。
川瀬基弘・野呂達哉，2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた，(38):56。
近藤高貴，2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号，69pp. 日本貝類学会，東京。

【関連文献】

浅香智也・鳥居亮一，2012. 油ヶ洲とその周辺の用水路の淡水二枚貝. 碧南海浜水族館年報，(25):36-40。
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報，(33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会。
酒井 類，2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた，(28):15-17。
田部雅昭・福原修一・長田芳和，1994. 淡水産二枚貝ドブガイに見られる遺伝的II型. *Venus*，53(1):29-35。

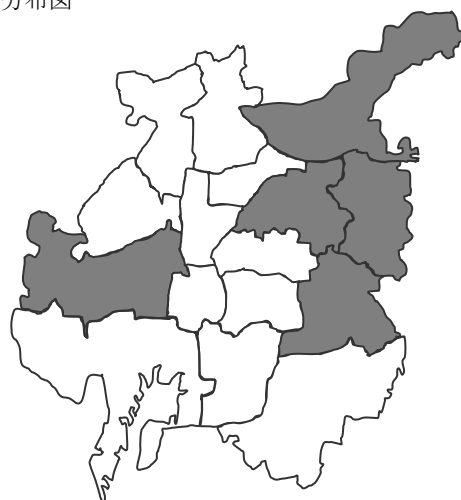
(執筆者 川瀬基弘)



ヌマガイ

天白区大根池、2011年11月3日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

サビシラトリ *Macoma contabulata* (Deshayes, 1854)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	絶滅危惧IB類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の奥部や河口部の砂泥干潟に生息する。愛知県では干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。もともと伊勢湾の愛知県側、三河湾での記録は多くないが、近年明らかに本種の個体数が減少している。名古屋市では、藤前干潟に古い死殻が打ち上げられて採集されるが個体数は少ない（木村，2004）。2013年の調査では死殻を多数確認したが、生貝を発見できなかった。

【形態】

殻長約7cm、殻は卵形、ニッコウガイ科としては膨らみが強い。殻はやや薄く、白色、生きている時には縁辺部に薄い殻皮を被る。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の泥底下60～80cm程度に生息している個体を発見した。泥底の深いところに生息しているため、生貝を発見するのは困難である（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

汐川干潟、三河一色、矢作川河口干潟。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”を参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”を参照。

【保全上の留意点】

内湾奥の干潟環境を保全する必要がある。

【特記事項】

名古屋市港区の藤前干潟の泥底では、60～80cm程度まで潜っているので、生貝を発見するのは困難である。ただし夏の干潮時のタイドプールでは、捕食のために動き回る本種の水管を複数確認できる。この水管の下を60～80cm程度まで掘り下げると本種を発見することができた。また、庄内川河口では、靱帯と殻皮が保存された新鮮な本種の死殻を多数確認できたので、藤前干潟の泥底と同様にある程度の個体数が生き残っていると考えられる（川瀬ほか，2009）。

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬ほか，2015）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.

川瀬基弘・市原 俊・河合秀高，2015. 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告，(41): 51-131.

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博報，(19):11-20.

木村昭一，2004. ⑧貝類. レッドデータブックなごや2004—動物編—，pp.263-292. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室，名古屋.

【関連文献】

川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生動物相. 矢作川研究，(6):81-98.

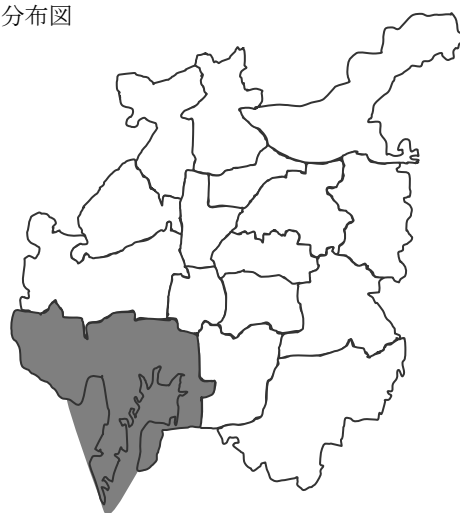
鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



サビシラトリ

藤前干潟、2004年7月4日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マメシジミ科>

ウエジマメシジミ *Pisidium (Odhneripisidium) uejii* Mori, 1938

カテゴリー

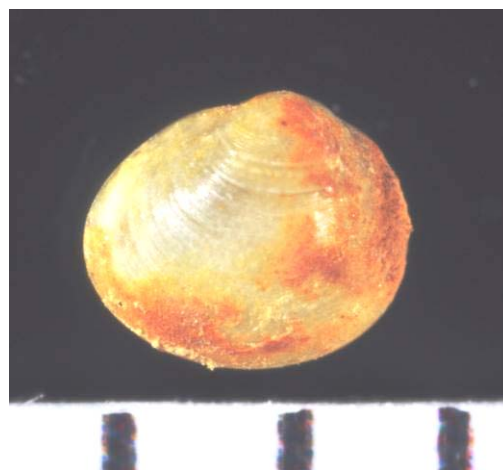
名古屋市2015	絶滅危惧IB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが (Mori, 1938; 黒田, 1963)、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は十分に調べられていない。豊田市や岐阜市の平野部の水田を調査したところ比較的多くの地点で見つかったが (川瀬ほか, 2012; 川瀬, 2014)、汚濁の進んだ水質の悪い水田ではほとんど見つからなかった。市内全域の主要な水田を調査したが、生貝は天白区の一つの水田以外では発見できなかった。発見された水田においても個体数はやや少なく、隣接する水田では本種を発見できなかった。その後、南区呼続長楽寺付近で死殻を 1 個体のみ発見したが生貝を確認できなかった。

【形態】

殻は非常に小さく、殻長 1~2mm 程度。殻は薄質の白色半透明から灰褐色で、微細な成長脈がある。殻頂は後方に位置する。鉸板が殻頂部で非常に狭くなり靱帯が殻内面に裸出する。本属は日本国内から 20 種程度が報告されているが (Mori, 1938; 黒田, 1963)、非常に微小な種が多いため、各地の詳細な分布・生息状況は十分に調べられていない。



ウエジマメシジミ

天白区梅が丘、2012 年 8 月 16 日、市原 俊 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区梅が丘 5 付近の水田 (生貝)、南区呼続長楽寺付近 (死殻 1 個体のみ)。

【県内の分布】

豊田市、新城市、西尾市など県内各地。

【国内の分布】

各地に分布すると思われるが調査不充分。

【生息地の環境／生態的特性】

比較的水質の良い水田の泥底に生息する。唯一生貝が発見された天白区梅が丘の水田では、他にヒラマキミズマイマイやヒメモノアラガイが見つかった。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の多くの水田では汚濁耐性種のヒメタニシやスクミリンゴガイが優占し水質が悪く、このような水田には生息できないと考えられる。農薬の影響もあると考えられる。

【保全上の留意点】

水田の水質・底質の汚濁防止。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ427-14, 採集地: 天白区梅が丘 5、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

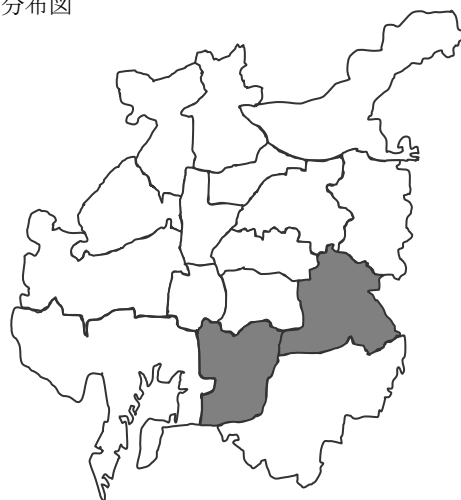
【引用文献】

- 川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～. pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.
 川瀬基弘・鳥居亮一・市原 俊, 2012. 愛知県矢並湿地に生息するマメシジミ類. 平成 23 年度豊田市自然観察の森年次報告書: 223-225, 豊田市自然観察の森, 豊田.
 黒田徳米, 1963. 日本非海産貝類目録, 71pp, 日本貝類学会, 東京.
 Mori, S., 1938. Classification of Japanese *Pisidium*. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):254-278, pls.7-11.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか (編). 新城市の自然誌—昆虫・動物編—. pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <アマオブネガイ目 アマオブネガイ科>

ヒロクチカノコ *Neripteron* sp.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、絶滅寸前(日本本土)とランクされている。名古屋市では、庄内川河口域にまとまった個体群の生息が確認されているが、その生息範囲は狭い(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)。

【形態】

殻径約2cmの半球型平巻きで螺塔が現れない。殻表は平滑で褐色。殻口は広がる。蓋は半円形で、石灰質。

【分布の概要】**【市内の分布】**

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

庄内川河口、矢作川河口域。

【国内の分布】

東京湾(絶滅)、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海、琉球列島。

【世界の分布】

中国大陸南部から東南アジア、オーストラリア北部にかけて分布するが、日本本土産と同一種かどうかは注意を要する(水産資源保護協会, 1996)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地周辺の塩沼やヨシ原内の水たまりなど直接河川水の当らない淀んだ泥干潟を好む。泥上にも生息するが、朽ち木や転石があればその下面に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD)登録

録番号: GBJ417-14、登録標本の採集地: 名古屋市港区藤前干潟、分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
 水産資源保護協会, 1996. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅲ), 90pp.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

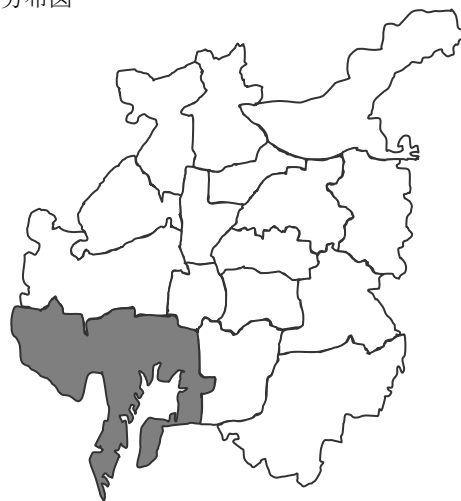
- 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会.
 三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.



ヒロクチカノコガイ

藤前干潟、2005年4月24日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 タニシ科>

オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

2009～2012年に市内15の溜池（守山区竜巻池／雨池／見返ヶ池、名東区明徳池、天白区大根池、千種区猫ヶ洞池／東山新池等）で池干しや鋤簾により調査が行われたが、オオタニシが発見されたのは守山区竜巻池と天白区大根池の2つの溜池だけであつた。その他市内の水田を幅広く調査したが本種の確認は出来なかった。調査の出来ない溜池も残されているが名古屋市内での生息状況は危機的であり、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップした。

【形態】

殻は高い円錐形でヒメタニシに似るがそれより大型で、殻底に比較的明瞭な角があるものが多い。また、マルタニシよりは体層の周縁が角張る。殻高は50～60mm程度で、環境条件がよいと80mm前後まで成長する。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区竜巻池と天白区大根池の2つの溜池のみ（川瀬・野呂，2013）。

【県内の分布】

豊田市（川瀬ほか，2011）や新城市（川瀬，2014）などのほか、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布する。

【国内の分布】

北海道南部～九州、沖縄諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、平野部の水田や用水路から丘陵地のため池などに広く分布し、かつては食用にするほど多産したが、近年では水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などのため、生息地、生息数とも著しく減少した。

【現在の生息状況／減少の要因】

前述の通り、名古屋市内の確実な生息地は2ヶ所のみである。

水質汚濁、農薬散布、用水路の改修などの影響の少ないため池は、市内にはほとんど存在しない。

【保全上の留意点】

用水路の改修、溜池の護岸工事、農薬散布には注意が必要である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号：GBJ419-14, GBJ420-14、登録標本の採集地：天白公園大根池、DNA分析：名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘，2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか（編），新城市の自然誌－昆虫・動物編一，pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館。
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊，2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水，(48):9-16.
 川瀬基弘・野呂達哉，2013. 名古屋市におけるヌマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた，(38):56.

【関連文献】

- 紀平 肇，1990. 琵琶湖淀川淡水貝類，131pp. たたら書房，鳥取。
 紀平 肇・松田征也・内山りゅう，2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類. 159pp. ピーシーズ，東京。
 木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究集報，(33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会。

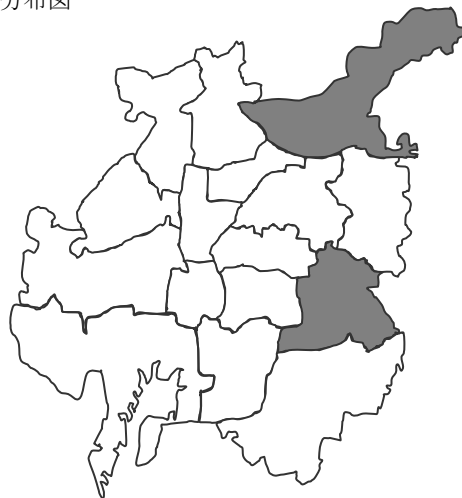
(執筆者 川瀬基弘)



オオタニシ

守山区竜巻池、2012年10月24日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ワカウラツボ科>

ワカウラツボ *Iravadia (Fairbankia) sakaguchii* (Kuroda et Habe, 1954)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺の転石や朽ち木の下に生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村, 1989; 木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、絶滅寸前とランクされている。市内では藤前干潟に健全な個体群が残っている(木村, 2001)。2013年の調査では庄内川河口干潟の流木(埋もれ木)の下からわずかながら生貝を発見した。

【形態】

殻は殻長約 5mm と小型で、長卵形。臍孔はなく、蓋は革質で薄い。近似種のカワグチツボとは臍孔がない点、殻が厚い点などで区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟より上部の転石地の深く埋もれた転石の下面に生息している(木村, 2001; 木村, 2010)。2013年にも確認した。

【県内の分布】

矢作川(木村, 2012)、佐奈川、汐川。

【国内の分布】

三河湾～九州。模式産地の和歌山県和歌浦では、環境破壊のため採集されず、有明海から再発見されるまで長らく幻の貝であった(木村, 1987)。

【世界の分布】

朝鮮半島南部。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺の 10cm 以上深く埋もれた石や朽ち木の下面に付着している。稀にヨシ原群落内の小さな水たまりにたまった朽ち木や落ち葉に付着している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

泥に埋もれた転石や流木など漂着物の下面の貧酸素的環境を好むが、時に干潟軟泥の表層を匍匐していることもある。

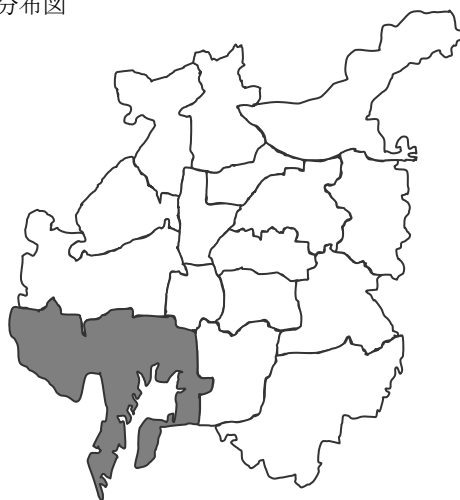
【引用文献】

- 木村昭一, 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. 南紀生物, 29(2):95.
 木村昭一, 1989. ワカウラツボを汐川干潟(三河湾)にて採集. 南紀生物, 31(2):130-131.
 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
 木村昭一, 2010. コラム: 庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全. 生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100 (改訂版), pp.102-103. 三菱 UFJ 環境財団, 東京.
 木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河野生生物研究会.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.



ワカウラツボ
福岡県、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 フトヘナタリ科>

フトヘナタリ *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. Adams, 1855

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に生息し、特にヨシ原群落内に高密度で生息する。愛知県ではヨシ原湿地という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。庄内川河口干潟に健全な個体群が残っているが(川瀬ほか, 2009)、分布範囲は限られている。

【形態】

殻高約4cm、殻径約1.5cmの円筒形で殻頂部分は成長にともなって欠落する。殻表は粗い布目状で殻口は反転して肥厚する。蓋は円形で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口干潟に健全な個体群が残っている(川瀬ほか, 2009)。

【県内の分布】

上記のほか、矢作川河口、矢作古川河口、汐川干潟、内海、知多奥田など(鈴木ほか, 2006; 木村・木村, 1999)。特に三河湾汐川干潟では大きな個体群が残っている。

【国内の分布】

東北地方～九州、南西諸島。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、インド・太平洋域。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようにヨシ原湿地、特にヨシ原群落内に多く生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ416-14、登録標本の採集地: 名古屋市庄内川河口。

【引用文献】

- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告, (22):31-64.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

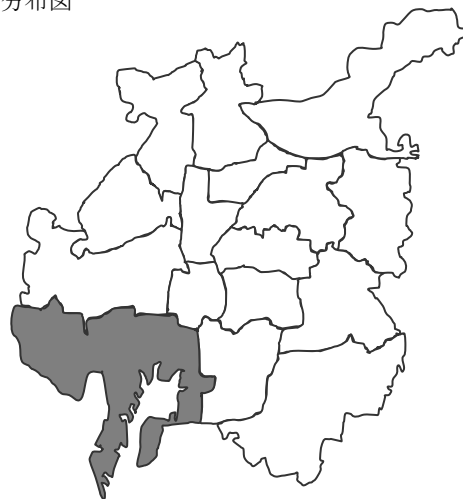
【関連文献】

- 木村昭一, 2004. 名古屋市より採集されたフトヘナタリの生貝. かきつばた, (30):34-35.
 木村昭一・福田 宏, 2012. フトヘナタリ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.29. 東海大学出版会, 秦野.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘, 2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49. 西三河野生生物研究会.



フトヘナタリ
愛知県矢作川河口、2014年11月1日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <新腹足目 オリイレヨウバイ科>

ムシロガイ *Niotha livescens* (Philippi, 1849)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟から潮下帯砂泥底に棲む。本県では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾から伊勢湾にかけて普通に生息していた（愛知県科学教育センター，1967）が、近年急速に生息場所、生息数共に激減し、生貝が全く採集されていなかった（木村，1996；木村，2000）。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数個体のみ採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻高約1.5cmの卵形の貝で、殻は厚く、大きく低い縦肋があるが、細い螺溝で横切られ、石畳状になる。殻口は丸く、内唇側に白い滑層が発達する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2～6mの砂泥底から幼貝ではあるが生貝が数個体、死殻が少数ではあるが採集された。

【県内の分布】

上述したように県内の内湾域では、古い死殻は比較的多く見られるが、生貝は限られた海域のみで採集される。

【国内の分布】

大槌湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、熱帯インド・西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。しかし、近年急激に減少し生貝が見られなくなった理由については不明。本種と生息場所をほぼ同じくするアラムシロガイは内湾奥から湾口部の干潟から潮下帯にかけて現在もきわめて多産する。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究集報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.

【関連文献】

- 福田 宏，2012. ムシロガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.68. 東海大学出版会，秦野。
 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野。
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子，2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～，120pp. 日本国際湿地保全連合，東京。

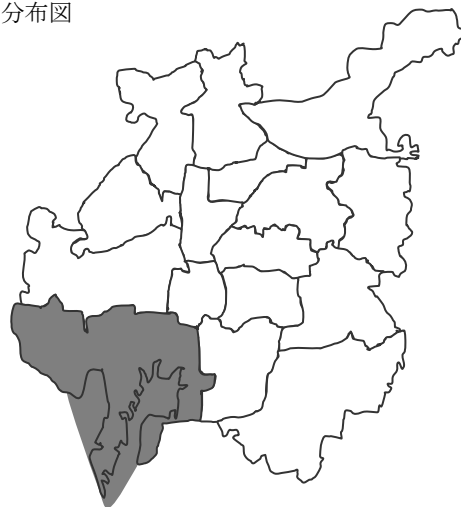
（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



ムシロガイ

福井県敦賀市、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <異旋目 トウガタガイ科>

ヌカルミクチキレ（未記載種） *Seyella* sp.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は和田ほか（1996）で和名だけが提唱された未記載種である。内湾奥の泥干潟にヨコイトカケギリ（トウガタガイ科）やカワグチツボ、エドガワミズゴマツボと共に生息する。三河湾、伊勢湾の干潟から潮下帯に広く分布するヨコイトカケギリと比べて、本種は生息範囲が狭く、県内では現在汐川干潟の奥部の泥干潟でのみ生息が確認されているにすぎない（藤岡・木村，2000）。本種は未記載種であるが、本県における前述のような生息環境は比較的調査が行われたので、生息状況は明らかになってきている。名古屋市内からも生息が確認された。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長約 4mm の微小な細いさなぎ型の貝。殻は黄褐色で成長脈は弱く、光沢が強い。殻口軸唇には弱い襞が 1 本ある。肉眼で見るとカワグチツボとよく似ているので混同されやすい。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口域より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

上述したように生息場所は限られていて、生息が確認されたのは汐川干潟と庄内川河口域のみである。汐川干潟には、健全な個体群の生息が確認されている。死殻の採集記録があるのは、美浜町布土（河合，1998）のみである。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ発見されている。三河湾、伊勢湾、瀬戸内海に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.

河合秀高，1998．内湾性稀少種サザナミツボの新産地．かきつばた，(24):16-17.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京．

【関連文献】

福田 宏・久保弘文，2012．ヌカルミクチキレ．日本ベントス学会（編）．干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.88．東海大学出版会，秦野．

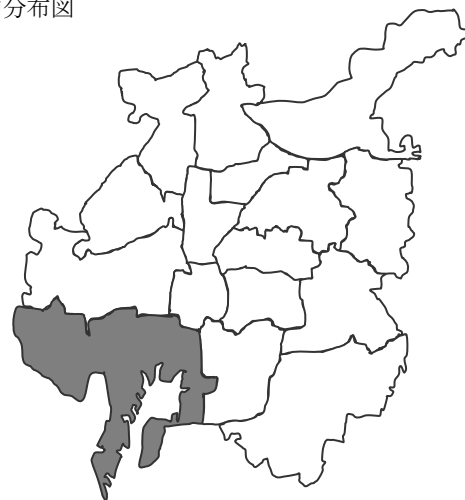
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～．269pp. 日本国際湿地保全連合，東京．



ヌカルミクチキレ

港区藤前干潟、2013 年 6 月 23 日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒゼンキビ *Parakaliella hizenensis* (Pilsbry, 1902)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

2012年に、市民参加型（参加者465名）による名古屋市陸貝一斉調査（市内全16区33地点）が開催され、その際名古屋市から初めて発見された種である（川瀬, 2013a, b）。山地性種であるため（川瀬ほか, 2012）、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。発見された熱田区高座結御子神社では19種もの陸貝が発見されており、名古屋市内としては陸貝の種数が豊富で自然度が比較的高いと考えられる。一方、外来種の陸貝の個体数は市内最多であり、環境の改変が進んでいる。名古屋市内では他に本種の記録がなく、高座結御子神社においても本種の個体数は非常に少ない。

【形態】

殻径3mm程度の微小種。殻は薄く半透明で黄褐色～褐色。螺塔はやや高く円みのある円錐形。各螺層はよく膨らみ縫合はやや深い。ハリマキビよりも体層が一回り小さく、ヒメハリマキビよりも丸みをおびることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

高座結御子神社（熱田区）。

【県内の分布】

豊田市足助地区桑田和町、野林町、室口町、籠林町、小原地区樽俣町、旭地区加塩町、坪崎町などで発見したが、各地点ともに個体数は非常に少ない。

【国内の分布】

関東～九州まで記録があるが北限の記録については詳細な情報がないため不明。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため（川瀬ほか, 2012）、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。例えば、岐阜市内では雛倉、則松、外山、三田洞東、岩井、長良など比較的自然度の高い北部地域に生息し、市街地や平地の広がる自然度の低い南部地域では発見されていない（川瀬, 2014）。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

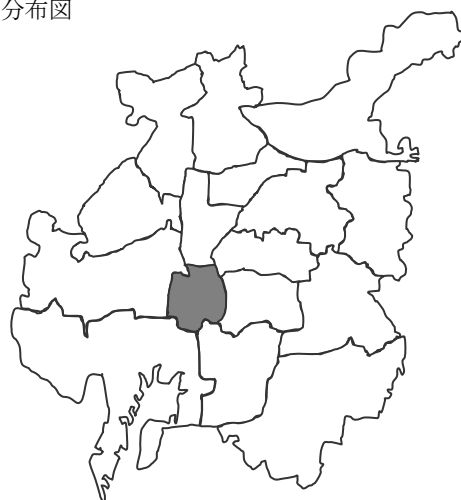
- 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業）, pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.



ヒゼンキビ

岐阜市雛倉、2011年3月30日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



（執筆者 川瀬基弘）

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

ビロウドマイマイ属の一種 *Nipponochloritis* sp.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種が生息できるような自然度の高い環境は少ない。寺社林や緑地公園の雑木林の多くは、手入れが行き届いており、倒木や朽ち木が少なく、落葉なども定期的に清掃され、湿度を保ったリター層や腐葉土が堆積しにくくなっている。

【形態】

殻高12mm、殻径17mm程度、殻はやや球形で、黄褐色。殻表には短い殻皮毛が密にある。螺塔はほとんど平らで、縫合の間は緩やかに中高となる。次体層と体層は下降し、円形となる。殻口はわずかに斜位、広い円形、その唇縁は薄い。滑層は内唇から外側へ広がり半円状となる。ケハダビロウドマイマイより殻皮毛の密度が高い。

【分布の概要】

【市内の分布】

八竜緑地(守山区)、小幡緑地公園(守山区)。

【県内の分布】

新城市黄柳野、岡崎市滝尻町、犬山市栗栖、豊田市和合町、豊田市稲武町など。

【国内の分布】

東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、四国地方など。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であり、倒木の裏面や朽ち木の内部などに生息し、昼間に這いまわることが希で、生息数も少なく発見するのが難しい。

【現在の生息状況／減少の要因】

八竜緑地(守山区)および小幡緑地(守山区)の湿度の保たれた雑木林中の倒木や朽ち木の中から発見されたが、このような良好な環境が残されているところは名古屋市内には少ない。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。また、景観を意識した環境美化のためだけに、倒木、朽ち木や落葉などをむやみに取り除くのではなく、少しでも自然の状態を維持するように心がける。

【特記事項】

DNA分析の結果、*N. oscitans*には複数種が含まれるため、*N. sp.*とした(川瀬ほか, 2014)。

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ332-14、採集地: 守山区小幡緑地、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊, 2014. 名古屋で発見されたビロウドマイマイ類. なごやの生物多様性, 1:1-14.

【関連文献】

早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のビロウドマイマイ属について. かきつばた, (31):8-19.

早瀬善正・多田 昭, 2008. 中部地方に分布するビロウドマイマイ属. かきつばた, (33):17-21.

早瀬善正・多田 昭, 2009. 東北地方に分布するビロウドマイマイ属. かきつばた, (34):14-19.

早瀬善正・多田 昭, 2010. 関東地方に分布するビロウドマイマイ属. かきつばた, (35):19-27.

川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

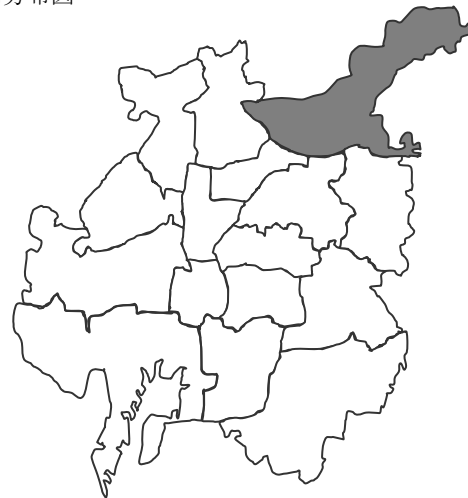
多田 昭, 2005. 中国地方産ビロウドマイマイ属貝類. まいご, (13):12-25.



ビロウドマイマイ属の一種

守山区小幡、2012年10月5日、西尾和久 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

イヨスダレガイ *Paphia (Neotapes) undulata* (Born, 1778)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県でも潮下帯の環境が著しく悪化していて、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は三河湾や伊勢湾で操業する底引き網漁船（トリガイ桁網）によって近年でも生貝が採集されるが、個体数は少ない。近年三河湾湾口部、知多半島伊勢湾側をドレッジにより調査したが、生貝は採集されなかった（木村，2000）。2008年名古屋港沖合で生貝が採集された。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや 2010 の評価区分に従った。

【形態】

殻長約4cmで殻は前後に長い楕円形。殻はやや薄く、膨らみは弱い。殻表には光沢があり、殻頂部以外には赤紫褐色の放射状の網目模様がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深6～10mの泥底から生貝が比較的多数採集された。

【県内の分布】

名古屋港沖合のほか、西條ほか（2008）に関わる中部国際空港セントレア周辺海域調査において、本種のまとまった個体群を2012年頃まで潜水調査で確認している。

【国内の分布】

房総半島、能登半島以南～琉球列島。

【世界の分布】

太平洋、インド洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。現在でも生貝は採集されているが個体数は少ない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

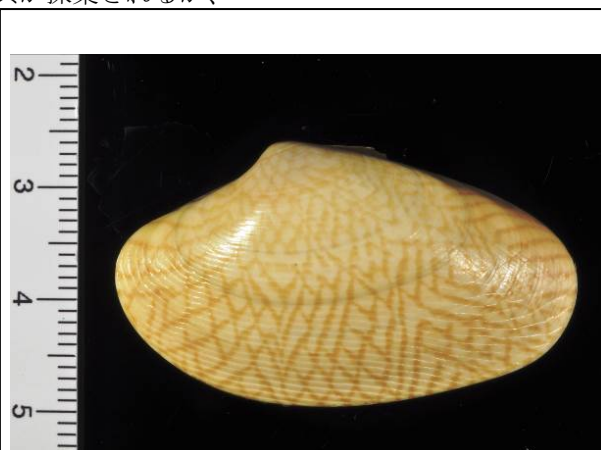
【引用文献】

- 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.
 西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.

【関連文献】

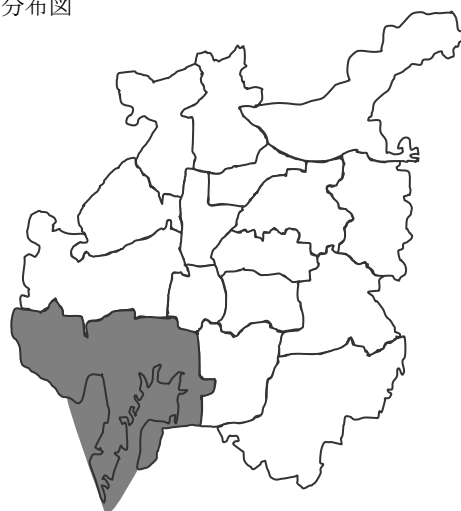
- 奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.
 西條八束・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之，2004. 中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンダ第13期助成成果報告書，pp.3-16.

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



イヨスダレガイ
愛知県三河一色、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ヤマトニシ科>

ヤマタニシ *Cyclophorus herklotsi* Martens, 1861**【選定理由】**

本種は、山地性種であり(川瀬ほか, 2012)、山地の落葉の下や小石の下などに生息する。2013年7月30日、守山区竜泉寺一丁目の雑木林(庄内川左岸)で名古屋市から初めて本種が発見された(川瀬・村瀬, 2014)。個体数も非常に少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

殻高10mm、殻径13.5mm。濃い茶褐色で光沢があり、螺塔は低平な円錐形。螺管は急に太くなる。大層の周縁は円い。殻口は広い円形、その口縁はやや厚く、堅く、ひろがり反転する。臍孔は広大で、前面から各螺層の一部がみられる。蓋は多旋型の革質で、円く厚く、核は中央にある。軟体部は不規則な黒い縞模様があり、触角は漆黒色。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区竜泉寺一丁目。

【県内の分布】

瀬戸市、田原市、三河地方の山地。

【国内の分布】

関東地方以西日本各地。

【世界の分布】

朝鮮半島南部



ヤマタニシ

守山区竜泉寺、2013年7月30日、川瀬基弘 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

山地の落葉の下や小石の下などに生息する。湿度の高いこのような環境に生息するが、やや乾燥しがちな場所からも発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

志段味地区や吉根地区など守山区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が急激に減少した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ437-14、採集地: 守山区竜泉寺、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘・村瀬文好, 2014. 名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ. かきつばた, (39):51.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

【関連文献】

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪府.

川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

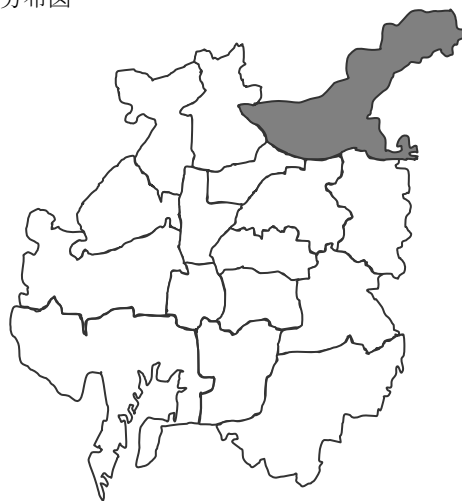
川瀬基弘, 2013. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2014. 新都市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新都市の自然誌—昆虫・動物編—, pp.1-24. 新都市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.

(執筆者 川瀬基弘)

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ヤマタニシ科>

ミジンヤマタニシ *Nakadaella micron* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

山地性種であり(川瀬ほか, 2012b)、緩やかな谷川沿いの落葉の下に生息する。名古屋市内の記録は熱田神宮のみであったが(守谷, 2004; 川瀬ほか, 2012a)、2012年に行われた名古屋市内の陸貝一斉調査で、名東区明徳公園のリター層から1個体のみが発見された(川瀬, 2013a, b)。

【形態】

殻は微小で、殻高 1.2mm、殻径 1.8mm、約 4 層。白く半透明で、殻表は滑らかな光沢がある。螺塔は低く、各層はよくふくらみ円い。縫合は深い。殻口は全縁で、ややうすい。臍孔は広く深い。蓋は多旋型で、円くてうすく、黄色である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

熱田区熱田神宮の本殿東方の窪地斜面の落葉下、名東区明徳公園のリター層。

【県内の分布】

石巻山、嵩山、鳳来寺山麓、三河各地。

【国内の分布】

北海道以南、日本全国。

【世界の分布】

朝鮮、台湾(高雄州旗山)。



ミジンヤマタニシ

岐阜市上雛倉、2011年2月23日、市原 俊 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。リター層から発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29 pp.

なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・守谷茂樹・石黒鎌三, 2012a. (8) 陸産貝類. 熱田神宮の生物調査と外来生物対策. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成23年度生物多様性保全推進支援事業), pp.136-140. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012b. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

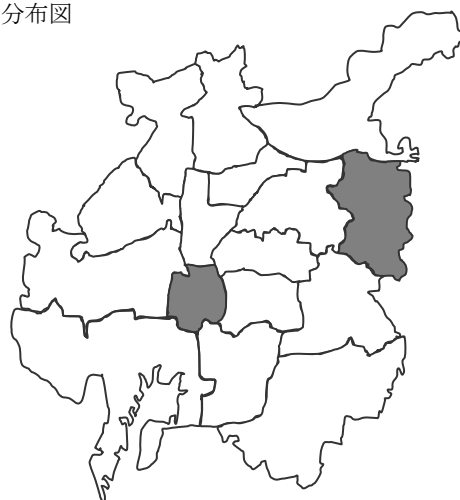
守谷茂樹, 2004. 名古屋市の陸貝の現況 補足その1(熱田神宮). かきつばた, (30):23-26.

【関連文献】

川瀬基弘・村瀬文好・高柳茉友子・石黒鎌三, 2014. 9 陸産貝類調査 [II-4 熱田神宮の生物調査と外来生物対策]. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成25年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.134-143. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

(執筆者 川瀬基弘)

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ゴマガイ科>

ヒダリマキゴマガイ *Diplommantina (Sinica) pusilla* (Martens, 1877)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2012年に、市民参加型(参加者465名)による名古屋市陸貝一斉調査(市内全16区33地点)が開催され、天白区荒池のみで発見された種である(川瀬, 2013a, b)。山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。名古屋市内では他に熱田神宮からの記録があるが熱田神宮においても生息個体数は非常に少なく最近の調査でも稀にしか見つかっていない。2012年に、新たに中村区枇杷島町(庄内川左岸)の雑木林のリター層から1個体だけが発見された。2013年には名古屋城外堀から多数の個体が発見された。名古屋城外堀を除き市内各地の個体数は非常に少ない。

【形態】

殻は左巻で、殻高2mm、殻径1mm、5層。卵形。表面には斜めの肋条がある。淡い黄色で光沢がある。縫合は深い。初めの2層は平滑、第3層は急に大きくなり、第4層は第3層と同じ大きさ。最終層は小さくなる。殻口は斜位で円い。口縁は二層で外方へ広がる。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区荒池、中村区枇杷島町、熱田区熱田神宮、中区名古屋城外堀、緑区大高町鷺津。

【県内の分布】

犬山市、小牧市、豊田市、新城市、豊川市、田原市などの県内各地。

【国内の分布】

北海道、本州、八丈島、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮。

【生息地の環境／生態的特性】

山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林やそれに準ずる環境に生息している。リター層や腐葉土層中から発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

【関連文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, (16):11-26.
 守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況. かきつばた, (29):25-31.

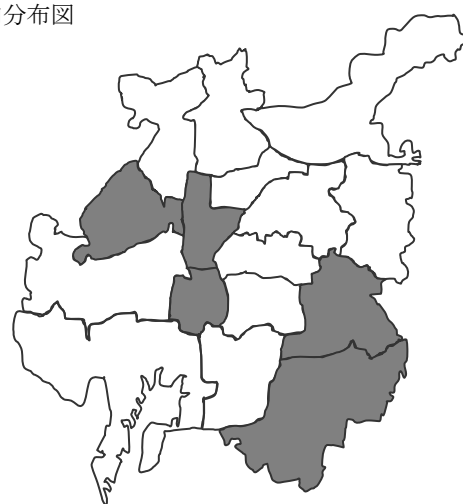
(執筆者 川瀬基弘)



ヒダリマキゴマガイ

岐阜市伊洞川上流部川岸、2011年3月、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ワカウラツボ科>

カワグチツボ *Iravadia (Fluviocingula) elegantula* (A. Adams, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響しているので(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻は殻長約 5mm と小型で、長卵形。臍孔は狭いが開く、蓋は革質で薄い。近似種のワカウラツボとは臍孔が開く点、殻が薄い点などで区別される。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて7ヶ所程度である。生息地では群生して多産する。

【国内の分布】

北海道北部(クッチャロ湖)～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、ロシア沿海州。

【生息地の環境／生態的特性】

県下では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。藤前干潟ではエドガワミズゴマツボと同所的に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ445-14、登録標本の採集地: 港区庄内川河口干潟、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝5種. かきつばた, (39):31-36.
川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.

【関連文献】

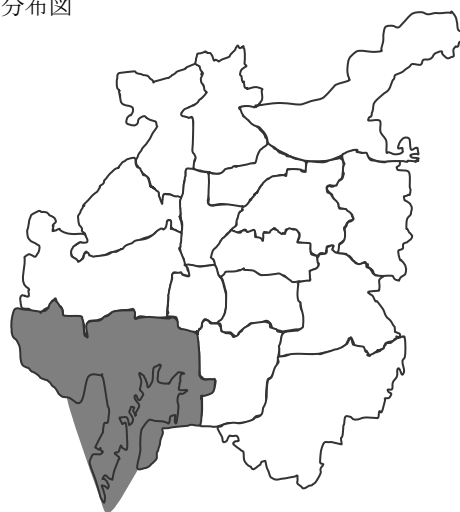
福田 宏, 2012. ワカウラツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.38. 東海大学出版会, 秦野.
三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



カワグチツボ
港区藤前干潟、2004年7月4日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 ミズゴマツボ科>

エドガワミズゴマツボ *Stenothyra edogawensis* (Yokoyama, 1927)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。愛知県ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟に健全な個体群が残っているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻は殻長約 2mm と微小で、卵形。殻口は体層から狭まり円形。臍孔はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の泥表面に比較的多数生息しているが(木村, 2001; 川瀬ほか, 2009)、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在8ヶ所である。生息地では群生し、個体数は多い。

【国内の分布】

宮城県万石浦・若狭湾～九州。沖縄県から近似した個体が知られるが同種か否かは検討の余地がある(福田, 2012)。

【世界の分布】

日本固有種。朝鮮の記録はトライミズゴマツボの誤同定(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県下では、上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地や泥干潟の保全と周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ434-14、採集地: 港区藤前干潟、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.44. 東海大学出版会, 秦野.
 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.

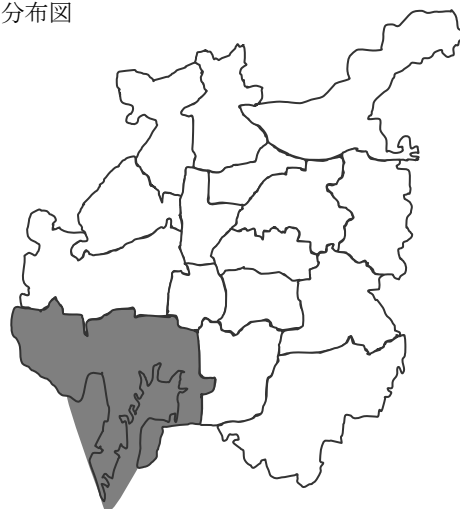
【関連文献】

- 三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.



エドガワミズゴマツボ
新川河口干潟、2005年7月23日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

クリイロカワザンショウ *Angustassiminea castanea* (Westerlund, 1883)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少している(木村・木村, 1999)。名古屋市内では藤前干潟と庄内川下流に分布しているが(川瀬ほか, 2009)、名古屋市の生息環境は確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)、準絶滅危惧と判断した。

【形態】

殻高約7mm、殻径約3mmの小型種。カワザンショウガイ科は小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔が高く、貝殻が濃い栗色であることが特徴である。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に健全な個体群が分布しているが、生息範囲は狭い。

【県内の分布】

県下での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて、15ヶ所生息地がある。生息地では群生する。

【国内の分布】

陸奥湾～種子島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。フトヘナタリと同所的に見られることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

ヨシ原湿地と上部の陸上植生の保全及び周辺水域の水質を保全する必要がある。

名古屋市ではレッドデータブックを作成し絶滅危惧種をリストアップしてきたが、これらの種が今尚もきわめて多種多数生息する庄内川河口域は名古屋市内に残存する最後の干潟貝類の好適生息環境(楽園)であり、ここに生息する一部の種だけに焦点を当て絶滅危惧種としてリストアップすることも重要ではあるが、もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【引用文献】

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.

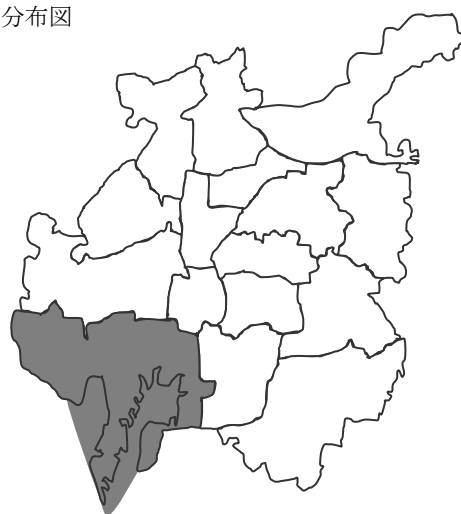
【関連文献】

福田宏, 2012. クリイロカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.46. 東海大学出版会, 秦野.



クリイロカワザンショウ
新川河口干潟、2008年11月22日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ツブカワザンショウ *Assiminea estuarina* Habe, 1946

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地やその周辺が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも減少した(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市でも生息環境が確実に減少しており個体数の減少にも影響している(早瀬ほか, 2014)。

【形態】

殻高約 4mm の小型種。小型のカワザンショウガイと近似するが、本種は、殻質が厚く、螺塔は低く球形、狭いが臍孔が開く。

【分布の概要】**【市内の分布】**

藤前干潟のカキ礁(川瀬ほか, 2009)および庄内川河口域のヨシ原湿地や付近の転石周辺より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて 5ヶ所生息地がある。

【国内の分布】

宮城県志津川湾～九州、奄美大島、沖縄島。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の砂利や転石上に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地やその周辺が護岸工事などで破壊され、生息地が確実に減少している。

【保全上の留意点】

庄内川河口域は名古屋市内に残存する最後の干潟貝類の好適生息環境(楽園)であり、ここに生息する一部の種だけに焦点を当て絶滅危惧種としてリストアップすることも重要ではあるが、もはや名古屋市内では極端に減少し奇跡的ともいえるほどに貴重な存在となってしまった庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらないと考える(早瀬ほか, 2014)。

【特記事項】

螺層上部に螺肋を持つことで別種とされていたヒメカワザンショウは、分子系統解析の結果本種と同種とされた(福田, 2012)。

【引用文献】

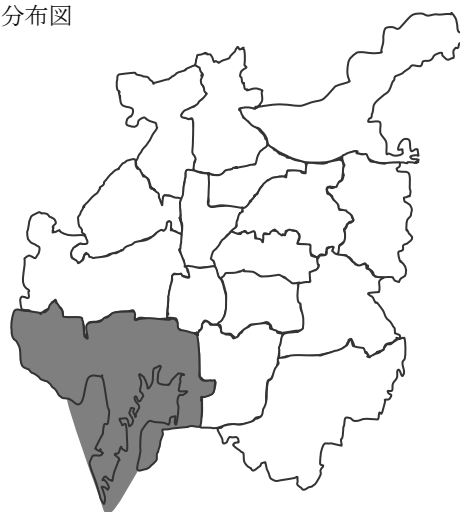
- 福田 宏, 2012. ツブカワザンショウ. 日本ペントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.48. 東海大学出版会, 秦野.
 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博報, (19):11-20.
 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるヨシ原湿地の腹足類相. 日本ペントス学会誌, 54:44-56.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 (執筆 者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ツブカワザンショウ

藤前干潟、2003年8月19日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <盤足(ニナ)目 カワザンショウガイ科>

ヒナタムシヤドリカワザンショウ *Assimineea parasitologica* Kuroda, 1958

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺に分布する。愛知県ではヨシ原湿地自体が、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。名古屋市内では、藤前干潟と庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内に分布している(川瀬ほか, 2009: ムシヤドリカワザンショウとされているもの)。

【形態】

殻高約 6mm の小型種。カワザンショウガイ科は、小型種が多く形態的にも近似していて同定は難しい。本種は螺塔がやや高く、貝殻の色彩が赤く、縫合付近に黄白色の帯が入るので区別できる。臍孔はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内。

【県内の分布】

愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて 15 ヶ所生息地がある。生息地では群生する。

【国内の分布】

本州～九州の太平洋岸、瀬戸内海、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地周辺の落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。湿度が高いときにはヨシに登る。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで失われ、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

庄内川河口域のヨシ原塩性湿地や泥質干潟(ラムサール条約登録地に該当する藤前干潟(庄内川河口干潟の一部)の範囲より外れる上流部分)の環境をも保全することを考慮しなければ本当の意味での生物保護にはつながらない(早瀬ほか, 2014)。

【特記事項】

川瀬ほか(2009)でムシヤドリカワザンショウとした種は本種の誤同定である。ムシヤドリカワザンショウは日本海側に生息し、太平洋側には生息していないため、これまでに記録された種はヒナタムシヤドリカワザンショウの可能性が高い(福田, 2012)。

【引用文献】

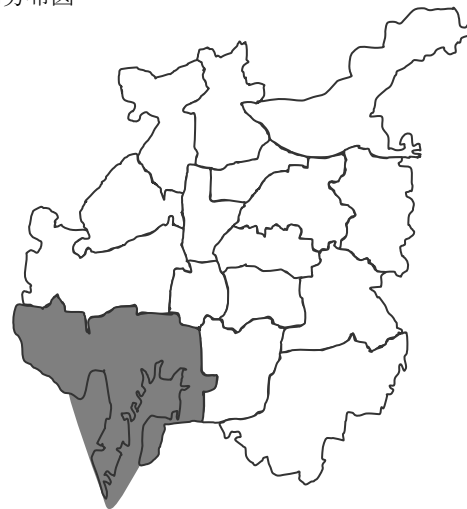
- 福田 宏, 2012. ヒナタムシヤドリカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.48. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるヨシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- 木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ヒナタムシヤドリカワザンショウ
庄内川河口、2008年11月12日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <翼舌目 イトカケガイ科>

セキモリ *Papyriscala yokoyamai* (Suzuki et Ichikawa, 1936)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の潮下帯砂泥底に棲む。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では2008年に名古屋港沖で生貝と死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻高約1.5cmの低い塔型で殻は灰白色で螺層に濃褐色の色帯が2本ある。殻表は不規則にやや強い縦肋がある。臍孔は広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2～6mの砂泥底から生貝が1個体、死殻が少数ではあるが採集された。

【県内の分布】

豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。

【国内の分布】

房総半島、佐渡島～九州。

【世界及び国内の分布】

インド、西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されており、同様に保全することが必要である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合，2000）や愛知県田原市高松の中部更新統（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

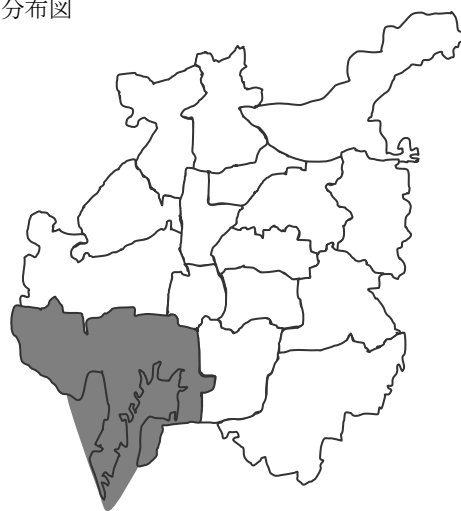
- 蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友，(45):20-25.
 河合秀高，2000. 名古屋港浚渫地（金城埠頭）産貝類化石（3）巻貝（その2）. 化石の友，(47):46-49.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

木村昭一，2012. セキモリ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.63. 東海大学出版会，秦野.



市内分布図



（執筆：木村昭一，加筆：川瀬基弘）

貝類 <翼舌目 イトカケガイ科>

クレハガイ *Papyriscala latifasciata* (Sowerby, 1878)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥の干潟から潮下帯砂泥底に生息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。和田ほか（1996）では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約 20mm の塔型で殻は淡褐色で体層に 3 本、各層 2 本の濃褐色帯をめぐらす。縦肋は白く細い。臍孔はやや広く開く。蓋は濃褐色から黒色で革質。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深 2～6m の砂泥底から新鮮な死殻が 1 個体ではあるが採集された。

【県内の分布】

豊川河口域、三河湾奥（蒲郡市沖）、日間賀島南沖などで生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない（木村，1996；松岡ほか，1999）。

【国内の分布】

房総半島、佐渡島～九州。

【世界及び国内の分布】

西太平洋。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも生貝が少数採集されているが、生息場所、生息数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要であろう。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【引用文献】

- 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

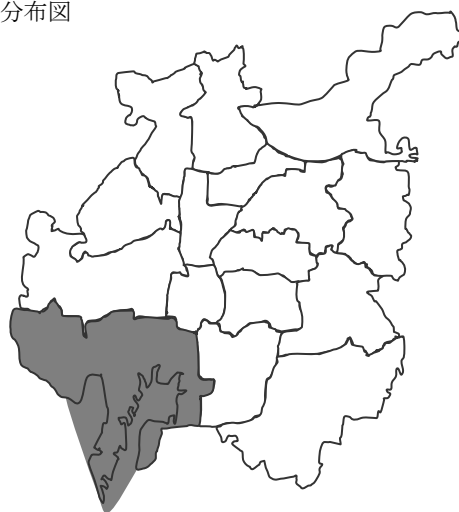
木村昭一，2012. クレハガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.62. 東海大学出版会，秦野.



クレハガイ

愛知県蒲郡市、市原 俊 撮影

市内分布図



（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）

貝類 <異旋目 トウガタガイ科>

カキウラクチキレモドキ *Brachystomia bipyrarnidata* (Nomura, 1936)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種はマガキの体液を吸う外部寄生生活を行っており（三浦，2008）、マガキのカキ礁中に見られる。しかし大規模なマガキ群集が存在しても、本種はマガキほど水質汚濁に対する抵抗性は強くないため、水質汚濁の進んだカキ礁では棲息が困難である。かつて港区藤前干潟のカキ礁ではマガキに寄生している本種を見つけることが出来たが、近年は生息を確認できない。2013 年春の調査では、藤前干潟で本種を見つけることが出来ず、導流堤先端付近の庄内川河口右岸側のカキ礁からわずかな個体を発見した。市内では本種の個体数は確実に減少している。年変動を考慮し、準絶滅危惧に判断した。

【形態】

殻長約 4mm。殻はやや薄質、乳白色で黄褐色の殻皮を被る。成長線は粗く、湾曲する。軸唇には弱い襞が 1 個ある。外唇縁後端が浅く湾入する。

【分布の概要】

【市内の分布】

導流堤先端付近の庄内川河口右岸のカキ礁から生貝を 2 個体のみ発見した。

【県内の分布】

蒲郡市三谷町（木村，2004）、西尾市幡豆町（早瀬ほか，2011）。

【国内の分布】

松島湾、三河湾、瀬戸内海、有明海、富岡湾など（和田ほか，1996）、東北～九州の潮間帯岩礁域や干潟。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の属するトウガタガイ科の各種は、軟体動物、環形動物、星口動物の体液を吸引する自由生活型の外部寄生種であり、本種は潮間帯の干潟や岩礁のマガキ *Crassostrea gigas* の体液を吸って生活している。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟、庄内川河口の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少が要因である。

【保全上の留意点】

内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
 木村昭一，2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30):14-20.
 三浦知之，2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
 Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

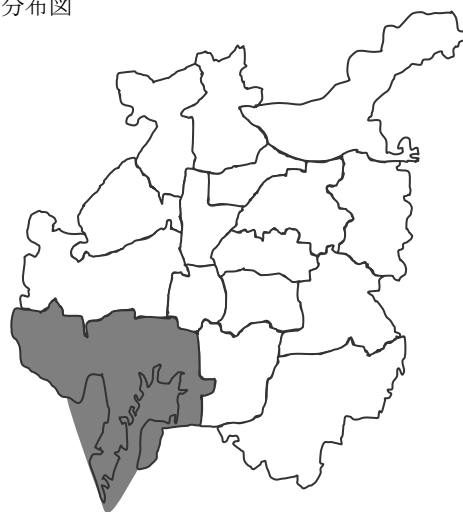
(執筆者 川瀬基弘)



カキウラクチキレモドキ

庄内川河口、2013 年 4 月 27 日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus chinensis* Dunker, 1854

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	情報不足

【選定理由】

名古屋市内のいくつかの水田から発見されたが、本種の生息する水田は限られており、市外の水田(川瀬ほか, 2011; 川瀬, 2014)に比べて水田毎の生息個体数が非常に少ない。水草の輸入に伴い近似した外国産種が移入されており、市内でも本属の外来種と考えられる個体が見つかっている。

【形態】

殻径 5mm 程度の扁平な平巻き形。周縁は円いか、わずかにキール状になる。本種はヒメヒラマキミズマイマイに比べて大型で同サイズのそれと比較すると巻き数が少ないことで区別できる。殻表は灰褐色や黄褐色を帯びた半透明で微細な成長脈がある。殻は付着物に覆われていることが多い。

【分布の概要】

【市内の分布】

市内分布図参照。ほぼ市内全域に生息すると考えられる。

【県内の分布】

県内全域。

【国内の分布】

北海道～九州、南西諸島までの日本全国。

【世界の分布】

中国、朝鮮など大陸に広く分布。



ヒラマキミズマイマイ

豊田市東大見町、2012年8月16日、川瀬基弘 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

日本各地の池沼や湖、水路や水田などの止水環境に生息するが、名古屋市内では主に水田の水草や水のある休耕田の植物などに付着していた。流れの速い水域には生息しない。また、汚濁の進んだ水域にはあまり生息していなかった。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内各地の水田に生息するが、本種の生息は特定の水田に限られ、全く生息していない水田も多い。また、水田毎の個体数は少ない。水質汚濁や冬季の乾田化などが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

水質汚濁や冬季乾田化の防止。溜池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ424-14、GBJ425-14、GBJ426-14、GBJ428-14、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.

【関連文献】

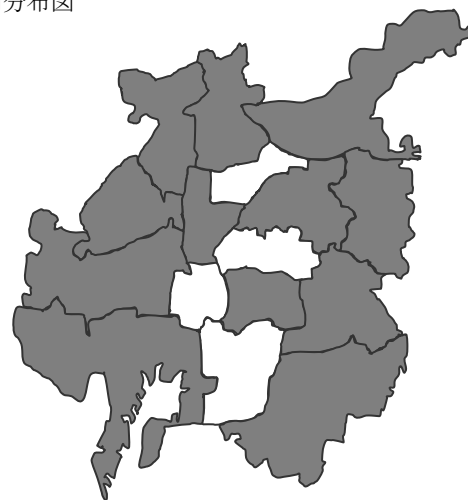
川瀬基弘, 2010. 3 貝類. なごやため池生きものの生き生き事業報告書, pp.69-72. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・森山昭彦・家山博史, 2012. 岐阜市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (54):33-42.

Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):279-300, pls.12-18.

(執筆者 川瀬基弘)

市内分布図



貝類 <基眼(モノアラガイ)目 ヒラマキガイ科>

ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson, 1842)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は、ヒラマキミズマイマイやヒメヒラマキミズマイマイとともに愛知県内各地の水田に生息しているが、名古屋市内のこれらの微小淡水貝は詳細な調査がなされていなかった。今回の調査で市内の主要な水田を概ね調査したが、本種が発見されたのは守山区太田井の水田のみであった。年による消長が著しく、今後新たに別の場所で発見されたり個体数が増加する可能性もあるが、現時点で生息地、個体数とも限られている。

【形態】

殻径 5mm 程度の平巻き形。体層の底面は平らで、臍孔は急激に落ち込み狭く深い陥没となる。螺塔は緩やかな弧を描き、殻頂部は浅く陥没する。螺管下面からは畝状の内彫刻が数本透視できる。螺管内の反対側にも同様な内突起がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区太田井の水田。

【県内の分布】

美浜町、日進市、岡崎市、西尾市、豊田市、新城市、田原市など県内各地（湖沼や水田の水草に付着して生活する）。

【国内の分布】

北海道以南、本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

湖沼の水草や水田の稲など水生植物に付着して生活する。停滞性水域に生息するため、流れのある河川や水路にはほとんど生息していない。

【現在の生息状況／減少の要因】

例えば、岐阜市内では水質の綺麗な水田から汚濁の進んだ市街地の水田まで幅広く生息しているが（川瀬ほか、2012）、極端に汚濁の進んだ水田ではやや個体数が少ない傾向にあった。過去の名古屋市内の情報がないたため、もともと生息地と個体数少なかった可能性も否定できないが、市内の水田は水質汚濁が進んでおり、本種が生息できる環境は確実に減少している。

【保全上の留意点】

水質汚濁や冬季乾田化の防止。溜池では水草など、本種が付着できる水生植物が豊富な環境作りをする。

【特記事項】

ヒラマキガイ科の巻貝は、外来種が海外の水草に付着して観賞魚とともに輸入されており、それらが市内の溜池などに帰化している可能性が高く、今後は水田などでも同科の外来種が発見される機会が増えると考えられる。

【引用文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・森山昭彦・家山博史, 2012. 岐阜市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (54):33-42.

【関連文献】

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.

Mori, S., 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):279-300, pls.12-18.

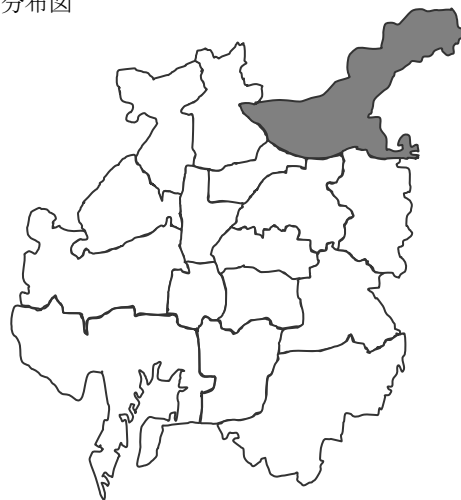
(執筆者 川瀬基弘)



ヒラマキガイモドキ

豊田市蕪木町、2014年9月27日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 タワラガイ(ネジレガイ)科>

タワラガイ *Sinoennea iwakawa* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

2012年に、市民参加型(参加者465名)による名古屋市陸貝一斉調査(市内全16区33地点)が開催され、その際名古屋市から初めて発見された種である(川瀬, 2013a, b)。山地性種であるため(川瀬ほか, 2012)、主に自然度の高い山林、雑木林やそれに準ずる環境に生息している。発見された細根公園(緑区)は、一般公開される比較的最近まで手つかずの状態の自然が残っていたため本種が生き残っていたと考えられる。個体数は少なく、現時点で名古屋市内からの記録は細根公園のみであるため、今後の環境改変によって個体数は減少していく可能性が高い。

【形態】

殻高4mm、殻径1.5mm。殻は昔の米俵に似た白色蛹形で微小。体層に続く3層の殻幅はほとんど同じ。各螺層には多数の板状の強い縦肋がある。殻口外唇には2個、軸唇上にも1個の結節状突起がある。軟体部は灰白色。

【分布の概要】

【市内の分布】

細根公園(緑区)。

【県内の分布】

石巻山、嵩山(野々部ほか, 1984)、豊田市各地(川瀬, 2012)、新城市副川諏訪神社(川瀬, 2014)など。

【国内の分布】

関東地方以西、四国、九州、屋久島、奄美大島。

【世界の分布】

朝鮮済州近郊。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の分布域では、リター層中や腐葉土層中から発見されることが多いが、腐肉食性あるいは肉食性の陸貝とされており、大型陸貝の死殻の中から発見されることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物. 加藤貞亨ほか(編), 新城市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新城市立鳳来寺山自然科学博物館.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.
 野々部良一・高桑弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会.

(執筆者 川瀬基弘)



タワラガイ

緑区細根公園、2012年10月6日、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒメカサキビ *Trochochlamys subcrenulata* (Pilsbry, 1901)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

高座結御子神社、八竜緑地、相生山緑地、小幡緑地公園、東山公園などの比較的自然度の高い雑木林や緑地公園などで生息が確認されたが、個体数は少なく、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化により生息地や個体数は減少していると考えられる。

【形態】

殻は微小で殻高2.2mm、殻径3mm程度。淡い褐色で半透明。カサキビより著しく低い円錐形。螺層は緩やかに膨れる。体層の周縁角は鋭く突起している。殻表は繊細な糸状縦脈と多少不明瞭な螺状脈を現す。殻口はやや菱形、その周縁は薄い。軸唇はやや垂直にわずかに広がる。臍孔は狭く開いている。軟体は淡灰～赤褐色。触角は黒褐色。

【分布の概要】

【市内の分布】

高座結御子神社(熱田区)、八竜緑地(守山区)、相生山緑地(天白区)、小幡緑地公園(守山区)、東山公園(千種区)。

【県内の分布】

豊田市や新城市など県内各地。

【国内の分布】

本州、三宅島、八丈島、四国、九州。

【生息地の環境／生態的特性】

湿度の保たれたリター層、落葉下などに生息する。岐阜市の全域調査では、本種の分布は北部から中部の山地に集中し南部の平地、市街地には分布しない(川瀬, 2014)。豊田市では自然度の高い平地を除き、山地に分布記録が多い(川瀬, 2012)。このように本種は山地性種であり、本種の分布は比較的自然度が高い指標になる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したとおり、宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ439-14、採集地: 天白区相生山緑地、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343pp. 保育社, 大阪.
川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課.

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見. 生きものシンフォニー5号. なごや生物多様性センター, 名古屋.
川瀬基弘, 2013. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.

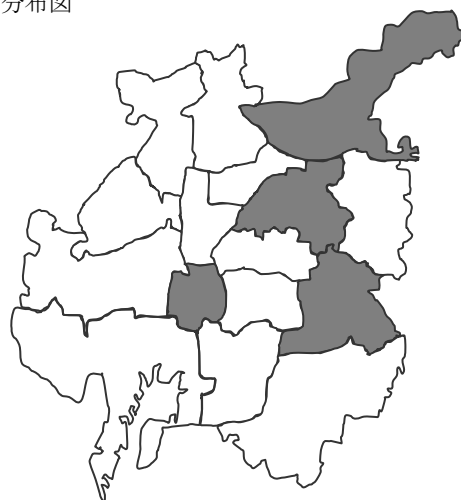
(執筆者 川瀬基弘)



ヒメカサキビ

豊田市野原町、2009年7月6日、西尾和久 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ウメムラシタラ *Coneuplecta (Sitalina) japonica* Habe, 1964

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。やや乾燥に弱いため、湿度のある環境を好むようである。名古屋市内では生息記録が少なく、局所的に大量発生する例が知られているが、大量発生は一時的ですぐに激減、消滅することが多い。本調査では守山区と天白区から生貝を発見しているが、それぞれの生息地において個体数は少なかった。中区の護国神社では過去に多くの個体が記録されたことがあるが今回の調査では確認できなかった。

【形態】

殻は微小で、殻高約 1.2mm、殻径 1.8mm 程度。螺塔が低く、巻数は少なく、低い円錐形。縫合はくびれ、各層には段差を有し、3本程度の螺状肋を持つ。体層底部は平たく、周縁の角は尖らない。殻は淡黄褐色。殻口は肥厚・反転せず、内部に歯はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白区相生山緑地、中区護国神社、守山区竜泉寺、緑区大高町鷺津など。

【県内の分布】

豊田市内の山地各地、新城市副川諏訪神社、豊橋市石巻町石巻山など。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

巨文島（韓国）。

【生息地の環境／生態的特性】

平地性～山地性種であり低標高の比較的自然度の高い森林の落葉下での記録が多い。また、自然度の高い緑地公園、寺社林や河畔林のリター層や腐葉土層にも生息している。比較乾燥に弱く、湿度のある環境を好むようである。極めて局所的に大量発生することがあるが、一時的であることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発などによる自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような環境が多く、本種が生息できないと考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ444-14、登録標本の採集地: 名古屋市天白区相生山緑地、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.

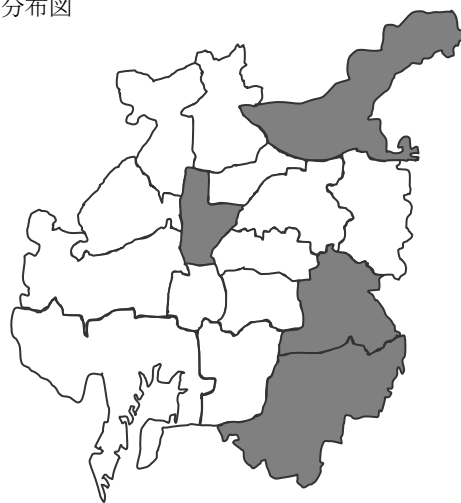
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.



ウメムラシタラ

天白区相生山緑地、2014年5月24日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

ヒラベッコウガイ *Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	情報不足
環境省2014	情報不足

【選定理由】

山麓～平地に生息する種であり、例えば、愛知県豊田市(川瀬, 2012)や岐阜県岐阜市(川瀬ほか, 2012)などでは市内各地に分布するものの各地の個体数は極めて少なく、稀にしか見つからない。そのため分布情報も少なく、環境省や愛知県では情報不足にランクされている。名古屋市内では2012年に大規模な一斉調査が行われたが(川瀬, 2013a,b)、本種の発見には至らず、2013年に守山区吉根の荒地(庄内川左岸)で新鮮な死殻1個体のみが発見された。

【形態】

殻はやや小形で、殻高5mm、殻径10mm程度。半透明、淡い黄褐色で光沢が強い。螺塔は低く扁平で、わずかに緩やかに突出する。各層は緩やかに広がり、体層は著しく広くなり、その幅は次体層の倍である。周縁は円い。殻表は滑らかで、繊細な成長線と細密な螺線によって彫刻されている。殻口はわずかに斜位で広い新月形、その周縁は鋭く尖る。殻軸は前方へ広がる。臍孔は狭く、その幅は殻径の1/10ぐらいである。

【分布の概要】

【市内の分布】

2013年に守山区吉根の荒地(庄内川左岸)で新鮮な死殻を1個体のみ確認した。

【県内の分布】

長久手町、瀬戸市、豊田市、新城市など。

【国内の分布】

本州、四国、九州とその属島。

【生息地の環境／生態的特性】

落葉樹林などの比較的自然度の高い雑木林に生息している。ある程度の湿度を保ったリター層や朽ち木の中からも発見され、乾燥にはあまり強くない。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような劣悪な環境が増加している。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。景観に重視した倒木や朽ち木の撤去を避け自然の状態を維持することが重要である。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.

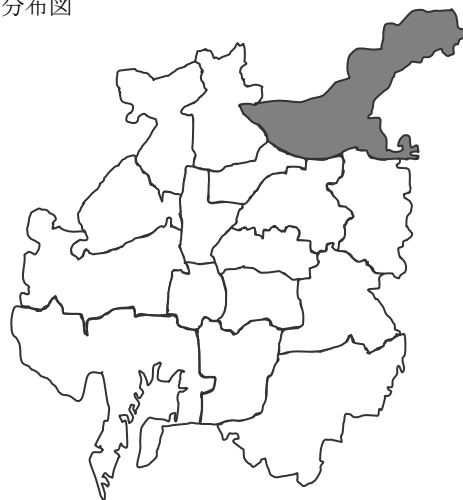
(執筆者 川瀬基弘)



ヒラベッコウ

豊田市大滝町、2011年10月10日、西尾和久 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

コベソマイマイ *Satsuma myomphala* (Martens, 1865)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は山麓から平地に生息し、国内の分布域では南の方が小型化する傾向があり多産する地域もあるが、東海地域では比較的個体数が少なく希少な種である。愛知県では稀にしか見つからず、例えば豊田市では生息地は極めて限局的であり（川瀬, 2012）、個体数も非常に少ない。今回の調査では名古屋市守山区吉根の雑木林で、生貝を発見したが個体数は非常に少なかった（川瀬・村瀬, 2014）。

【形態】

殻は大形でやや薄く、殻高 30mm~35mm、殻径 40~50mm。螺塔は低く、淡い黄褐~赤褐色。周縁に赤褐色の色帯がある。縫合は浅い。殻口は斜位でやや広い半円形。外唇はうすくわずかに反転する。臍孔は閉じる。軟体の背面はアメ色。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区吉根の荒地（庄内川左岸）。

【県内の分布】

野々部ほか（1984）によれば、県下では豊田地方に稀産と記されている。近年、豊田市小原地区四季桜公園や石野地区東広瀬町で生貝を確認している（川瀬ほか, 2012）。

【国内の分布】

本州（中部以西）、四国、九州。山口県見島（鯖島）には矮小型が分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

山麓から平地に生息し、個体数は非常に少ないが、豊田市や岐阜市では河畔林の雑木林で発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000 年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ438-14、登録標本の採集地: 名古屋市守山区吉根、DNA 分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
 川瀬基弘・村瀬文好, 2014. 名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ. かきつばた, (39):51.
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, (16):11-26.
 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚 (編). 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

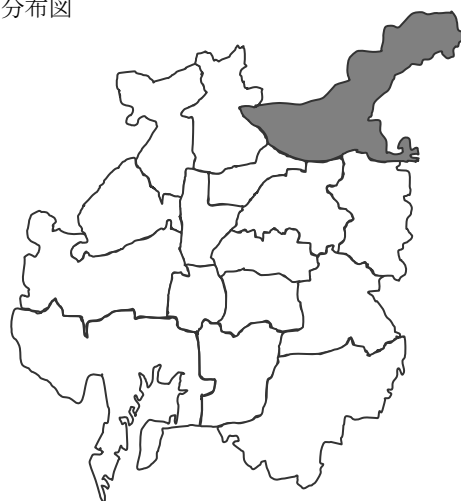
【関連文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.



コベソマイマイ
守山区吉根、2014 年 1 月 23 日、村瀬文好 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ナンバンマイマイ科>

ニッポンマイマイ *Satsuma japonica* (Pfeiffer, 1847)**【選定理由】**

本州各地の山地から平地の雑木林や周辺の草むらなどに生息するが、名古屋市内の分布は極めて限られており、発見された2ヶ所ともに生息個体数はとても少なかった。本種が生息する守山区(川瀬, 2013)の環境が破壊されれば市内から絶滅する可能性もある。

【形態】

殻は薄く半透明で黄褐色～濃褐色の山形に尖った円錐形。カドバリニッポンマイマイ、ヌノメニッポンマイマイ、マルニッポマイマイ、コニッポンマイマイなど亜種または型に分けられる。雑木林周辺の草むらなどで見られる。守山区で発見された個体は、ある程度周縁角が発達するカドバリニッポンマイマイ型 *Satsuma japonica carinata* の個体であった。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区上志段味東谷山(瀬戸市との境界付近の雑木林)と守山区竜泉寺1丁目付近(庄内川左岸の雑木林)。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

本州に広く分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

守山区上志段味東谷山(瀬戸市との境界付近の雑木林)と守山区竜泉寺1丁目付近(庄内川左岸の雑木林)の2ヶ所のみで発見されている。いずれも雑木林であり、倒木や朽ち木を起こして発見された。

【現在の生息状況／減少の要因】

守山区の志段味地区や吉根地区は、都市基盤の整備が遅く農地と山林が広がっていたが、2000年頃から宅地化が急速に進み自然が激減した。これにより生息環境が破壊されたか、もしくは消失した。

【保全上の留意点】

現在本種が生息している環境を改変しないように保全することが大切である。

【特記事項】

Barcode of Life Data Systems (BOLD) 登録番号: GBJ436-14、採集地: 守山区竜泉寺、DNA分析: 名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013. 名古屋市内でニッポンマイマイを発見。生きものシンフォニー7号。なごや生物多様性センター, 名古屋。

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物。豊田市史研究, (3):57-80。

川瀬基弘, 2014. 新都市の軟体動物。加藤貞亨ほか(編), 新都市の自然誌—昆虫・動物編一, pp.1-24. 新都市立鳳来寺山自然科学博物館。

川瀬基弘, 2014. 11 貝類。岐阜市の自然情報～岐阜市自然環境基礎調査～, pp. 197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課。

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類。豊橋市自然史博研報, (21):31-43。

川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市内に生息する陸産貝類。瀬木学園紀要, (7):12-17。

カテゴリー

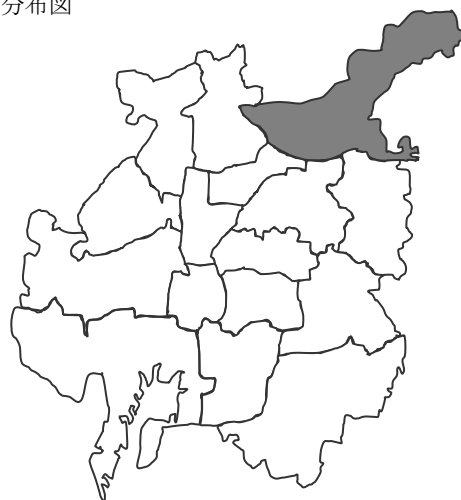
名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ニッポンマイマイ

守山区上志段味東谷山、2013年1月9日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <柄眼（マイマイ）目 オナジマイマイ科>

オオケマイマイ *Aegista vulgivaga* (Schmacker et Boettger, 1890)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は山地性種であり（川瀬ほか，2012）、溪流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯に多く生息する。名古屋市内では、本種が生息できる自然度の高い雑木林は少なく、生息地、個体数ともに減少している。市中区三の丸一丁目の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭い。また、2013年には瑞穂区村上町の民家の庭でも本種の生体が発見されており、絶滅を免れた個体が飛び地的に生き残っていると考えられる。

【形態】

殻高 11～15mm、殻径 20～30mm 程度。殻は低く扁平なレンズ形をした螺塔。殻色は黄褐色から鈍い褐色。周縁角は鋭くとがり、殻表に鱗片状の剛毛を放射状にもち、臍孔は広く深い。殻口は菱形。その上縁は薄く、下縁は厚く白色で光沢がある。軟体は淡褐色である。

【分布の概要】

【市内の分布】

名古屋城外堀（中区）、護国神社（中区）、瑞穂区村上町、守山区竜泉寺。

【県内の分布】

豊田市、新城市、田原市、岡崎市、豊橋市、豊川市など県内各地に広く分布する。

【国内の分布】

本州（関東、越後、佐渡以南）、中部、近畿、中国、四国地方。

【生息地の環境／生態的特性】

本種が好む溪流沿いの緩やかな斜面や石灰岩地帯は名古屋市内に存在しないが、やや自然度の高い雑木林（名古屋城外堀や守山区竜泉寺）に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

中区三の丸の護国神社と守山区の庄内川河畔林にはある程度の個体群が維持されているが、分布域は狭く限られており、本種が生息できるような湿度の保たれた自然度の高い雑木林は名古屋市内にはあまり残されていない。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【特記事項】

愛知県下では本種が棲息する好環境が各地に残されており生息場所、個体数ともに多いが、都市化が進んだ名古屋市内ではこのような好環境が激減した。

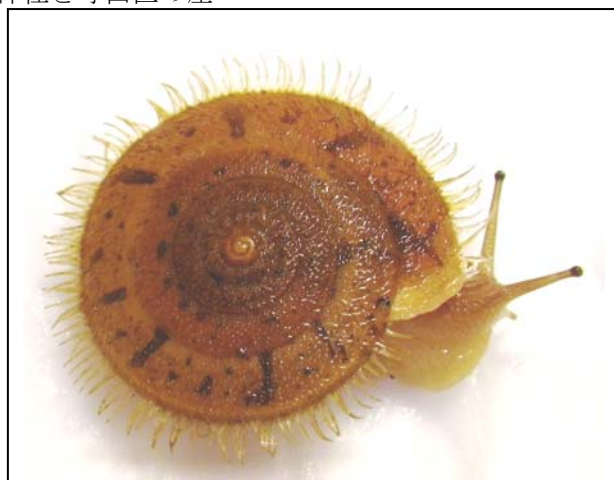
【引用文献】

川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則，2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要，(6):19-36.

【関連文献】

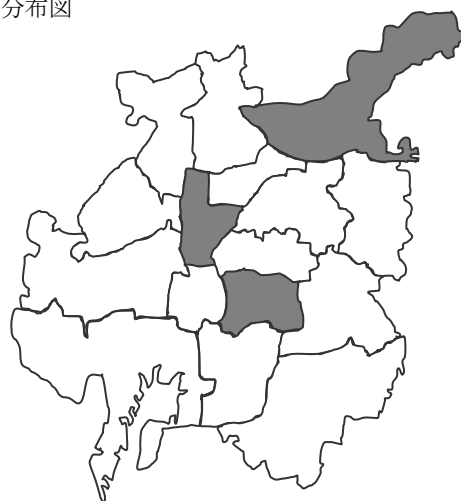
川瀬基弘，2012. 自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見. 生きものシンフォニー5号. なごや生物多様性センター，名古屋.
川瀬基弘，2013. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書（平成24年度環境省生物多様性保全推進支援事業），pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会.
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好，2013. 名古屋市内に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要，(7):12-17.

(執筆者 川瀬基弘)



オオケマイマイ
中区護国神社、2012年10月6日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



貝類 <イガイ目 ハボウキガイ科>

タイラギ *Atrina pictinata* (Linnaeus, 1767)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底に突き刺さるように深く埋没し、後端だけを出して生息する。愛知県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の渥美湾で海水浴客が誤って踏んで足をけがするほど多産した（愛知県科学教育センター，1967）。しかし、近年三河湾奥部では死殻すら採集できない。三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺では現在も漁業対象種となっているが、その量は年々減少している。和田ほか（1996）では危険にランクされている。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝と死殻が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長25cmを越える大型種。長い三角形の殻で、黒褐色。殻はやや厚いが脆い。貝殻中央部の貝柱は大きく美味で「たいらがい」の通称で呼ばれる水産有用種である。本種はいわゆるタイラギの有鱗型で、無鱗型のズベタイラギに比べ鱗片状突起が顕著である。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2～5mの泥底から生貝が1個体、死殻が少数採集された。

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾知多半島南部周辺の潮下帯。西條ほか（2008）によるセントレア周辺海域の調査では、継続調査時に2010年の潜水調査で本種の生貝を確認した。

【国内の分布】

本州～九州。

【世界の分布】

中国大陸沿岸の類似種との関係は不明で、分布範囲も未解明である（山下・木村，2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているので、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

水産資源保護協会（1997）では減少にランクされている。

【引用文献】

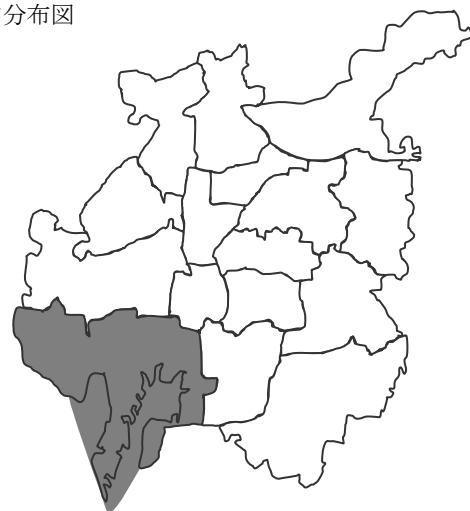
- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.
 水産資源保護協会，1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料（IV），126pp.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京。
 山下博由・木村昭一，2012. タイラギ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.114. 東海大学出版会，秦野。



タイラギ

長崎県島原市、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ツキガイ科>

ツキガイモドキ *Lucinoma annulatum* (Reeve, 1850)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されるが、個体数は少ない(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。市内では、2008、2009年に名古屋港沖合で生貝が少数採集されている。今回は潮下帯の調査を行っていないので、レッドデータブックなごや2010の評価区分に従った。

【形態】

殻長約30mmで殻は類円形で膨らみは弱い。殻表は間隔の広い板状の輪肋がある。殻は白色であるが、生時や新鮮な死殻には茶褐色の殻皮がある。殻頂は小さく低い。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深2～15mの泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。

【県内の分布】

上述したように、生息場所、生息数が減少している。2003年の潜水調査でセントレア周辺海域から生貝1個体を採集した。

【国内の分布】

日本海、南西北海道以西。

【世界の分布】

アラスカ、カリフォルニア。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、イセシラガイなどと共に本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。

【引用文献】

- 川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26):18-20.
 中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.

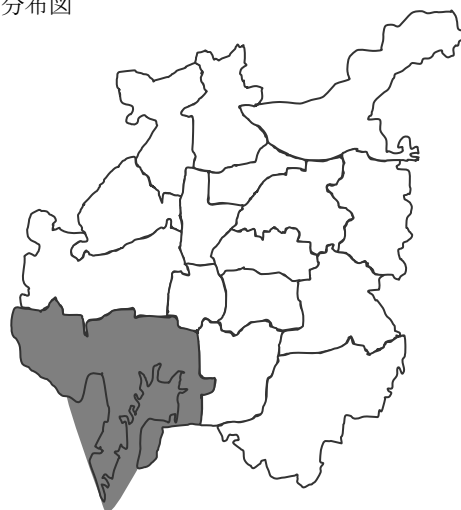
【関連文献】

- 奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
 西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫, 2008. 中部国際空港島建設による水質, 底質, 底生生物群集の劣化. 海の研究, 17(4):281-295.



ツキガイモドキ
産地不詳、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ヒメシラトリ *Macoma incongrua* (Martens, 1865)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の奥部の泥干潟から潮下帯に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では庄内川河口から名古屋港沖合まで生息しているが、生息数が少なく、絶滅が危惧される。

【形態】

殻長約2cmで殻は卵形でこの類としては膨らみがやや強い。殻はやや薄く白色、殻頂部が紅彩される個体が多い。殻表には薄い殻皮をもつ。後端は裁断状。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、新川河口域、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。また、2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2～6mの砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。

【県内の分布】

汐川、東幡豆、三河一色、神野新田、河和、師崎、矢作川など。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界及び国内の分布】

サハリン、アラスカ、カナダ。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯から潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

【参考文献】

- 藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
 川瀬基弘，2013．愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～．瀬木学園紀要，(7):38-48.
 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.

【関連文献】

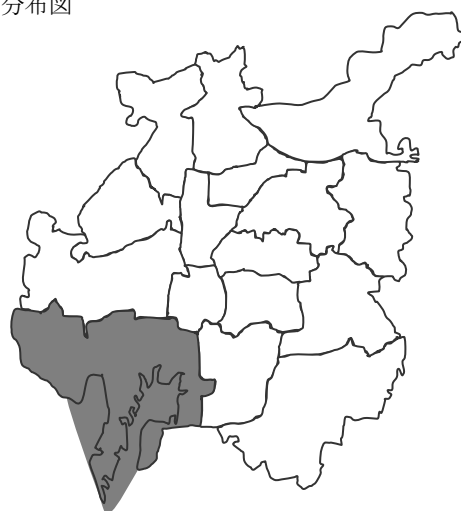
- 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.
 川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生生物相．矢作川研究，(6):81-98.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



ヒメシラトリ

庄内川河口、2008年3月24日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ゴイサギガイ *Macoma tokyoensis* Makiyama, 1927

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集され、健全な個体群が残されているが（中山，1980；木村，1996；木村，2000）、名古屋港沖合では死殻は多いが生貝の個体数は少なく、絶滅が危惧される。

【形態】

殻長約5cmで、殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で成長脈に沿って色彩の濃淡がある。殻周辺部の殻表にはやや厚い殻皮を持つ。後背縁は張り出して後端は少しとがる。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008、2009年のドレッジおよび潜水調査で名古屋港沖合の水深10～15mの泥底から生貝が少数個体、死殻が多数採集された。

【県内の分布】

上述のほか、2011年にセントレア周辺海域で生貝を確認した。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統（蜂矢・田中，1998）、名古屋港浚渫地の半化石（河合・千葉，1996）や愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群（川瀬，2013）からは、本種の化石記録がある。

【引用文献】

蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友，(45):20-25.
河合秀高・千葉正己，1996. 名古屋港13号地浚渫地より産出した貝類化石（1）二枚貝・角貝. 化石の友，(43):21-25.
川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.

【関連文献】

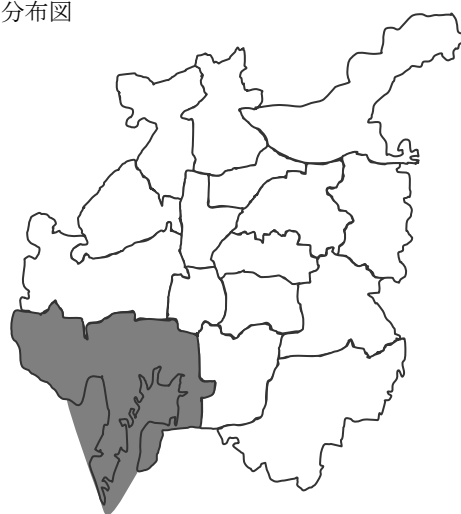
奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.
西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質、底質、底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.

（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



ゴイサギガイ
産地不詳、市原 俊 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

ユウシオガイ *Moerella rutila* (Dunker, 1860)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の最も奥部の砂泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、蒲郡市などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。市内では2013年に庄内川河口干潟で少数の生貝を発見した。

【形態】

殻長 15～20mm で殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色、黄色、橙色など個体変異がある。後端は裁断状。トガリュウシオガイに似るが殻頂の成長脈が弱く密であることで区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟（川瀬ほか，2009）や庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

汐川干潟、豊川河口域、三河一色、東幡豆（早瀬ほか，2011）、蒲郡市。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界及び国内の分布】

朝鮮半島、中国大陸、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.

早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.

松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

木村昭一，2012. ユウシオガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.126. 東海大学出版会，秦野.

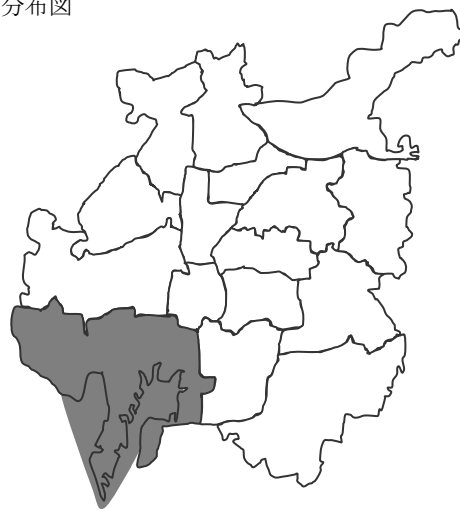
鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



ユウシオガイ

庄内川河口、2008年12月11日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 ニッコウガイ科>

サクラガイ *Nitidotellina hokkaidoensis* (Habe, 1961)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯に棲む貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部から湾口部にかけての広い範囲で打ち上げられる貝としてごく普通で、また多産したが（愛知県科学教育センター，1967）、現在では打ち上げられる海岸も激減し、明らかに生息場所、生息数とも減少している。近年でも三河湾湾口部の一部では健全な個体群が残っているが、そのような場所は少ない（木村，1996；木村，2000）。市内では2008年に名古屋港沖で生貝が少数採集されたが、2013年の港区の干潟調査では本種を発見することができなかった。

【形態】

殻長約2cmで殻は長い卵形で膨らみは非常に弱く扁平。殻は薄く桃色で殻表は平滑で光沢がある。稀に白色個体が出現する。

【分布の概要】

【市内の分布】

2008年のドレッジ調査で名古屋港沖合の水深2～6mの砂泥底から生貝が少数、新鮮な死殻が多数採集された。

【県内の分布】

東幡豆、寺部（早瀬ほか，2011）。2002～07年にかけての中部国際空港セントレア東の水深4m付近の潜水調査では、生貝が多数発見されている。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸、ニューカレドニア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬，2013）。

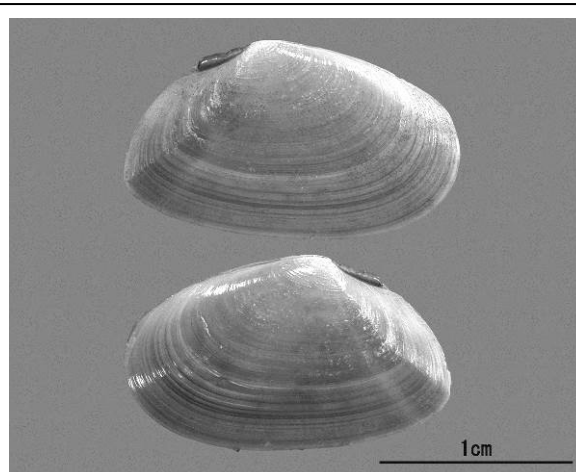
【引用文献】

- 愛知県教育センター，1967. 愛知の動物，222pp. 愛知県科学教育センター，名古屋。
 早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.
 川瀬基弘，2013. 愛知県渥美層群の貝類化石（速報）～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要，(7):38-48.
 木村昭一，1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究集報，(35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一，2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類（予報）. かきつばた，(26):18-20.

【関連文献】

- 木村昭一，2012. サクラガイ. 日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.126. 東海大学出版会，秦野。
 西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫，2008. 中部国際空港島建設による水質，底質，底生生物群集の劣化. 海の研究，17(4):281-295.

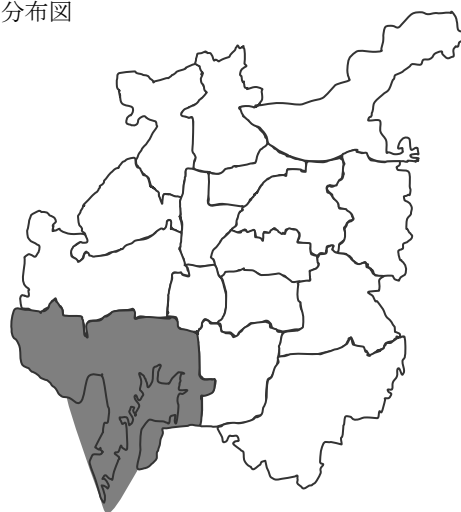
（執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘）



サクラガイ

名古屋港沖水深6m、2008年10月9日、木村昭一 撮影

市内分布図



貝類 <マルスダレガイ目 シオサザナミガイ科>

イソシジミ *Nuttallia japonica* (Reeve, 1857)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

潮間帯から水深 10m の砂泥底に生息し、愛知県下では比較的多産する地域もある。名古屋市の藤前干潟では死殻が多数打ち上がっていることがあるが、生貝は稀にしか見つからない。藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟で生貝を確認したが、いずれも個体数は少なかった。底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

【形態】

殻長約 43mm、殻高約 30mm。殻は薄く、卵形で膨らみは弱い。殻表は平滑で殻皮を被る。左殻が右殻より膨らみ、右殻は偏平。套線湾入はやや深く、やや尖る。殻頂付近には数本の放射状の白帯がある。内面は紫色。

【分布の概要】

【市内の分布】

新川河口、庄内川河口、藤前干潟の砂泥底の深さ 50cm 程度に棲息(川瀬ほか, 2009)。

【県内の分布】

神野新田、東幡豆、三河一色、矢作川河口、汐川干潟、伊良湖岬、美浜町、日間賀島など県内各地。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮半島、中国大陸沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

潮間帯～水深 10m ほどの砂泥底に潜って棲息する。水管を伸ばして水中の懸濁物を捕食する濾過摂食者。藤前干潟では砂泥底の深さ 50cm 程度に潜っている。矢作川河口域では、アサリの棲息帯より深い砂底に潜っており、30～50cm まで砂泥を掘ると比較的沢山の生貝を見つけることが出来た。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすい。干潟自体の減少、水質や底質の汚濁が個体数の減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

干潟環境の保全。水質や底質の汚濁防止。

【引用文献】

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.

【関連文献】

川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦, 2009. 干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去. 第 8 回 海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム 発表論文集, pp.67-72. 海底環境研究会, 静岡.

早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.

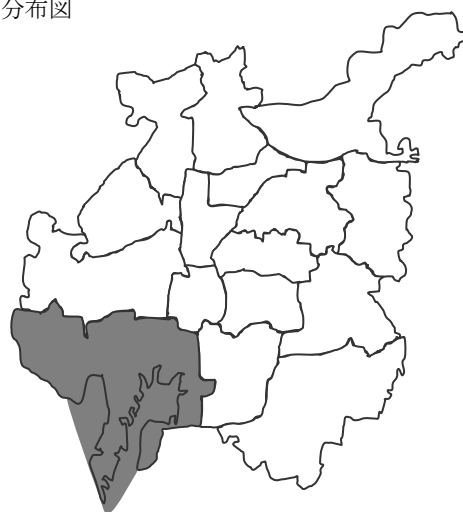
八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子, 2014. 藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去—潮溜まり・底泥間隙水・二枚貝中心として—. 陸の水, (64):1-9.



イソシジミ

新川河口干潟、2004年6月5日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マテガイ科>

マテガイ *Solen (Solen) gordonis* Yokoyama, 1920**【選定理由】**

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息し、名古屋市を除く愛知県下では各地で比較的普通に見られる。名古屋市の藤前干潟では極めて稀に生貝が発見されるが、死殻もほとんど見かけない。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

【形態】

殻は薄質、細長い円筒形。殻頂は前端近くにあり、背腹縁は平行。前端はやや斜め裁断状、後端は直角に裁断状。殻の前後端は紡錘形に広く開口。殻表は平滑。前筋痕、後筋痕ともに細長い。套線は腹縁から離れる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

港区藤前干潟の砂泥底で極めて稀に見つかることがある（川瀬ほか, 2009）。

【県内の分布】

六条干潟、美浜町、セントレア周辺海域、三河一色、東幡豆、矢作川河口など県内各地に棲息する。

【国内の分布】

北海道南西部～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

潮間帯の砂底にやや深く潜って生息する。干潮時に本種の巣穴に食塩をふりかけると、巣穴から飛び出す性質をもつ。

【現在の生息状況／減少の要因】

藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。なお、藤前干潟の底質は砂質部分が少なく泥質が優占するため、砂質を好む本種は生息しにくいと考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により本種の個体数は確実に減少していると判断した。

【保全上の留意点】

水質や底質の汚濁防止や砂粒子の流出防止。

【特記事項】

愛知県各地の潮間帯に生息しているが、近年個体数が減少している地域が目立つ。

【引用文献】

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

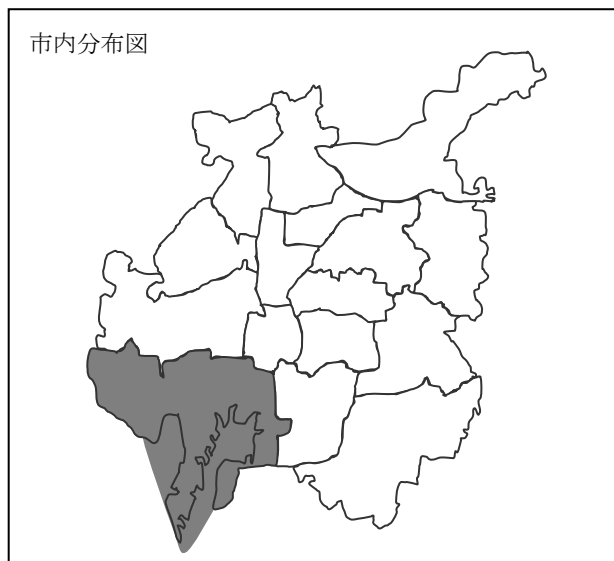
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
川瀬基弘, 2006. 矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類. 矢作川研究, (10):75-84.
奥谷喬司 (編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
山本茂雄 (編), 2007. 海のふれ健康診断報告書, 90pp. 伊勢・三河湾流域ネットワーク山川里海 22 海の健康診断手法開発チーム, 名古屋.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外



市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 フナガタガイ科>

ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum* (Reeve, 1843)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	国リスト
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

津軽以南の河口の汽水域にかなり普通に生息し、また比較的汚染にも強い貝であったが、大都市近郊の河川の河口では水の汚濁のためにほとんど絶滅している（和田ほか，1996）。また、外来種のコウロエンカワヒバリガイの急増に反比例して本種が減少する事例がある（福田・福田，1995）。名古屋市港区藤前干潟では、水質汚濁に加えてコウロエンカワヒバリガイが増え本種の生態的地位が失われつつある。

【形態】

殻は中型で、殻長40mm前後、厚質でやや堅固。長楕円形で膨らみはやや弱い。後端は裁断状。殻表は平滑、背縁部で成長線がやや立ち上がって粗くなる。主歯は横に倒れて2本、離れて弱い後側歯がある。前後の筋痕はほぼ円形。套線は湾入しない。

【分布の概要】

【市内の分布】

新川河口、庄内川河口、藤前干潟のカキ礁で確認した（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

矢作川河口（鳥居ほか，2012）など県内各地に生息し、カキ礁を構成する。

【国内の分布】

津軽半島以南。

【世界の分布】

台湾、中国大陸南岸。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟や庄内川河口域の底泥は強熱減量の値が高く、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすい。水質や底質の汚濁も目立つ。

本種は、転石裏側やカキ礁中に足糸で付着して棲息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

新川・庄内川河口、藤前干潟では個体数が少なく（川瀬ほか，2009）、外来種のコウロエンカワヒバリガイが転石やカキ礁に多数付着し、本種の生態的地位が奪われている。

【保全上の留意点】

コウロエンカワヒバリガイの増加や水質汚濁を防止する。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある（川瀬ほか，2015）。

【引用文献】

- 福田 宏・福田敏一，1995. 阿知須干拓にコウロエンカワヒバリガイ出現. 山口の自然，(55):16-20.
 川瀬基弘・市原 俊・河合秀高，2015. 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告，(41): 51-131.
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物，3:9-49. 西三河野生生物研究会.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京.

【関連文献】

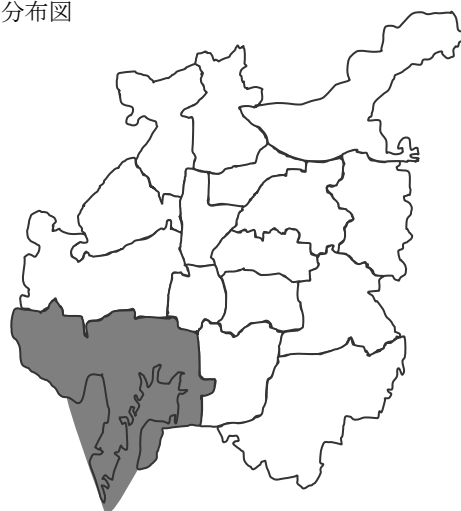
奥谷喬司（編），2000. 日本近海産貝類図鑑，1173pp. 東海大学出版会，秦野.



ウネナシトマヤガイ

藤前干潟、2007年7月22日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 川瀬基弘)

貝類 <マルスダレガイ目 マルスダレガイ科>

オキシジミ *Cyclina sinensis* (Gmelin, 1791)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

潮間帯から水深 20m の砂泥底に生息し、愛知県下では比較的多産する地域もある。藤前干潟、庄内川・新川河口干潟で生貝を確認したが、消長が著しく、2002～03 年や 2006～07 年は個体数が激減していた（川瀬ほか，2009）。底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。水質や底質の汚濁、干潟自体の減少により個体数は減少していると判断した。

【形態】

殻長約 45mm。殻はやや厚質、類円形、よく膨らむ。殻表は細かい成長脈が不規則にあり、低く不明瞭な放射肋があり、両者が交わり布目状。小月面を欠く。鉸板は厚く広い。3 主歯があり、側歯はない。套線は三角形状に深く湾入。腹縁内面は細かく刻まれる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟（川瀬ほか，2009）。

【県内の分布】

前芝、矢作川河口、汐川干潟、三河一色など県内各地。

【国内の分布】

陸奥湾～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸南岸。

【生息地の環境／生態的特性】

藤前干潟、庄内川河口干潟、新川河口干潟では、泥質が少なく砂質の優占する底質に 10cm 程度潜っている。

【現在の生息状況／減少の要因】

年による消長が著しく、激減する年が何度か確認されているため、継続調査が必要である。水質や底質の汚濁が減少要因の一つと考えられる。

【保全上の留意点】

水質や底質の汚濁を防止する。

【特記事項】

名古屋市南区鶴里周辺の完新統に本種の化石記録がある（蜂矢・田中，1998）。

【引用文献】

- 蜂矢喜一郎・田中利雄，1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石。化石の友，(45):20-25。
 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類。豊橋市自然史博研報，(19):11-20。
 Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

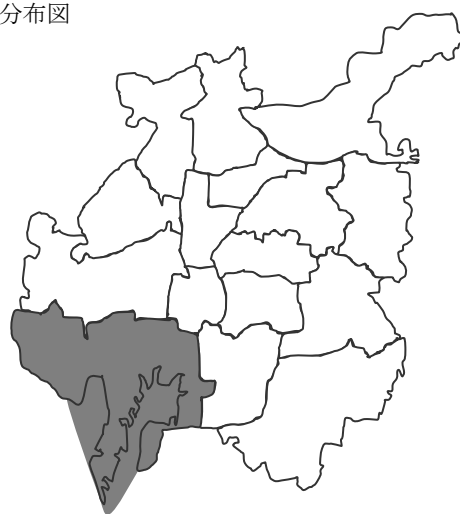
- 川瀬基弘，2002. 矢作川河口域における干潟の底生生物相。矢作川研究，(6):81-98。
 川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦，2009. 干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去。第 8 回 海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム 発表論文集，pp.67-72. 海底環境研究会，静岡。
 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録。三河生物，3:9-49. 西三河野生生物研究会。
 八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子，2014. 藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去－潮溜まり・底泥間隙水・二枚貝中心として－。陸の水，(64):1-9。



オキシジミ

港区藤前干潟、2007 年 4 月 21 日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 川瀬基弘)

貝類 <オオノガイ目 オオノガイ科>

オオノガイ *Mya (Arenoma) oonogai* Makiyama, 1935

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

本種は内湾奥部の泥干潟に深く潜って生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、一色干潟などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では藤前干潟や庄内川河口に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。藤前干潟の底泥は強熱減量の値が高く（Umemura and Yagi, 2006）、潮流が停滞するときは貧酸素状態が形成されやすく、抵抗力の低い種は生息が困難と考えられる。

【形態】

殻は大型で殻長約 10cm、長い卵形で、後端は細くなり開く。殻色は白色から灰褐色で、生きている時は褐色の殻皮を被る。内面は白色。殻質は薄質でもろい。水管は太く長いのでこの部分が食用になる。

【分布の概要】

【市内の分布】

藤前干潟、新川河口干潟、庄内川河口域の泥質干潟より少数ながら生きた個体が採集された。

【県内の分布】

汐川干潟、東幡豆、矢作川、一色干潟などの三河湾奥部。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国大陸。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋立をこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.

Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.

【関連文献】

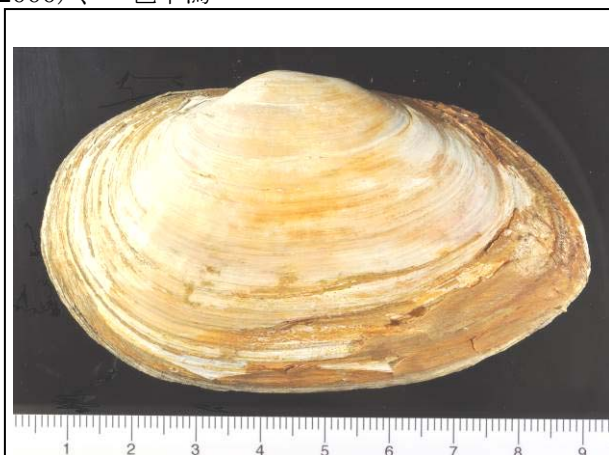
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士，2011．愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相．東海大学海洋研究所研究報告，(32):11-33.

川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生動物相．矢作川研究，(6):81-98.

川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19):11-20.

木村昭一・山下博由，2012．オオノガイ．日本ベントス学会（編），干潟の絶滅危惧動物図鑑，p.167．東海大学出版会，秦野．

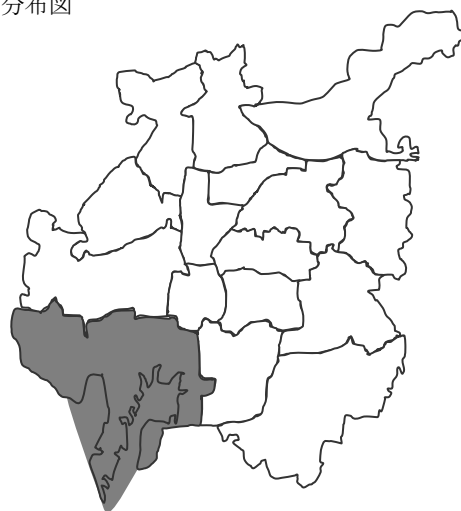
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典，2013．干潟生物調査ガイドブック～全国版（南西諸島を除く）～，269pp．日本国際湿地保全連合，東京．



オオノガイ

北海道根室市、1990 年 8 月、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <ウミタケガイモドキ目 オキナガイ科>

ソトオリガイ *Laternula marilina* (Reeve, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は内湾の河口域や奥部の泥干潟に生息する。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は現在でも汐川干潟（藤岡・木村，2000）、豊川河口域（松岡ほか，1999）、矢作川河口域（鳥居ほか，2012）などの三河湾奥部に健全な個体群が残っている。名古屋市内では庄内川河口域に生息しているが、生息数が少なく絶滅が危惧される。一方、藤前干潟では比較的多産する（川瀬ほか，2009）。和田ほか（1996）では、危険とランクされている。

【形態】

殻長 45mm、殻は長楕円形で膨らみは強い。左殻が右殻より少し大きく、前後端は開く。殻は非常に薄く、白色半透明。内面には真珠光沢がある。弾帯受けの前に殻帯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口域の泥質干潟より生きた個体が採集されたが、個体数は少ない。藤前干潟の泥質部分では個体数が多く、強熱減量が高い値を示す泥底にも生息する。

【県内の分布】

汐川干潟、豊川河口、矢作川河口、三河一色など。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

中国、東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 藤岡えり子・木村妙子，2000．三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相．豊橋市自然史博物館研究報告，(10):31-39.
- 川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊，2009．愛知県藤前干潟に生息する貝類．豊橋市自然史博研報，(19):11-20.
- 松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己，1999．豊川下流域の貝類相．豊橋市自然史博物館研究報告，(9):15-24.
- 鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘，2012．矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録．三河生物，3:9-49．西三河野生生物研究会．
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996．日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状．WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会，東京．

【関連文献】

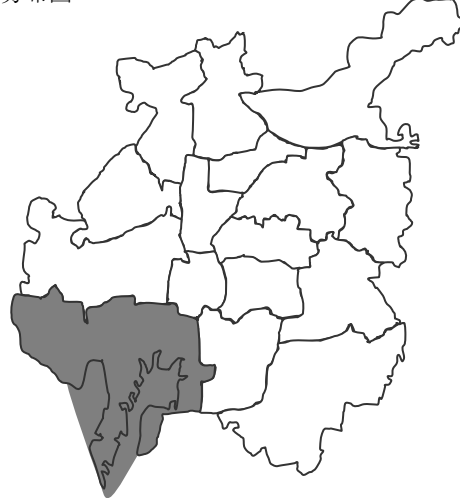
- 川瀬基弘，2002．矢作川河口域における干潟の底生動物相．矢作川研究，(6):81-98.
- 鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生，2006．伊勢湾・三河湾における 1960 年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化．名古屋大学博物館報告，(22):31-64.



ソトオリガイ

藤前干潟、2004 年 8 月 3 日、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆者 木村昭一，加筆 川瀬基弘)

貝類 <盤足(ニナ)目 シロネズミガイ科>

ヒナツボ *Berthais egregia* (A. Adams, 1863)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は瀬戸内海を模式産地とし、和歌山県から九州の内湾域の潮下帯に生息することが知られているが、ほとんど生貝が採集された記録がなく(和田ほか, 1996)、河合(2009)が金城ふ頭造成時にサンドポンプで得られた新鮮な死殻の採集を報告するまで、愛知県からの産出の記録自体がなかった。小型種かつ希少種であるため、本種の情報が少なく、今回は情報不足と評価された。和田ほか(1996)では、希少とランクされている。

【形態】

殻高約 5mm で、貝殻は白色で細長い紡錘型。縫合部で強くくびれ、各層は肩部がやや角張る。殻表には肩部で湾曲する細長い縦肋と微細な螺肋がある。臍孔は閉じる。

【分布の概要】

【市内の分布】

金城ふ頭造成時に周辺水域よりサンドポンプで新鮮な死殻が1個体のみ採集された。

【県内の分布】

上記のとおり、金城ふ頭周辺水域のサンドポンプで得られた新鮮な死殻が1個体以外に生貝の記録はない。化石記録については【特記事項】を参照。

【国内の分布】

和歌山県田辺湾、佐賀県伊万里湾、熊本県天草富岡など、伊豆半島～九州西岸の潮下帯(水深10～50m)。

【世界の分布】

記録なし。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

情報不足である。

【特記事項】

愛知県田原市高松の中部更新統渥美層群からは、本種の化石記録がある(川瀬, 2013)。渥美層群豊橋層高松シルト質砂岩部層の *Tonna* Bed ヤツシロガイ層から50個体ほど発見されているが、全種の産出個体数から判断すると極めて稀産であり、当時から生息個体数は少なかった可能性がある。

河合(2009)では、本種と共に、タクミニナ、ツキガイモドキ、ウラカガミ、ハナグモリが記録されている。

【引用文献】

河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝。かきつばた, (34):20.

川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石(速報)～鶴飼修司コレクションの貝類化石～. 瀬木学園紀要, (7):38-48.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.

【関連文献】

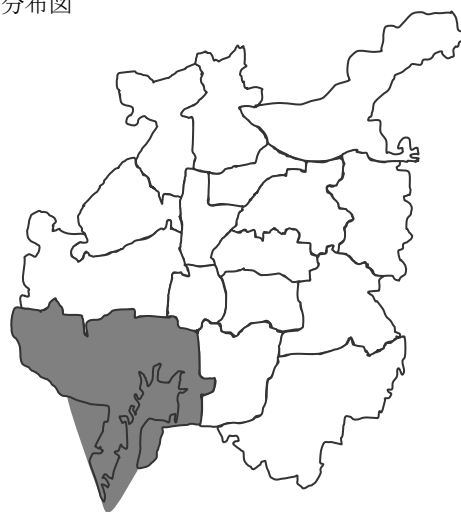
奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp, 東海大学出版会, 東京.



ヒナツボ

中部更新統渥美層群産の化石、市原 俊 撮影

市内分布図



(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)

貝類 <柄眼(マイマイ)目 ミジンマイマイ科>

ミジンマイマイ *Vallonia pulchellura* (Heude, 1822)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州、四国、九州の平野部から海岸の比較的自然度の高い自然林に分布するが生息地は限定されている。千葉県から四国、九州の6県では平野部や離島の海岸林の改変によって、生息地が狭められており、絶滅危惧Ⅰ類から準絶滅危惧種に選定されている。愛知県内からは早瀬・木村(2011)で記録されるまで、生息記録はなかった(野々部ほか, 1984)。愛知県内で本種と同所的に生息していた種はコハクガイやチャコウラナメクジなど外来移入種であった(早瀬・木村, 2011)。愛知県内の個体群は、移入個体群の可能性もある。その後の調査で名古屋市各地から発見されている(川瀬, 2013a, b)。

【形態】

殻高約1mm、殻径約2mmの平巻き状。殻は白～淡橙色の半透明で細かい縦肋が密にある。殻口は肥厚し反転する。臍孔は広い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

本ヶ崎公園周辺(東区)、高座結御子神社(熱田区)、相生山緑地(天白区)、山崎川(瑞穂区)、熱田神宮公園(熱田区)、横井山緑地(中村区)、名城公園(北区)、戸田川緑地(港区)、金城ふ頭中央緑地(港区)など。

【県内の分布】

上記のほか、豊田市高橋地区扶桑町。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

アジア、ヨーロッパに近似種が分布するが分類学的検討が十分に行われていない。

【生息地の環境／生態的特性】

“【選定理由】”の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

“【選定理由】”の項参照。

【保全上の留意点】

情報不足である。

【特記事項】

市内での分布情報が増え、国内移入種の可能性が高くなったが(川瀬, 2013a, b)、アジア、ヨーロッパに分布する近似種との分類学的検討が十分に行われていないため、今回は引き続き情報不足に位置づけた。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ(新称)について. ちりばたん, 41(2):48-59.
- 川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29pp. なごや生物多様性保全活動協議会.
- 川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成24年度 環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213, なごや生物多様性保全活動協議会.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋市.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.
- 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.
- 川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.

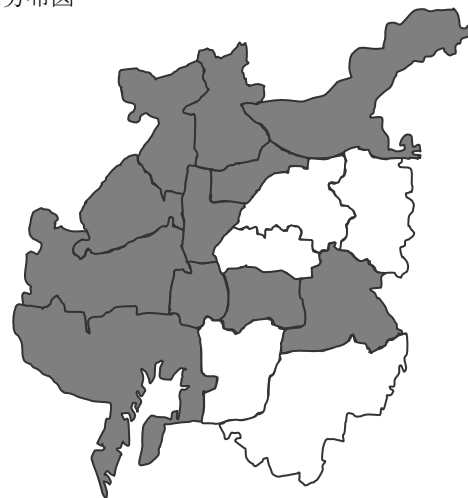
(執筆 木村昭一, 加筆 川瀬基弘)



ミジンマイマイ

岐阜市日置江, 2011年3月7日、川瀬基弘 撮影

市内分布図



貝類 <柄眼(マイマイ)目 ベッコウマイマイ科>

オオウエキビ *Trochochlamys fraterna* (Pilsbry, 1900)

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	国リスト
環境省2014	情報不足

【選定理由】

2012 年に行われた「なごや生きもの一斉調査」の陸貝調査では市内各地から本種が発見されたが、一部の生息地を除き生息個体数は少なかった。特に死殻1個体だけしか発見されなかった地点が多くあった(川瀬, 2013a,b)。適度な湿度を保った腐葉土やリター層が豊富な雑木林は、本種がせい生息するための好環境であるが、市内からはこのような環境が減少している。また、本種に同定される個体には複数種が含まれている可能性があるなど、分類学的に未解決部分がある。

【形態】

殻は微小で、殻高 3mm、殻径 2mm 程度。淡い黄褐色。円味のある円錐形。縫合は深く、螺層はよく膨れる。体層の周縁角は鋭い。殻底は緩やかな弧状となる。殻口はほぼ菱形、その周縁は薄く鋭い。軸唇は少し斜めに広がり、臍孔の一部を覆う。臍孔は狭く小さく開く。

【分布の概要】

【市内の分布】

木ヶ崎公園周辺(東区)、興正寺公園(昭和区)、高座結御子神社(熱田区)、相生山緑地(天白区)、城山八幡宮(千種区)、小幡緑地公園(守山区)、猪高緑地(名東区)、戸田川緑地(港区)、氷上姉子神社(緑区)、細根公園(緑区)など市内各地。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

本州～九州。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は山麓地の湿った環境下に生息する。名古屋市内の本種が発見された場所の多くは、神社や緑地公園など、適度な湿度を保った腐葉土やリター層であった。乾燥に対する抵抗性は強くない。

【現在の生息状況／減少の要因】

自然林の減少や乾燥化が減少の要因である。適度な湿度を保った腐葉土やリター層の貧弱な雑木林では生息が困難であり、市内の緑地公園や雑木林ではこのような劣悪な環境が増加している。

【保全上の留意点】

不用意な開発や雑木林の伐採を避け、植樹する際には落葉広葉樹を植えるなど、適度な湿度を保った腐葉土やリター層を維持できる環境作りに配慮する。

【引用文献】

川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ. 29 pp. なごや生物多様性保全活動協議会.
川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きもの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書(平成 24 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213, なごや生物多様性保全活動協議会.

【関連文献】

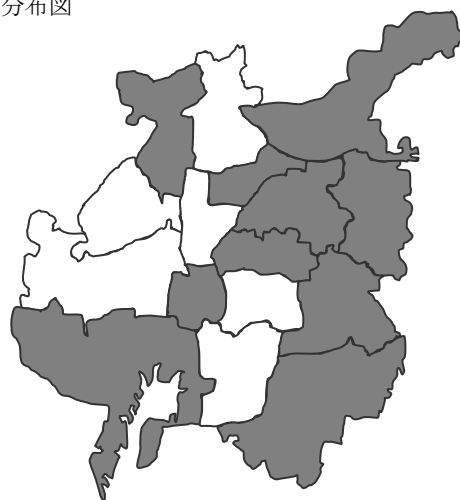
川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.
川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市に生息する陸産貝類. 瀬田学園紀要, (7):12-17.
守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況, かきつばた, (29):25-31.

(執筆者 川瀬基弘)



オオウエキビ
豊田市和合町, 2011 年 10 月 5 日、西尾和久 撮影

市内分布図



【 資 料 編 】

1. 名古屋市の自然地理の概況
2. 名古屋市版レッドリストから削除された種
3. レッドデータブックなごや2015 動物編に関するQ & A
4. 文献一覧
5. 執筆者及び協力者

1. 名古屋市の自然地理の概況

名古屋市は、本州中央部濃尾平野に位置し、市域は、東西 24.55km（東経 136°47'30"～137°3'39"）、南北 25.08km（北緯 35°2'2"～35°15'37"）で、総面積は 326.43km²である。

夏は湿度が高く、冬は伊吹おろしと呼ばれる北西の季節風が吹き、乾燥が激しい。年平均気温は 15.8℃（昭和 56 年～平成 22 年の 30 年間の平均値）で、過去における最高気温は 39.9℃（昭和 17 年）、最低気温は 10.3℃（昭和 2 年）である。降水量は 1,535.3mm（昭和 56 年～平成 22 年の 30 年間の平均値）である（気象庁 HP より）。

市域の地形については、この周辺では様々な地殻変動があり、鮮新世から洪積世（300～200 万年前）に現在の伊勢湾に東海湖、それが西に延びて古琵琶湖、古奈良湖、さらに現在の大阪湾に古大阪湖と連なる一連の淡水域があったとされている。その後、洪積世から更新世前期（200～80 万年前）に古琵琶湖の北への移動で現在の琵琶湖が形成され、古奈良湖の消失、それに古大阪湾、古伊勢湾の形成による海域の拡大によって、古大阪湖と東海湖が消失し、更新世以降現状に近い地形となったと考えられている。その後第四紀後期（およそ 13 万年前以降）の環境変化により洪積台地や沖積低地が形成され、その結果おおまかに見ると、現在の名古屋市域は次の丘陵地、台地、沖積地から成っている。

東部丘陵地（東部地域）

守山・千種・名東・天白・緑の 5 区が属する東部地域は、市の東北にある最高地、東谷山（198.3m）から続く標高 50～100m 程度のなだらかな丘陵地（新生代第三紀の丘陵）となっている。

この地域最北にある守山区の北側には、東から西に向かって庄内川が、最南の緑区の東側には、北から南に向かって天白川が流れている。

中央部の台地（中央部地域）

東・中・昭和・瑞穂・熱田・南の 6 区が属する中央部地域は、名古屋城付近から熱田神宮付近にかけては、なだらかに傾斜する標高 10～15m 程度の低い台地（第四紀洪積台地）になっている。

この地域では、昭和区、瑞穂区を通過して山崎川が流れ、名古屋港に注いでいる。

北・西・南部の沖積地（西部地域）

北・西・中村・中川・港の 5 区が属する西部地域は、河川によって形成された沖積地となっている。海に近いところは江戸時代以降の干拓地や埋立地で、いわゆる海拔ゼロメートル地帯（最低は港区新茶屋四丁目の－1.73m）である。この地域の北側と西側には庄内川が流れ、名古屋港に注いでいる。

2. 名古屋市版レッドリストから削除された種

前回の名古屋市版レッドリストに掲載されていた動物のうち、今回見直しを行った結果レッドリストから削除された動物の種名及び削除された理由は以下の通りである。

は虫類

(1 種)

- ・ジムグリ（ナミヘビ科、2010 年 NT）名古屋市には確実な生息記録がないと判断された。

魚 類

(2 種)

- ・イチモンジタナゴ（コイ科、2010 年 EN）名古屋市内には分布しなかったと判断された。
- ・チチブ（ハゼ科、2010 年 VU）名古屋市内には分布しなかったと判断された。

昆虫類

(4 種)

- ・コクロマメゲンゴロウ（ゲンゴロウ科、2010 年 CR）名古屋市には確実な生息記録がないと判断された。
- ・オオズウミハネカクシ（ハネカクシ科、2010 年 EN）誤同定であることが判明した。
- ・オオトックリゴミムシ（オサムシ科、2010 年 NT）誤同定であることが判明した。
- ・アカマエアツバ（ヤガ科、2010 年 DD）DD であることから同様な環境に生息するカギモンハナオイアツバに入れ替えた。

3. レッドデータブックなごや2015 動物編に関するQ & A

Q1：レッドリスト掲載種は、希少種と考えて良いか。

A1：レッドリストは、それぞれの種に対して現在加えられている圧力が将来もそのまま継続すると仮定した場合、その種の絶滅リスクがどの程度であるかという観点から評価が行われています。そのため、リスト掲載種はかならずしも希少種というわけではありません。例えば、以前からごく普通に見られ現在もまだかなりの個体数が存在している種Aでも、減少傾向が著しくこのまま減少した場合は、もともと希少であったが減少傾向が著しくない種Bよりも早く絶滅してしまうと考えられます。このような場合、種Aは種Bよりも高いランクに評価されます。ただし、生息地点が限られているという意味で希少な種は、たとえ今まで特に減少していなくても、その場所が何かの事情により破壊されれば容易に絶滅してしまう可能性があります。このように存続の基盤が脆弱な種は、その点も考慮して評価が行われています。

Q2：移殖等により保護されているものはどう扱われたか。

A2：基本的に「絶滅」扱いです。レッドデータブックでは、本来の生息地での生息状態が評価対象です。移殖等により本来の生息地と異なる場所に生息しているものは、国際自然保護連合の指針により、一見自然状態になっていても「野生絶滅」と判断することとされています。

Q3：名古屋市のレッドデータブックは、名古屋市独自の基準で作ればよいと思う。なぜ国際基準や国の基準を考慮するのか。

A3：名古屋市のレッドデータブックは、絶滅危惧種に関する広範な情報ネットワークの一部をなすものです。それぞれの地域がそれぞれの基準でレッドデータブックを作成すると、情報の互換性が保証されないため、名古屋市のレッドデータブックは、国、あるいは愛知県のリストと整合性を持つように評価基準を設定し、実際の評価を行っています。

4. 文献一覧

(1) 総論

- ・阿江 茂, 1983. 昆虫分布調査報告書, iii+62pp. 愛知県農地林務部.
- ・安藤威夫ほか, 1967. 愛知の動物, iv+222pp. 愛知県科学教育センター.
- ・安藤 尚, 1979. 第2回自然環境保全基礎調査, 動物分布調査報告書(昆虫類), 愛知県, i+93pp. 環境庁.
- ・朝比奈正二郎(編), 1993. 滅びゆく日本の昆虫 50 種, ix+183pp. 築地書館, 東京.
- ・中部河川研究会(編), 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書, iii+59pp. 名古屋城管理事務所.
- ・広 正義, 1981. 名古屋市内河川の水質と生物, 名古屋市内河川生物調査報告書. iv+152pp. 名古屋市公害対策局.
- ・井波一雄他, 1965. 名古屋の自然, 178pp. 六月社, 大阪.
- ・環境庁(編), 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物、レッドデータブック(脊椎動物編), 331+ipp. 日本野生生物研究センター, 東京.
- ・環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物、レッドデータブック(無脊椎動物編), 271+ipp. 日本野生生物研究センター, 東京.
- ・倉内一二ほか, 1984. 愛知県の自然環境, viii+278pp. 愛知県自然保護課.
- ・名古屋市逢左文庫(編), 1982. 名古屋叢書三編. 中部日本自然科学調査団報告(3), 33pp.
- ・野田米太郎(編), 1959. 名古屋, 尾張北東部の自然, Iv+152pp. 名古屋市公害対策局.
- ・落合圭次ほか, 1989. 保全を要する自然環境要素分布調査報告書(自然環境保全基礎調査), i+v+151pp. 愛知県自然保護課.
- ・佐藤正孝, 1990. 昆虫研究者からみた環境行政, 自然保護と昆虫研究者の役割講演論文集. 日本昆虫学会第50回大会特別集会, pp.33-36.
- ・上野俊一(編), 1993. 滅びゆく日本の動物 50 種, ix+195pp. 築地書館, 東京.
- ・白田明正, 1989. なごやの昆虫, 171pp. 名古屋昆虫館.

(2) 哺乳類

- ・阿部 永, 2007. 増補版日本産哺乳類頭骨図説, 290pp. 北海道大学出版会, 札幌.
- ・愛知学院大学歯学部第二解剖学教室, 1985. 小哺乳類の採集記録第1集(1978~1984年), 67pp. 愛知学院大学歯学部第二解剖学教室.
- ・愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(イノシシ), 31pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(カモシカ), 36pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(ニホンザル), 34pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県環境部自然環境課, 2012. 特定鳥獣保護管理計画(ニホンジカ), 33pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県環境調査センター(編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち2009動物編, 651pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・荒井秋晴・足立高行・桑原佳子・吉田希代子, 2003. 久住高原におけるテン *Martes melampus* の食性. 哺乳類科学, 43(1): 19-28.
- ・千葉徳爾, 1995. オオカミはなぜ消えたか - 日本人と獣の話 -, 279pp. 新人物往来社, 東京.
- ・千々岩哲, 2006. 川辺林と残存林がホンドヌキ (*Nyctereutes procyonoides viverrinus*) の行動圏利用に果たす役割. 矢作川研究, 10: 85-96.
- ・船越公威・前田史和・佐藤美穂子・小野宏治, 1999. 宮崎県枇榔島に生息するオヒキコウモリ *Tadarida insignis* のねぐら場所、個体群構成および活動について. 哺乳類科学, 39(1): 23-33.
- ・船越公威, 2010. 九州産食虫性コウモリ類の超音波音声による種判別の試み. 哺乳類科学, 50(2): 165-175.
- ・長谷川修平・大池辰也・浅井康行・村上勝志, 2014. ストランディング記録からみた伊勢湾・三河湾のスナメリについて. 海洋と生物, 36(2): 135-141.
- ・畠佐代子, 2014. カヤネズミの本, 106pp. 世界思想社, 京都.
- ・畑瀬 淳, 2000. 広島のおヒキコウモリ. 広島市の生物 - まもりたい生命の営み -, p.158. 広島市環境局環境企画課, 広島.
- ・平岩米吉, 1981. 狼 - その生態と歴史 -, 308pp. 池田書店, 東京.
- ・環境省(編), 2014. レッドデータブック2014 - 1 哺乳類 -, 132pp. ぎょうせい, 東京.
- ・川口 敏, 2006. 香川県産 *Mustela* 属 2 種の事故死体の同定と分布. 哺乳類科学, 46(1): 35-39.
- ・コウモリの会(編), 2011. コウモリ識別ハンドブック改訂版, 88pp. 文一総合出版, 東京.
- ・宮尾嶺雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物(佐藤正孝・安藤尚編), pp.286-325. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- ・名古屋市, 2010. 名古屋のみどり - 緑の現況調査報告書 - デジタルマッピング手法による緑被調査, 212pp. 名古屋市緑政土木局緑地部緑化推進課.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会(監), 2004. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2004動物編, 368pp. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会(監), 2010. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックなごや2010 - 2004年版補遺 -, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室.

- ・名古屋市動植物実態調査検討会（監），2010. 生き物から見た名古屋の自然 - なごやの環境指標種 100（改訂版） -, 160pp. 財団法人 三菱 UFJ 環境財団，東京.
- ・名古屋市教育委員会（編），1964. 名古屋叢書続編第 1 巻，432pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋市教育委員会（編），1965. 名古屋叢書続編第 9 巻，416pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋市教育委員会（編），1966. 名古屋叢書続編第 3 巻，447pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋市教育委員会（編），1966. 名古屋叢書続編第 10 巻，552pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋市教育委員会（編），1968. 名古屋叢書続編第 11 巻，657pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋市教育委員会（編），1969. 名古屋叢書続編第 12 巻，741pp. 名古屋市教育委員会.
- ・名古屋ため池調査実行委員会，2007. 名古屋・東山新池ため池調査報告書，111pp. 名古屋ため池調査実行委員会.
- ・名古屋ため池生物多様性保全協議会，2010. 2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書，207pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
- ・名古屋ため池生物多様性保全協議会，2011. 平成 22 年度生物多様性保全推進支援事業名古屋ため池生きものいきいき計画事業報告書，81pp. 名古屋ため池生物多様性保全協議会.
- ・中園敏之，1989. 九州におけるホンドキツネのハビタット利用パターン. 哺乳類科学，29(1): 51-62.
- ・名和 明，2010. 名古屋市における哺乳類の記録. マンモ・ス特別号，12: 17-23.
- ・名和 明，2009. 名古屋市におけるカモシカの記録. マンモ・ス特別号，11: 69-75.
- ・名和 明，2009. 森の賢者カモシカ - 鈴鹿山地の定点観察記 -, 185pp. サンライズ出版，彦根.
- ・新美倫子，2003. 玉ノ井遺跡第 3 次調査出土の動物遺体. 埋蔵文化財調査報告 44，pp.157-158. 名古屋市教育委員会.
- ・西本豊弘，1988. 動物遺体. 伊川津遺跡 - 渥美町埋蔵文化財調査報告書 4 -, pp.269-272. 渥美町教育委員会.
- ・野呂達哉，2009. 矢作川河畔林における哺乳類の基礎調査報告. 矢作川研究，13: 105-112.
- ・野呂達哉，2013. 小幡緑地と金城学院大学で確認されたアカギツネ. 生きものシンフォニー7 号. なごや生物多様性センター.
- ・野呂達哉，2013. なごやのイノシシ. 生きものシンフォニー8 号. なごや生物多様性センター.
- ・野呂達哉，2014. 愛知県名古屋市におけるオヒキコウモリ *Tadarida insignis* の初記録. なごやの生物多様性，1: 65-69.
- ・野呂達哉，2014. 名古屋市のアカギツネその後. 生きものシンフォニー12 号. なごや生物多様性センター.
- ・野呂達哉，2014. 緑区のブドウ畑で確認されたニホンアナグマ. 生きものシンフォニー13 号. なごや生物多様性センター.
- ・Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (ed.). The Wild Mammals of Japan. SHOUKADOH Book Sellers, Kyoto.
- ・斎藤 豊・堂崎正博・祖一 誠，2014. 名古屋港に生息するスナメリの調査. 海洋と生物，36(1): 29-35.
- ・新修名古屋市史編集委員会（編），1997. 新修名古屋市史第一巻，894pp. 名古屋市.
- ・新修名古屋市史資料編集委員会（編），2008. 新修名古屋市史資料編自然，525pp. 名古屋市.
- ・新修名古屋市史資料編集委員会（編），2008. 新修名古屋市史資料編自然目録，222pp. 名古屋市.
- ・自然環境研究センター（編），2004. 第 6 回自然環境基礎調査 - 種の多様性調査 哺乳類分布調査報告書 -, 213pp. 環境省自然環境局生物多様性センター.
- ・自然環境研究センター（編），2008. 日本の哺乳類 [改訂 2 版]，206pp. 東海大学出版会，秦野.
- ・高田靖司，2002. 守山と春日井の哺乳類. 私たちの博物館 - 志段味の自然と歴史を訪ねて -, 62: 1-5.
- ・高槻成紀，2006. シカの生態誌. 480pp. 東京大学出版，東京.
- ・田村典子，2011. リスの生態学，211pp. 東京大学出版会，東京.
- ・Tatara, M. and T. Doi, 1994. Comparative analyses on food habits of Japanese marten, Siberian weasel, and leopard cat in the Tsushima Islands, Japan. Ecological Research, 9: 99-107.
- ・渡辺 誠・岡田 賢・李 浩基・築瀬孝延，2002. 西志賀遺跡の自然遺物. 平手町遺跡，pp.61. 愛知県埋蔵文化財センター.
- ・山田文雄・池田 透・小倉 剛（編），2011. 日本の外来哺乳類 - 管理戦略と生態系保全 -, 439pp. 東京大学出版会，東京.
- ・吉野 勲，2010. 新宿御苑におけるタヌキの生息環境. Animate，8: 33-36.

(3) 鳥 類

- ・愛知県，1977. 愛知県の野鳥. 愛知県環境部.
- ・愛知県，1983. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.
- ・愛知県，1989. 愛知県野生鳥類生息調査報告書. 愛知県農地林務部.
- ・愛知県，1995. 愛知の野鳥. 愛知県農地林務部.
- ・愛知県，2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックあいち-動物編. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県，2004. 愛知県野生鳥類生息調査データ集. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県，2006. 愛知の野鳥 2006. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県，2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生動物-レッドデータブックあいち 2009-動物編. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県弥富野鳥園，1976～2015. 野鳥園だより No. 1～84.
- ・江崎保男ほか，2001. 近畿地区・鳥類レッドデータブック-絶滅危惧種判定システムの開発，京都大学出版会，京都.
- ・榎本佳樹，1941. 野鳥便覧下巻.
- ・環境省自然環境局野生生物課，2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2 鳥類.
- ・環境庁自然保護局生物多様性センター，1999. 生物多様性調査，鳥類調査中間報告書.
- ・清棲幸保，1952. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社.

- ・清棲幸保, 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社.
- ・清棲幸保, 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅲ. 講談社.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1977. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 1. Oxford University Press.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1980. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 2. Oxford University Press.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1983. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 3. Oxford University Press.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1985. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 4. Oxford University Press.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1988. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 5. Oxford University Press.
- ・Cramp, S. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa vol. 8. Oxford University Press.
- ・Krechmar, A. V., 1996. 北シベリア鳥類図鑑. 文一総合出版.
- ・建設省, 1997. 平成 6 年度河川水辺の国勢調査(河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂.
- ・建設省, 2000. 平成 10 年度河川水辺の国勢調査(河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂.
- ・サギと高速道路との共生を考える会合, 2013~2015. 東名阪自動車道弥富 IC・蟹江 IC に飛来営巣するサギと高速道路との共生に向けた活動報告.
- ・清水美登里・木村耕一, 2010. 愛知県内における鳥類の経年変化 (1) 山野で繁殖する鳥. 愛知県環境庁センター所報 38.
- ・新修名古屋市史資料編集委員会(編), 2008. 新修名古屋市史資料編 自然. 名古屋市.
- ・武内功, 1959. 名古屋地方の鳥. 中部日本自然科学調査報告 3.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 1992. Handbook of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 1994. Handbook of the Birds of the World vol. 2. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 1996. Handbook of the Birds of the World vol. 3. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 1997. Handbook of the Birds of the World vol. 4. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 1999. Handbook of the Birds of the World vol. 5. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 2004. Handbook of the Birds of the World vol. 9. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 2005. Handbook of the Birds of the World vol. 10. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 2010. Handbook of the Birds of the World vol. 15. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 2011. Handbook of the Birds of the World vol. 16. Lynx Edicions.
- ・del Hoyo, J. et al. (ed.), 2014. Illustrated Checklist of the Birds of the World vol. 1. Lynx Edicions.
- ・東海自然環境調査研究会, 1993. 名古屋市及び近隣に生息する動物に関する調査報告. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1976. 名古屋の野鳥. 名古屋市緑地局.
- ・名古屋市, 1981. 名古屋の野鳥. 名古屋市農政緑地局.
- ・名古屋市, 1986. 名古屋の野鳥. 名古屋市農政緑地局.
- ・名古屋市, 1991. 名古屋の野鳥. 名古屋市農政緑地局.
- ・名古屋市, 1996. 名古屋の野鳥. 名古屋市農政緑地局.
- ・名古屋市, 2001. 名古屋の野鳥. 名古屋市緑政土木局.
- ・名古屋市, 2006. 名古屋の野鳥. 名古屋市緑政土木局.
- ・名古屋市, 2010. 名古屋の野鳥. 名古屋市緑政土木局.
- ・なごや生物多様性保全活動協議会, 2012. なごや生きもの一斉調査 2011 野鳥編.
- ・日本鳥学会, 2012. 日本鳥類目録改訂 7 版, 日本鳥学会.
- ・(財) 日本野鳥の会, 1980. 鳥類繁殖地図調査. (財) 日本野鳥の会.
- ・(財) 日本野鳥の会, 1988. 動植物分布調査報告書(鳥類). (財) 日本野鳥の会.
- ・日本野鳥の会愛知県支部, 1982-2015. 日本野鳥の会愛知県支部報, (1)-(337). 日本野鳥の会愛知県支部.
- ・日本野鳥の会名古屋支部, 1975-1982. 日本野鳥の会名古屋支部報, (17)-(35). 日本野鳥の会名古屋支部.

(4) は虫類

- ・愛知県両生類・は虫類研究会, 1996. 愛知県の両生類・は虫類, 117pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
- ・内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類, 336pp. 平凡社, 東京.
- ・千石正一・疋田 努・松井正文・仲谷一宏(編), 1996. 両生類・爬虫類・軟骨魚類, 日本動物大百科第 5 巻, 189pp. 平凡社, 東京.
- ・中村健二・上野俊一, 1953. 原色日本両生類爬虫類図, 214pp. 保育社, 東京.
- ・日本カメ自然誌研究会(監), 2014. ミシシippアカミミガメ防除マニュアル-名古屋市内の活動を事例として-, 34pp. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.

- ・野呂達哉, 2007. 爬虫類. 名古屋・東山新池ため池調査報告書 2007, pp.30-33. 名古屋ため池調査実行委員会, 名古屋市.
- ・野呂達哉・矢部隆, 2009. 爬虫類. 2009 年度なごやため池生きもの生き生き事業報告書, pp.1**-1**. 名古屋ため池生物多様性保全協議会事務局, 名古屋市.
- ・疋田 努・鈴木 大, 2010. 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入. 爬虫両棲類学会報第 2010 巻第 1 号, pp.41-46.
- ・矢部 隆, 2008. 名古屋の生物 動物 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然, pp.271-279. 名古屋市, 名古屋.
- ・矢部 隆, 2008. 爬虫類. 新修名古屋市史 資料編 自然 目録, pp.271-279. 名古屋市, 名古屋.
- ・矢部 隆, 2010. 淡水棲・陸棲カメ類. 野生動物保護の事典, pp.569-577. 朝倉書店, 東京.
- ・矢部 隆, 2010. 愛知の自然のなりたち 愛知の生物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然, pp.162-207. 愛知県, 名古屋.
- ・矢部 隆, 2010. 愛知の自然と人々 残したい貴重な動植物 愛知の脊椎動物. 愛知県史 別編 自然, pp.597-618. 愛知県, 名古屋.
- ・Okada, Y., T. Yabe and S. Oda, 2011. Interpopulation variation in sex ratio of the Japanese pond turtle *Mauremys japonica* (Reptilia: Geoemydidae). *Current Herpetology*, 30(1): 53-61.
- ・Suzuki, D., H. Ota, H. Oh and T. Hikida, 2011. Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2):237-249.

(5) 両生類

- ・内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎, 2002. 決定版日本の両生爬虫類, pp.56-59. 平凡社, 東京.
- ・林光 武, 1993. ダンスを踊って求愛 アカハライモリ. 両生類・爬虫類 1 アシナシイモリ、サンショウウオ. 週刊朝日百科動物たちの地球, 97:20-22. 朝日新聞社.
- ・松橋利光・奥山風太郎, 2002. アズマヒキガエル. 山溪ハンディ図鑑 日本のカエル+サンショウウオ, pp.28-39. 山と溪谷社, 東京.
- ・浦野明央・石原勝敏(編), 1987. ヒキガエルの生物学, 289pp. 裳華房, 東京.
- ・Ihara, S., T. Fujitani., 2005. Prey Items Salamander *Hynobius nebulosus* in Nagoya and its Inferred Position in the soil food web. *Edaphologia*, (76):7-10.
- ・大谷 勉, 2009. 日本の爬虫両棲類, 288pp. 文一総合出版, 東京.
- ・Matsui, M., K. Nishikawa, S. Tanabe and Y. Misawa, 2001. Systematic status of *Hynobius tokyoensis* from Aichi Prefecture, Japan: a biochemical survey (Amphibia, Urodela). *Comparative Biochemistry and Physiology*, 130B(2):181-189.
- ・藤谷武史, 2000. 名古屋市東山公園におけるトウキョウサンショウウオの調査. 両生類誌, 4:9-12.
- ・愛知県, 1996. 愛知県の両生類・爬虫類, 117pp. 愛知県.
- ・島田知彦・坂部あい, 2014. 西三河平野部におけるツチガエルの分布. 豊橋自然史博物館研報, (24):7-15.
- ・島田知彦・坂部あい, 2014. 知多半島におけるツチガエルの生息地の一例. 豊橋市自然史博物館研報, (24):33-35.
- ・松井正文, 2003. 野生動物の保全遺伝学 14 両生類. 小池裕子・松井正文(編), 保全遺伝学, pp.214-226. 東京大学出版会, 東京.
- ・長井悠佳里, 土井敏男, 湯浅義明, 藤谷武史, 伊藤邦夫, 小泉雄紀, 三浦郁夫, 2011. ナゴヤダルマガエルの遺伝的地域分化—とくに岡山集団とナゴヤ集団が接する境界領域について—. 爬虫両棲類学会報, 2011(1):55. 日本爬虫両生類学会第 49 回大会 発表要旨.
- ・光田佳代・原 直之・高木雅紀・山崎裕治・宮川修一・岩澤 淳, 2011. PCR と制限酵素を利用したトノサマガエルとナゴヤダルマガエルの母親系統の簡易な判別法. 両生類誌, 21:17-22.
- ・前田憲男・松井正文, 1999. 改訂版 日本のカエル図鑑, 223pp. 文一総合出版, 東京.
- ・比婆科学教育振興会, 1996. 広島県の両生・爬虫類, 163pp. 中国新聞社, 広島.

(6) 魚 類

- ・愛知県, 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックあいち—動物編, 596pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・愛知県, 1978. 栽培漁業あゆ, pp.1-57. 愛知県.
- ・愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, pp. 1-223. 愛知県科学教育センター.
- ・愛知県水産試験場, 1994. 水産試験場創立百周年記念誌. 愛知県水産試験場.
- ・荒尾一樹, 2008. 庄内川で採集された魚類. 豊橋市自然史博物館研究報告, 18: 25-27.
- ・荒尾一樹・山上将史・大仲知樹, 2007. 愛知県の河口地域魚類. 豊橋市自然史博物館研究報告, 17: 29-40.
- ・川那部浩哉・水野信彦, 1989. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, 720pp. 山と溪谷社, 東京.
- ・環境庁, 1983. 河川調査. 第 2 回自然環境保全基礎調査報告書資料編, pp. 23-102. 環境庁.
- ・環境庁自然保護局, 1987. 愛知県. 第 3 回自然環境保全基礎調査河川調査報告書東海版(岐阜県・静岡県・愛知県・三重県), pp.23-102.
- ・環境庁自然保護局・朝日航洋株式会社, 1994. 第 4 回自然環境保全基礎調査河川調査報告書(全国版). 環境庁.
- ・建設省, 1998. 平成 7 年度河川水辺の国勢調査(河川版) 魚介類調査, 底生動物調査編. 山海堂, 東京.
- ・建設省, 1999. 平成 9 年度河川水辺の国勢調査(河川版) 魚介類調査, 底生動物調査編. 山海堂, 東京.

- ・国土交通省, 2001. 平成 11 年度河川水辺の国勢調査(河川版)鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂, 東京.
- ・國村恵子, 2002. 川に遊び 川に学ぶ, 314pp. 名古屋市水辺研究会.
- ・Miyazaki, J. M. Dobashi, T. Tamura, S. Beppu, T. Sakai, M. Mihara and K. Hosoya, 2011. Parallel evolution in eight-barbel loaches of the genus *Lefua* (Balitoridae, Cypriniformes) revealed by mitochondrial and nuclear DNA phylogenies. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 60: 416-427.
- ・Miyazaki, J., K. Nakao, M. Mihara, T. Sakai, Y. Gunji, K. Tojo, K. Muraoka and K. Hosoya, 2007. Incongruence between mtDNA hylogeny and morphological and ecological characters in loaches of the genus *Lefua* (Balitoridae, Cypriniformes). *Zoological Science*, 24: 666-675.
- ・宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1976. 原色日本淡水魚類図鑑, 462pp. 保育社, 大阪.
- ・向井貴彦・西田睦, 2003. 日本産ドンコにおけるミトコンドリア DNA の系統と関東地方への人為移植の分子的証拠. 魚類学雑誌, 50: 71-76.
- ・中島淳・洲澤譲・斉藤憲治, 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.
- ・名古屋市, 1978. 昭和 53 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1979. 昭和 54 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1980. 昭和 55 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1981. 昭和 56 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1986. 昭和 61 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1988. 昭和 63 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1990. 平成 2 年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1992. 平成 4 年版 公害の現況. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1994. 平成 6 年版 公害の現況. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1996. 平成 8 年版 名古屋市環境白書(資料編). 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1998. 平成 10 年版 名古屋市環境白書(資料編). 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 2000. 平成 12 年版 名古屋市環境白書(資料編). 名古屋市環境局.
- ・名古屋市, 2002. 平成 14 年版 名古屋市環境白書(資料編). 名古屋市環境局.
- ・鈴木寿之・向井貴彦, 2010. シマヒレヨシノボリとトウカイヨシノボリ: 池沼性ヨシノボリの特徴と生息状況. 魚類学雑誌, 57:176-179. 環境庁.
- ・鈴木寿之・坂本勝一, 2005. 岐阜県と愛知県で採集されたトウカイヨシノボリ(新称). 日本生物地理学会会報, 60:13-20.
- ・自然保護課, 1985. 愛知県の河川と海岸及び干潟. 愛知県の自然環境 1984, pp.223-238. 愛知県農地林務部自然保護課.
- ・東海自然環境調査研究会, 1993. 名古屋市及び近隣に生息する動物に関する調査報告, 174pp. 名古屋市環境保全局.
- ・梅村鐔二, 1984. 淡水魚類. 愛知の動物. pp.212-231. 愛知県郷土資料刊行会.
- ・梅村鐔二, 1968. 魚類. 愛知県立自然公園学術調査書, pp.127-144. 愛知県.
- ・Yamazaki, Y., A. Goto and M. Nisida, 2003. Mitochondrial DNA sequence divergence between two cryptic species of *Lethenteron*, with reference to an improved identification technique. *Journal of Fish Biology*, 62:591-609.

(7) 昆虫類

- ・阿江 茂, 1975. 1958 年 3 月の八事の蛾. 佳香蝶, 27(101):15.
- ・阿江 茂, 1983. 昆虫分布調査報告書, iii+62pp. 愛知県農地林務部.
- ・阿江茂樹, 1974. 名古屋市八事・東山附近のトンボ. 佳香蝶, 26(100):99-100.
- ・愛知県, 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックあいち-動物編, 596pp. 愛知県環境部自然環境課.
- ・相田正人, 1989-1990. 濃尾平野のナゴヤサナエ(1)-(7). 月刊むし, (221)-(226).
- ・安藤 尚, 1977. 名古屋市のヒメボタル. 佳香蝶, 29(111):29-31.
- ・安藤 尚, 1978. 愛知県と岐阜県のマダラナニワトンボ. 佳香蝶, 30(114):21-23.
- ・安藤 尚, 1982. 尾張平野のヒメボタル. 佳香蝶, 34(130):34.
- ・安藤 尚, 1987. 愛知県におけるトラフトンボの採集例. 佳香蝶, 39(151):42.
- ・安藤 尚, 1987. 愛知・岐阜両県とその周辺のコサナエ属サナエトンボ 3 種の分布. 佳香蝶, 39(152):59-67.
- ・安藤 尚ほか, 1972. 第 2 回自然環境保全基礎調査, 動物分布調査報告書(昆虫類), 愛知県, i+93pp. 環境庁.
- ・安藤 尚・岡田正哉・横地鋭典, 1979. 東海の昆虫, 223pp. 中日新聞本社.
- ・安藤威夫ほか, 1967. 愛知の動物, iv+222pp. 愛知県科学教育センター.
- ・朝比奈正二郎, 1988. 日本産ゴキブリ分類ノート, XVII. オオゴキブリ族の種類. 衛生動物, 39(1):53-62.
- ・尾藤成人, 1988. 名古屋市内でシンジュキノカワガを採集. 蛾類通信, (147):337.
- ・尾藤成人, 1990. 名古屋市都心部(東区筒井)で採集した蛾類. 誘蛾灯, 120:75-82.
- ・深田雅之, 1971. 名古屋市内で採集したオオシロカミキリ. 月刊むし, (7):36.
- ・福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑 (I), 277pp, pls.64. 保育社, 大阪.
- ・福田晴夫ほか, 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (II), 325pp, pls.64. 保育社, 大阪.
- ・福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (III), 373pp, pls.72. 保育社, 大阪.
- ・福田晴夫ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (IV), 373pp, pls.64. 保育社, 大阪.

- ・福原檜男, 1982. 水田に見られる直翅目害虫の見分け方 (1). 植物防疫, 36(11):34-38.
- ・原 聖樹・青山潤三, 1993. チョウが消えた!?, pp.48-59. あかね書房, 東京.
- ・長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博研報, (12):49-53.
- ・長谷川道明, 2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナバブタムシの標本について. 豊橋市自然史博研報, (16):55-57.
- ・長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希, 2015. 愛知県のトックリゴミムシ類. 豊橋市自然史博研報: No.(25):21-24, 豊橋市自然史博物館
- ・林 昌利, 2000. 名古屋城の自然・昆虫編, 119pp. (財)名古屋城振興協会.
- ・林 正美, 1984. 日本産セミ類概説. 日本セミの会会報, 5(2,3,4):25-51.
- ・広 正義ほか, 1983. 名古屋城外堀生物調査報告書, iii+59pp. 名古屋城管理事務所.
- ・日浦 勇, 1993. 原色日本昆虫図鑑 (下), 385pp. 保育社, 大阪市.
- ・穂積俊文, 1955. 尾張地方の甲虫相. 新昆虫, 8(11):36-38.
- ・穂積俊文, 1972. 東海甲虫誌 (第18報). 佳香蝶, 24(92):37-56.
- ・穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌 (第3報). 佳香蝶, 9(32):1-7.
- ・穂積俊文ほか, 1975. 庄内川の昆虫, 40pp, 12pls. 建設省庄内川工事事務所刊.
- ・穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫 (上), 506pp. 愛知県昆虫分布研究会.
- ・Hori, Y., 1977. A new Species of the Genus *Ommatidiotus* (Homoptera, Issidae) from Japan. *Annotations Zoologicae Japonenses*, 50(20):127-130.
- ・堀 義宏, 1982. 愛知県の半翅目. 昆虫と自然, 17(12):22-25.
- ・堀 義宏, 1989. 都市環境下の昆虫相について (1), 名古屋市の頸吻類. 名古屋市衛生研究所報, (35):118-123.
- ・堀 義宏, 1991. 都市環境下の昆虫相について (2), 名古屋市の頸吻類. 名古屋市衛生研究所報, (37):93-100.
- ・井野川重則, 1973. 熱田神宮にてベーツヒラタカミキリを採集. 佳香蝶, 25(96):55.
- ・井上 寛ほか, 1972. 原色昆虫大図鑑第1巻 (蝶蛾編), pp.1-284. 北隆館, 東京.
- ・井上 寛ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑, 1:41-43, 2:1-556, pls.1-392. 講談社, 東京.
- ・伊藤芳教, 1992. ミツノエンマコガネの外部形態による雌雄の区別法について. 月刊むし, 262:23-24.
- ・河路圭吾, 1981. 庄内川で採集したカワラゴミムシ. 佳香蝶, 33(126):31.
- ・河路掛吾, 1986. ホソハンミョウの記録. 佳香蝶, 38(148):60.
- ・河路掛吾, 1991. 愛知県におけるトダセシジゲンゴロウの記録. 月刊むし, (246): 36.
- ・川副昭人・若林守男, 1976. 原色日本蝶類図鑑, 422pp. 保育社, 大阪.
- ・建設省, 1996. 平成5年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂, 東京.
- ・建設省, 1996. 平成5年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 魚介類調査, 底生動物調査編. 山海堂, 東京.
- ・建設省, 1998. 平成8年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂, 東京.
- ・建設省, 1999. 平成9年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 魚介類調査, 底生動物調査編. 山海堂, 東京.
- ・倉内一二ほか, 1984. 愛知県の自然環境, viii+278pp. 愛知県自然保護課.
- ・松井 勲ほか (編), 1990. 東海の自然誌. i+406pp. (財)東海財団.
- ・Miyatake, M., 1985. Notes on the genus *Tenomerga* of Japan (Coleoptera: Cupedidae). *Transactions of the Shikoku Entomological Society*, 17:21-26.
- ・中谷至伸・吉武 啓・吉松慎一・石川 忠, 2013. 農業環境技術研究所所蔵のサンガメ科 (昆虫綱: カメムシ目) 標本目録. 農環研報, 32:11-37.
- ・名古屋昆虫同好会, 1990-2014. 佳香蝶, 160-260.
- ・名古屋市, 1978. 昭和53年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1979. 昭和54年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1980. 昭和55年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1981. 昭和56年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1986. 昭和61年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1988. 昭和63年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1990. 平成2年 公害の現況. 名古屋市公害対策局.
- ・名古屋市, 1992. 平成4年版 公害の現況. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1994. 平成6年版 公害の現況. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1994. なごやのほたる, 24pp. 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1996. 平成8年版 名古屋市環境白書 (資料編). 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 1998. 平成10年版 名古屋市環境白書 (資料編). 名古屋市環境保全局.
- ・名古屋市, 2000. 平成12年版 名古屋市環境白書 (資料編). 名古屋市環境局.
- ・名古屋市, 2002. 平成14年版 名古屋市環境白書 (資料編). 名古屋市環境局.
- ・成瀬善一郎, 1957. オオシロカミキリ東区で採集. *Napi News*, (22):8.
- ・ニューサイエンス社 (編), 1982. 愛知県の昆虫特集, 17(12):2-25.
- ・岡田正哉ほか, 1991. 愛知県の昆虫 (下), 416pp. 愛知県昆虫分布研究会.

- ・岡田正哉, 1999. ナナフシのすべて. トンボ出版. 大阪市.
- ・岡田正哉, 2000. カマキリのすべて, 63pp. トンボ出版, 大阪市.
- ・大沢省三・三島敏夫, 1894. 名古屋市内の甲虫 3 種. 佳香蝶, 36(139):36.
- ・佐々木昇, 1994. 日本産蛾類の知見. pp.1-364. (自費出版).
- ・佐藤正孝, 1971. 知多半島の水生甲虫類. 日本昆虫学会東海支部報, 24:2-3.
- ・佐藤正孝, 1978. 熱田神宮林の昆虫類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書, pp.93-110.
- ・佐藤正孝・安藤 尚 (編), 1984. 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会.
- ・佐藤正孝・長谷川道明 (編), 2001. 穂積俊文博士記念論文集, 東海甲虫誌, 368pp. 穂積俊文博士記念論文集発行事業会.
- ・清水典之・鶴殿清文・鶴殿 茂, 1972. 名古屋市南区のトンボ 5 種の新産地と種類追加. 佳香蝶, 24(93):73.
- ・清水典之, 1992. トンボ *Dragonflies*, pp.72. 自刊, 名古屋.
- ・清水清市, 1990. 愛知県尾張平野部のミツノエンマコガネ. 月刊むし, (230):40.
- ・杉 繁郎ほか, 1987. 日本産蛾類生態図鑑, pp.1-458. 北隆館, 東京.
- ・高橋 昭, 1975. 名古屋市内のギフチョウは絶滅してしまったか?. 昆虫と自然, 10(4):29-31.
- ・高橋 昭・葛谷 健, 1956. 中部東海地方産蝶類目録, 第 3 報. 佳香蝶, 8(29/30):1-123.
- ・高橋 敬, 1975. 甲虫雑記 (1), 名古屋市東山の甲虫. 佳香蝶, 27(101):9-10.
- ・高崎保郎, 1968. 愛知県のムスジイトンボ. 佳香蝶, 20(60):101-104.
- ・高崎保郎, 1994. 名古屋市中心部地下街でサラサヤンマを採集. 月刊むし, (286):12.
- ・高崎保郎, 1997. ため池の衰退を反映するベッコウトンボの滅亡. ため池の自然, (26):1-6.
- ・高崎保郎, 2003. 愛知県のベニイトンボ (第 2 報). ため池の自然, (38):1-8.
- ・高崎保郎, 2002. 愛知万博会場予定地におけるムカシヤンマの生息環境と羽化生態. 月刊むし, (377):36-41.
- ・竹内重信, 1985. 名古屋城外堀, ヒメボタル, 86pp. エフエー出版, 名古屋.
- ・田中 著, 1978. 日本産 *Ladoga* 属の幼生期の食草と分布. 蝶と蛾, 29(1):35-45.
- ・田中多喜彦, 1982. 愛知県の注目すべき蛾, 名古屋近郊を中心に. 佳香蝶, 34(131):43-45.
- ・Tominaga, Storozhenko and Kano, 1996. Two new and a subspecies of the genus *Parapodisma* (Orthoptera, Acrididae) from Japan. *Tettigonia*, 1(1):1-23.
- ・東海自然環境調査研究会, 1993. 名古屋市及び近隣に生息する動物に関する調査報告, viii+174pp. 名古屋市環境保全局.
- ・鶴殿清文・鶴殿 茂・清水典之, 1974. 黄昏活動性のヤンマ 3 種. 佳香蝶, 26(100):95-98.
- ・梅谷献二, 1994. 野外の毒虫と不快な昆虫, pp.1-331. 全国農村教育協会, 東京.
- ・渡辺康之, 1991. 検索入門 チョウ①, 207pp. 保育社, 大阪.
- ・渡辺康之, 1991. 検索入門 チョウ②, 207pp. 保育社, 大阪.
- ・矢崎充彦, 2012. 愛知県に侵入したキマダラカメムシ. 月刊むし, (491):44-45.
- ・山内博美・北原誠次, 1992. 名古屋市内でベッコウトンボを採集. 月刊むし, (253):36.
- ・山内博美・三輪利宏, 1992. 名古屋市内でネアカヨシヤンマを採集. 月刊むし, (253):36.
- ・Yoshitomi, H., 1997. A revision of the Japanese species of the genus *Elodes* and *Sacodes* (Coleoptera, Scirtidae). *Elytra*, 25:349-417.
- ・吉富博之・長谷川道明, 1997. 愛知県のアメンボ. 豊橋市博研報, (7):35-39.

(8) クモ類

- ・愛知県環境調査センター (編), 2002. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち ―動物編―, 596pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・愛知県環境調査センター (編), 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―動物編―, 651pp. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会 (監), 2004. レッドデータブックなごや 2004 ―動物編―, 368pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物環境影響評価室, 名古屋.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会 (監), 2010. レッドデータブックなごや 2010 ―2004 年版補遺―, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋.
- ・Tanikawa, A., 2001. Two new synonymies of the spider genus *Cyrtarachne* (Araneae: Araneidae). *Acta Arachnologica*, 50(1):87-89.
- ・千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑, 308pp. 偕成社, 東京.
- ・Tanaka, H., 1986. Descriptions of Three New Spiders of the *Pardosa laura* Complex (Araneae: Lycosidae) based on their Morphology and Ecology. *Acta Arachnologica*, 34(2):49-60.
- ・Tanaka, H., 1998. A New Species of the Genus *Pardosa* (Araneae: Lycosidae) from Japan. *Acta Arachnologica*, 47(2):101-103.
- ・石井幸子, 2000. ゲホウグモの観察 ―網・フ化、および越冬の観察―. 蜘蛛, (32/33):611-618. 中部蜘蛛談話会.
- ・加村隆英, 2002. ワシグモ科 Gnaphosidae (その 5). くものいと, (32):23-25. 関西クモ研究会.
- ・建設省, 1996. 平成 5 年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編. 山海堂, 東京.
- ・建設省, 1998. 平成 8 年度河川水辺の国勢調査 (河川版) 鳥類調査, 両生類・爬虫類・哺乳類調査, 陸上昆虫類等調査編.

山海堂, 東京.

- ・村上 勝, 1970. トリノフンダマン名古屋で採集. 中部蜘蛛談話会会報, (2):8. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 1972. スズミグモ *Cyrtophora ikomasanensis* B. et S.の生息地について. 中部蜘蛛談話会会報, (8):42. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 1995. オダカウレイグモを名古屋港で採集. 蜘蛛, (28):358. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 1998. 我が家の蜘蛛. 蜘蛛, (30):436. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 2002. 2001 年度採集観察会・合宿報告 (第4回). 蜘蛛, (35):739-740. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 2008. 我が家で見かける蜘蛛. 蜘蛛, (41):1011. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 2012. 2011 年度採集観察会第4回 庄内緑地公園. 蜘蛛, (45):1282-1283. 中部蜘蛛談話会.
- ・村上 勝, 2013. 2012 年度採集観察会第2回 庄内緑地公園. 蜘蛛, (46):1335. 中部蜘蛛談話会.
- ・永井 均, 1983. 興正寺のクモ (1). 蜘蛛, (17):109-110. 中部蜘蛛談話会.
- ・永井 均, 1984. 興正寺のクモ (2). 蜘蛛, (18):115-116. 中部蜘蛛談話会.
- ・永井 均, 1985. 名城大学研究棟外壁に生息するチリグモの個体数年変動について. 蜘蛛, (19):129. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1993. はじめまして… -我が家のクモたち-. 蜘蛛, (26):265-268. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1993. 1993 年度例会・採集会報告等 (1). 蜘蛛, (26):278-284. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1997. ちょっと寒い朝でもどっこい生きている その2. まどい, (15):9-12. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1994. 1994 年度第2回採集会報告. 蜘蛛, (27):325-326. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1997. 短期間で成体になったヒメフクログモの一例. 蜘蛛, (29):397. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1997. スズミグモの越冬について. 蜘蛛, (29):398-399. 中部蜘蛛談話会.
- ・小笠原幸恵, 1997. 1996 年度第3回採集観察会報告. 蜘蛛, (29):409-410. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 1985. マネキグモの思い出. 蜘蛛, (19):134-135. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 1987. 八事太白溪湿地のクモ. 蜘蛛, (21):157-159. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・小笠原幸恵, 1994. 名古屋市の真正クモ類について (1). 蜘蛛, (27):295-304. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 1994. クモ3種の採集例について イトグモ アダンソンハエトリ ツシマトリノフンダマン. 蜘蛛, (27):311-312. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・小笠原幸恵, 1995. 名古屋市の真正クモ類について (2). 蜘蛛, (28):341-344. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・小笠原幸恵, 1995. 1995 年度第3回採集会報告. 蜘蛛, (28):364-365. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・小笠原幸恵, 1997. 名古屋市の真正クモ類について (3). 蜘蛛, (29):384-386. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・須賀瑛文, 2001. 名古屋城庭園内のクモ類と多足類. 蜘蛛, (34):651-654. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2002. 2001 年度採集観察会・合宿報告 (第1回). 蜘蛛, (35):735-736. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2009. 愛知県産クモ目録追加種. 蜘蛛, (42):1062. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2009. 2008 年度第2回採集会報告. 蜘蛛, (42):1081-1082. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人・大原結, 2009. INAX 主催・平和公園観察会. 蜘蛛, (42):1084-1085. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2010. 愛知県産クモ目録 追加と削除ならびに変更と改称. 蜘蛛, (43):1120-1122. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2010. 2009 年度採集観察会第2回 緑区大高緑地公園. 蜘蛛, (43):1141. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2011. 愛知県内でのキンノウエタテグモの新産地. 蜘蛛, (44):1200-1203. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2012. 愛知県産クモ目録 追加種 (IV). 蜘蛛, (45):1237-1239. 中部蜘蛛談話会.
- ・緒方清人, 2013. 愛知県産クモ目録 追加種 (V). 蜘蛛, (46):1312-1314. 中部蜘蛛談話会.
- ・奥田敏夫 (付記: 須賀瑛文), 1997. 都会で出会ったタテグモ. まどい, (15):5. 中部蜘蛛談話会.
- ・小栗大樹, 2010. 2009 年度採集観察会第3回 平和公園. 蜘蛛, (43):1142. 中部蜘蛛談話会.
- ・小栗大樹, 2010. 2009 年度採集観察会第4回 小幡緑地公園. 蜘蛛, (43):1143. 中部蜘蛛談話会.
- ・小栗大樹, 2012. 2011 年度採集観察会第3回 小幡緑地公園. 蜘蛛, (45):1281-1282. 中部蜘蛛談話会.
- ・小栗大樹, 2013. 2012 年度採集観察会第1回 平和公園. 蜘蛛, (46):1334. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 1997. 観察採集会報告④. まどい, (15):15. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 1998. 「我が家」への同居者と訪問者. 蜘蛛, (30):428-429. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 1998. 1997 年度第4回採集観察会報告. 蜘蛛, (30):498-499. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 1999. 1998 年度第4回採集観察会報告. 蜘蛛, (31):562-564. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2001. 名古屋市千種区内におけるキンノウエタテグモの分布調査. 蜘蛛, (34):646-650. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2001. 2000 年度採集観察会第3回 興正寺. 蜘蛛, (34):692-693. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2005. 2004 年度採集観察会第1回 平和公園. 蜘蛛, (38):817-818. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2006. 2005 年度採集観察会第4回 平和公園. 蜘蛛, (39):916-917. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2006. 平和公園及び東山公園周辺の蜘蛛類. 蜘蛛, (39):886-891. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2007. 2006 年度採集観察会第3回 平和公園. 蜘蛛, (40):966-967. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2008. 2007 年度採集観察会第3回 興正寺. 蜘蛛, (41):1034-1035. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2011. 2010 年度採集観察会第3回 興正寺. 蜘蛛, (44):1219-1220. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2012. 今年はスズミグモの当たり年?! . 蜘蛛, (45):1266. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2012. 越冬するクモ -名古屋市西部地域を中心とした冬場のクモの観察記録-. 蜘蛛, (45):1244-1247. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2013. 越冬するクモ 2 -名古屋市西部地域を中心とした冬場のクモの観察記録-. 蜘蛛, (46):1321-1322. 中部蜘蛛談話会.

蜘蛛談話会.

- ・柴田良成, 2013. 蜘蛛の点描記録 ―名古屋市内で見られた観察記録―. 蜘蛛, (46):1323-1322. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2013. ワスレナグモ フ ワスレルナ. 蜘蛛, (46):1324. 中部蜘蛛談話会.
- ・柴田良成, 2013. 2012 年度採集観察会第 4 回 小幡緑地公園. 蜘蛛, (46):1338. 中部蜘蛛談話会.
- ・清水善夫, 1983. くもまんだら ―その 8― クモとコンピューター時代に思う. 蜘蛛, (17):107. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1972. 名古屋市内産真正クモ類メモ. 中部蜘蛛談話会会報, (7):31-34. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1980. クモ採集覚え書 ―その 3― ハングツオスナギグモ. 蜘蛛, (14):68-69. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1980. クモの越冬 その 1 ジョロウグモ その 2 ハングツオスナギグモ. 蜘蛛, (14):71. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1983. 愛知県産クモ類分布資料としての文献. 蜘蛛, (17):104-107. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1984. 真正蜘蛛類. 愛知の動物 愛知文化シリーズ (3), pp.41-62. (株) 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- ・須賀瑛文, 1985. 愛知県のトタテグモ類. 蜘蛛, (19):121-128. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1986. スズミグモの網の小観察. 蜘蛛, (20):147. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1989. 愛知県・三重県・静岡県におけるトタテグモ類三種について. 蜘蛛, (22):173-181. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 1995. 名古屋港付近のマダラヒメグモの生息地と環境. 蜘蛛, (28):358. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文, 2010. 2009 年度採集観察会第 1 回 守山区上志段味. 蜘蛛, (43):1140. 中部蜘蛛談話会.
- ・須賀瑛文・柴田良成, 2012. 7 クモ類調査. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書, pp.131-135. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・須賀瑛文・緒方清人・柴田良成, 2013. 8 クモ類調査. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書, pp.123-131. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・田中幸一, 1983. クサグモの天敵 (I) チリイソウロウグモ. 蜘蛛, (17):102-103. 中部蜘蛛談話会.
- ・田中幸一, 1998. チリイソウロウグモの空間分布 ―クサグモの網には何頭のイソウロウが寄生しているか―. 蜘蛛, (30):442-444. 中部蜘蛛談話会.
- ・筒井明子・柴田良成, 2012. 夏休み子供観察会. 蜘蛛, (45):1280-1281. 中部蜘蛛談話会.
- ・筒井明子, 2013. 夏休み子供観察会. 蜘蛛, (46):1336. 中部蜘蛛談話会.
- ・東海自然環境調査研究会 (編), 1993. 名古屋市及び近隣に生息する動物に関する調査報告, 174pp. 名古屋市環境保全局環境管理部環境影響評価室, 名古屋.
- ・牛田晴彦, 1971. 名古屋市中村区のクモ. 中部蜘蛛談話会会報, (3):13-15. 中部蜘蛛談話会.
- ・八木沼健夫, 1963. Zoropsidae のクモ日本の Fauna に入る. *Acta Arachnologica*, 18(1):1-6.
- ・新海栄一・八木沼健夫, 1977. 分布資料. *Atypus*, (69):39. 日本蜘蛛学会.
- ・八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑, 305pp. 保育社, 大阪.
- ・小野展嗣編, 2009. 日本産クモ類, pp.738. 東海大学出版会, 秦野.

(9) カニ類

- ・天野 勲, 2002. 黒潮と知多半島沿岸のカニ, pp.45,47,63,89,90. 半田市立博物館.
- ・天野 勲, 2008. 第Ⅱ部第 3 章 7 節甲殻類 (カニ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.337,340,341,342. 名古屋市.
- ・天野 勲, 2008. 第Ⅱ部第 4 章代表的な自然環境と生物・庄内川河口. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.496-497. 名古屋市.
- ・天野 勲, 2008. 第Ⅱ部第 4 章代表的な自然環境と生物 4 東谷山 カニ. 新修名古屋市史資料編 自然, p.507. 名古屋市.
- ・天野 勲, 2010. 生物から見た名古屋の自然, pp.98-99,135. 名古屋市.
- ・天野 勲, 2010. 名古屋市の絶滅の恐れのある野生生物 レッドデータブックなごや 2010 ―2004 年版補遺―, p.171-183. 名古屋市.
- ・池田 等ほか, 2006. 相模湾葉山沖の短尾類相. 国立科学博物館専報, (41):173-182.
- ・市川市・東邦大, 2007. 干潟ウォッチングフィールドガイド, pp.37,136.
- ・伊藤 円, 2004. 静岡県下田市大賀茂川に生息するシオマネキ類について. 日本甲殻学会第 42 回全国大会報, p.36.
- ・伊藤 円, 2011. 静岡県内でのシオマネキ類の生息状況. 日本甲殻学会第 49 回大会報, p.44.
- ・大阪府立自然史博物館・大阪自然史センター編, 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, pp.33,45,46,105. 東海大学出版会, 秦野.
- ・岡本一利, 2004. モクズガニの種苗生産の現状. 日本甲殻学会第 42 回大会報, p.14.
- ・小林 哲, 2014. モクズガニの形態の変異と奇形. *CANCER*, (23): 36. 日本甲殻学会.
- ・小島太一, 2008. アカテガニの産卵における 3 年サイクル. 日本甲殻学会第 46 回大会報, p.78.
- ・酒井 恒, 1976. 日本産蟹類, pp.419,420. 講談社, 東京.
- ・酒井 恒, 1980. 蟹 その生態と神秘, pp.40-46,218-222. 講談社, 東京.
- ・水産庁, 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp.3-23. (社) 日本水産資源保護協会.
- ・富山 実, 1989. 小型底びき網漁獲物から見た伊勢湾内底生生物相. 愛知水試研報, (1):41-47.
- ・中島徳男, 1992. 愛知県三谷港に水揚げされたカニ類の目録とその分布, pp.35-45. 三河生物同好会.
- ・中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録, p.32.
- ・馬場敬次, 1976. アニマ特集 カニの世界・海に育つ河口のカニ, pp.16-19. 平凡社, 東京.
- ・嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.260-261,270-271. 朝日新聞社, 東京.

- ・三輪龍之, 1977. 郷土の化石と貝 ―名古屋港及びその周辺を中心として―, pp.24-25.
- ・三宅貞祥, 1998. 日本産かに類の分類目録. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ, pp.193-249. 保育社, 大阪.
- ・山崎いづみほか, 2006. モクズガニ属カニ類の遺伝的類縁関係. 日本甲殻学会第 42 回大会報, p.59.
- ・和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp.18-23,58-59,64,66,93-96,98,102-103,158,162. 京都大学出版会, 京都.
- ・渡辺精一ほか, 2006. モクズガニの種内分化. *CANCER*, (15):9-12. 日本甲殻学会.
- ・渡辺精一ほか, 2007. モクズガニ異所的集団の遺伝的文化. 日本甲殻学会第 45 回大会報, p.13.

(10) 貝 類

- ・阿部 司・福田 宏, 2010. 絶滅危惧種カワネジガイの岡山県における新産地. *Molluscan Diversity*, 2(2):37-41.
- ・愛知県教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp. 愛知県科学教育センター, 名古屋.
- ・浅香智也・鳥居亮一, 2012. 油ヶ淵とその周辺の用水路の淡水二枚貝(ドブガイ属 *Anodonta*). 碧南海浜水族館年報, (25):36-40.
- ・東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, 343 pp. 保育社, 大阪.
- ・藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春季における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10):31-39.
- ・福田 宏, 2012. エドガワミズゴマツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 44. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ヒナタムシヤドリカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 48. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. クリイロカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 46. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ムシロガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 68. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. サザナミツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 40. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ツブカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 48. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ワカウラツボ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 38. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ヤチヨノハナガイ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 143. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏, 2012. ヨシダカワザンショウ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 46. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏・木村昭一, 2012. ヘナタリ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 29. 東海大学出版会, 秦野.
- ・福田 宏・久保弘文, 2012. スカルミクチキレ. 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p. 88. 東海大学出版会, 秦野.
- ・Fukuda, H. and K. Ekawa, 1997. Description and anatomy of a new species of the Elachisinidae (Caenogastropoda: Rissoidae) from Japan. *The Yuriyagai*, 5(1/2):69-88.
- ・福田 宏・福田敏一, 1995. 阿知須干拓にコウロエンカワヒバリガイ出現. 山口の自然, (55):16-20.
- ・岐阜県, 2001. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物, 350pp. 岐阜県健康福祉環境部自然環境森林課, 岐阜.
- ・岐阜市役所自然共生部自然環境課, 2014. 岐阜市の自然情報, 238pp. 岐阜市役所, 岐阜.
- ・蜂矢喜一郎・田中利雄, 1998. 名古屋市南区鶴里町周辺の沖積層の化石. 化石の友, (45):20-25.
- ・原田一夫, 2000. タイワンジジミが愛知県に侵入. かきつばた, (26):10.
- ・早瀬善正, 1998. キヌカツギハマシイノミガイ庄内川河口に生息. かきつばた, (24):12.
- ・早瀬善正, 2001. 知多半島に生息するヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (27):10-11.
- ・早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史. 兵庫陸水生物, (60):151-157.
- ・早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む絶滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
- ・早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ(新称)について. ちりばたん, 41(2):48-59.
- ・早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のピロウドマイマイ属について. かきつばた, (31):8-19.
- ・早瀬善正・多田 昭, 2008. 中部地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (33):17-21.
- ・早瀬善正・多田 昭, 2009. 東北地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (34):14-19.
- ・早瀬善正・多田 昭, 2010. 関東地方に分布するピロウドマイマイ属. かきつばた, (35):19-27.
- ・早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32):11-33.
- ・Huber, M., 2010. *Compendium of Bivalves*, 901pp. Conch Books, Hackenheim.
- ・池田 等・倉持卓司・渡辺政美, 2001. 相模湾レッドデータ ―貝類―, 104 pp. 葉山しおさい博物館, 神奈川.
- ・河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. かきつばた, (24):16-17.
- ・河合秀高, 2000. 名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(3) 巻貝(その 2). 化石の友, (47):46-49.
- ・河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた, (34):20.
- ・河合秀高・千葉正己, 1996. 名古屋港 13 号地浚渫地より産出した貝類化石(1) 二枚貝・角貝. 化石の友, (43):21-25.
- ・河合秀高・蜂矢喜一郎, 1999. 名古屋港浚渫地(金城埠頭)産貝類化石(2) 巻貝(その 1). 化石の友, (46):20-25.
- ・川瀬基弘, 2002. 矢作川河口域における干潟の底生生物相. 矢作川研究, (6):81-98.
- ・川瀬基弘, 2006. 矢作川河口域における絶滅のおそれのある貝類. 矢作川研究, (10):75-84.
- ・川瀬基弘, 2010. 3 貝類. なごやため池生きものの生き生き事業報告書, pp.69-72. 名古屋ため池生物多様性保全協議会, 名古屋.
- ・川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物. 豊田市史研究, (3):57-80.

- ・川瀬基弘, 2012a. 名古屋市内で確認されたシリオレギセルとヒルゲンドルフマイマイ. かきつばた, (37):52.
- ・川瀬基弘, 2012b. 自然豊かな名古屋 41 種の陸貝を発見. 生きものシンフォニー5号. 名古屋生物多様性センター, 名古屋.
- ・川瀬基弘, 2013. 愛知県渥美層群の貝類化石 (速報) ~鶴飼修司コレクションの貝類化石~. 瀬木学園紀要, (7):38-48.
- ・川瀬基弘, 2013a. なごやで探そう! カタツムリ, 29 pp. 名古屋生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・川瀬基弘, 2013b. II-7 なごや生きものの一斉調査 2012・陸貝編. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書 (平成 24 年度環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.178-213. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・川瀬基弘, 2013c. 名古屋市内でニッポンマイマイを発見. 生きものシンフォニー7号. 名古屋生物多様性センター, 名古屋.
- ・川瀬基弘, 2014. 新都市の軟体動物. 加藤貞亨ほか編. 新都市の自然誌ー昆虫・動物編ー, pp. 1-24. 新都市立鳳来寺山自然科学博物館.
- ・川瀬基弘, 2014. 11 貝類. 岐阜市の自然情報 ~岐阜市自然環境基礎調査~, pp.197-209. 岐阜市役所自然共生部自然環境課, 岐阜.
- ・川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 豊田市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (48):9-16.
- ・川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類. 豊橋市自然史博研報, (21):31-43.
- ・川瀬基弘・市原 俊, 2013. 名古屋市守山区で発見された外来シジミ. かきつばた, (38):63.
- ・川瀬基弘・市原 俊・河合秀高, 2015. 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告, (41):51-131.
- ・川瀬基弘・石黒鎌三, 2015. 名古屋市内で再発見されたマルタニシ. なごやの生物多様性, 2:33-34.
- ・川瀬基弘・守谷茂樹・石黒鎌三, 2012. (8) 陸産貝類. 熱田神宮の生物調査と外来生物対策. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書 (平成 23 年度 生物多様性保全推進支援事業), pp.136-140, なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・川瀬基弘・村瀬文好, 2014. 名古屋市初記録のヤマタニシとコベソマイマイ. かきつばた, (39):51.
- ・川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類. 矢作川研究, (16):11-26.
- ・川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・森山昭彦・家山博史, 2012. 岐阜市に生息する淡水産貝類. 陸の水, (54):33-42.
- ・川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊・吉村卓也・山内貴司・横山貴則, 2012. 岐阜市に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (6):19-36.
- ・川瀬基弘・村瀬文好・高柳茉友子・石黒鎌三, 2014. 9 陸産貝類調査 [II-4 熱田神宮の生物調査と外来生物対策]. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書 (平成 25 年度 環境省生物多様性保全推進支援事業), pp.134-143. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋.
- ・川瀬基弘・西尾和久・市原 俊・村瀬文好, 2013. 名古屋市内に生息する陸産貝類. 瀬木学園紀要, (7):12-17.
- ・川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊, 2014. 名古屋市内で発見されたピロウドマイマイ類. なごやの生物多様性, 1:1-14.
- ・川瀬基弘・野呂達哉, 2013. 名古屋市におけるスマガイとオオタニシの生息状況. かきつばた, (38):56.
- ・川瀬基弘・尾畑 功・市原 俊, 2009. 愛知県藤前干潟に生息する貝類. 豊橋市自然史博研報, (19):11-20.
- ・川瀬基弘・鳥居亮一・市原 俊, 2012. 愛知県矢笠湿地に生息するマメシジミ類. 平成 23 年度豊田市自然観察の森年次報告書, pp.223-225. 豊田市自然観察の森, 豊田.
- ・川瀬基弘・梅村麻希・八木明彦, 2009. 干潟に生息する二枚貝類の炭素・窒素除去. 第 8 回 海環境と生物および沿岸環境修復技術に関するシンポジウム 発表論文集, pp.67-72. 海底環境研究会, 静岡.
- ・紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類, 131pp. たたら書房, 鳥取.
- ・紀平 肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類, 159 pp. ピーシーズ, 東京.
- ・木村昭一, 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. 南紀生物, 29(2):95.
- ・木村昭一, 1989. ワカウラツボを汐川干潟 (三河湾) にて採集. 南紀生物, 31(2):130-131.
- ・木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報, (33):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
- ・木村昭一, 1996. ドレヅジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報, (35):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
- ・木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25):14-17.
- ・木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレヅジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26):18-20.
- ・木村昭一, 2001. 藤前干潟で採集されたワカウラツボ. かきつばた, (27):14-16.
- ・木村昭一, 2002. 豊田市におけるカネツケシジミの繁殖例. かきつばた, (28):18-19.
- ・木村昭一, 2002. 熱田神宮の貝類相. かきつばた, (28):24-25.
- ・木村昭一, 2004. ⑧貝類. 名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックなごや 2004 -動物編-, pp.263-292. 名古屋環境局環境都市推進部環境影響評価室, 名古屋.
- ・木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30):14-20.
- ・木村昭一, 2004. 名古屋市内より採集されたフトヘナタリの生貝. かきつばた, (30):34-35.
- ・木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31):29-31.
- ・木村昭一, 2010. コラム: 庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全. 生き物から見た名古屋の自然 なごやの環境指標種 100 (改訂版), pp.102-103. 三菱 UFJ 環境財団, 東京.
- ・木村昭一, 2012. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, 3:1-8, 2pls. 西三河生物研究会.
- ・木村昭一, 2012. ヒメマスオガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. クシケマスオガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. クレハガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.62. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. ナラビオカミミガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.92. 東海大学出版会, 秦野.

- ・木村昭一, 2012. オカミミガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.95. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. サクラガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.126. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. セキモリ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.63. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. ウラカガミ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.149. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一, 2012. ユウシオガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.126. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・福田 宏, 2012. フトヘナタリ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.29. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・福田 宏, 2012. イボウミナ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・福田 宏, 2012. カワアイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.30. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・福田 宏, 2012. オリイレボラ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.74. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・福田 宏, 2012. ウミナ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.31. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54:44-56.
- ・木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相. かきつばた, (28):13-14.
- ・木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりばたん, 21(1/2):12-13.
- ・木村昭一・山下博由, 2012. イボキサゴ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.17. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・山下博由, 2012. マゴコロガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.162. 東海大学出版会, 秦野.
- ・木村昭一・山下博由, 2012. オオノガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.167. 東海大学出版会, 秦野.
- ・近藤高貴, 2008. 日本産イシガイ目貝類図譜 日本貝類学会特別出版物第3号, 69 pp. 日本貝類学会, 東京.
- ・黒田徳米, 1963. 日本非海産貝類目録, 71pp. 日本貝類学会, 東京.
- ・黒住耐二, 2000. 貝類. 千葉県保護上重要な野生生物 ―千葉県レッドデータブック― 動物編, pp.359-399. 千葉県環境部自然保護課, 千葉.
- ・増田 修, 2005. カワネジガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 6 陸・淡水産貝類, p.79. 自然環境研究センター, 東京.
- ・増田 修, 2005. マメタニシ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 6 陸・淡水産貝類, p.317. 自然環境研究センター, 東京.
- ・増田 修, 2005. モノアラガイ. 環境省(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 6 陸・淡水産貝類, p.320. 自然環境研究センター, 東京.
- ・増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類, 240pp. ピーシーズ, 東京.
- ・松岡敬二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (9):15-24.
- ・三浦知之, 2008. 干潟の生き物図鑑, 197pp. 南方新社, 鹿児島.
- ・Mori, S., 1938. Classification of Japanese *Pisidium*. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):254-278, pls.7-11.
- ・Mori, S., 1938. Classification of the Japanese *Planorbidae*. *Memoirs of the College of Science, Kyoto Imperial University, Series B*, 14(2):279-300, pls.12-18.
- ・守谷茂樹, 2004. 名古屋市内の陸貝の現況. かきつばた, (29):25-31.
- ・守谷茂樹, 2004. 名古屋市の陸貝の現況 補足その1 (熱田神宮). かきつばた, (30):23-26.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会(監), 2004. レッドデータブックなごや 2004 ―動物編―, 368pp. 名古屋市環境局環境都市推進部環境影響評価室, 名古屋市.
- ・名古屋市動植物実態調査検討会(監), 2010. レッドデータブックなごや 2010 ―2004年版補遺―, 316pp. 名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室, 名古屋市.
- ・中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6):10-12.
- ・中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第7回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, (4):4-5.
- ・日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑―海岸ベントスのレッドデータブック, 284pp. 東海大学出版会, 秦野.
- ・日本水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.
- ・日本水産資源保護協会, 1996. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅲ), 90pp.
- ・日本水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅳ), 126pp.
- ・西 浩孝, 2010. 三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認. 豊橋市自然史博物館研究報告, (20):15-17.
- ・野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 佐藤正孝・安藤 尚編, 愛知の動物, pp.23-40. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- ・奥谷喬司(編), 2000. 日本近海産貝類図鑑, 1173pp. 東海大学出版会, 秦野.
- ・西條八束・寺井久慈・永野真理子・鮎川和泰・八木明彦・梅村麻希・加藤義久・川瀬基弘・佐々木克之・松川康夫, 2008. 中部国際空港島建設による水質, 底質, 底生生物群集の劣化. 海の研究, 17(4):281-295.
- ・西條八束・八木明彦・梅村麻希・寺井久慈・川瀬基弘・松川康夫・佐々木克之, 2004. 中部空港島周辺における底質・底生動物を中心とした水域環境変化に関する研究. プロ・ナトゥーラ・ファンド第13期助成成果報告書, 3-16.
- ・酒井 類, 2002. 名古屋市守山区の淡水産貝類. かきつばた, (28):15-17.
- ・佐藤正典(編), 2000. 有明海の生きものたち, 396pp. 海游舎, 東京.
- ・水産庁・日本水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅰ), 123pp.
- ・鈴木尊仁・井上恵介・小澤智生, 2006. 伊勢湾・三河湾における1960年代以降の環境劣化と潮間帯軟体動物相の変化. 名古屋

- 屋大学博物館報告, (22):31-64.
- ・鈴木孝男・木村昭一・木村妙子, 2009. 干潟生物調査ガイドブック～東日本編～, 120pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.
 - ・鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック～全国版(南西諸島を除く)～, 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.
 - ・庄司幸八, 1938. 珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝. *Venus*, 8(3/4):119-127.
 - ・田部雅昭・福原修一・長田芳和, 1994. 淡水産二枚貝ドブガイに見られる遺伝的Ⅱ型. *Venus*, 53(1):29-35.
 - ・多田 昭, 2005. 中国地方産ピロウドマイマイ属貝類. まいご, (13):12-25.
 - ・高柳菜友子, 2014. 矢作川上中流域に生息する淡水産貝類. 矢作川研究, (18):5-11.
 - ・田中守彦, 1959. 愛知県産淡水産貝類目録, 14pp, (謄写).
 - ・田中利雄・河合秀高, 1998. 愛知県渥美半島西ノ浜の打上げ貝. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8):33-36.
 - ・鳥居亮一・浅香智也・荒尾一樹・川瀬基弘, 2012. 矢作川下流域における魚類と甲殻類十脚目を中心とした生物種の記録. 三河生物, 3:9-49.
 - ・Umemura, M. and A. Yagi, 2006. Changes in Nitrous oxide, DOC and Methane in the interstitial Water of Fujimae Tidal-Flat. *Verhandlungen IVL*, 29(3):1228-1234.
 - ・和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182pp. 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
 - ・八木明彦・大八木麻希・川瀬基弘・横山亜希子, 2014. 藤前干潟の底泥・海水における炭素・窒素の除去－潮溜まり・底泥間隙水・二枚貝中心として－. 陸の水, (64):1-9.
 - ・山田充哉・石橋亮・河村功一・古丸 明, 2010. ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ, タイワンシジミの類縁関係. 日本水産学会誌, 76(5):926-932.
 - ・山本茂雄編, 2007. 海のふれ健康診断報告書, 90pp. 伊勢・三河湾流域ネットワーク山川里海 22 海健康診断手法開発チーム, 名古屋.
 - ・山下博由, 2012. アゲマキ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.172. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由, 2012. ハイガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.110. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由, 2012. ハナグモリ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.139. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由, 2012. イセシラガイ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.116. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由・木村昭一, 2012. イチョウシラトリ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.129. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由・木村昭一, 2012. タイラギ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.114. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・山下博由・木村昭一, 2012. ウミタケ. 日本ベントス学会編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑, p.166. 東海大学出版会, 秦野.
 - ・Yamasita, H., M. Okamoto, M. Harato and H. Fukuda, 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan -1. *Tellina (Serratina) capsoides* (Bivalvia: Veneroida: Tellinidae). *The Yuriyagai*, 5(1/2):101-116.
 - ・矢野一生・田中利雄・牧口貴久, 2010. 愛知県三河地方境川水系の護岸工事に伴って産出した完新世化石. 化石の友, (55):26-36.

5. 執筆者及び協力者

レッドデータブックの作成に当たり、次の方々に執筆、調査、写真の提供等に協力していただいた。

(敬称略、五十音順)

【執筆者】

① 哺乳類

名和 明、野呂達哉

② 鳥 類

小笠原昭夫

③ は虫類

矢部 隆

④ 両生類

藤谷武史

⑤ 魚 類

浅香智也、荒尾一樹、大仲知樹、谷口義則、地村佳純、鳥居亮一、向井貴彦

⑥ 昆虫類

岡田正哉（故人）、佐藤正孝（故人）、高崎保郎、田中多喜彦（故人）、戸田尚希、長谷川道明、水野利彦、矢崎充彦

⑦ クモ類

緒方清人、柴田良成、須賀瑛文

⑧ カニ類

天野 勲

⑨ 貝 類

木村昭一（再録）、川瀬基弘（2015 執筆，旧版加筆）

【調査、写真提供等協力者】

① 哺乳類

石原則義、宇地原永吉、梅本洋子、鬼頭保、小島盛夫、酒井正二郎、丹井 隆、寺西敏夫、研谷 厚、名和 明、野呂達哉、堀田 守、吉田耕治、吉村文孝

金城学院大学小野研究室、なごや生きもの市民調査員、名古屋コミュニケーションアート専門学校エコ・コミュニケーション科、名古屋市立大学生物多様性研究センター、なごや生物多様性保全活動協議会、名古屋大学エコトピア研究所林研究室、名城大学農学部環境動物学研究室、名城大学野生動物生態研究会、愛知県（環境部自然環境課自然公園・鳥獣グループ、大高緑地管理事務所、小幡緑地管理事務所、森林公園）、国土交通省中部地方整備局（庄内川第一出張所、庄内川第二出張所）、環境省中部地方環境事務所、名古屋市市民経済局名古屋城総合事務所、名古屋市緑政土木局（都市農業課、東山総合公園、北土木事務所、天白土木事務所、千種土木事務所、名東土木事務所、守山土木事務所）。

② 鳥 類

小笠原昭夫、後藤弘行、近藤 孝、佐藤武男、芝原隆男、杉山禎彦、高木清和、前田 崇、村上 修、森井俊雄、森井豊久、矢田和子

③ は虫類

石原則義、鵜飼 普、宇地原永吉、大矢美紀、鬼頭保、研谷 厚、中西倜夫、野呂達哉、堀田 守、矢部 隆

④ 両生類

岩本やよい、梅本洋子、大竹 勝、熊澤慶伯、佐藤利行、柴田美子、島田知彦、白谷由紀子、高木雅紀、瀧川正子、田中理映子、柳川菊蔵、野呂達哉、藤谷武史、水谷泰通、森 功一、山下紀雄、山田律子

長久手市役所、名古屋市東山動植物園、名古屋市立大学システム自然科学研究科、名古屋市立丸の内中学校、藤原ナチュラルヒストリー振興財団

⑤ 魚 類

浅香智也、荒尾一樹、宇治原永吉、大仲知樹、大矢美紀、國村恵子、瀬能宏、谷口義則、地村佳純、鳥居亮一、野呂達哉、古橋 芽、間野静雄、向井貴彦、淀 太我

神奈川県立生命の星・地球博物館、碧南海浜水族館、名城大学理工学部環境創造学科谷口研究室

⑥ 昆虫類

安藤 尚、安藤泰樹、鵜殿清文、岡田正哉（故人）、佐藤正孝（故人）、清水典之、高崎保郎、田中多喜彦（故人）、戸田尚希、長谷川道明、福住和也、水野利彦、矢崎充彦、山本雅人、横地鋭典

⑦ クモ類

家股幸子、緒方清人、柴田良成、須賀瑛文、筒井明子、中根翼
熱田神宮、名古屋城管理事務所

⑧ カニ類

天野 勲、池田 等、井谷雅治、太田 馨、木村昭一、鈴木真悠

⑨ 貝 類

浅香智也、石黒鏐三、市原 俊、鵜飼 普、宇地原永吉、大八木麻希、大矢美紀、緒方清人、川瀬基弘、河辺訓受、木村昭一、柴田美世子、高柳茉友子、城 政子、鳥居亮一、中村 肇、西尾和久、野呂達哉、早瀬善正、水野吉昭、村瀬文好、森川晴つみ、森際真友、守谷茂樹、森山昭彦

IFF 東海、熱田神宮、西部・守山農政課、名古屋貝類談話会、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科附属生物多様性研究センター、なごや生物多様性保全活動協議会

【 索 引 】

和名五十音順

- (1) 哺 乳 類
- (2) 鳥 類
- (3) は 虫 類
- (4) 両 生 類
- (5) 魚 類
- (6) 昆 虫 類
- (7) ク モ 類
- (8) カ ニ 類
- (9) 貝 類

分 類 順

- (1) 哺 乳 類
- (2) 鳥 類
- (3) は 虫 類
- (4) 両 生 類
- (5) 魚 類
- (6) 昆 虫 類
- (7) ク モ 類
- (8) カ ニ 類
- (9) 貝 類

【索引（和名五十音順）】

（１）哺乳類

種名	学名	目名	科名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus)	食肉(ネコ)	イヌ	CR			40
アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck)	齧歯(ネズミ)	ネズミ	VU			48
イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus	偶蹄(ウシ)	イノシシ	DD			53
オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	食肉(ネコ)	イヌ	EX	EX	EX	32
オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth)	翼手(コウモリ)	オヒキコウモリ	DD	DD	VU	51
カモシカ	<i>Capricornis crispus</i> (Temminck)	偶蹄(ウシ)	ウシ	NT			50
カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)	齧歯(ネズミ)	ネズミ	EN	VU		46
キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	CR	NT		35
コウバモグラ	<i>Mogera wogura</i> (Temminck)	トガリネズミ	モグラ	VU	LP		47
スナドリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i> (G.Cuvier)	クジラ	ネズミイルカ	CR	NT		44
タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray)	食肉(ネコ)	イヌ	NT			49
ニホンアナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck	食肉(ネコ)	イタチ	CR	DD		43
ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck	食肉(ネコ)	イタチ	CR			42
ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth)	霊長(サル)	オナガザル	DD			52
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck	偶蹄(ウシ)	シカ	EX			33
ニホンジネズミ	<i>Crocodylus dsinezumi</i> (Temminck)	トガリネズミ	トガリネズミ	CR			34
ニホンテン	<i>Martes melampus</i> (Wagner)	食肉(ネコ)	イタチ	CR	NT		41
ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck	ウサギ	ウサギ	CR	NT		39
ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck	齧歯(ネズミ)	リス	CR	NT		37
ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)	齧歯(ネズミ)	キヌゲネズミ	CR	NT		36
ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck	トガリネズミ	モグラ	EN			45
ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)	齧歯(ネズミ)	リス	CR	NT		38

（２）鳥 類

種名	学名	目名	科名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
アオバズク	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)	フクロウ	フクロウ	VU	EN		82
アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	NT	VU	VU	96
イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i> Gray et Gray	チドリ	チドリ	NT	VU		89
ウズラ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	キジ	キジ	DD	EN	VU	107
ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i> (Horsfield)	チドリ	シギ	VU	EN		76
エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	NT	VU		100
オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)	フクロウ	フクロウ	NT	NT		105
オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i> (Gray)	チドリ	シギ	EN	CR	NT	66
オオツリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	NT	VU	VU	94
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	タカ	タカ	NT	NT	NT	104
オグロシギ	<i>Limosa limosa</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	VU	VU		73
オバシギ	<i>Calidris tenuirostris</i> (Horsfield)	チドリ	シギ	NT	NT		97
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> Linnaeus	カッコウ	カッコウ	NT	VU		88
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus	ツル	クイナ	NT	NT		87
クロツラヘラサギ	<i>Platalea minor</i> Temminck et Schlegel	ベリカン	トキ	CR		EN	62
ケリ	<i>Vanellus cinereus</i> (Blyth)	チドリ	チドリ		国リスト	DD	110
コアシサシ	<i>Sterna albifrons</i> Pallas	チドリ	カモメ	VU	EN	VU	78
コイカル	<i>Eophona migratoria</i> Hartert	スズメ	アトリ	VU			85
コオバシギ	<i>Calidris canutus</i> Linnaeus	チドリ	シギ	NT	VU		98
コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i> Laxmann	スズメ	ツバメ	VU			84
コノハズク	<i>Otus scops</i> (Hodgson)	フクロウ	フクロウ	EN	CR		69
サシバ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	タカ	タカ	VU	VU	VU	81
サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	スズメ	サンショウクイ	NT	国リスト	VU	106
シベリアオオハシシギ	<i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth)	チドリ	シギ	DD	CR	DD	108
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	チドリ	チドリ	NT	VU	VU	90
ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i> (Swinhoe)	チドリ	カモメ	VU	EN	VU	77
セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus)	チドリ	セイタカシギ	NT	VU	VU	92
ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	NT	VU		95
タカブシギ	<i>Tringa glareola</i> Linnaeus	チドリ	シギ	VU	EN	VU	75
タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	チドリ	タマシギ	EN	EN	VU	68
チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i> (Wagler)	ベリカン	サギ	NT	国リスト	NT	86
チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	タカ	タカ	VU	CR	EN	80
ツミ	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck et Schlegel)	タカ	タカ	NT	NT		102
ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i> (Pallas)	チドリ	シギ	EN	EN	VU	67
トモエガモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	カモ	カモ	VU	VU	VU	71
バシコ	<i>Emberiza sulphurata</i> Temminck et Schlegel	スズメ	ホオジロ	DD	CR	NT	109
ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus)	タカ	タカ	NT	国リスト	NT	103
ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	タカ	タカ	VU	VU	NT	79
ハマシギ	<i>Calidris alpina</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	NT	NT	NT	99
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	ハヤブサ	ハヤブサ	VU	VU	VU	83
ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	ツル	クイナ	VU	VU	NT	72
フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas	フクロウ	フクロウ	EN	NT		70
ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus)	チドリ	シギ	VU	VU	VU	74

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus)	タカ	ミサゴ	NT	VU	NT	101
ミソゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	ベリカン	サギ	EN	EN	VU	65
メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus</i> Pallas	チドリ	チドリ	NT			91
ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus	チドリ	シギ	NT	NT		93
ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	ベリカン	サギ	EN	CR	NT	64
ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	ヨタカ	ヨタカ	CR	EN	NT	63

(3) は虫類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i> (Gray)	カメ	イシガメ	DD			122
シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie)	有鱗	ナミヘビ	NT			121
シロマダラ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)	有鱗	ナミヘビ	VU	DD		119
ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel)	カメ	イシガメ	VU	NT	NT	117
ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i> (Wiegmann)	カメ	スッポン	DD	DD	DD	123
ニホンマムシ	<i>Gloydius blomhoffii</i> (Boie)	有鱗	クサリヘビ	DD			124
ヒバカリ	<i>Amphisma vibakari vibakari</i> (Boie)	有鱗	ナミヘビ	VU			118
ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i> (Boie)	有鱗	ナミヘビ	VU	DD		120

(4) 両生類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie)	有尾	イモリ	CR	DD	NT	129
アズマヒキガエル	<i>Bufo japonicus formosus</i> Boulenger	無尾	ヒキガエル	VU			134
カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck et Schlegel)	有尾	サンショウウオ	CR	EN	VU	128
シュレーゲルアオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i> (Gunther)	無尾	アオガエル	CR			132
ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel)	無尾	アカガエル	CR	DD		130
トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell)	無尾	アカガエル	VU	国リスト	NT	135
ナゴヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i> (Ito)	無尾	アカガエル	CR	VU	EN	131
ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger	無尾	アカガエル	EN			133

(5) 魚 類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
アカザ	<i>Liobagrus reinii</i> Hilgendorf	ナマズ	アカザ	CR	NT	VU	146
アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i> (Temminck et Schlegel)	サケ	アユ	VU			159
ウキゴリ	<i>Gymnogobius urotaenia</i> (Hilgendorf)	スズキ	ハゼ	NT			166
ウシモンゴ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	コイ	コイ	DD	CR	CR	169
ウツセミカジカ	<i>Cottus reinii</i> Hilgendorf	スズキ	カジカ	EN	VU	EN	153
エドハゼ	<i>Gymnogobius macrognathos</i> Bleeker	スズキ	ハゼ	EN	NT	VU	156
カマキリ(アユカケ)	<i>Cottus kazika</i> Jordan et Starks	スズキ	カジカ	EN	EN	VU	152
カワアナゴ	<i>Eleotris oxycephala</i> Temminck et Schlegel	スズキ	カワアナゴ	VU	NT		162
カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	コイ	コイ	CR	EN	EN	142
カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)	コイ	コイ	DD	CR	NT	170
カワムツ	<i>Candidia temminckii</i> (Temminck et Schlegel)	コイ	コイ	EN			150
クルマサヨリ	<i>Hyporhamphus intermedius</i> (Cantor)	ダツ	サヨリ	DD	DD	NT	172
コイ(在来型)	<i>Cyprinus carpio</i> Linnaeus	コイ	コイ	DD	DD		167
サツキマス・アマゴ	<i>Oncorhynchus masou ishikawae</i> Jordan et McGregor	サケ	サケ	DD	DD	NT	171
シラウオ	<i>Salangichthys microdon</i> (Bleeker)	サケ	シラウオ	VU	VU		160
スナヤツメ類	<i>Lethenteron</i> sp.	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	CR	EN	VU	141
スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i> (Rendahl)	スズキ	ハゼ	NT			165
ゼゼラ	<i>Biwia zezera</i> (Ishikawa)	コイ	コイ	VU	NT	VU	157
タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i> (Temminck et Schlegel)	コイ	コイ	NT			163
トウカイコガスジシマドジョウ	<i>Cobitis minamorii tokaiensis</i> Nakajima	コイ	ドジョウ	CR	EN	EN	144
トウカイヨシノボリ	<i>Rhinogobius</i> sp. TO	スズキ	ハゼ	CR	CR	NT	148
ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> (Cantor)	コイ	ドジョウ	VU	VU	DD	158
トビハゼ	<i>Periophthalmus modestus</i> Cantor	スズキ	ハゼ	EN	VU	NT	154
ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)	スズキ	ドンコ	CR	EN		147
ナマズ	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus	ナマズ	ナマズ	NT			164
ニシシマドジョウ	<i>Cobitis</i> sp. BIWAE type B	コイ	ドジョウ	EN	VU		151
ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	ウナギ	ウナギ	EN	EN	EN	149
スナムツ	<i>Candidia sieboldii</i> (Temminck et Schlegel)	コイ	コイ	DD			168
ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson	コイ	ドジョウ	CR	EN	EN	145
マサゴハゼ	<i>Pseudogobius masago</i> (Tomiyama)	スズキ	ハゼ	EN	VU	VU	155
ミナメダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	メダカ	メダカ	VU	NT	VU	161
ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	コイ	コイ	CR	CR	NT	143

(6) 昆虫類

種名	学名	目名	科名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i> Selys	トンボ	カワトンボ	EX	国リスト	NT	179
アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	トンボ	ヤンマ	VU	EN	NT	242
アカジマアシブトウンカ	<i>Ommatidiotus japonicus</i> Y.Hori	カメムシ	アカジマウンカ	EN	NT		221
アカマダラハナムグリ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	コウチュウ	コガネムシ	EN	NT	DD	230
アトジロキリガ	<i>Dioszeghyana mirabilis</i> (Sugi)	チョウ	ヤガ	NT			309
アヤコバネナミシヤク	<i>Acasis bellaria</i> (Leech)	チョウ	シヤクガ	VU			255
アリツカコオロギの一種	<i>Myrmecophilus</i> sp.	バッタ	アリツカコオロギ	DD			317
イグチケブカゴミムシ	<i>Peronomerus auripilis</i> Bates	コウチュウ	オサムシ	NT		NT	286
イチモンジチョウ	<i>Limenitis camilla japonica</i> Ménétrières	チョウ	タテハチョウ	VU			262
イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	カメムシ	イトアメンボ	CR	VU	VU	200
イボタガ	<i>Brahmaea japonica</i> Butler	チョウ	イボタガ	NT			301
ウスバカマキリ	<i>Mantis religiosa</i> Linnaeus	カマキリ	カマキリ	国リスト		DD	334
ウスミモンキリガ	<i>Eupsilia contracta</i> (Butler)	チョウ	ヤガ	NT	国リスト	NT	307
ウラギンシジミ	<i>Argyrogonome laodice japonica</i> (Ménétrières)	チョウ	タテハチョウ	EN	NT	VU	237
ウラギンシジミ	<i>Fabriciana adippe pallescens</i> (Butler)	チョウ	タテハチョウ	EN			238
ウラクロシジミ	<i>Iratsume orsedice orsedice</i> (Butler)	チョウ	シジミチョウ	VU	NT		261
ウラゴマダラシジミ	<i>Artopoetes pryri pryri</i> (Murray)	チョウ	シジミチョウ	NT			312
ウラナミシヤノメ	<i>Ypthima multistriata nipponica</i> Murayama	チョウ	タテハチョウ	CR	VU	VU	212
エサキアメンボ	<i>Limnopus esakii</i> (Miyamoto)	カメムシ	アメンボ	EN	NT	NT	223
エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)	トンボ	エゾトンボ	EN	VU		217
エチゴツクリゴミムシ	<i>Oodes echigonus</i> Habu et Baba	コウチュウ	オサムシ	EX		NT	188
エンスイミズメイガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu	チョウ	ツトガ	EN	DD		235
オオアメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	カメムシ	アメンボ	EN	NT		222
オオイトンボ	<i>Paracerion sieboldii</i> (Selys)	トンボ	イトトンボ	VU	EN		240
オオウラギンシジミ	<i>Fabriciana nerippe</i> (C.Felder et R.Felder)	チョウ	タテハチョウ	EX	EX	CR	195
オオキトンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	トンボ	トンボ	CR	CR	EN	198
オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	コウチュウ	クワガタムシ	CR	CR	VU	206
オオゴキブリ	<i>Panesthia angustipennis spadica</i> (Shiraki)	ゴキブリ	オオゴキブリ	NT	NT		273
オオシモフリズメ	<i>Langia zenzeroides nawai</i> Rothschild et Jordan	チョウ	スズメガ	DD			330
オオシロカミキリ	<i>Olenecamptus cretaceus cretaceus</i> Bates	コウチュウ	カミキリムシ	CR			209
オオチャバネヨトウ	<i>Nonagria puengeleri</i> (Schawerda)	チョウ	ヤガ	EN	NT	VU	236
オオヒョウダンゴミムシ	<i>Scarites sulcatus</i> Olivier	コウチュウ	オサムシ	CR	VU	NT	203
オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> (Modeer)	コウチュウ	ミズスマシ	NT	NT	NT	291
オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i> Asahina	トンボ	サナエトンボ	EN	VU	NT	213
オナガミズアオ	<i>Actias gnoma gnoma</i> (Butler)	チョウ	ヤママユガ	NT	国リスト	NT	300
カギアシゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kono)	コウチュウ	ゾウムシ	DD	DD		328
カギモンハナオアイツバ	<i>Cidariplura signata</i> (Butler)	チョウ	ヤガ	DD	国リスト	NT	332
ガマヨトウ	<i>Capsula aerata</i> (Butler)	チョウ	ヤガ	VU		VU	257
ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	コウチュウ	ガムシ	EN		NT	228
カワラゴミムシ	<i>Omophron aequale</i> Morawitz	コウチュウ	カワラゴミムシ	CR	NT		201
カワラハナムシ	<i>Cicindela laetescripta</i> Motschulsky	コウチュウ	ハナムシ	EX	CR	EN	186
キイロサナエ	<i>Asiagomphus pryri</i> (Selys)	トンボ	サナエトンボ	EN	NT	NT	216
キイロヤマトンボ	<i>Macromia daijoi</i> Okumura	トンボ	ヤマトンボ	EX	NT	NT	181
キシタアツバ	<i>Hypena claripennis</i> (Butler)	チョウ	ヤガ	NT	国リスト	NT	303
キスジウスキヨトウ	<i>Capsula sparganii</i> (Esper)	チョウ	ヤガ	VU	NT	VU	258
キトンボ	<i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)	トンボ	トンボ	EN	EN		218
ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	チョウ	アゲハチョウ	CR	VU	VU	211
キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	コウチュウ	ゲンゴロウ	NT		NT	289
キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria livida angulata</i> Banninger	コウチュウ	オサムシ	EX	CR	EN	187
キボシチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Motschulsky)	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	EN	NT	EN	226
クツワムシ	<i>Mecopoda niponensis</i> (de Haan)	バッタ	クツワムシ	EN			219
クロエンマムシ	<i>Hister concolor</i> Lewis	コウチュウ	エンマムシ	DD	DD		326
クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	コウチュウ	ゲンゴロウ	CR	VU	NT	205
クロボシコガシラミズムシ	<i>Haliphus basinotatus latiusculus</i> Nakane	コウチュウ	コガシラミズムシ	VU		VU	247
クロマダラタマムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (E.Saunders)	コウチュウ	タマムシ	EN	VU		231
クワトゲエダシヤク	<i>Apoclima excavata</i> (Dyar)	チョウ	シヤクガ	NT		NT	299
ゲンゴロウ	<i>Cybister chinensis</i> Motschulsky	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	EN	VU	189
ゲンジボタル	<i>Luciola cruciata</i> Motschulsky	コウチュウ	ホタル	EN			232
コウベツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus kobensis</i> Sharp	コウチュウ	ゲンゴロウ	NT		NT	288
コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i> Vuillefroy	カメムシ	コオイムシ	DD	国リスト	NT	319
コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp	コウチュウ	ミズスマシ	VU	NT	VU	250
コガタガムシ	<i>Hydrophilus bilineatus cashimirensis</i> Redtenbacher	コウチュウ	ガムシ	DD		VU	325
コガタノゲンゴロウ	<i>Cybister tripunctatus lateralis</i> (Fabricius)	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	EX	VU	190
コカブトムシ	<i>Eophileurus chinensis chinensis</i> (Faldernmann)	コウチュウ	コガネムシ	NT			294
コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	コウチュウ	ガムシ	DD		DD	324
コシボソヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i> (Selys)	トンボ	ヤンマ	NT			267
コンシタバ	<i>Catocala actaea</i> Felder et Rogenhofer	チョウ	ヤガ	NT		NT	305
コバネアオイトトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	トンボ	アオイトトンボ	EX	CR	EN	178
コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamatoris</i> (Scott)	カメムシ	コバンムシ	CR	CR	EN	199
ゴマフツトガ	<i>Chilo pulveratus</i> (Wileman et South)	チョウ	ツトガ	VU		NT	254
コミズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i> Motschulsky	コウチュウ	ミズスマシ	EN	EN	EN	227
コロギス	<i>Prosopogryllacris japonica</i> (Matsumura et Shiraki)	バッタ	コロギス	NT			276
サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryri</i> (Martin)	トンボ	ヤンマ	NT			266
シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringii</i> Clark	コウチュウ	ゲンゴロウ	VU	NT	NT	249
ジャコウアゲハ	<i>Atrophaneura alcinous alcinous</i> (Klug)	チョウ	アゲハチョウ	NT			310
ジャノメチョウ	<i>Minois dryas bipunctata</i> (Motschulsky)	チョウ	タテハチョウ	NT			314
シルビアシジミ	<i>Zizina emelina emelina</i> (de l'Orza)	チョウ	シジミチョウ	EX	EX	EN	194
シロヘリツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	カメムシ	ツチカメムシ	NT		NT	285

種名	学名	目名	科名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
シワムネマルドロムシ	<i>Georissus kurosawai</i> Nakane	コウチュウ	マルドロムシ	DD			321
スジゲンゴロウ	<i>Hydaticus satoi</i> Wewalka	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	EX	EX	192
セグロイナゴ	<i>Shirakiacris shirakii</i> (Bolivar)	バッタ	バッタ	NT			278
セスジイトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i> (Brauer)	トンボ	イトンボ	NT			263
タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i> Scott	カメムシ	タイコウチ	NT			283
タイワントビナナフシ	<i>Sipylodea sipylus</i> (Westwood)	ナナフシ	トビナナフシ	DD			318
タガメ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	カメムシ	コオイムシ	EX	EN	VU	184
タバサナエ	<i>Trigomphus citimus tabei</i> Asahina	トンボ	サナエトンボ	VU	国リスト	NT	243
チッチゼミ	<i>Kosemia radiator</i> (Uhler)	カメムシ	ゼミ	VU			244
ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	チョウ	シロチョウ	NT	国リスト	EN	311
トウカイツマキリアツバ	<i>Tamba roseopurpurea</i> Sugi	チョウ	ヤガ	DD			331
トゲナナフシ	<i>Neohirasea japonica</i> (de Haan)	ナナフシ	トビナナフシ	NT			281
トゲナバブタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	カメムシ	ナバブタムシ	EX	EX	VU	185
トダセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus nakamurai</i> Guéorguiev	コウチュウ	ゲンゴロウ	DD	NT	VU	320
トビロアカガネトウ	<i>Euplexia albilineola</i> (Wileman et South)	チョウ	ヤガ	VU			259
トラフトンボ	<i>Epithea marginata</i> (Selys)	トンボ	エントンボ	NT	NT		271
ナゴヤサナエ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	トンボ	サナエトンボ	NT	NT	VU	269
ナナフシモドキ	<i>Ramulus mikado</i> (Rehn)	ナナフシ	ナナフシモドキ	NT			280
ヌマバウスキトウ	<i>Chilodes pacificus</i> Sugi	チョウ	ヤガ	VU		VU	256
ネアカヨシヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	トンボ	ヤンマ	VU	NT	NT	241
バシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys)	トンボ	トンボ	県リスト	NT		334
ハイイロボクトウ	<i>Phragmataecia castaneae</i> (Hübner)	チョウ	ボクトウガ	NT	国リスト	NT	298
ハウチウウンカ	<i>Trypetimorpha japonica</i> Ishihara	カメムシ	ゲンバウウンカ	EN		VU	220
ハッチョウトンボ	<i>Nannophya pygmaea</i> Rambur	トンボ	トンボ	NT			272
ハネナガイナゴ	<i>Oxya japonica</i> (Thunberg)	バッタ	バッタ	NT			279
ハネナシコロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i> (Matsumura et Shiraki)	バッタ	コロギス	NT			275
ハネビロエントンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	トンボ	エントンボ	DD	VU	VU	315
ハルゼミ	<i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)	カメムシ	ゼミ	NT			282
ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i> Thunberg	コウチュウ	ハンミョウ	VU			246
ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i> (Stichel)	チョウ	タテハチョウ	NT			313
ヒスメイトンボ	<i>Mortonagrion hirosei</i> Asahina	トンボ	イトンボ	EX	EN	EN	180
ヒメカマキリ	<i>Acromantis japonica</i> Westwood	カマキリ	ヒメカマキリ	NT			274
ヒメシジミガムシ	<i>Laccobius fragilis</i> Nakane	コウチュウ	ガムシ	DD			323
ヒメタイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki	カメムシ	タイコウチ	VU	NT		245
ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus arothius</i> Okada et Torii	チョウ	タテハチョウ	EX	CR	EN	196
ヒメボタル	<i>Luciola parvula</i> Kiesenwetter	コウチュウ	ホタル	NT			295
ヒラタクワガタ	<i>Serrognathus platymelus pilifer</i> (Snellen van Vollenhoven)	コウチュウ	クワガタムシ	NT			293
フシギキリタバ	<i>Catocala separans</i> Leech	チョウ	ヤガ	NT			304
フタスジサナエ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	トンボ	サナエトンボ	EN	VU	NT	214
フタモンマルクビゴミムシ	<i>Nebria pulcherima</i> Bates	コウチュウ	オサムシ	CR	CR	EN	202
ヘイケボタル	<i>Luciola lateralis</i> Motschulsky	コウチュウ	ホタル	EN			233
ペーヅヒラタカミキリ	<i>Euplynes batesi</i> Harold	コウチュウ	カミキリムシ	VU			253
ベッコウトンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	トンボ	トンボ	EX	CR	CR	183
ベニイトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i> Asahina	トンボ	イトンボ	VU	VU	NT	239
ホソクビツユムシ	<i>Shirakisotima japonica</i> (Matsumura et Shiraki)	バッタ	ツユムシ	DD			316
ホソバオビキリガ	<i>Dryobotodes angusta angusta</i> Sugi	チョウ	ヤガ	DD			333
ホソハンミョウ	<i>Cicindela gracilis</i> Pallas	コウチュウ	ハンミョウ	EN	VU	VU	224
ホンサナエ	<i>Shaogomphus postocularis</i> (Selys)	トンボ	サナエトンボ	EN			215
マエジロツトガ	<i>Pseudocatharylla infixella</i> (Walker)	チョウ	ツトガ	EN			234
マダラウスズミケンモン	<i>Hylonycta subornata</i> (Leech)	チョウ	ヤガ	NT	DD		306
マダラクワガタ	<i>Aesalus asiaticus asiaticus</i> Lewis	コウチュウ	クワガタムシ	DD			327
マダラコガシラミズムシ	<i>Halipilus sharpi</i> Wehncke	コウチュウ	コガシラミズムシ	EN	EN	VU	225
マダラシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus thermonectoides</i> Sharp	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	EX	CR	193
マダラナニワトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	トンボ	トンボ	EX	EN	EN	182
マメハンミョウ	<i>Epicauta gorhami</i> Marseul	コウチュウ	ツチハンミョウ	CR			207
マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	EX	VU	191
マルタンヤンマ	<i>Anaciaeschna martini</i> (Selys)	トンボ	ヤンマ	NT			268
マルチビゲンゴロウ	<i>Leiodytes frontalis</i> (Sharp)	コウチュウ	ゲンゴロウ	NT	NT	NT	287
マルヒラタガムシ	<i>Enochrus subsignatus</i> (Harold)	コウチュウ	ガムシ	NT		NT	290
ミズカマキリ	<i>Ranatra chinensis</i> Mayr	カメムシ	タイコウチ	NT			284
ミズジキリガ	<i>Jodia sericea</i> (Butler)	チョウ	ヤガ	NT		NT	308
ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	コウチュウ	ミズスマシ	VU	VU	VU	251
ミツノエンマコガネ	<i>Onthophagus tricornis</i> (Wiedemann)	コウチュウ	コガネムシ	VU			252
ミヤマセセリ	<i>Erynnis montana montana</i> (Bremer)	チョウ	セセリチョウ	VU			260
ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	チョウ	セセリチョウ	CR	EN		210
ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i> (Selys)	トンボ	ムカシヤンマ	CR			197
ムスジイトンボ	<i>Paracercion melanotum</i> (Selys)	トンボ	イトンボ	NT			264
ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	<i>Canthydrus politus</i> (Sharp)	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	CR	NT	VU	204
メガネサナエ	<i>Stylurus oculatus</i> (Asahina)	トンボ	サナエトンボ	NT	NT	VU	270
モートンイトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	トンボ	イトンボ	NT	NT	NT	265
ヤネホソバ	<i>Eilema fuscodorsalis</i> (Matsumura)	チョウ	ヒトリガ	NT		NT	302
ヤホシホソマダラ	<i>Balataea octomaculata</i> (Bremer)	チョウ	マダラガ	DD		NT	329
ヤマトエンマムシ	<i>Hister japonicus</i> Marseul	コウチュウ	エンマムシ	NT			292
ヤマトオサムシダマシ	<i>Blaps japonensis</i> Marseul	コウチュウ	ゴミムシダマシ	NT		NT	297
ヤマトヒメメダカカッコムシ	<i>Neohydus hozumii</i> Nakane	コウチュウ	カッコムシ	NT			296
ヤマトフキバッタ	<i>Parapodisma setouchiensis</i> Inoue	バッタ	バッタ	NT			277
ヤマトホソガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	コウチュウ	ホソガムシ	DD	NT	NT	322
ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	コウチュウ	シデムシ	EN	VU	NT	229
ヨツボシカミキリ	<i>Stenogrinus quadrinotatum</i> Bates	コウチュウ	カミキリムシ	CR	EN	EN	208
ルイスツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus lewisius</i> Sharp	コウチュウ	ゲンゴロウ	VU		VU	248

(7) クモ類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
アカイトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand	クモ	コガネグモ	VU	NT		349
エビチャコモリグモ	<i>Arctosa ebicha</i> Yaginuma	クモ	コモリグモ	VU	EN		352
オオトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa	クモ	コガネグモ	NT	NT		360
オビシガバチグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong	クモ	ネコグモ	VU	VU		355
オビボソカニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono	クモ	カニグモ	VU	VU		356
カコウコモリグモ	<i>Pardosa nojimai</i> Tanaka	クモ	コモリグモ	CR	VU		343
カネコトタテグモ	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L.Koch)	クモ	カネコトタテグモ	CR	VU	NT	340
キシノウエトタテグモ	<i>Latouchia typica</i> (Kishida)	クモ	トタテグモ	CR	VU	NT	341
キノボリトタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	クモ	トタテグモ	EN	VU	NT	345
ギボシヒメグモ	<i>Chrysso albipes</i> (S.Saito)	クモ	ヒメグモ	NT			357
クリチャササグモ	<i>Oxyopes licenti</i> Schenkel	クモ	ササグモ	VU			353
ゲホウグモ	<i>Polys illepidus</i> C.L.Koch	クモ	コガネグモ	VU	NT		351
コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L.Koch	クモ	コガネグモ	NT	NT		359
シロオビトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand	クモ	コガネグモ	VU	NT		348
シロスジグモ	<i>Runcinia affinis</i> Simon	クモ	カニグモ	DD			367
スズミグモ	<i>Cyrtophora ikomosanensis</i> (Bösenberg et Strand)	クモ	コガネグモ	NT			362
チビクロヨウグモ	<i>Meta nigridorsalis</i> Tanikawa	クモ	アシナガグモ	DD			365
テジロハリグコモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa	クモ	コモリグモ	CR	EN		344
トゲグモ	<i>Gasteracantha kuhli</i> C. L. Koch	クモ	コガネグモ	VU	VU		350
トリノフンダマン	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)	クモ	コガネグモ	NT	NT		361
ハマキフクログモ	<i>Clubiona japonicola</i> Bösenberg et Strand	クモ	フクログモ	NT			363
ハヤテグモ	<i>Perenethis fascigera</i> (Bösenberg et Strand)	クモ	キシダグモ	EN			347
ヒゲナガツヤグモ	<i>Micaria dives</i> (Lucas)	クモ	ワシグモ	NT			364
ビジョオニグモ	<i>Araneus mitificus</i> (Simon)	クモ	コガネグモ	NT			358
ミナミコモリグモ	<i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)	クモ	コモリグモ	EN	VU		346
ムツトゲイセキグモ	<i>Ordgarius sexspinosus</i> (Thorell)	クモ	コガネグモ	CR	EN		342
ムロズミシグモ	<i>Takeoa nishimurai</i> (Yaginuma)	クモ	スオウグモ	DD	DD		366
ヤギヌマフクログモ	<i>Clubiona yaginumai</i> Hayashi	クモ	フクログモ	VU			354
ワスレナグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	クモ	ジグモ	CR	VU	NT	339

(8) カニ類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
アカテガニ	<i>Chiromantes haematocheir</i> (De Haan)	十脚	イワガニ	VU			374
ウモレベンケイガニ	<i>Clistocoeloma sinensis</i> Shen	十脚	イワガニ	VU			377
クシテガニ	<i>Parasesarma plicatum</i> (Latreille)	十脚	イワガニ	VU			375
コメツキガニ	<i>Scopimera globosa</i> De Haan	十脚	スナガニ	NT			380
サメハダヘイケガニ	<i>Paradorippe granulata</i> (De Haan)	十脚	ヘイケガニ	NT			378
サワガニ	<i>Geothelphusa dehaani</i> (White)	十脚	サワガニ	EN			373
チゴガニ	<i>Ilyoplax pusilla</i> (De Haan)	十脚	スナガニ	NT			381
ハクセンシオマネキ	<i>Uca (Celuca) lactea lactea</i> (De Haan)	十脚	スナガニ	EN		VU	372
モクズガニ	<i>Eriocheir japonicus</i> (De Haan)	十脚	イワガニ	NT			379
ユビアカベンケイガニ	<i>Parasesarma acis</i> Davie	十脚	イワガニ	VU			376

(9) 貝 類

種名	学名	目名	科名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
アオサギガイ	<i>Psammotreta (Pseudomitris) praeupta</i> (Salisbury)	マルスダレガイ	ニッコウガイ	CR	CR		410
アゲマキ	<i>Sinonovacula lamarcki</i> Huber	マルスダレガイ	ナタマメガイ	EX	EX	CR+EN	390
イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (Martens)	イシガイ	イシガイ	CR	CR		406
イセシラガイ	<i>Anodontia bialata</i> (Pilsbry)	マルスダレガイ	ツキガイ	CR	CR	CR+EN	408
イノシジミ	<i>Nuttallia japonica</i> (Reeve)	マルスダレガイ	シオサザナミガイ	NT			461
イソチドリ	<i>Amathina tricarinata</i> (Linnaeus)	異旋	イソチドリガイ	CR	CR	CR+EN	401
イチウシラトリ	<i>Tellina (Serratina) capsoides</i> Lamarck	マルスダレガイ	ニッコウガイ	EX	EX	CR+EN	389
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguiera)	盤足(ニナ)	ウミニナ	CR	CR	VU	397
イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (Lamarck)	古腹足(オキナエビス)	ニシキウズガイ	CR	CR	NT	391
イヨスダレガイ	<i>Paphia (Neotapes) undulata</i> (Born)	マルスダレガイ	マルスダレガイ	VU	VU		434
ウエジマシジミ	<i>Pisidium (Odhneripisidium) uejii</i> Mori	マルスダレガイ	マシジミ	EN			425
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i> (Reeve)	マルスダレガイ	フナガタガイ	NT	国リスト	NT	463
ウミタケ	<i>Barnea (Umitakea) japonica</i> (Yokoyama)	オオノガイ	ニオガイ	CR	CR	VU	417
ウミニナ	<i>Batillaria multiiformis</i> (Lischke)	盤足(ニナ)	ウミニナ	CR	NT	NT	396
ウメムシタラ	<i>Coneuplecta (Sitalina) japonica</i> Habe	柵脚(マイマイ)	ベッコウマイマイ	NT	NT	NT	450
ウラガミ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) penicillata</i> (Reeve)	マルスダレガイ	マルスダレガイ	CR	CR	CR+EN	413
エドガワミズゴマツボ (ウミゴマツボ)	<i>Stenothyra edogawaensis</i> (Yokoyama)	盤足(ニナ)	ミズゴマツボ	NT	NT	NT	439
オオウエキビ	<i>Trochcholamys fraterna</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	ベッコウマイマイ	DD	国リスト	DD	469
オオケマイマイ	<i>Aegista vulgiva</i> (Schmacker et Bottger)	柵脚(マイマイ)	オナジマイマイ	NT			454
オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (Martens)	盤足(ニナ)	タニシ	VU	国リスト	NT	427
オオノガイ	<i>Mya (Arenoma) onogai</i> Makiyama	オオノガイ	オオノガイ	NT	NT	NT	465
オカミガイ	<i>Elliptium chinense</i> (Pfeiffer)	基脚(モノアラガイ)	オカミガイ	CR	EN	VU	403
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)	マルスダレガイ	マルスダレガイ	NT			464
オリイレボラ	<i>Trigonostoma scalariformis</i> (Lamarck)	新腹足	コモロガイ	EN	EN	VU	418

種名	学名	目名	科名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
カキウラクチキレモドキ	<i>Brachystomia bipyrnidata</i> (Nomura)	異旋	トウガタガイ	NT	NT		445
カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithiopsis) djadjariensis</i> (K.Martin)	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	CR	CR	VU	399
カワグチツボ	<i>Iravadia (Fluviocingula) elegantula</i> (A. Adams)	盤足(ニナ)	ワカウラツボ	NT	NT	NT	438
カワネジガイ	<i>Camptoceras hirasei</i> Walker	基脚(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	EX	EX	CR+EN	387
ギヌカツギハマシイノミガイ	<i>Melampus (Melampus) singaporensis</i> Pfeiffer	基脚(モノアラガイ)	オカミミガイ	CR	CR	VU	402
クシケマスオガイ	<i>Venatomya truncata</i> (Gould)	オオノガイ	オオノガイ	CR	EN	NT	416
クワイロカワザンショウ	<i>Angustassiminea castanea</i> (Westerlund)	盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	NT	NT	NT	440
クレハガイ	<i>Papyriscala latifasciata</i> (Sowerby)	翼舌	イトカケガイ	NT	NT	NT	444
ゴイサギガイ	<i>Macoma tokyoensis</i> Makiyama	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT			458
ユベソマイマイ	<i>Satsuma myomphala</i> (Martens)	柵脚(マイマイ)	ナンバンマイマイ	NT			452
サクラガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> (Habe)	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT	NT	NT	460
サザナミツボ	<i>Elachisime ziczac</i> Fukuda et Ekawa	盤足(ニナ)	サザナミツボ	CR	EN	NT	394
サビシラトリ	<i>Macoma contabulata</i> (Deshayes)	マルスダレガイ	ニッコウガイ	EN	EN	NT	424
セキモリ	<i>Papyriscala yokoyamai</i> (Suzuki et Ichikawa)	翼舌	イトカケガイ	NT	NT	NT	443
ソトオリガイ	<i>Laternula marilina</i> (Reeve)	ウミタケガイモドキ	オキナガイ	NT	NT		466
タイラギ	<i>Atrina pictinata</i> (Linnaeus)	ウグイスガイ	ハボウキガイ	NT		NT	455
タガイ	<i>Anodonta japonica</i> Clessin	イシガイ	イシガイ	CR	NT		405
タクミナ	<i>Eucharilda sinensis</i> (Fischer)	異旋	タクミナ	CR	CR		400
タワラガイ	<i>Sinoennea iwakawa</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	タワラガイ(ネジレガイ)	NT			448
ツキガイモドキ	<i>Lucinoma annulatum</i> (Reeve)	マルスダレガイ	ツキガイ	NT	NT		456
ツブカワザンショウ	<i>Assiminea estuarina</i> Habe	盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	NT	NT	NT	441
ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	オカモノアラガイ	EN	NT	NT	421
ナミギセル	<i>Stereophaedusa japonica japonica</i> (Crosse)	柵脚(マイマイ)	キセルガイ	EN			420
ナラビオカミミガイ	<i>Auriculastra duplicata</i> (Pfeiffer)	基脚(モノアラガイ)	オカミミガイ	CR	CR	VU	404
ニッポンマイマイ	<i>Satsuma japonica</i> (Pfeiffer)	柵脚(マイマイ)	ナンバンマイマイ	NT			453
スカルミクチキレ(未記載種)	<i>Seyella</i> sp.	異旋	トウガタガイ	VU	VU	NT	431
ヌマガイ	<i>Anodonta lauta</i> Martens	イシガイ	イシガイ	EN	NT		423
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	フネガイ	フネガイ	EX	EX	VU	388
ハナグモリ	<i>Glauconome chinensis</i> Gray	マルスダレガイ	ハナグモリ	CR	CR	VU	411
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)	マルスダレガイ	マルスダレガイ	CR	VU	VU	414
ヒゼンキビ	<i>Parakaliella hizenensis</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	ベッコウマイマイ	VU	DD	NT	432
ヒダリマキゴマガイ	<i>Diplommantina (Sinica) pusilla</i> (Martens)	盤足(ニナ)	ゴマガイ	NT			437
ヒナタムシヤドリカワザンショウ	<i>Assiminea parasitologica</i> Kuroda	盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	NT	NT	NT	442
ヒナツボ	<i>Berthais egregia</i> (A. Adams)	盤足(ニナ)	シロネズミガイ	DD			467
ヒメカサキビ	<i>Trochochlamys subrenulata</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	ベッコウマイマイ	NT	NT	NT	449
ヒメシラトリ	<i>Macoma incongrua</i> (Martens)	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT			457
ヒメマスオガイ	<i>Cryptomya busoensis</i> Yokoyama	オオノガイ	オオノガイ	CR	EN	VU	415
ヒラベッコウガイ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i> (Pilsbry)	柵脚(マイマイ)	ベッコウマイマイ	NT	DD	DD	451
ヒラマキガイモドキ	<i>Polypylis hemisphaerula</i> (Benson)	基脚(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	NT	NT	NT	447
ヒラマキミズマイマイ	<i>Gyraulus chinensis</i> Dunker	基脚(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	NT	DD	DD	446
ヒルゲンドルフマイマイ	<i>Trishoplita hilgendorfi</i> (Kobelt)	柵脚(マイマイ)	オナジマイマイ	EN	NT	NT	422
ビロウドマイマイ属の一種	<i>Nipponochloritis</i> sp.	柵脚(マイマイ)	ナンバンマイマイ	VU			433
ヒロクチカノコ	<i>Neripteron</i> sp.	アマオブネガイ	アマオブネガイ	VU	VU	NT	426
フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A.Adams	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	VU	NT	NT	429
ヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithiopsis) cingulata</i> (Gmelin)	盤足(ニナ)	フトヘナタリ	CR	NT	NT	398
マゴコロガイ	<i>Peregrinamor oshimai</i> Shoji	マルスダレガイ	カワホトギスガイ	CR	CR	NT	407
マシジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	マルスダレガイ	シジミ	CR	VU	VU	412
マテガイ	<i>Solen (Solen) gordonis</i> Yokoyama	マルスダレガイ	マテガイ	NT	NT		462
マメタニシ	<i>Parafossarulus mauchuricus japonicus</i> (Pilsbry)	盤足(ニナ)	エゾマメタニシ	CR	DD	VU	393
マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)	盤足(ニナ)	タニシ	CR	NT	VU	392
ミジンマイマイ	<i>Vallonia pulchellura</i> (Heude)	柵脚(マイマイ)	ミジンマイマイ	DD			468
ミジンヤマタニシ	<i>Nakadaella micron</i> (Pilsbry)	盤足(ニナ)	ヤマタニシ	NT			436
ムシロガイ	<i>Niotha livescens</i> (Philippi)	新腹足	オリレイヨウバイ	VU	VU	NT	430
モノアラガイ	<i>Randix auricularia japonica</i> Jay	基脚(モノアラガイ)	モノアラガイ	EN	NT	NT	419
ヤチヨノハナガイ	<i>Raeta pellicula</i> (Deshayes)	マルスダレガイ	バカガイ	CR	CR	CR+EN	409
ヤマタニシ	<i>Cyclophorus herklotsi</i> Martens	盤足(ニナ)	ヤマタニシ	NT			435
ユウシオガイ	<i>Moerella rutila</i> (Dunker)	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT	NT	NT	459
ヨシダカワザンショウ	<i>Angustassiminea yoshidayukioi</i> Kuroda	盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	CR	VU	NT	395
ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fairbankia) sakaguchii</i> (Kuroda et Habe)	盤足(ニナ)	ワカウラツボ	VU	VU	VU	428

【 索引（分類順）】

（１）哺乳類

目、科、種の配列は原則として「The Wild Mammals of Japan」（SHOUKADOH Book Sellers, 2009）、
「日本の哺乳類〔改訂 2 版〕」（東海大学出版会, 2008）に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
トガリネズミ	トガリネズミ	ニホンベジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck)	CR			34
トガリネズミ	モグラ	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck	EN			45
トガリネズミ	モグラ	コウベモグラ	<i>Mogera wogura</i> (Temminck)	VU	LP		47
翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)	CR	NT		35
翼手(コウモリ)	オヒキコウモリ	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth)	DD	DD	VU	51
霊長(サル)	オナガザル	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth)	DD			52
齧歯(ネズミ)	キヌゲネズミ	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)	CR	NT		36
齧歯(ネズミ)	ネズミ	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)	EN	VU		46
齧歯(ネズミ)	ネズミ	アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck)	VU			48
齧歯(ネズミ)	リス	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck	CR	NT		37
齧歯(ネズミ)	リス	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)	CR	NT		38
ウサギ	ウサギ	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck	CR	NT		39
食肉(ネコ)	イヌ	アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus)	CR			40
食肉(ネコ)	イヌ	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray)	NT			49
食肉(ネコ)	イヌ	オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	EX	EX	EX	32
食肉(ネコ)	イタチ	ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck	CR			42
食肉(ネコ)	イタチ	ニホンテン	<i>Martes melampus</i> (Wagner)	CR	NT		41
食肉(ネコ)	イタチ	ニホンアナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck	CR	DD		43
偶蹄(ウシ)	シカ	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck	EX			33
偶蹄(ウシ)	イノシシ	イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus	DD			53
偶蹄(ウシ)	ウシ	カモシカ	<i>Capricornis crispus</i> (Temminck)	NT			50
クジラ	ネズミイルカ	スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i> (G. Cuvier)	CR	NT		44

（２）鳥 類

目及び科の範囲、名称、配列は「日本鳥類目録 改訂第 7 版」（日本鳥学会, 2012）に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
キジ	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	DD	EN	VU	107
カモ	カモ	トモエガモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	VU	VU	VU	71
ペリカン	サギ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	EN	CR	NT	64
ペリカン	サギ	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	EN	EN	VU	65
ペリカン	サギ	チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i> (Wagler)	NT	国リスト	NT	86
ペリカン	トキ	クロツラヘラサギ	<i>Platalea minor</i> Temminck et Schlegel	CR		EN	62
ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus	NT	NT		87
ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	VU	VU	NT	72
カッコウ	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> Linnaeus	NT	VU		88
ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	CR	EN	NT	63
チドリ	チドリ	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i> (Blyth)		国リスト	DD	110
チドリ	チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i> Gray et Gray	NT	VU		89
チドリ	チドリ	シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	NT	VU	VU	90
チドリ	チドリ	メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus</i> Pallas	NT			91
チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus)	NT	VU	VU	92
チドリ	シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus	NT	NT		93
チドリ	シギ	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i> (Gray)	EN	CR	NT	66
チドリ	シギ	シベリアオオハシシギ	<i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth)	DD	CR	DD	108
チドリ	シギ	オグロシギ	<i>Limosa limosa</i> (Linnaeus)	VU	VU		73
チドリ	シギ	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus)	NT	VU	VU	94
チドリ	シギ	ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i> (Linnaeus)	NT	VU		95
チドリ	シギ	ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus)	VU	VU	VU	74
チドリ	シギ	ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i> (Pallas)	EN	EN	VU	67
チドリ	シギ	アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i> (Linnaeus)	NT	VU	VU	96
チドリ	シギ	タカブシギ	<i>Tringa glareola</i> Linnaeus	VU	EN	VU	75
チドリ	シギ	オハシシギ	<i>Calidris tenuirostris</i> (Horsfield)	NT	NT		97
チドリ	シギ	コオハシシギ	<i>Calidris canutus</i> Linnaeus	NT	VU		98
チドリ	シギ	ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i> (Horsfield)	VU	EN		76
チドリ	シギ	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i> (Linnaeus)	NT	NT	NT	99
チドリ	シギ	エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i> (Linnaeus)	NT	VU		100
チドリ	タマシギ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	EN	EN	VU	68
チドリ	カモメ	ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i> (Swinhoe)	VU	EN	VU	77
チドリ	カモメ	コアシサシ	<i>Sterna albibrons</i> Pallas	VU	EN	VU	78
タカ	ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus)	NT	VU	NT	101
タカ	タカ	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	VU	VU	NT	79
タカ	タカ	チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	VU	CR	EN	80
タカ	タカ	ツミ	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck et Schlegel)	NT	NT		102
タカ	タカ	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus)	NT	国リスト	NT	103

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
タカ	タカ	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	NT	NT	NT	104
タカ	タカ	サシバ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	VU	VU	VU	81
フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)	NT	NT		105
フクロウ	フクロウ	コノハズク	<i>Otus scops</i> (Hodgson)	EN	CR		69
フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas	EN	NT		70
フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)	VU	EN		82
ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	VU	VU	VU	83
スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	NT	国リスト	VU	106
スズメ	ツバメ	コシアカツバメ	<i>Hirundo daurica</i> Laxmann	VU			84
スズメ	アトリ	コイカル	<i>Eophona migratoria</i> Hartert	VU			85
スズメ	ホオジロ	ノジロ	<i>Emberiza sulphurata</i> Temminck et Schlegel	DD	CR	NT	109

(3) は虫類

目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本爬虫両生類標準和名」(日本爬虫両棲類学会, 2014 改訂)に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
カメ	インガメ	クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i> (Gray)	DD			122
カメ	インガメ	ニホンインガメ	<i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel)	VU	NT	NT	117
カメ	スッポン	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i> (Wiegmann)	DD	DD	DD	123
有鱗	ナミヘビ	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie)	NT			121
有鱗	ナミヘビ	ヒバカリ	<i>Amphiesma vibakari vibakari</i> (Boie)	VU			118
有鱗	ナミヘビ	シロマダラ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)	VU	DD		119
有鱗	ナミヘビ	ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i> (Boie)	VU	DD		120
有鱗	クサリヘビ	ニホンマムシ	<i>Gloydus blomhoffii</i> (Boie)	DD			124

(4) 両生類

目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本爬虫両生類標準和名」(日本爬虫両棲類学会, 2014)に従った。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
有尾	サンショウウオ	カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck et Schlegel)	CR	EN	VU	128
有尾	イモリ	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie)	CR	DD	NT	129
無尾	ヒキガエル	アズマヒキガエル	<i>Bufo japonicus formosus</i> Boulenger	VU			134
無尾	アカガエル	ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger	EN			133
無尾	アカガエル	ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel)	CR	DD		130
無尾	アカガエル	ナゴヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i> (Ito)	CR	VU	EN	131
無尾	アカガエル	トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell)	VU	国リスト	NT	135
無尾	アオガエル	シュレーゲルアオガエル	<i>Rhacophorus schlegelii</i> (Gunther)	CR			132

(5) 魚 類

目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」(中坊徹次(編), 2013)に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	スナヤツメ類	<i>Lethenteron</i> sp.	CR	EN	VU	141
ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	EN	EN	EN	149
コイ	コイ	コイ(在来型)	<i>Cyprinus carpio</i> Linnaeus	DD	DD		167
コイ	コイ	ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	CR	CR	NT	143
コイ	コイ	カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	CR	EN	EN	142
コイ	コイ	カワムツ	<i>Candidia temminckii</i> (Temminck et Schlegel)	EN			150
コイ	コイ	ヌマムツ	<i>Candidia sieboldii</i> (Temminck et Schlegel)	DD			168
コイ	コイ	ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila</i> subsp.	DD	CR	CR	169
コイ	コイ	カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)	DD	CR	NT	170
コイ	コイ	タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i> (Temminck et Schlegel)	NT			163
コイ	コイ	ぜぜラ	<i>Biwia zezera</i> (Ishikawa)	VU	NT	VU	157
コイ	ドジョウ	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> (Cantor)	VU	VU	DD	158
コイ	ドジョウ	ニシンマドジョウ	<i>Cobitis</i> sp. BIWAE type B	EN	VU		151
コイ	ドジョウ	トウカイコガサジシマドジョウ	<i>Cobitis minamori tokaiensis</i> Nakajima	CR	EN	EN	144
コイ	ドジョウ	ホトケドジョウ	<i>Lefuia echigonia</i> Jordan et Richardson	CR	EN	EN	145
ナマズ	ナマズ	ナマズ	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus	NT			164
ナマズ	アカザ	アカザ	<i>Liobagrus reinii</i> Hilgendorf	CR	NT	VU	146
サケ	アユ	アユ	<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i> (Temminck et Schlegel)	VU			159
サケ	シラウオ	シラウオ	<i>Salangichthys microdon</i> (Bleeker)	VU	VU		160
サケ	サケ	サツキマス・アマゴ	<i>Oncorhynchus masou ishikawae</i> Jordan et McGregor	DD	DD	NT	171
メダカ	メダカ	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	VU	NT	VU	161
ダソ	サヨリ	クルマサヨリ	<i>Hyporhamphus intermedius</i> (Cantor)	DD	DD	NT	172
スズキ	カジカ	カマキリ(アユカケ)	<i>Cottus kazika</i> Jordan et Starks	EN	EN	VU	152

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
スズキ	カジカ	ウツセミカジカ	<i>Cottus reinii</i> Hilgendorf	EN	VU	EN	153
スズキ	ドンコ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)	CR	EN		147
スズキ	カワアナゴ	カワアナゴ	<i>Eleotris oxycephala</i> Temminck et Schlegel	VU	NT		162
スズキ	ハゼ	トビハゼ	<i>Periophthalmus modestus</i> Cantor	EN	VU	NT	154
スズキ	ハゼ	トウカイヨシノボリ	<i>Rhinogobius</i> sp. TO	CR	CR	NT	148
スズキ	ハゼ	スミウキゴリ	<i>Gymnogobius petschiliensis</i> (Rendahl)	NT			165
スズキ	ハゼ	ウキゴリ	<i>Gymnogobius urotaenia</i> (Hilgendorf)	NT			166
スズキ	ハゼ	エドハゼ	<i>Gymnogobius macronathos</i> Bleeker	EN	NT	VU	156
スズキ	ハゼ	マサゴハゼ	<i>Pseudogobius masago</i> (Tomiyama)	EN	VU	VU	155

(6) 昆虫類

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動植物の種の現
状—(無脊椎動物編Ⅱ)」(環境庁編, 1995) を基に新しい知見を加え整理した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
トンボ	アオイイトンボ	コバネアオイイトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	EX	CR	EN	178
トンボ	カワトンボ	アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i> Selys	EX	国リスト	NT	179
トンボ	イトトンボ	ベニイトトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i> Asahina	VU	VU	NT	239
トンボ	イトトンボ	セスジイトトンボ	<i>Paracercion hieroglyphicum</i> (Brauer)	NT			263
トンボ	イトトンボ	ムスジイトトンボ	<i>Paracercion melanotum</i> (Selys)	NT			264
トンボ	イトトンボ	オオイイトンボ	<i>Paracercion sieboldii</i> (Selys)	VU	EN		240
トンボ	イトトンボ	ヒスマイイトンボ	<i>Mortonagrion hirosei</i> Asahina	EX	EN	EN	180
トンボ	イトトンボ	モートンイトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	NT	NT	NT	265
トンボ	ヤンマ	コシボシヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i> (Selys)	NT			267
トンボ	ヤンマ	サラサヤンマ	<i>Sarasaeschna pryeri</i> (Martin)	NT			266
トンボ	ヤンマ	ネアカヨシヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	VU	NT	NT	241
トンボ	ヤンマ	アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	VU	EN	NT	242
トンボ	ヤンマ	マルタンヤンマ	<i>Anaciaeschna martini</i> (Selys)	NT			268
トンボ	サナエトンボ	タバサナエ	<i>Trigomphus citimus tabei</i> Asahina	VU	国リスト	NT	243
トンボ	サナエトンボ	フタスジサナエ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	EN	VU	NT	214
トンボ	サナエトンボ	オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i> Asahina	EN	VU	NT	213
トンボ	サナエトンボ	キヒロサナエ	<i>Asiagomphus pryeri</i> (Selys)	EN	NT	NT	216
トンボ	サナエトンボ	ホシサナエ	<i>Shaogomphus postocularis</i> (Selys)	EN			215
トンボ	サナエトンボ	ナゴヤサナエ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	NT	NT	VU	269
トンボ	サナエトンボ	メガネサナエ	<i>Stylurus oculatus</i> (Asahina)	NT	NT	VU	270
トンボ	ムカシヤンマ	ムカシヤンマ	<i>Tanypteryx pryeri</i> (Selys)	CR			197
トンボ	エゾトンボ	トラフトンボ	<i>Epithea marginata</i> (Selys)	NT	NT		271
トンボ	エゾトンボ	ハネピロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	DD	VU	VU	315
トンボ	エゾトンボ	エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)	EN	VU		217
トンボ	ヤマトンボ	キヒロヤマトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	EX	NT	NT	181
トンボ	トンボ	キトンボ	<i>Sympetrum croceolum</i> (Selys)	EN	EN		218
トンボ	トンボ	ノシトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys)	県リスト	NT		334
トンボ	トンボ	マダラナニワトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	EX	EN	EN	182
トンボ	トンボ	オオキトンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	CR	CR	EN	198
トンボ	トンボ	ハッチョウトンボ	<i>Nannophya pygmaea</i> Rambur	NT			272
トンボ	トンボ	ベッコウトンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	EX	CR	CR	183
ゴキブリ	オオゴキブリ	オオゴキブリ	<i>Panesthia angustipennis spadica</i> (Shiraki)	NT	NT		273
カマキリ	カマキリ	ウスバカマキリ	<i>Mantis religiosa</i> Linnaeus	国リスト		DD	334
カマキリ	ヒメカマキリ	ヒメカマキリ	<i>Acromantis japonica</i> Westwood	NT			274
バッタ	コロギス	ハネナシコロギス	<i>Nippancistroger testaceus</i> (Matsumura et Shiraki)	NT			275
バッタ	コロギス	コロギス	<i>Prosopogryllacris japonica</i> (Matsumura et Shiraki)	NT			276
バッタ	クツワムシ	クツワムシ	<i>Mecopoda niponensis</i> (de Haan)	EN			219
バッタ	ツユムシ	ホソクビツユムシ	<i>Shirakisotima japonica</i> (Matsumura et Shiraki)	DD			316
バッタ	アリツカオロギ	アリツカオロギの一種	<i>Myrmecophilus</i> sp.	DD			317
バッタ	バッタ	ヤマトフキバッタ	<i>Parapodisma setouchiensis</i> Inoue	NT			277
バッタ	バッタ	ハネナガイナゴ	<i>Oxya japonica</i> (Thunberg)	NT			279
バッタ	バッタ	セグロイナゴ	<i>Shirakiacris shirakii</i> (Bolivar)	NT			278
ナナフシ	ナナフシモドキ	ナナフシモドキ	<i>Ramulus mikado</i> (Rehn)	NT			280
ナナフシ	トビナナフシ	トゲナナフシ	<i>Neohirasea japonica</i> (de Haan)	NT			281
ナナフシ	トビナナフシ	タイワントビナナフシ	<i>Sipyloidea sipyilus</i> (Westwood)	DD			318
カメムシ	グンバイウンカ	ハウチワウンカ	<i>Trypetimorpha japonica</i> Ishihara	EN		VU	220
カメムシ	アカジマウンカ	アカジマアシブトウンカ	<i>Ommatidiotus japonicus</i> Y.Hori	EN	NT		221
カメムシ	セミ	ハルゼミ	<i>Terpnosia vacua</i> (Olivier)	NT			282
カメムシ	セミ	チツチゼミ	<i>Rosemia radiator</i> (Uhler)	VU			244
カメムシ	タイコウチ	タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i> Scott	NT			283
カメムシ	タイコウチ	ヒメタイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki	VU	NT		245
カメムシ	タイコウチ	ミズカマキリ	<i>Ranatra chinensis</i> Mayr	NT			284
カメムシ	コオイムシ	コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i> Vuillefroy	DD	国リスト	NT	319
カメムシ	コオイムシ	タガメ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	EX	EN	VU	184
カメムシ	コバンムシ	コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamatoris</i> (Scott)	CR	CR	EN	199
カメムシ	ナベバタムシ	トゲナベバタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	EX	EX	VU	185
カメムシ	イトアメンボ	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	CR	VU	VU	200
カメムシ	アメンボ	オオアメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	EN	NT		222
カメムシ	アメンボ	エサキアメンボ	<i>Limnoporos esakii</i> (Miyamoto)	EN	NT	NT	223
カメムシ	ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	NT		NT	285
コウチュウ	カワラゴミムシ	カワラゴミムシ	<i>Omophron aequale</i> Morawitz	CR	NT		201
コウチュウ	ハンミョウ	ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i> Thunberg	VU			246
コウチュウ	ハンミョウ	ホソハンミョウ	<i>Cicindela gracilis</i> Pallas	EN	VU	VU	224

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
コウチュウ	ハンミョウ	カワラハンミョウ	<i>Cicindela laetescripta</i> Motschulsky	EX	CR	EN	186
コウチュウ	オサムシ	フタモンマルクビゴミムシ	<i>Nebria pulcherrima</i> Bates	CR	CR	EN	202
コウチュウ	オサムシ	キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria livida angulata</i> Banninger	EX	CR	EN	187
コウチュウ	オサムシ	オオヒョウタンゴミムシ	<i>Scarites sulcatus</i> Olivier	CR	VU	NT	203
コウチュウ	オサムシ	イグチケブカゴミムシ	<i>Peronomerus auripilis</i> Bates	NT		NT	286
コウチュウ	オサムシ	エチゴトツクリゴミムシ	<i>Oodes echigonus</i> Habu et Baba	EX		NT	188
コウチュウ	コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	<i>Canthyrus politus</i> (Sharp)	CR	NT	VU	204
コウチュウ	コツブゲンゴロウ	キボシチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Motschulsky)	EN	NT	EN	226
コウチュウ	ゲンゴロウ	マルチビゲンゴロウ	<i>Leiodytes frontalis</i> (Sharp)	NT	NT	NT	287
コウチュウ	ゲンゴロウ	ルイスツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus lewisius</i> Sharp	VU		VU	248
コウチュウ	ゲンゴロウ	コウベツツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus kobensis</i> Sharp	NT		NT	288
コウチュウ	ゲンゴロウ	トダセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus nakamurai</i> Guéorguiev	DD	NT	VU	320
コウチュウ	ゲンゴロウ	キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	NT		NT	289
コウチュウ	ゲンゴロウ	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringii</i> Clark	VU	NT	NT	249
コウチュウ	ゲンゴロウ	スジゲンゴロウ	<i>Hydaticus satoi</i> Wewalka	EX	EX	EX	192
コウチュウ	ゲンゴロウ	マダラシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus thermonectoides</i> Sharp	EX	EX	CR	193
コウチュウ	ゲンゴロウ	マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	EX	EX	VU	191
コウチュウ	ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	CR	VU	NT	205
コウチュウ	ゲンゴロウ	コガタノゲンゴロウ	<i>Cybister tripunctatus lateralis</i> (Fabricius)	EX	EX	VU	190
コウチュウ	ゲンゴロウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister chinensis</i> Motschulsky	EX	EN	VU	189
コウチュウ	コガシラミズムシ	マダラコガシラミズムシ	<i>Haliphus sharpi</i> Wehncke	EN	EN	VU	225
コウチュウ	コガシラミズムシ	クロホシコガシラミズムシ	<i>Haliphus basinotatus latiusculus</i> Nakane	VU		VU	247
コウチュウ	ミズスマシ	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> (Mödeer)	NT	NT	NT	291
コウチュウ	ミズスマシ	コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp	VU	NT	VU	250
コウチュウ	ミズスマシ	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	VU	VU	VU	251
コウチュウ	ミズスマシ	コミズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i> Motschulsky	EN	EN	EN	227
コウチュウ	マルドロムシ	シワムネマルドロムシ	<i>Georissus kurosawai</i> Nakane	DD			321
コウチュウ	ホノガムシ	ヤマトホノガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	DD	NT	NT	322
コウチュウ	ガムシ	ヒメシジミガムシ	<i>Laccobius fragilis</i> Nakane	DD			323
コウチュウ	ガムシ	マルヒラタガムシ	<i>Enochrus subsignatus</i> (Harold)	NT		NT	290
コウチュウ	ガムシ	ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	EN		NT	228
コウチュウ	ガムシ	コガタガムシ	<i>Hydrophilus bilineatus cashimirensis</i> Redtenbacher	DD		VU	325
コウチュウ	ガムシ	コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	DD		DD	324
コウチュウ	エンママシ	ヤマトエンママシ	<i>Hister japonicus</i> Marseul	NT			292
コウチュウ	エンママシ	クロエンママシ	<i>Hister concolor</i> Lewis	DD	DD		326
コウチュウ	シデムシ	ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	EN	VU	NT	229
コウチュウ	クワガタムシ	マダラクワガタ	<i>Aesalus asiaticus asiaticus</i> Lewis	DD			327
コウチュウ	クワガタムシ	クワガタクワガタ	<i>Serrogathus platymelus pilifer</i> (Snellen van Vollenhoven)	NT			293
コウチュウ	クワガタムシ	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	CR	CR	VU	206
コウチュウ	コガネムシ	ミツノエンママコガネ	<i>Onthophagus tricornis</i> (Wiedemann)	VU			252
コウチュウ	コガネムシ	アカマダラハナムグリ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	EN	NT	DD	230
コウチュウ	コガネムシ	コカブトムシ	<i>Eophileurus chinensis chinensis</i> (Faldernmann)	NT			294
コウチュウ	タマムシ	クロマダラタマムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (E.Saunders)	EN	VU		231
コウチュウ	ホタル	ゲンジホタル	<i>Luciola cruciata</i> Motschulsky	EN			232
コウチュウ	ホタル	ヘイクホタル	<i>Luciola lateralis</i> Motschulsky	EN			233
コウチュウ	ホタル	ヒメホタル	<i>Luciola parvula</i> Kiesenwetter	NT			295
コウチュウ	カッコウムシ	ヤマトヒメメダカカッコウムシ	<i>Neohydnius hozumii</i> Nakane	NT			296
コウチュウ	ゴミムシダマシ	ヤマトオサムシダマシ	<i>Blaps japonensis</i> Marseul	NT		NT	297
コウチュウ	ツチハンミョウ	マメハンミョウ	<i>Epicauta gorhami</i> Marseul	CR			207
コウチュウ	カミキリムシ	ベーツヒラタカミキリ	<i>Euplynes batesi</i> Harold	VU			253
コウチュウ	カミキリムシ	ヨツボシカミキリ	<i>Stenogrynium quadrinotatum</i> Bates	CR	EN	EN	208
コウチュウ	カミキリムシ	オオシロカミキリ	<i>Olenecamptus cretaceus cretaceus</i> Bates	CR			209
コウチュウ	ゾウムシ	カギアシゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kono)	DD	DD		328
チョウ	マダラガ	ヤホシホソマダラ	<i>Balataea octomaculata</i> (Bremer)	DD		NT	329
チョウ	ボクトウガ	ハイイロボクトウ	<i>Phragmataecia castaneae</i> (Hübner)	NT	国リスト	NT	298
チョウ	ツトガ	ゴマフツトガ	<i>Chilo pulveratus</i> (Wileman et South)	VU		NT	254
チョウ	ツトガ	マエジロツトガ	<i>Pseudocatharylla infixella</i> (Walker)	EN			234
チョウ	ツトガ	エンスイミズメイガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu	EN	DD		235
チョウ	セセリチョウ	ミヤマセセリ	<i>Erynnis montana montana</i> (Bremer)	VU			260
チョウ	セセリチョウ	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	CR	EN		210
チョウ	アゲハチョウ	ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	CR	VU	VU	211
チョウ	アゲハチョウ	ジャコウアゲハ	<i>Atrophaneura alcinous alcinous</i> (Klug)	NT			310
チョウ	シロチョウ	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	NT	国リスト	EN	311
チョウ	シジミチョウ	ウラゴマダランジミ	<i>Artopotes pryri pryri</i> (Murray)	NT			312
チョウ	シジミチョウ	ウラクロシジミ	<i>Iratsume orsedice orsedice</i> (Butler)	VU	NT		261
チョウ	シジミチョウ	シルビアシジミ	<i>Zizina emelina emelina</i> (de l'Orza)	EX	EX	EN	194
チョウ	タテハチョウ	ウラギンシヒョウモン	<i>Argyronome laodice japonica</i> (Ménétrières)	EN	NT	VU	237
チョウ	タテハチョウ	ウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana adippe pallascens</i> (Butler)	EN			238
チョウ	タテハチョウ	オオウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana nerippe</i> (C.Felder et R.Felder)	EX	EX	CR	195
チョウ	タテハチョウ	イチモンジチョウ	<i>Limenitis camilla japonica</i> Ménétrières	VU			262
チョウ	タテハチョウ	ヒトドンチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas japonica</i> (Stichel)	NT			313
チョウ	タテハチョウ	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus arothius</i> Okada et Torii	EX	CR	EN	196
チョウ	タテハチョウ	ジャノメチョウ	<i>Minois dryas bipunctata</i> (Motschulsky)	NT			314
チョウ	タテハチョウ	ウラナミジャノメ	<i>Ypthima multistriata nipponica</i> Murayama	CR	VU	VU	212
チョウ	シャクガ	クワトゲエダシャク	<i>Apochima excavata</i> (Dyar)	NT		NT	299
チョウ	シャクガ	アヤコバネナミシャク	<i>Acasis bellaria</i> (Leech)	VU			255
チョウ	ヤママユガ	オナガミズアオ	<i>Actias gnoma gnoma</i> (Butler)	NT	国リスト	NT	300
チョウ	イボタガ	イボタガ	<i>Brahmaea japonica</i> Butler	NT			301
チョウ	スズメガ	オオシモフリスズメ	<i>Langia zenzeroides nawai</i> Rothschild et Jordan	DD			330
チョウ	ヒトリガ	ヤネホソバ	<i>Eilema fuscodorsalis</i> (Matsumura)	NT		NT	302
チョウ	ヤガ	トウカイソマキリアツバ	<i>Tamba roseopurpurea</i> Sugi	DD			331
チョウ	ヤガ	キシタアツバ	<i>Hypena claripennis</i> (Butler)	NT	国リスト	NT	303

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
チョウ	ヤガ	カギモンハナオイアツバ	<i>Cidariplura signata</i> (Butler)	DD	国リスト	NT	332
チョウ	ヤガ	マダラウスズミケンモン	<i>Hylomycta subornata</i> (Leech)	NT	DD		306
チョウ	ヤガ	アトジロキリガ	<i>Dioszeghyana mirabilis</i> (Sugi)	NT			309
チョウ	ヤガ	ホソバオビキリガ	<i>Dryobotodes angusta angusta</i> Sugi	DD			333
チョウ	ヤガ	ウスミモンキリガ	<i>Eupsilia contracta</i> (Butler)	NT	国リスト	NT	307
チョウ	ヤガ	ミスジキリガ	<i>Jodia sericea</i> (Butler)	NT		NT	308
チョウ	ヤガ	オオチャバネヨトウ	<i>Nonagria puengeleri</i> (Schawerda)	EN	NT	VU	236
チョウ	ヤガ	キスジウスキヨトウ	<i>Capsula sparganii</i> (Esper)	VU	NT	VU	258
チョウ	ヤガ	ガマヨトウ	<i>Capsula aerata</i> (Butler)	VU		VU	257
チョウ	ヤガ	スマベウスキヨトウ	<i>Chilodes pacificus</i> Sugi	VU		VU	256
チョウ	ヤガ	トビロアカガネヨトウ	<i>Euplexia albilineola</i> (Wileman et South)	VU			259
チョウ	ヤガ	フシキシタバ	<i>Catocala separans</i> Leech	NT			304
チョウ	ヤガ	コシロシタバ	<i>Catocala actaea</i> Felder et Rogenhofer	NT		NT	305

(7) クモ類

目及び科の範囲、名称、配列は、「日本産クモ類目録 ver. 2014R1」(谷川明男, 2014: インターネット上にて公表) に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
クモ	ジグモ	ワスレナグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	CR	VU	NT	339
クモ	カネコタテグモ	カネコタテグモ	<i>Anthrobiaetia roretzi</i> (L. Koch)	CR	VU	NT	340
クモ	トタテグモ	キノボリトタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	EN	VU	NT	345
クモ	トタテグモ	キシノウエトタテグモ	<i>Latouchia typica</i> (Kishida)	CR	VU	NT	341
クモ	ヒメグモ	ギボシヒメグモ	<i>Chrysso albipes</i> (S. Saito)	NT			357
クモ	アシナガグモ	チビクロドユグモ	<i>Meta nigridorsalis</i> Tanikawa	DD			365
クモ	コガネグモ	ビジョオニグモ	<i>Araneus mitificus</i> (Simon)	NT			358
クモ	コガネグモ	コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L. Koch	NT	NT		359
クモ	コガネグモ	オオトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa	NT	NT		360
クモ	コガネグモ	トリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)	NT	NT		361
クモ	コガネグモ	シロオビトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand	VU	NT		348
クモ	コガネグモ	アカイロトリノフンダマシ	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand	VU	NT		349
クモ	コガネグモ	スズミグモ	<i>Cyrtophora ikomosanensis</i> (Bösenberg et Strand)	NT			362
クモ	コガネグモ	トゲグモ	<i>Gasteracantha kuhli</i> C. L. Koch	VU	VU		350
クモ	コガネグモ	ムツトゲイセキグモ	<i>Ordgarius sexspinosus</i> (Thorell)	CR	EN		342
クモ	コガネグモ	ゲボウグモ	<i>Poltys illepidus</i> C. L. Koch	CR	NT		351
クモ	コモリグモ	エビチャコモリグモ	<i>Arctosa ebicha</i> Yaginuma	VU	EN		352
クモ	コモリグモ	カコウコモリグモ	<i>Pardosa nojimai</i> Tanaka	CR	VU		343
クモ	コモリグモ	テジロハリゲコモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa	CR	EN		344
クモ	コモリグモ	ミナミコモリグモ	<i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)	EN	VU		346
クモ	キンダグモ	ハヤテグモ	<i>Perenethis fascigera</i> (Bösenberg et Strand)	EN			347
クモ	ササグモ	クリチャササグモ	<i>Oxyopes licenti</i> Schenkel	VU			353
クモ	スオウグモ	ムロズミソグモ	<i>Takeoa nishimurai</i> (Yaginuma)	DD	DD		366
クモ	フクログモ	ハマキフクログモ	<i>Clubiona japonicola</i> Bösenberg et Strand	NT			363
クモ	フクログモ	ヤギヌマフクログモ	<i>Clubiona yaginumai</i> Hayashi	VU			354
クモ	ネコグモ	オビシガハチグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong	VU	VU		355
クモ	ワシグモ	ヒゲナガツヤグモ	<i>Micaria dives</i> (Lucas)	NT			364
クモ	カニグモ	シロスジグモ	<i>Runcinia affinis</i> Simon	DD			367
クモ	カニグモ	オビボノカニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono	VU	VU		356

(8) カニ類

目及び科の範囲、名称、配列については、原則として「日本産カニ類の分類目録」(三宅, 1998) に準拠した。その後の、新しい取り扱いがある場合には、それに従った。

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
十脚	ヘイケガニ	サメハダヘイケガニ	<i>Paradorippe granulata</i> (De Haan)	NT			378
十脚	イワガニ	モクズガニ	<i>Eriocheir japonicus</i> (De Haan)	NT			379
十脚	イワガニ	アカテガニ	<i>Chiromantes haematocheir</i> (De Haan)	VU			374
十脚	イワガニ	クシテガニ	<i>Parasesarma plicatum</i> (Latreille)	VU			375
十脚	イワガニ	ユビアカベンケイガニ	<i>Parasesarma acis</i> Davie	VU			376
十脚	イワガニ	ウモレベンケイガニ	<i>Clistocheiloma sinensis</i> Shen	VU			377
十脚	サワガニ	サワガニ	<i>Geothelphusa dehaani</i> (White)	EN			373
十脚	スナガニ	ハクセンシオマネキ	<i>Uca (Celuca) lactea lactea</i> (De Haan)	EN		VU	372
十脚	スナガニ	コマツキガニ	<i>Scopimera globosa</i> De Haan	NT			380
十脚	スナガニ	チゴガニ	<i>Ilyoplax pusilla</i> (De Haan)	NT			381

(9) 貝 類

目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-（無脊椎動物編Ⅲ）」（環境庁（編），1998）に準拠した。

目名	科名	種名	学名	市2015	県2015	国2014	掲載頁
古腹足(オキナエビス)	ニシキウズガイ	イボキサゴ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> (Lamarck)	CR	CR	NT	391
アマオブネガイ	アマオブネガイ	ヒロクチカノコ	<i>Neripteron</i> sp.	VU	VU	NT	426
盤足(ニナ)	ヤマタニシ	ヤマタニシ	<i>Cyclophorus herklotsi</i> Martens	NT			435
盤足(ニナ)	ヤマタニシ	ミジンヤマタニシ	<i>Nakadaella micron</i> (Pilsbry)	NT			436
盤足(ニナ)	ゴマガイ	ヒドリマキゴマガイ	<i>Diplommantina (Sinica) pusilla</i> (Martens)	NT			437
盤足(ニナ)	タニシ	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)	CR	NT	VU	392
盤足(ニナ)	タニシ	オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (Martens)	VU	国リスト	NT	427
盤足(ニナ)	ワカウラツボ	カワグチツボ	<i>Iravadia (Fluviocingula) elegantula</i> (A. Adams)	NT	NT	NT	438
盤足(ニナ)	ワカウラツボ	ワカウラツボ	<i>Iravadia (Fairbankia) sakaguchii</i> (Kuroda et Habe)	VU	VU	VU	428
盤足(ニナ)	ミズゴマツボ	エドガワミズゴマツボ (ウミゴマツボ)	<i>Stenothyra edogawaensis</i> (Yokoyama)	NT	NT	NT	439
盤足(ニナ)	エゾマメタニシ	マメタニシ	<i>Parafossarulus mauchuricus japonicus</i> (Pilsbry)	CR	DD	VU	393
盤足(ニナ)	サザナミツボ	サザナミツボ	<i>Elachisime ziczac</i> Fukuda et Ekawa	CR	EN	NT	394
盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	クリイロカワザンショウ	<i>Angustassiminea castanea</i> (Westerlund)	NT	NT	NT	440
盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	ヨシダカワザンショウ	<i>Angustassiminea yoshidayukioi</i> Kuroda	CR	VU	NT	395
盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	ツバカワザンショウ	<i>Assiminea estuarina</i> Habe	NT	NT	NT	441
盤足(ニナ)	カワザンショウガイ	ヒナタムシヤドリカワザンショウ	<i>Assiminea parasitologica</i> Kuroda	NT	NT	NT	442
盤足(ニナ)	ウミナナ	ウミナナ	<i>Batillaria multifasciata</i> (Lischke)	CR	NT	NT	396
盤足(ニナ)	ウミナナ	イボウミナナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguiere)	CR	CR	VU	397
盤足(ニナ)	フトヘナタリ	フトヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i> A.Adams	VU	NT	NT	429
盤足(ニナ)	フトヘナタリ	ヘナタリ	<i>Cerithidea (Cerithideopsisilla) cingulata</i> (Gmelin)	CR	NT	NT	398
盤足(ニナ)	フトヘナタリ	カワアイ	<i>Cerithidea (Cerithideopsisilla) djadjariensis</i> (K.Martin)	CR	CR	VU	399
盤足(ニナ)	シロネズミガイ	ヒナツボ	<i>Berthais egregia</i> (A. Adams)	DD			467
翼舌	イトカケガイ	セキモリ	<i>Papyriscala yokoyamai</i> (Suzuki et Ichikawa)	NT	NT	NT	443
翼舌	イトカケガイ	クレハガイ	<i>Papyriscala latifasciata</i> (Sowerby)	NT	NT	NT	444
新腹足	オリレヨウバイ	ムシロガイ	<i>Niotha livescens</i> (Philippi)	VU	VU	NT	430
新腹足	コモロガイ	オリレボラ	<i>Trigonostoma scalariformis</i> (Lamarck)	EN	EN	VU	418
異旋	タクミニナ	タクミニナ	<i>Eucharilda sinensis</i> (Fischer)	CR	CR		400
異旋	トウガタガイ	カキウラクチキレモドキ	<i>Brachystomia bipyramidata</i> (Nomura)	NT	NT		445
異旋	トウガタガイ	ヌカルミクチキレ(未記載種)	<i>Seyella</i> sp.	VU	VU	NT	431
異旋	イソチドリガイ	イソチドリ	<i>Amathina tricarinata</i> (Linnaeus)	CR	CR	CR+EN	401
基眼(モノアラガイ)	オカミミガイ	キヌカツギハマシイノミガイ	<i>Melampus (Melampus) singaporensis</i> Pfeiffer	CR	CR	VU	402
基眼(モノアラガイ)	オカミミガイ	オカミミガイ	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	CR	EN	VU	403
基眼(モノアラガイ)	オカミミガイ	ナラビオカミミガイ	<i>Auriculastra duplicata</i> (Pfeiffer)	CR	CR	VU	404
基眼(モノアラガイ)	モノアラガイ	モノアラガイ	<i>Randix auricularia japonica</i> Jay	EN	NT	NT	419
基眼(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	カワネジガイ	<i>Campyoceras hirasei</i> Walker	EX	EX	CR+EN	387
基眼(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	ヒラマキミズマイマイ	<i>Gyraulus chinensis</i> Dunker	NT	DD	DD	446
基眼(モノアラガイ)	ヒラマキガイ	ヒラマキガイモドキ	<i>Polyptychis hemisphaerula</i> (Benson)	NT	NT	NT	447
柄強眼(マイマイ)	ミジンマイマイ	ミジンマイマイ	<i>Vallonia pulchellura</i> (Heude)	DD			468
柄強眼(マイマイ)	キセルガイ	ナミギセル	<i>Stereophaedusa japonica japonica</i> (Crosse)	EN			420
柄強眼(マイマイ)	タワラガイ(ネジレガイ)	タワラガイ	<i>Sinoennea iwakawa</i> (Pilsbry)	NT			448
柄強眼(マイマイ)	オカモノアラガイ	ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	EN	NT	NT	421
柄強眼(マイマイ)	ベッコウマイマイ	ヒラベッコウガイ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i> (Pilsbry)	NT	DD	DD	451
柄強眼(マイマイ)	ベッコウマイマイ	ウメムラシタラ	<i>Coneuplecta (Sitalina) japonica</i> Habe	NT	NT	NT	450
柄強眼(マイマイ)	ベッコウマイマイ	ヒゼンキビ	<i>Parakaliella hizenensis</i> (Pilsbry)	VU	DD	NT	432
柄強眼(マイマイ)	ベッコウマイマイ	オオウエキビ	<i>Trochochlamys fraterna</i> (Pilsbry)	DD	国リスト	DD	469
柄強眼(マイマイ)	ベッコウマイマイ	ヒメカサキビ	<i>Trochochlamys subcrenulata</i> (Pilsbry)	NT	NT	NT	449
柄強眼(マイマイ)	ナンバンマイマイ	ピロウドマイマイ属の一種	<i>Nipponochloritis</i> sp.	VU	NT	DD	433
柄強眼(マイマイ)	ナンバンマイマイ	ニッポンマイマイ	<i>Satsuma japonica</i> (Pfeiffer)	NT			453
柄強眼(マイマイ)	ナンバンマイマイ	コベソマイマイ	<i>Satsuma myomphala</i> (Martens)	NT			452
柄強眼(マイマイ)	オナジマイマイ	オオケマイマイ	<i>Aegista vulgivaga</i> (Schmacker et Bottger)	NT			454
柄強眼(マイマイ)	オナジマイマイ	ヒルゲンドルフマイマイ	<i>Trishoplita hilgendorfi</i> (Kobelt)	EN	NT	NT	422
フネガイ	フネガイ	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	EX	EX	VU	388
ウグイスガイ	ハボウキガイ	タイラギ	<i>Atrina pictinata</i> (Linnaeus)	NT		NT	455
イシガイ	イシガイ	ヌマガイ	<i>Anodonta lauta</i> Martens	EN	NT		423
イシガイ	イシガイ	タガイ	<i>Anodonta japonica</i> Clessin	CR	NT		405
イシガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> (Martens)	CR	CR		406
マルスダレガイ	カワホトギスガイ	マゴコロガイ	<i>Peregrinamor oshimai</i> Shoji	CR	CR	NT	407
マルスダレガイ	ツキガイ	イセシラガイ	<i>Anodonta bialata</i> (Pilsbry)	CR	CR	CR+EN	408
マルスダレガイ	ツキガイ	ツキガイモドキ	<i>Lucinoma annulatum</i> (Reeve)	NT	NT		456
マルスダレガイ	バカガイ	ヤチヨノハナガイ	<i>Raeta pellicula</i> (Deshayes)	CR	CR	CR+EN	409
マルスダレガイ	ニッコウガイ	サビシラトリ	<i>Macoma contabulata</i> (Deshayes)	EN	EN	NT	424
マルスダレガイ	ニッコウガイ	ヒメシラトリ	<i>Macoma incongrua</i> (Martens)	NT			457
マルスダレガイ	ニッコウガイ	ゴイサギガイ	<i>Macoma tokyoensis</i> Makiyama	NT			458
マルスダレガイ	ニッコウガイ	ユウシオガイ	<i>Moerella rutila</i> (Dunker)	NT	NT	NT	459
マルスダレガイ	ニッコウガイ	サクラガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> (Habe)	NT	NT	NT	460
マルスダレガイ	ニッコウガイ	アオサギガイ	<i>Psammotreta (Pseudomitis) praeupta</i> (Salisbury)	CR	CR		410
マルスダレガイ	ニッコウガイ	イチヨウシラトリ	<i>Tellina (Serratina) capsoides</i> Lamarck	EX	EX	CR+EN	389
マルスダレガイ	ハナグモリ	ハナグモリ	<i>Glauconome chinensis</i> Gray	CR	CR	VU	411
マルスダレガイ	シオサザナミガイ	イソシジミ	<i>Nuttallia japonica</i> (Reeve)	NT			461
マルスダレガイ	ナタマメガイ	アゲマキ	<i>Sinonovacula lamarcki</i> Huber	EX	EX	CR+EN	390
マルスダレガイ	マテガイ	マテガイ	<i>Solen (Solen) gordonis</i> Yokoyama	NT	NT		462
マルスダレガイ	フナガタガイ	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i> (Reeve)	NT	国リスト	NT	463
マルスダレガイ	シジミ	マシジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	CR	VU	VU	412

目名	科名	種名	学名	市 2015	県 2015	国 2014	掲載頁
マルスダレガイ	マメシジミ	ウエジマメシジミ	<i>Pisidium (Odhnneripisidium) uejii</i> Mori	EN			425
マルスダレガイ	マルスダレガイ	ウラカガミ	<i>Dosinorbis (Phacosoma) penicilata</i> (Reeve)	CR	CR	CR+EN	413
マルスダレガイ	マルスダレガイ	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)	CR	VU	VU	414
マルスダレガイ	マルスダレガイ	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)	NT			464
マルスダレガイ	マルスダレガイ	イヨスダレガイ	<i>Paphia (Neotapes) undulata</i> (Born)	VU	VU		434
オオノガイ	オオノガイ	ヒメマスオガイ	<i>Cryptomya busoensis</i> Yokoyama	CR	EN	VU	415
オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Mya (Arenoma) oonogai</i> Makiyama	NT	NT	NT	465
オオノガイ	オオノガイ	クシケマスオガイ	<i>Venatomya truncata</i> (Gould)	CR	EN	NT	416
オオノガイ	ニオガイ	ウミタケ	<i>Barnea (Umitakea) japonica</i> (Yokoyama)	CR	CR	VU	417
ウミタケガイモドキ	オキナガイ	ソトオリガイ	<i>Laternula marilina</i> (Reeve)	NT	NT		466

Threatened Wildlife of Nagoya City

RED DATA BOOK NAGOYA 2015

- Animals -

April 2015

Edited by

City of Nagoya Environmental Affairs Bureau
Environmental Planning Department Environmental Activities Promotion Division

Published by

City of Nagoya Environmental Affairs Bureau
Environmental Planning Department Environmental Activities Promotion Division

1-1, Sannomaru 3-chome, Naka-ku, Nagoya 460-8508 Japan

TEL: 052-831-8104

FAX: 052-839-1695

名古屋市の絶滅のおそれのある野生生物

レッドデータブックなごや 2015

- 動物編 -

発行年月 平成 27 年 4 月

編集 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課

発行 名古屋市環境局環境企画部環境活動推進課

〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目 1 番 1 号

TEL: 052-831-8104

FAX: 052-839-1695

本書に収録した写真は、著作者の了解を得て複製したものです。
私的使用又は引用等著作権法上認められた行為を除き、
著作者に無断で再複製を行うことはできません。



この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。



古紙パルプ配合率80%再生紙を使用

この冊子は古紙を含む用紙（総合評価 80 以上）を使用しています。



Threatened Wildlife of Nagoya City
RED DATA BOOK NAGOYA 2015
Animals
